

9人の戦士と10人の虹 乙女

カツ丼DX

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

全ての怪人の怨念から生まれた強敵「ゼウーデス」。9人の仮面ライダーは仲間達を失いながらも必死に立ち向かう・・・が、彼らは「空間の狭間」という別世界へと繋がる空間に飛ばされてしまう。

飛ばされた先の世界で記憶を失った9人の戦士たちは、その世界でスクールアイドルとマネージャーとして暮らす10人の女神達と共に悪に立ち向かう！

そして、本人達すら知らぬ女神達の秘密とは・・・？

※あらすじちよつと変えました。

※書き方変わったたり変わらなかつたりするかもです。

第1章 終了

第2章 終了

第3章 進行中

目次

プロローグ	1
目覚めし9人の戦士達編	
第1話 物語の始まり。幼馴染は炎の剣士	5
第2話	23
第3話 憎きアイツは大企業の御曹司	
で仮面ライダー・・・!?	45
第4話 絶望を希望に、大好きを守る	
指輪の魔法使い 前編	68
第5話 絶望を希望に、大好きを守る	
指輪の魔法使い 後編	97
第6話 ビルドなあいつとツナガル少女	
第7話 疑惑の兄と、しずくの想い。	119
第8話 スタート・ユア・眠り姫	143
165	
第9話 愛・友・ギター!	192
第10話 vivid!命大切少年!	
第11話 エヴァーグリーン・果実武者!	223
第12話 桜坂邸の攻防。碧映の決意	247
としずくの叱咤 前編	274

第13話	桜坂邸の攻防。碧映の決意	569
としずくの叱咤	後編	308
第14話	語られること。	351
動き出した悪編		657
第15話	雷羽教官による追試対策	683
ログラム!		377
第16話	もう何でもありのガチンコ	413
レース		413
第17話	復活の魔人、死風となりて。	468
第18話	赤き剣士は鎧を纏いて騎士	506
となる。		506
第19話	闘魂デッドヒート!	749
第20話	緊急戦闘001!	618
第21話	掴んだ1%の可能性	618
第22話	攫われたせつ菜……。	657
第23話	裏切りのウィザード……。	683
第24話	ドラゴンの呼び声。	711
第25話	ドラゴンを使役する騎士、	749
ドラゴンの力を使う魔法使い。		798
第26話	磁力全開友情パワー!	798

プロローグ

ここは、とある世界。ここでは今まさに、世界の命運をかけて人々の幸せを守る戦士「仮面ライダー」と、その仮面ライダー達が今まで倒してきた怪人の怨念の集合体である敵「ゼウーデス」との最終決戦が行われていた。

セイバー「……………ゼウーデス！お前の野望もここまでだ！」

ゼウーデス「ぐっ……………ううっ……………！まだだ！まだ、我が野望は終わってないっ！」

ゼロワン「何言ってるんだ？」

フォーゼ「どう考えたってもう終りだろ？」

オーズ「油断しない方がいいよ！まだ何してくるか分からない！」

鎧武「だな。」

ゼウーデス「こうなつたら、貴様らを空間の狭間に飛ばし、無理やりにも我が野望を叶えるまでだっ！」

仮面ライダー達は、ゼウーデスが何かしてくるかもしれないと警戒を強める……が、その一瞬の隙が、彼らの運命を変えることになる――

ゼウーデス「はあああああああつつつつつつつ
!!!!!!」

ドライブ「ぐっ……! な、なんだっ!？」

ゴースト「皆さんっ! あれを見てくださいっ!」

ウィザード「……な、なにつ!？」

ゼウーデスが衝撃波を放つと、仮面ライダー達の後ろの空に穴が開いていた。そし

て、その穴から突風が吹き、仮面ライダー達を引き込んでいく。

ビルド「なっ!?!しまった、空間に穴が!?!」

セイバー「身体が……引き込まれるっ!?!」

ウイザード「皆!俺が腕を大きくして支えるから集まるんだ!」

ゼウーデス「そうは……させるかあっ!」

ウイザードがビッグウイザードリングで腕を大きくし、仮面ライダー達を守ろうとしたが、ゼウーデスがウイザードに闇の斬撃を放ち、あえなく失敗してしまう。さらに、その衝撃でウイザードが穴の中に吸い込まれてしまった。

ウイザード「しまっ……!?!ぐわあああああつつつつ!!!」

ドライブ「ウイザードっ!」

ゼロワン「まじかよっ!？」

ゼウーデス「貴様等も、あいつと同じ運命を辿るがいいっ!はあっ!」

ウイザード以外の仮面ライダー「ぐわあああああつあああああつっつっつ!!!!!」

ゼウーデスの攻撃により、仮面ライダー達は空間に開いた穴の中へ飛ばされてしま
う。

ゼウーデス「はっはっ!はーはっはっはっは!!!これで我が野望を阻む者はいなくなっ
た!待っている、別空間の世界に住まう人類達よ!」

そして、ゼウーデスは自ら空間の穴に飛び込む。さて、空間の狭間に飛ばされてし
まった仮面ライダー達の運命は?そしてゼウーデスの野望とは――

目覚めし9人の戦士達編

第1話 物語の始まり。幼馴染は炎の剣士

—— 侑視点 ——

私、高咲侑は“夢”を見た。それは戦士達の夢……9人の仮面の戦士と強大な悪との戦い。自分が何故こんな夢を見たのかわからない……

侑「……あの仮面の戦士達……どうなったんだろう……」

夢は途中で終わった。彼らが空に開いた穴の中へ飛ばされたところで……。そんなことを考えていると、私のスマホが鳴る。画面を確認すると、そこには私の幼馴染“歩夢”の文字が写し出されていた。私は眠たい目を擦りながら電話に出ると、いつもの癒しボイスが耳を通る。

歩夢『侑ちゃん？ 今日約束の日だけど、どうしたの……？』

侑「やく、そく……？約束……」

約束とは何だっただろう……。私は眠気でボーっとしている頭で歩夢の言った言葉を何回か繰り返し返す。そして私は思い出す……。そうだ！今日は歩夢ともう一人の幼馴染の「剣緋陽哉（つるひはるや）」と3人で買い物に出かける約束をしてたんだっ！

侑「やばい忘れてた！時間は……。10時!?歩夢！陽いる？」

歩夢『陽くん？私の隣にいるよ?』

侑「わー!?!すぐいくから待ってー!」

歩夢『う、うん。気を付けてねえ……。?』

私は歩夢との電話を切り、急いで支度をするとダッシュで駅へ向かう。やばいやばい！一時間も過ぎちゃってるよおー！

——陽哉視点——

俺、剣緋陽哉（つるひはるや）は今日小さい頃からの幼馴染2人に頼まれ、買い物をする約束をしていた……。のだが、その1人が寝坊でまだ来ていない。俺は、俺の隣で先ほどまでその幼馴染と電話していたもう1人の幼馴染の上原歩夢に聞いてみることにした。

陽哉「侑の奴、なんだって？」

歩夢「うん、すぐ来るって」

陽哉「……まったくあいつは」

歩夢「ま、まあまあ！侑ちゃんも昨日は忙しかったし、大目に見てあげて？」

陽哉「……………まあ、確かにな」

俺が眉間を押さえ、はあーつと溜息をつく。歩夢がなだめてくる。本当に歩夢は侑に
関して甘いというかなんというか……………まあ確かに侑と歩夢は昨日、2人が所属し
ているスクールアイドル同好会という部活の仲間達や他の学校のスクールアイドルの
子達と共にスクールアイドルフェスティバルという祭典を開催し見事成功に収めた。
俺も見に行つたがとてもいいフェスで、楽しかった。そのフェスの間、侑と会うことが
出来なかつたが、どうやら裏方としてずっと動いていた様だ。そんなことを考えている
と、不意に歩夢が聞いてきた。

歩夢「そういうえば、陽くんも昨日来てくれてたんだよね？どうだった？」

陽哉「……………ん？ああ、すごくいいフェスだった！歩夢はああいう衣装が似合うな
！」

歩夢「……………も、もう！陽くんだったら……………／／／／／／／／／／」

俺が褒めると、歩夢は両手で赤面した顔を恥ずかしそうに押さえた。ほんと、こういうところが可愛いよなあ。歩夢ってwよし、もう少しからかってみようw

陽哉「歌もパフォーマンスもすぐよかった・・・歩夢の、歌詞の世界観を大切にしようってのが伝わってきて。可愛くて、キラキラ輝いてて・・・俺じゃないけど、ときめいた」

歩夢「え、ええっ!?・・・／／／／／も、もうやめてえ・・・!恥ずかしくて死んじゃう・・・／／／／／」

潮時か・・・w

陽哉「・・・ははっ!ごめんごめん!でも、本当に楽しいお祭りだったよ!」

歩夢「・・・陽くんの、ばか・・・／／／／／」

俺たちがそれからも他愛ない話をしていると、侑が走ってきた。

侑「ふ、二人ともく……！遅れてごめくん……！」

陽哉「あ、やっと来た」

歩夢「侑ちゃん、大丈夫？へろへろだけど……」

侑「だい、じよっ……えほっうゝえっほ……！！！」

額の汗と息切れ具合から相当走って来たのがわかる。それにしても「うゝえっほ」って女の子がしている咳込みじゃないだろ、まったく……

陽哉「……ほら、水やるから。ゆっくり飲めよ」

侑「あ、ありがと……。ゴクツ……。うわっぬるっ!？」

このやろうっ……！

陽哉「嫌なら返してもらってもいいんだが………?」

侑「わーっ!ごめんごめん!ありがたく、ありがたく飲ませて頂きます〜!」

歩夢「ふふっ……もう侑ちゃんダメだよ?」

侑「はい……」

陽哉「ほら、もう行くぞ?」

そして、侑が合流した俺達は元の約束通り3人で買い物に出かけた――。

あれから2時間、色々な店を回り、気づけば俺の手には大量の紙袋が……

陽哉「……な、なあ？そろそろ何処かで休まないか？」

歩夢「あ、そうだよね！ごめんね陽くん！」

侑「つい夢中になっちゃったね〜！どうしよつか？近くのファミレスにでも行く？」

陽哉「さ、賛成……」

侑の提案で近くのファミレスに向かった俺達。これで少し休める……と、思っていたら近くで爆発音が鳴り響いた。

ドオオオオオオオーーーーーン
!!!!!!!

陽哉「うわっ!? な、なんだっ!？」

歩夢 「きやあつ!？」

侑 「うえええつ!?!なにになにつ!？」

な、何かの撮影か・・・?それにしても爆発音が大きい気が・・・

陽哉 「行ってみよう!」

歩夢 「あ、陽くん・・・!」

侑 「とりあえず、私達も行こう歩夢!」

そして、俺達が向かった先・・・そこには、人間とは思えない異形な存在が逃げ惑う人達に襲いかかっていた。俺がその異形の存在を眼に捉えると、突然もの凄い頭痛に襲われ、頭の中に謎の・・・赤い龍?の映像が一瞬流れる。

陽哉「あぐつ．．．!?な、なんだ．．．今の．．．!?」

歩夢「陽くん!?大丈夫!?」

??? 「．．．．コノ．．．セカイヲ．．．ワレワレノ、モノニ．．．」

侑「何言ってるの．．．あいつ．．．」

陽哉「．．．．とにかく、奴の注意を引かないと．．．．!」

俺は、痛む頭を押さえながら異形の存在の元へと走り出す。

歩夢「は、陽くん!どこ行くの!」

侑「ま、まさか!?ちよつとそれはやばいって!」

陽哉「2人は逃げ遅れた人を頼む!」

歩夢 「そんな!? 陽くん、死んじやうよお!？」

歩夢と侑の2人にそう言うと、俺は異形の存在の前に出る。 うわあ、ほぼ勢いで出て来たけどやっぱ怖っ!?!で、でもここで逃げたら、歩夢が、侑が、逃げ遅れる人達が危険な目に遭う!それだけは絶対に駄目だ!だから . . .

陽哉 「約束する!俺が 二人を、皆を守る!!!」

その時、俺の目の前に炎が立ち込め、気が付くとそこに一本の剣が刺さっていた。さらに、何処からか先程俺の頭の中の映像に出て来た赤い龍が現れ、異形の存在を攻撃した。

赤い龍 「グオオオオオオオ!!!」

??? 「ナニッ!?!グアアッ!？」

陽哉「そうだ……思い出した……何もかも！」

『聖剣ソードライバー』

そのまま俺は、バックルの様な形……『聖剣ソードライバー』を腰に巻き、『ブレイブドラゴンワンダーライドブック』を開きソードライバーに装填すると、決意を新たに『炎炎剣烈火』を引き抜く。

『ブレイブドラゴン！かつて、全てを滅ぼすほどの偉大な力を手にした神獣がいた……』

『烈火抜刀！』

陽哉「……変身!!!」

『ブレイブ、ドラゴン♪』

そして、ブレイブドラゴンが火炎と共に俺の身体を包み込むと、俺はもう一つの俺の姿に“変身”する……そう、俺は、俺は……!

『烈火一冊! 勇気の竜と火炎剣烈火が交わる時、真紅の剣が悪を貫く!』

『火炎剣烈火!』

陽哉「セイバー」「俺は、セイバー……… “仮面ライダーセイバー”だ!!!」

—— 侑視点 ——

侑「何……あれ……」

歩夢「陽くん……なの……?」

私達の目の前で、地面に刺さった剣を引き抜いた陽が炎に包まれそれが晴れると、そこには特撮ヒーローの様な姿をした陽が立っていた。

陽「セイバー」「物語の結末は……俺が決める!!!」

特撮ヒーローの様な姿になった陽が、持っていた剣を目の前の怪物に向けると、そのまま走り出し剣に炎を纏わせて攻撃を加えていった。

陽「セイバー」「はあぁっ!はあっ!ふ、はあっ!」

???「グオツ!?!……クソツ!ジャマダ!!!」

陽哉「セイバー」「くっ……!?!中々やるな。なら、これでどうだっ!」

剣で攻撃を加えていた陽が、反撃してきた怪物の攻撃を剣で受け止めると、腰の……何か機械みたいなのに収めてある本みたいなやつページの押し込むと右手からさっきの赤い龍？みたいな形をした炎を怪物に向かって放った。

??? 「クツ……!!!コシヤクナマネヲツ!!」

陽哉「セイバー」「あんまり長引かせるのもまずいからな……これで決める!!!」

さっきの火炎攻撃で距離を取った陽が、今度は剣を腰の機械みたいなやつに収めると、剣の引き金を押すと、もう一度剣を引き抜き、眼にも止まらぬ早さで炎を纏った剣で怪物を斬って行く。

『必殺読破!』

『烈火抜刀!ドラゴン! 一冊斬り!ファイヤー!』

陽哉「セイバー」「……火炎、十字斬っ!!!」

陽哉「あゝ・・・その話はまた明日！」

侑・歩夢「・・・え、ええ〜〜〜〜
!?!?!?!」

こうして、私達の不思議?で衝撃的な1日は終わった・・・?

第2話

陽哉「……えっと、劍緋陽哉（つるひはるや）です。創神学園（そうしんがくえん）2年です、よろしく」

歩夢視点

昨日、私達の幼馴染の陽くんが特撮ヒーローに変身して、怪物から私達を守ってくれたんだけど……何故か、諸々の理由を明日話すとはぐらかされて、侑ちゃんと話し合った結果……陽くんをスクールアイドル同好会の部室に呼ぼうということになりました。とりあえず自己紹介は終わったからあとは……

陽哉「……で、来て早々自己紹介させられたんだけど、なんで俺ここに呼ばれたんだ？」

侑「昨日説明してくれなかったからさく！陽の紹介も兼ねてここに呼ばっかって歩夢

と話しててき！・・・さ、昨日のこと教えて」

陽哉「・・・いや、テンションの落差・・・はー、わかったよ」

溜息をついた陽くんが、自分の制服のポケットから昨日の赤い本を取り出し、それをテーブルの上に置き説明してくれた。

陽哉「じゃあまず、これ。これは『ブレイブドラゴンワンダーライドブック』っていう本だ」

侑「その本ってなんなの？」

陽哉「これは、俺が『仮面ライダー』に変身する為に必要なものだ」

かすみ「仮面・・・ライダー・・・？」

しずく「それが、侑先輩達が言っていた特撮ヒーローみたいな姿・・・ということだ

すか？」

歩夢「うん、そうだよ」

愛「へえ〜！こんな小さいのでヒーローになれちゃうなんてすごいよね！」

せつ菜「本・・・ということは、他にも種類があつたりするのですか？」

陽哉「あるけど、俺が持つてるのは一部だね」

侑「え〜全種じゃないの？」

陽哉「他のは・・・ちよつとな」

あれ？陽くんどうしたんだろ？なんだか苦しそうな顔してる・・・

歩夢「・・・陽くん？」

陽哉 「ん？あ、ああ！悪い！この話はもういいだろ？さ、次は？」

彼方 「じゃあ、侑ちゃんが言ってた怪物っていうのはなに〜？」

陽哉 「その怪物は『デイクエンジャー』。とある奴が作り出した怪物です」

エマ 「とある奴って……？」

陽哉 「……それは、多分今説明してもよくわからないと思うので、今後話します」

果林 「それじゃあ、貴方がさっき言ってた仮面ライダーっていうのは具体的にどう言うものなのかしら？」

陽哉 「仮面ライダーっていうのは、そうですね……簡単に言えば、人々の自由と希望を守る戦士……ですかね」

陽くんがそう言うと、それを聞いたせつ菜ちゃんが突如立ちあがり、目をキラキラさせ始める。そんなせつ菜ちゃんを見て、陽くんが困惑する。・・・あく、初めてこの状態のせつ菜ちゃん見るとそうなっちゃうよね。

せつ菜「ふおおおおお!!!自由と希望を守る戦士!!!!凄いです!!!」

陽哉「え、え〜つと、優木せつ菜さん・・・だっけ?急にどうしたの?」

歩夢「せつ菜ちゃんは大好きが溢れるとこうなっちゃうから気にしなくていいよ!」

陽哉「え、あ、そうなの?」

愛「ところでさー?その仮面ライダーっていうのは、はるはる1人だけなの?」

陽哉「は、はるはる・・・って俺のこと?」

愛「そ!あだ名あだ名!」

陽哉「あ、そういうことね．．．あ、えっと、質問の答えだけど仮面ライダーは後
8人いるよ！」

しずく「他の方も剣緋さんと同じで本を使って変身するのですか？」

陽哉「いや、色々いるよ！メダルとかスイッチとか、ボトルとかね！」

璃奈「ボトル．．．気になる。」

かすみ「．．．でも、ここまで話しを聞いていても、やっぱり信じられないとい
か．．．．．」

侑「だったら、変身してみてもよ陽！」

陽哉「お前なあゝ．．．はあ、わかった」

侑ちゃんの提案にもう一度溜息を洩らした陽くんだったが、その提案を聞き変身することに……。またあのカッコいい陽くんが見られるんだ！けど、逆に陽くんからの提案で部室で変身するのは危ないということの中庭に移動することに

陽哉「それじゃ、行くよ」

『聖剣ソードライバー』

『ブレイブドラゴン！』

『烈火抜刀！』

陽哉「変身！」

『ブレイブ、ドラゴン♪』

陽哉「セイバー」……はっ！

仮面ライダーに変身した陽くんを見て、愛ちゃん・せつ菜ちゃんが身体をぺたぺたと触り、璃奈ちゃんのはしゃがみ込んで腰の機械をじつと見ていた。

せつ菜「ふおおおおお!!!これが仮面ライダーなのですね!!!!」

愛「へえ〜!めっちゃかつこいいじゃん!」

璃奈「これ、どういう構造になってるのか、気になる。璃奈ちゃんボード【キラキラツ
ー!】」

陽哉「セイバー」「あ、あの……」

彼方「あの剣って本物なのかな?」

エマ「侑ちゃんが怪物を倒したって言ってたから本物じゃないかな?」

果林「まあ、それはそれとして……あなた達！その子困ってるわよー！ちよつと離れなさい！」

せつ菜「……はっ!?す、すみません……つい」

愛「あはは……ごめんねえ〜！」

璃奈「……ごめんなさい。璃奈ちゃんボード【しゅん……】」

陽哉「セイバー」「ああ、いや、全然……」

侑「実は満更でもないんじゃない？」

陽哉「セイバー」「う、うるさいな……／＼／＼／＼／＼」

侑ちゃんにいじられて恥ずかしがりながらも否定はしない陽くん……満更じゃないんだ。……と、そんなことを思っていると、学校敷地内で昨日みたいな爆発が鳴

歩夢「侑ちゃん、行こ！」

侑「うん！皆は何処か安全なところに隠れてて！」

かすみ「あ、ちよつと！歩夢先輩、侑先輩！」

エマ「行つちやつた……」

愛「愛さんも行つてくる！」

せつ菜「あ、愛さん!?1人では危険ですよ！」

果林「まったく……あの子達だけじゃ心配だし、私達も行くわよ！」

彼方「ちよつと果林ちゃん……待ってよお〜」

しずく「行こ！璃奈さん！」

璃奈「うん。」

かすみ「あ、ちよつと待ってくださいよおー！！！」

——陽哉視点——

同好会の皆にセイバーの姿を見せる為、皆が見ている前で変身したんだけど、そんな時に近くで爆発があり、俺はそのまま爆発のした方へ行くことにした。俺がその場に到着すると、一体のデイクエンジャーが暴れ回っていた。

??? 「この世界は、我々の物に！人類など消えろ！」

陽哉「セイバー」「あのデイヴエンジャー……ベースはゴーレムメギドか？」

目の先にいるデイヴエンジャーは外見は俺の知るゴーレムメギド……だが、額の手が牛の様な角になり、全身が青くなっていた。

陽哉「セイバー」「おいっ！デイヴエンジャー！」

ゴーレロスデイヴエンジャー（以下、ゴーレロス）「貴様……仮面ライダー！」

陽哉「セイバー」「これ以上の破壊は許さない！行くぞ！」

ゴーレロス「邪魔者め……死ね！」

ゴーレロスデイヴエンジャーが放ってきた岩を火炎剣烈火で砕いていくが、数の多さとその威力に対処しきれず何発も当たってしまった。

陽哉「セイバー」「ぐあつ?!? . . . くそ、前の時よりも威力が上がっている!」

ゴーレロス「当たり前前だ! ミノタウロスファントムと融合した我力 . . . とくと味わうがいい!」

ミノタウロスファントム . . . 確か、ウィザードの . . . 。すると、ゴーレロス
デイヴェンジャーは頭の角に岩石を集め巨大な角を作ると、それを振り落としてきた。

陽哉「セイバー」「あぶなつ?!? . . . なら、これでどうだ!」

ゴーレロスデイヴェンジャーの攻撃を避けた俺は、〃ソードライバー必冊ホルダー〃
から一冊の本を取り出すと、それを烈火の〃シンガンリーダー〃と呼ばれる速読器に取
り出した本を読み込ませると、ゴーレロスデイヴェンジャーに向けて炎の竜巻を飛ばし
た。

『イーグル! ふむふむ . . . 習得一閃!』

陽哉「セイバー」「……………はあっ！」

ゴーレロス「ぐっ……………!？」

俺が放った炎の竜巻がゴーレロスデイベンジャーを飲み込む……………だが。

ゴーレロス「……………ちよこざいなあっ!!!」

陽哉「セイバー」「なっ!?!……………うそ、だろ……………!?!」

まったく効いていない……………いや、正確にはダメージは受けているが、大ダメージというほどではない。

ゴーレロス「ふん……………前の俺ならやばかったが、今の俺にはかすり傷だ！」

陽哉「セイバー」「なら、もっと威力の高い技で！」

『ストームイーグル!』

『この大鷲が現れし時、猛烈な竜巻が起これと言ひ伝えられている……』

俺は烈火をソードライバーに納刀すると、さつき取り出した本「ストームイーグルワ
ンダーライドブック」をソードライバーに収め再度、烈火を抜刀する。

『烈火抜刀!』

陽哉「セイバー」「はあっ!」

『烈火二冊! 竜巻ドラゴンイーグル! 荒ぶる空の翼龍が獄炎を纏い、あらゆるものを焼
き尽くす!』

陽哉「セイバードラゴンイーグル(以下「ドライグ」)」「行くぞ!」

ゴーレロス「どんな姿であろうとも、砕く!!!」

ゴーレロスディヴェンジャーは、今度は角ではなく右腕に岩石を集め巨大化させると、俺に向かって放ってきた。

ゴーレロス「おらあっ!!!」

陽哉「セイバードライグ」「そう易々と・・・くらうか!!!」

俺は、態勢をギリギリまで深く落とし、相手の岩石の腕と地面との間すれすれを飛行しゴーレロスディヴェンジャーに炎を纏わせた烈火で切り付けた。

ゴーレロス「なにつ!? 地面すれすれを飛行して回避した・・・だどっ!?」

陽哉「セイバードライグ」「はあっ!!!」

ゴーレロス「ぐおっ!?!」

陽哉「セイバードライグ」「さあ、物語の結末は……俺が決める!!!」

ゴーレロスデイヴエンジャーが俺の攻撃で怯んだ隙に俺は烈火を納刀し、トリガーを二回引いて脚に炎を纏わせると、ゴーレロスデイヴエンジャーに向けて最大威力の飛び蹴りを放つ。

『必殺読破！ドラゴン！イーグル！二冊撃！ファ・ファ・ファイヤー！』

陽哉「セイバードライグ」「……火龍蹴撃破!!!」

ゴーレロス「そうはさせん!!!勝つのは……俺だつ!!!」

俺が必殺キックを放つと、ゴーレロスデイヴエンジャーも負けじと再度角に岩石を集めさつきよりも巨大な角で攻撃し、互いの技がぶつかり合う。

陽哉「セイバードライグ」「負けない……絶対につ!!!はあああああつつつつつ!!!」

ゴーレロス「おおおおおおおつつつつ
!!!!!!」

拮抗……かつ……！後一步！後一步なのにっ！足りない……！！後何が……
!!!!!!
……その時だった。

歩夢「……負けないで！！陽くん！！！！」

陽哉「セイバードライグ」「歩夢っ!? そうだ、俺は負けない！俺の後ろにいる皆の為に
!!!!!!
も!!!!!!
あああああああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ
!!!!!!」

ゴーレロス「……なにつ!? ここにきてパワーが上がった……だと!? くっそつ……
クソオオオオオオオオオオオツツツツツツツツツツ
!!!!!!」

そして、歩夢の声援で力を増すことが出来た俺は岩石の角を破壊し、ついに……ついにゴーレロスディヴェンジャーを打倒することに成功した！そして俺は、変身を解除する。

陽哉「……………はあつ……………はあつ……………はあ、はあ……………」

—— 歩夢視点 ——

陽くん、勝てて良かった……………。それにしても…………。

侑「すごかったね……………今回の戦い……………」

歩夢「う、うん……………」

せつ菜「……………なんという迫力……………」

かすみ「あれが……仮面ライダー……」

しずく「つい、見入ってしまったね……」

璃奈「う、うん……。璃奈ちゃんボード【ぼーぜん】」

果林「エマ……。ちよつと私の頬をつねってくれないかしら……?」

エマ「う、うん……。えい」

果林「痛い痛いっ!?!……。ほ、本当のことなのね……」

彼方「本当に……。びつくりだよねえ……。彼方ちゃん、眠気がふつとんじやつたよ……」

そう、私達は逃げ遅れた人を非難させてる中、あまりの戦闘の迫力にいつの間にか見入ってしまったいました……。でも、それだけ凄く、手に汗握る戦いだつた。

歩夢 「あ、陽くん……！」

そして私は、変身を解除した陽くんの元へと駆け寄り親指を突き出すと、陽くんも肩で息しながらも笑顔で返してくれた。

歩夢 「やったね！」

陽哉 「……ああ！」

第3話 憎きアイツは大企業の御曹司で仮面ライダー……!?

—— かすみ視点 ——

今日の部活の帰り道……私、中須かすみは昨日の出来事を思い出していた……

かすみ「……はあー。まさか、本当にあんなアニメみたいなことが現実に起こるなんて……」

そう、昨日、私と同じスクールアイドル同好会の部員で一年先輩の上原歩先輩と高咲侑先輩の幼馴染である剣緋陽哉さんという方が仮面ライダーと呼ばれるヒーローに変身して、突如現れた怪物をズバー！と倒しちやっつた時は……正直、興奮しちやっつた……昨日のことを思い返すと、全身にあの熱風の熱さが残っているのを感じ、あの出来事が現実だったのだと実感する。

かすみ「あの後、もしもの時について陽哉先輩と連絡先を交換したけど……そんなポンポン起きるもののかな？」

そんなことを考えていると、後ろの方で声を掛けられた。

??? 「あれ？もしかして……かすかす？」

む。誰ですかその不名誉なあだ名で呼ぶ失礼な人は！……愛先輩？いや、声は完全に男の人の声だ。それに愛先輩は今日運動部の助っ人で部活に来ていないし、そもそも帰り道違うから会うはずないし……じゃあ本当に誰？まあいいです！どんな顔か見てやろうじゃないですか！

かすみ「かすかすじゃなくて、かすみんですー!!!というか誰ですか！その不名誉なあだ名で私を呼ぶのは！」

そして怒りのままに振り返ると……そこには高身長イケメンの男性が立っていた。

??? 「俺だよ俺！久しぶりだな！」

・・・はて？こんなイケメン、知り合いにいたでしょうか？新手的オレオレ詐欺かなんかかと訝しんでいると、目の前のイケメンが察したのか名乗ってきた。

??? 「あれ？もしかして忘れられた？まあ、小学校の時からだもんなあ〜！・・・よし、じゃあ改めて・・・飛瀬雷羽（ひせらいは）！さすがに名前を聞けば思い出すろ？」

飛瀬雷羽、飛瀬雷羽・・・。私は何度かその名前を頭の中で繰り返し、ようやく思い出す。そして思い出したと同時に私の中である感情が沸き上がる・・・そう、それは憎しみ。この名前を思い出すと、私は叫ばずにはいられなかった。だって、だつてこの男は・・・

かすみ「飛瀬・・・雷羽ああああ!!!ここで会ったが・・・え〜つと、なんとやら！その息の根を止めてやるうううう!!!」

雷羽「うわああああ!!!ちよちよ、落ち着けてかすみ!とりあえずチョコキを真っ直ぐにして俺の眼を潰そうとするのはやめろ!!!」

かすみ「ガルルルル・・・!!!あの日のこと!忘れたとは言わせない!」

そう、この男は・・・飛瀬雷羽は、私の人生で初めてかすかすというあだ名を口にした憎き敵だ!ぜえつたいに許さないー!!!つと、思い腕に力を入れるも、流星は男。片手で私の腕を掴みビクともしない。

雷羽「あ、あの日のことは悪かったって!お詫びに駅前のフルーツパフェの店の人気のパフェ奢るからさ!」

かすみ「・・・えっ!?!」

私は、その言葉を聞いて手が緩む。駅前のフルーツパフェのお店と言えば、少し前から人気が出始めたお店で、特に女性を中心に人気を博している。そのお店のパフェを

奢ってくれるというのだから、手も緩んでしまう……。

かすみ「……………本当？」

雷羽「あ、ああ！本当だ！」

かすみ「……………なら、一番高いやつで」

雷羽「お、おう……………」

そして私達は、駅前のフルーツパフェの店へ直行した。

学校の帰り道で偶然小学校の時の同級生、中須かすみに再会した俺こと飛瀬雷羽は、なんやかんやあつて駅前フルーツパフェの店にかすみと共に来ていた。

雷羽「……で？何にするか決めた？」

かすみ「ちよつと待って！……うくん。こつちもいいしあつちもいいし……」

雷羽「ていうか、一番高いやつじゃないのかよ？」

かすみ「だつて〜！来たらどれも美味しそうだったんだもくん……！……うくん、やつぱり〃風と切り札パフェ〃がいいかなあ〜それとも〃時を掛ける列車パフェ〃も捨てがたい……」

俺の真正面に座っているかすみがこの店に来てもう10分ほどうんうんと唸っている……。ていうかなんだよ〃風と切り札パフェ〃とか〃時を掛ける列車パフェ〃つ

て、どんなパフエだよ。

雷羽「もくなんでも奢ってやるからまだかよく……」

かすみ「……決めた!この『黄色い芸人社長パフエ』にする!」

雷羽「な、なんだその名前のパフエは!?!ほんとにそんなのあるのか!?!」

かすみ「うん、ほら」

と、かすみが見せてきたメニュー表を見てみる……と、そこには確かに『黄色い芸人社長パフエ』という名のパフエがあった……。いや、まじか……

雷羽「はあく、もうそれでいいから早く注文してくれ……」

かすみ「すみませーん!黄色い芸人社長パフエーっお願いしまーす!」

??? 「はいはい！黄色い芸人社長パフエね！」

そして、男性店員が持ってきたパフエを食べながらかすみがかんことを聞いてきた。

かすみ「……そういえば、雷羽はなんで日本にいるの？確かアメリカで、なんだっけ？え〜と……」

雷羽「帝王学のこと？」

かすみ「そうそれ！それを学ぶ為にアメリカ行ってたんじやないの？」

雷羽「あ〜、それならこの間終わって帰って来たんだよ」

俺がそう言うと、かすみはパフエを口に運びながら「そうなんだ」と言ってきた。いや、聞いてきいて興味なさそうだなおい！……と、俺達がそんなやり取りをしていると、店の外が騒がしく、何事かと見てみると何かから逃げ惑っている人々が見えた。

雷羽「な、なんだなんだ？」

かすみ「何かの撮影かな？」

雷羽「撮影にしてはなんか妙……ちよつと行つてみるか」

かすみ「ええ!?ちよ、ちよつと待つてよー!」

雷羽「店員さん!テーブルに代金置いときますね!」

???「はい!ありがとうございますー!」

俺がテーブルの上に代金を置いて席を立つと、かすみが焦つたようにパフエをバクバクと食べ、急いで席を立つ。そして俺達は、悲鳴がもつとも大きい所に向かう……するとそこには、何か、ヤバそうなロボットがいた。

雷羽「な、なんだよ……あれ!」

かすみ「あれって……昨日のと姿が違うけど、やっぱりデイヴェンジャー……?」

雷羽「……デイ、ヴェンジャー……?あぐつ!」

かすみがああのロボットの名前?を口にし、その名前を俺が口にした時……突然ひどい頭痛に見舞われる。なんだよ……急に!」

かすみ「ちよ、雷羽!?!どうしたの!」

雷羽「急に……頭痛が……!?!かすみは逃げる……!」

かすみ「そんなの出来る訳ないじゃん!」

俺達がそんなやり取りをしていると、ヤバそうなロボットが俺達の方に近づいてきて

持っていた武器を振り上げてきた。狙いは……かすみ!?

雷羽「……かすみ!」

かすみ「え?……きやあつ!」

トリロバイトマギア「ジンルイ……ハメツ……!」

雷羽「……くっそ!」

このままじゃかすみは殺される!……そう思った時だった。どこからともなく巨大なバツタのロボットが現れて、かすみを襲おうとしたロボットを頭突きで跳ね飛ばした。

トリロバイトマギア「ナニツ!?グオツ!」

雷羽「こ、今度は何だ……!」

かすみ「え、ええっ!？」

かすみを襲おうとしたロボットを跳ね飛ばしたバツタ型のロボットが俺の方を向き、何かを放つて来た。俺は痛む頭を抑え、それを手に取ると・・・俺を襲っていた頭痛が消え、頭の中が晴れていくのを感じる。そして俺は、ある記憶を思い出す・・・そう、それはあの時の記憶。あの世界での・・・もう一つの俺の姿。俺はその記憶を思い出すと、大きい方の機械“ゼロワンドライバー”を腰に巻き、右手に持っていた小さい機械“ライジングホッパープログライズキー”を起動させる。

雷羽「・・・そうだ、思い出した!全部!」

『ジャンプ!オーソライズ』

雷羽「・・・変身つ!!!」

そして、起動させたプログライズキーをベルトに読み込ませると、それをベルトに差

し込む。すると俺の身体を黒いパワードスーツが包み、俺の目の前にいた「バツタのラ イダモデル」が俺の頭上で分解、俺の身体に黄色いアーマーパーツとなつて再構築され ていく。

『プログライズ!』

『飛び上がライズ!ライジングホッパー!』

『A jump to the sky turns to a rider kick.』

そして俺は、あの世界でのもう一つの姿に変身が完了した。そう、俺は……

雷羽「ゼロワン」「俺はゼロワン!仮面ライダーゼロワン!」

かすみ視点

かすみ「うそ……雷羽が仮面ライダーだったなんて……」

バツタ型のロボットが放つて来た何かを雷羽が手に取り大きい方の機械を腰に付けると、今度は右手に持った小さい機械を腰に巻いた機械に挿し込むと、……雷羽が黄色い仮面ライダーに変身した。

雷羽「ゼロワン」「さあ〜て！行くぜマジア……と、言いたいところだけどその前に！」

と、仮面ライダーに変身した雷羽が突然私の方に振り向いてきた……と思つたら、急に私をお姫様だっこしてきた!?

かすみ「うえええっ!?ちよ、なにしてんのっ!？」

雷羽「ゼロワン」「かすみ、ちゃんと掴まってないと舌噛むぞ?・・・はっ!」

かすみ「ちよ、いやあああああ・・・!!!」

私を急にお姫様だっこした雷羽がぐつと足に力を入れると、すっごい高くジャンプした。そして、少し離れた場所に着地すると私をゆっくり下ろした。・・・絶対にならないけど、ちよつとおしっこお漏らししそうになっちゃった・・・。

雷羽「ゼロワン」「かすみ、ちよつとここに隠れていてくれ」

かすみ「ひゃ・・・ひゃい・・・」

私を下した雷羽は、またジャンプしてデイヴエンジャーの元に戻って行った。

雷羽「ゼロワン」「さて・・・マギア!お前、ただのマギアじゃないんだろ?」

トリロバイトマギア「ヨク……ワカッタナ……。ウオオオオオオオ!!!」

デイヴェンジャーが叫ぶと、その姿を変え、右側が何か横ににきつと伸びたロボットで左がカマキリ?の様な姿になった。

カマキリベローサデイヴェンジャー（以下、カマキリベローサ）「フッフッフ……カメンライダー、キサマをマツサツスル！」

雷羽「ゼロワン」「カマキリ対バッタ……。昆虫対決か。行くぜ！」

そして、雷羽とデイヴェンジャーはついに戦いを開始した。

雷羽「ゼロワン」「はあっ！おりやつ！」

カマキリベローサ「クっ！ウツ！……クそガっ!!!」

雷羽「ゼロワン」「うおっ!……くそ、なかなかやるなあ！だったら鎌には剣！」

デイヴエンジャーと攻防を繰り返していた雷羽が、カバン?みたいなものを取り出すと、それを剣に変形させデイヴエンジャーが振り上げた鎌に合わせて振るい弾くとそのままアタッシュカリバーを振り下ろし攻撃を加える。

カマキリベローサ「これでおわりだっ!!!」

『ブレードライズ!』

雷羽「ゼロワン」「はあっ!」

カマキリベローサ「ナニっ!?! ……グおっ!?!」

そして、距離を取った雷羽は剣を再びカバンの形に戻し、もう一度剣に戻すとトリガーを引くと、デイヴエンジャーに向けて何か、すごい、斬撃?みたいなのを飛ばした。

『チャージライズ!』

『フルチャージ!』

雷羽「ゼロワン」「行くぞ!」

『カバンストラッシュユ!』

雷羽「ゼロワン」「はあああ……はあっ!!
!!!」

カマキリベローサ「ぐッ……グオアあっつっつ?!?!」

雷羽「ゼロワン」「お前を止められるのはただ一人……俺だ!」

そう言うと、雷羽は腰の機械に挿してあるさっきの小さい機械を押し込むと、目にも止まらない速さでデイヴェンジャーに攻撃を加え空に飛ばすと、雷羽自身も飛び上がり、地面へ向けて蹴りを入れると、その勢いそのまま飛び蹴りをかます。

『ライジングインパクト』

雷羽「ゼロワン」「はあああ………らあああ
!!!!」

ラ イ ジ ン グ
イ ン パ ク ト

カマキリベローサ「ぐ、グワアあああつあああつ
つつつつつつ
!?!?!?
」

『ライジンググインパクト!』

そして、雷羽の蹴りを受けたデイヴエンジャーが上空で爆発し、雷羽はそのまま地上に着地しようとした……けど……

雷羽「ゼロワン」「おおおおお!……止まらねええええ……あぐっ!?!げふっ!?!」

勢いを消しきれなかった雷羽はその勢いそのまま躓き、派手に転がりついに倒れ込んで
停止した。

やべえ、やっちゃった・・・。久しぶりの変身とかすみの前だからって調子に乗ってゼロワンに初変身した時と同じことしちゃったけど、あの時以上に勢い余ってすっころんじまった! ああ・・・! しかもよりにもよってかすみの前でとか! 絶対いじられるじゃくん!・・・と、俺がゼロワンのマスク越しに顔を手で覆って足をバタバタさせつつかすみの方を見ると、かすみは何故か口を大きく開け固まっていた。

かすみ「・・・・・・・・!」

雷羽「ゼロワン」「・・・・・・・・かすみ?」

俺は変身を解除してかすみの方へ向かい固まっているかすみの顔の前で手を振って見せる・・・・・・・・すると、かすみがはっ!と我に返った瞬間、すごい勢いで抱き着いてきた。

雷羽「おっい・・・・・・・・!かすみ?」

かすみ「……………はっ!? 雷羽ーー!!」

雷羽「おわっ!?! ちよ、いきなり何抱き着いてきてんの!?!」

この構図はやばい! 色々やばいつて! ……俺はそう心の中でドギマギしていた……が、それは次のかすみの言葉でかき消された。

かすみ「……………雷羽も仮面ライダーだったんだね!」

雷羽「……………も? もつてお前、何で仮面ライダーのこと知って……………つてまさか! 知り合いにいるのか!?! 俺以外の仮面ライダーが!?!」

かすみ「う、うん……………いるよ」

その言葉を聞いた俺はかすみの肩をガシッと掴み顔を近づける。

かすみ「ちよ、雷羽!?! 近い近い……………// // // //」

雷羽 「かすみ………そいつに会わせてくれ！」

かすみ 「………ほえ？」

第4話 絶望を希望に、大好きを守る指輪の魔法使い 前編

「「「「「「「「えーっっっっっ
!!!!!!」」」」」」」」

——かすみ視点——

私、中須かすみは現在、私の憎き敵で小学校時代の同級生である飛瀬雷羽と同好会のメンバーと共に上原歩夢先輩と高咲侑先輩の幼馴染でもう一人の仮面ライダーである剣緋陽哉さんを待っている間、昨日あった出来事を同好会の皆に話していた。

侑「まさか、かすみちゃんの小学校時代の同級生が——」

彼方「あの、日本を代表する2大企業の一つ、飛瀬グループの御曹司で——」

愛「仮面ライダーだったなんてっ!?!」

せつ菜「びっくりですっつっ
!!!!!!」

璃奈「……設定がもりもり。」

しずく「た、確かに……」

雷羽「あ、あはは……それほど」

かすみ「なに照れてんの？別に褒めてないけど？」

雷羽「い、いいだろ別に！」

果林「それにしても、貴方は剣緋君みたいに本で変身しないのね？」

雷羽「本？ということは今から来る奴って——」

雷羽が言いかけたその時、部室の扉が勢いよく開かれ、ぜえぜえと息を切らせた陽哉先輩が入って来た。

陽哉「遅れてごめんっ!？」

歩夢「あ！陽君！」

侑「遅かったじゃん、何やってたの？」

陽哉「ちよつと、学校の用事が長引いちやつて……って、それよりも！俺以外の仮面ライダーが出たって本当か!？」

雷羽「……よお！あんたが仮面ライダーか？」

部室に入ってきて来てすぐに侑先輩の肩を揺すっていた陽哉先輩に雷羽がいつもの調子で……いや、少しテンション高い？感じで声をかけた。

陽哉「……もしかして、君が？」

雷羽「ああ！俺は飛瀬雷羽！……そして、ゼロワンだ」

陽哉「ゼロワン……ゼロワン！久しぶりだな！俺は剣緋陽哉！……そして、セイバーだ！」

二人は互いに自己紹介をしてアイテムを見せ合うと、急に抱き合い喜び合う……そして、それを見たせつ菜先輩が何故かいつも以上に興奮します。

雷羽「やつぱりセイバーか！久しぶりだなあ！」

陽哉「ああ！また会えて嬉しいよ！」

せつ菜「ふ、ふおお……!!!これは……どっちが攻めでどっちが受けなのでしょうか……!!!」

エマ「せつ菜ちゃんは何を言っているの？」

果林「知らなくていいことよ、エマ」

本当に、何を言ってるんですかねせつ菜先輩は・・・まあ、あえてツツコミませんけど。・・・と、そんなことを思っていると、せつ菜先輩のスマホが鳴った。

せつ菜「・・・ん？どなたでしょう？・・・あ!!!!!!」

歩夢「せつ菜ちゃん、どうしたの？」

せつ菜「ちよつと、知り合いから電話で！すみません、少し席を外します！」

そう言うと、せつ菜先輩は廊下に出て行っちゃいました。

彼方「今のせつ菜ちゃん、ちよつと嬉しそうじゃなかった？」

果林「これは……まさか、ね」

かすみ「え？何でそんな悪い顔してるんですか？まさかっつてなんなんですか？」

果林「男かもつてことよ♪」

侑「そ、そんなっ!？」

しずく「ですが、あのせつ菜さんですよ？」

璃奈「考えにくい……。」

愛「でもまあ、せつつーもなんだかんだ女の子だしねー」

雷羽「……なあ？俺達忘れられてね？」

陽哉「……あ、ああ。」

私達がそんな話しをしていると、廊下の方からいつものせつ菜先輩の大声が聞こえてきた。

せつ菜《……あ……!!!
!!!すみません、忘れてました!!!
!!!い、今すぐ行きます!!!
!!!》

エマ「わあ!?!び、びつくりしたあ〜」

しずく「扉越しでもはつきりと聞こえるとは……さすがですね」

歩夢「な、何があつたんだろ……?」

すると、パンツ!と勢いよく扉が開き、せつ菜先輩が慌てた様子で荷物を鞆に詰めていく。

せつ菜「……皆さん!すみません、私は今日は帰りますね!」

歩夢「え、ど、どうしたの？」

せつ菜「実は用事があつて……」

彼方「用事つて？」

せつ菜「私の知り合いがマジシャンを目指していて……今、マジックバーでバイト兼修

行をしているのですが、今日は初めてバーの舞台に立つというので見に行く約束をしていたのですが……」

しずく「忘れてしまつていた……と？」

せつ菜「……はい」

エマ「大変！急がないと！」

せつ菜「なので私はこれで失礼します!!!」

侑「ちよろろと待ったー!!!」

そうして、せつ菜先輩が出て行こうとすると、侑先輩がこんなことを言い出した。

せつ菜「ど、どうしたのですか？侑さん・・・？」

侑「・・・私も！見たい！という訳で皆で行こう！そのマジックバーに！」

侑以外の全員『え、ええー！！！！！！』

という訳で、私達とすっかり影が薄くなっていた雷羽と陽哉先輩と共に、皆でマジックバーに行くことになった。

—— 侑視点 ——

何か大切な約束を忘れていたみたいで、せつ菜ちゃんが急いで部室を出ようとしたところで私、高咲侑がせつ菜ちゃんを呼び止め部室にいたみんなでせつ菜ちゃんが今から行くマジックバーに行くことに

せつ菜「そろそろ着きますよ！皆さん！」

侑「こういうところ来るの初めてー！」

歩夢「勢いで来ちゃったけど、バーって未成年の私達が行っても大丈夫なのかな？」

せつ菜「そこは安心してください！バーは基本未成年でも入れますし、今から行くお店は禁煙なので大丈夫ですよ！」

雷羽「バーなんて、久々に行くな」

かすみ「え？雷羽、バーとか行ったことあるの？」

雷羽「まあなく。中学の時に親父に連れられてさ」

しずく「ちゅ、中学の時からバーだなんて……」

璃奈「お金持ちはやることが違う……」

彼方「いや、二人も結構なお金持ちだからね？」

今一瞬彼方さんから黒い何かが出たような……？まあそれはそれとして、私達がワイワイ話ながら歩いていると、少し先にあるお店の前に立っていた男の子がこちらに手を振りながら声をかけてきた。

??? 「あ、おーい！菜々ー!!!」

せつ菜 「あ!!!太陽君!!!」

歩夢 「太陽くん？」

果林 「知り合いみたいね・・・と、いうことはここが約束してたお店かしら？」

エマ 「わあああ・・・！綺麗なお店〜！」

愛 「なんかこう、大人な空間！って感じじゃん！」

“太陽君”と呼ばれた男の子の元へ走っていくせつ菜ちゃんの後を追い、目的のお店に着いた私達は、お店の外観を見て感嘆の声を上げる。すると、太陽君と呼ばれた男の子と話していたせつ菜ちゃんが私達の方を向き、紹介をしてくれた。

太陽 「もお、今日の約束忘れるなんてひどいじゃないか菜々〜！」

せつ菜「す、すみません……。ちよつとここ数日色々ありまして……」

太陽「ま、こうして来てくれたから許すよ！……つと、それよりもそちらの方々は？」

せつ菜「あ、そうでした!!!こちら、私と同じ同好会に所属している皆さんです!!!」

太陽「あく！スクールアイドルの！そういえばこの間のフェスで見たな……。あ、初めまして皆さん！菜々がいつもお世話になってます！菜々の幼馴染の、希魔太陽（きばたいよう）です、よろしく！」

と、にこやかに挨拶してくれた姿は正しくイケメン……。ていうか、せつ菜ちゃん男の幼馴染いたんだ……。と、それは置いといて私達も一人ずつ挨拶を済ませていく。

太陽「まさか、その男子たちもスクールアイドルなの？」

陽哉 「い、いや、俺達はスクールアイドルじゃなくて……」

雷羽 「俺はかすみの小学校時代のともだ「憎き敵ですっ!」……ん、の飛瀬雷羽!で、こっちは上原さんと高咲さんの幼馴染の剣緋陽哉って言うんだ!よろしく!」

太陽 「ああ、なるほど……勘違いしちゃってすいません。こちらこそよろしく!」

歩夢 「……でも、陽くんのスクールアイドル姿……見てみたいかも♪」

陽哉 「はえっ!?何言ってるの歩夢!」

あ、陽照れてる……まあ、でも確かにちよつと面白いかも。……と、私達が話していると、お店の中からオーナーらしき男の人が太陽くんを呼びに来た。

オーナー 「太陽くん?そろそろ時間だけど、せつ菜ちゃんとそのお友達は来た?」

太陽「あ、オーナー！すいません今行きます！さ、皆も入って入って」

せつ菜「はい！失礼します！」

太陽くんに案内されて入店した私達は空いていたテーブル席に座り、太陽くんのステージが始まるまでの間にせつ菜ちゃんと色々話すことにした。ちなみに、店内は入つてすぐにレジカウンター、少し間を開けてバーカウンターがあり、バーカウンターの目の前に20席くらいのテーブル席・・・そして、一番目を引くのが店内の一番奥に設置されたライブハウスのステージよりちよつと大きいステージがある。

侑「へえー！結構広いだね！」

せつ菜「ええ！中央のステージを広くするためにオーナーさんがちよつと前に改装したんですよ！」

歩夢「せつ菜ちゃん詳しいね？よく来るの？」

せつ菜「はい！太陽くんがバイトで働き始めたくらいからちよくちよく来てます！」

果林「せ、せつ菜も結構大人の経験してるのね・・・！」

彼方「果林ちゃん？手が震えてるよ？」

しずく「それより、希魔さんはせつ菜さんがスクールアイドルをやっていること知っている様でしたけど」

せつ菜「はい！・・・た、太陽くんは、小さい頃から私を理解してくれるので・・・一番最初にスクールアイドルをやりたいと言った時も、応援するって言ってくれて・・・」

と、そう言うせつ菜ちゃんは少し俯き頬も少し赤くなっている様に見える。お？これはもしや・・・と、私がそう思っていると、ステージの照明がパツ！と明るくなり、ステージの中央からタキシードを着た太陽くんが姿を現す。

愛「おおく！太陽すごく似合ってるじゃん！」

せつ菜「……た、太陽くん……！」

そして、ステージ上の太陽くんがこちら……主にせつ菜ちゃんに軽く微笑むと、ついにマジックショーが開幕した……

——太陽視点——

今日が初ステージの俺、希魔太陽は……無事にショーを終わらせ、今は菜々とスクールアイドルの友達の間が帰るといっているので見送りに店の前に来ていた。

太陽「今日は俺の初マジックショーに来てくれてありがとう！」

侑「すつごく良かった！……ね！歩夢！」

歩夢「うん！夢中で見ちゃったよ！」

陽哉「俺も、こんな間近でマジックショーを見たのは初めてだったから興奮しちゃったよ！」

雷羽「いや〜！俺も結構プロのマジシャンのとか見てるけど、レベル高くて面白かったなあ〜！」

太陽「あ、あはは……そう褒め殺されると、恥ずかしいな……。でも、皆が喜んでもらえたみたいでよかったよ！」

しずく「希魔さん！今度、舞台上で活かしたいのでいつかマジック教えていただきたいですか！」

太陽「うん、もちろんいいよ！」

みんなが思い思いに感想を言ってくれて嬉しい気持ちになると、最後にもじもじしている菜々が話しかけてきた。

せつ菜「た、太陽くん……！」

太陽「あ、菜々！どうだったかな？俺の初マジックショー……」

せつ菜「……すつつつごくよかったです!!!!ステージの上の太陽くんはかつこよくてキラキラしていてとても楽しかったです!!!」

太陽「そつか……！それならよかったよ！」

と、俺達が話していると、目の前で爆発が起こりその中から無数のロボットやら怪物やらが出てきた。

歩夢「きやあつ!?」

かすみ「あ、あれ!見てください……!?」

陽哉「あれはっ……!?」

雷羽「シミーにトリロバイトマギア……それに、あれは確か……グール?」

エマ「あんなにいっぱい……!」

愛「と、とにかく!皆を避難させないと!」

陽哉「行こう!ゼロワン!」

雷羽「ああ!」

皆はあの怪物達のことを知っている様で陽哉と雷羽はあの群れに立ち向かっていき、虹ヶ咲の皆は逃げ惑ってる人を先導し、避難させ始める……が、俺はいまだに事態を把握しきれず呆然としながら隣にいた菜々に問いかける。

太陽「菜々……一体、何がどうなってるんだ？あれは……なんなんだ？」

せつ菜「太陽くん、あれはデイクエンジャーと呼ばれる怪人です！危険なので私達も早く逃げましょう！」

太陽「で、でも……陽哉と雷羽が……！」

せつ菜「あの2人なら大丈夫です！なぜなら……」

せつ菜が何かを言いかけた瞬間、陽哉と雷羽が何者かに吹き飛ばされ、怪人の群れの中から炎のような怪人が出て来た。

陽哉「ぐあっ……!？」

雷羽「がっ……!?」

??? 「ふっふっふっ……! 我らの邪魔をする者は消してしまえ!」

陽哉「くっ……! お前は……!」

??? 「私ですか? 私は……ヘルマグマデイヴエンジャー!」

雷羽「負ける訳にはいかないよな! セイバー!」

陽哉「ああ!」

そう言うと2人は腰に謎の機械を巻き、それぞれ本と小さい機械を取り出す。

『ブレイブドラゴン!』

『ジャンプ!』

陽哉&雷羽 「変身つつ!!!」

『ブレイブ、ドラゴーン♪』

『ライジングホッパー!』

ヘルマグマディヴェンジャー（以下、ヘルマグマ）「ふっ……まさか、仮面ライダーだったとは。まあいいでしょう!消して差し上げます!」

それぞれ取り出した本と機械を腰の機械に装填すると、陽哉と雷羽の2人は漫画のヒーローの様な姿になる。そしてそのまま炎の怪人と戦闘を開始した2人を見て俺が困惑していると、菜々が説明してくれた。

太陽 「どうしちゃったんだ……2人共……」

せつ菜「2人は正義のヒーロー……仮面ライダーなんですよっ!!」

太陽「仮面……ライダー……?……あぐっ!」

菜々の言った仮面ライダーという言葉を目にした瞬間、俺は激しい頭痛に見舞われる。

せつ菜「太陽君っ!?大丈夫ですかっ!……と、とにかく逃げましょう!」

太陽「あ、ああ……」

頭痛で苦しんで動けない中、何とかこの場から逃げようとする菜々と俺だったが、すでに怪人の群れに囲まれていた。

せつ菜「そ、そんな……!?いつのまに!」

太陽「ぐっ!……俺が、道を開けるから、菜々は……逃げろ!」

せつ菜「待ってください！太陽君！」

俺は菜々の制しも無視して、怪人の群れに走っていく……が、頭痛を抱えたままでは上手く戦うことが出来ず、簡単に弾き飛ばされてしまう。そして、俺が倒された隙に先程まで陽哉達と戦っていた炎の様な怪人は他の下級っぽい怪人たちに任せ、俺達の前に現れると、菜々を連れて行こうとする。

太陽「ぐあっ……!?」

せつ菜「太陽君っ!?! ……きゃっ!ちよつと、放してください!」

ヘルマグマ「その女は見せしめに殺して差し上げましょう! ……そうですね、テレビ局をジャックしてこの女の公開処刑を放送しましょう!」

太陽「なにつ……そ、んなこと……させるかっ! ……あぐっ!?!」

ヘルマグマ「無力な人間は黙っていてももらえますか？見苦しいだけですから！」

太陽「ぐっ……ううっ……」

ヘルマグマ「さあ！その女を連れて行きなさい！」

せつ菜「嫌、嫌!!!太陽君！太陽君！」

陽哉「セイバー」「くそっ！シミー達が多くて……助けに行けないっ！」

雷羽「ゼロワン」「ああもうっ！邪魔だお前ら！」

怪人に菜々が連れていかれるのを見て、自分の無力さに拳を握り締めることしかできなかった。くそ……俺は、菜々を守ることが出来ないのか……！俺はいつもそうだ！アイツが悲しんでいる時、俺は何もしてあげることができなかった！小さい頃、初めて見せたマジックで菜々が喜んでくれた……嬉しかった！もつとあの笑顔が見たいと、そう思ってたマジシャンの道を目指したのに……！結局何もできないっ！俺

は守りたい……！菜々の大好きを、あの笑顔を守りたい……！！！！

歩夢「せつ菜ちゃんがっ……!?」

果林「せつ菜!!!」

エマ「ダメだよ果林ちゃんっ！」

果林「放してエマっ!? 私達の仲間が殺さるかもしれないのよっ！」

エマ「わかってるよっ！でも、私達まで掴まっちゃったら……!!」

果林「くっ……！」

周りが騒ぐ中、俺の心は熱く……炎の様に猛り出す。俺はその燃え盛る気持ち、言葉として吐き出す。

太陽 「まずは、俺の大切な子を返してもらおうか」

第5話 絶望を希望に、大好きを守る指輪の魔法使い 後編

太陽「まずは、俺の大切な子を返してもらおうか」

——せつ菜視点——

突如現れた怪人の群れと、炎の怪人“ヘルマグマデイヴエンジンジャー”によって囚われてしまった私こと優木せつ菜は、何か武器を持った太陽君に銃口を向けられていた。

せつ菜「……………へ？ちよ、太陽君？何する気ですか？」

太陽「菜々……………♪」

そして、太陽君は笑顔を私に向けると、躊躇うことなく横風ぎに撃ってきた。

せつ菜「えっ、ええっ……!?」

ヘルマグマ「なにいつ!?」

太陽君の放った銃弾は私に当たることはなく、私を捕らえていた怪人たちと、ヘルマグマデイヴエンジャーを撃ち抜いた。

グール1・2「グギイツ……!?」

ヘルマグマ「くっ!……ぐあっ!?」

せつ菜「へ?……えっ?え???

太陽「菜々!早くこつちへ!」

事態が把握しきれずあたふたしている私に太陽君が先導してくれ、私は言われるがま

ま太陽君の元へ走った。そして、私は怒りのままに太陽君の胸を叩くが、太陽君は笑って受け流す。

せつ菜「もう、もう！太陽君ひどいです！私てつきり撃たれるのかと・・・！」

太陽「あはは！ごめんごめん、あいつらを油断させるにはこれくらいしなきゃなつて思つてさ・・・！」

雷羽「ゼロワン」「・・・おい、あれ・・・」

陽哉「セイバー」「あ、ああ・・・ウイザードライバーにウイザーソードガン・・・まさか、太陽が・・・！」

ヘルマグマ「・・・くっ！よくもやってくれましたねえ！」

私達が話していると、ヘルマグマデイヴェンジャーが立ち上がり、怒りで身体を震わせる。

太陽「菜々、俺の後ろに」

せつ菜「は、はい……」

いつになく真剣な顔の太陽君を見て私は言われた通り太陽君の後ろに隠れる。すると、太陽君は少しだけ私の方を向きこんな事を言ってきた。

太陽「菜々……君は、俺が守る！」

せつ菜「……へえっ!?!?!?!」

何だかとても恥ずかし嬉しいことを言った太陽君が、腰にあるベルトに今度は右手ではなく左手の赤い指輪をかざすと、太陽君の左側の空間から先程武器を取り出した時に
出た赤い魔方陣が出現する。

『シャバドウビタッチヘーンシーン！シャバドウビタッチヘーンシーン！』

太陽「……………変身！」

『フレイム！プリーズ』

『ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！』

出現した魔方陣が太陽君の身体を通り過ぎると、そこには黒いローブに身を包み、顔を赤い宝石の様な仮面に覆われた戦士に変身した太陽君が立っていた。

せつ菜「まさか……………仮面、ライダー……………？」

太陽「ウイザード」「俺はウイザード。絶望を希望に変える魔法使い……………仮面ライダーウイザード！」

せつ菜「ウイザー……………ド」

太陽「ウイザード」「さあ、ショータイムだ！」

仮面ライダーに変身した太陽君が持っていた武器を銃から剣に変形させると、敵の群れへと走っていき華麗に斬撃を与えていく。その姿はまるで、踊っている様で……

せつ菜「……綺麗……」

侑「凄いね……陽や雷羽君とはまた違った感じで、避ける仕草も攻撃する仕草も、まるで踊ってるみたい……」

せつ菜「ふふっ♪……私も同じこと思っていました」

私が太陽君の戦い方に見惚れていると、近くに来ていた侑さんが私と同じことを思っていた様で、戦いの最中だというのに思わず微笑んでしまう。そして私と侑さんは戦いに巻き込まれない様に、場所を移動する。

陽哉「セイバー」「ウイザード！またこうして会えて嬉しいよ！」

雷羽「ゼロワン」「本当はゆっくり話したいところだけど……今は協力してこいつらを倒そうぜ！」

太陽「ウィザード」「セイバーにゼロワン……ああ！ さっさとこいつらを倒してゆっくり話そう！」

仮面ライダーの三人が敵に攻撃を加えながら会話をしていると、ヘルマグマディヴェンジャーが何か……Mと描かれたUSBメモリ？の様な物を取り出すと、自身の左腕にそれを突き挿す。すると……

ヘルマグマ「ウィザード……また私の邪魔をするとは、忌々しい！ 今度こそ、進化した我が炎で貴様を消し去ってくれ！」

陽哉「セイバー」「あれは……！」

雷羽「ゼロワン」「……確かWの、ガイアメモリ？」

太陽「ウイザード」「ガイアメモリはガイアメモリでもあれば……ドーパントが使うッドーパントメモリだ」

『MAGMA』

ヘルマグマ「あああああああああ!!!」

ヘルマグマ「ガイアエンジナーの身体の内から溶岩が噴き出し、身体中の血管が浮き出し脈打ち始める。」

ヘルマグマ「この力で貴方達を……!!」

かすみ「うげっ!? あっつ……!!」

しずく「ここまで少し距離があるのに、ここまで熱気が伝わってくる……!!」

璃奈「この熱さ……長袖はきつい。璃奈ちゃんボード【あつつ……】」

ヘルマグマ《さあ、誰から死にたいですか?》

雷羽「ゼロワン」「あいつ、調子乗ってるな……!」

太陽「ウイザード」「……セイバー、ゼロワン、こいつは俺に任せてくれ。二人は周りのグール達を頼む。」

陽哉「セイバー」「……やれるのか?」

太陽「ウイザード」「……ああ、久しぶりの変身でまだちよつと本調子じゃないが……あいつぐらいなら倒せるさ!」

陽哉「セイバー」「……わかった。行こう、ゼロワン!」

雷羽「ゼロワン」「死ぬなよ!ウイザード!」

太陽「ウイザード」「ああ！」

前に出た太陽君が姿を変えたヘルマグマデイヴエンジャーと対峙、そして陽哉さんと雷羽さんが周りにいる残存怪人に切りかかる。

ヘルマグマ《……ウイザード、まずは貴方ですか。》

太陽「ウイザード」「ああ、ヘルハウンド……いや、ヘルマグマ！お前の炎は俺の炎で打ち消す！」

ヘルマグマ《……やれるものなら！》

太陽「ウイザード」「やってやるさ……絶望を希望に変える為に！」

向かって来る太陽君に向けて、ヘルマグマデイヴエンジャーが火球を放っていくが、太陽君はそれを無駄のない動きで綺麗に躲していき、再び銃に変形させた武器でヘルマ

グマデイヴェンジャーを撃ち抜く。

太陽「ウイザード」「……………はっ！」

ヘルマグマ《……………ぐっ！》

太陽「ウイザード」「さあ、もう終わらせよう」

ヘルマグマ《まだだ……………私はまだ終わらないっつっつっつ！！！！！！うおおおおお！！！！！！》

ヘルマグマデイヴェンジャーが叫びをあげると、身体中の溶岩が溢れ出し浮き出ている血管がドクンドクンとさらに脈打ち始めると、身体が大きく巨大化した。

太陽「ウイザード」「……………なっ?！」

ヘルマグマ《ふっふっふ……………！この姿は最後に貴方方にとどめを刺す為にと取つていたのですが……………もういいでしょう。貴方を潰す！》

太陽「ウイザード」「ぐあっ!？」

巨大化したヘルマグマディヴエンジャーが炎を纏わせた拳を太陽君に向けて放ち、太陽君は直撃は避けられたものの、余波で私達のいる場所まで飛ばされてしまった。何とか立ち上がろうとした太陽君の腰にある指輪の一つが光り輝くと、太陽君はそれを取り出す。

せつ菜「太陽君!?!大丈夫ですか!？」

太陽「ウイザード」「……あ、ああ……。」

せつ菜「……あ、指輪が……。」

太陽「ウイザード」「……っ!?!これは……でも、ここは『アンダーワールド』じゃないけど……いけるのか?……いや、お前も久々に暴れたんだな!」

『ドラゴライズ！プリーズ！』

太陽君がそう言うと、その光っていた指輪を右手に嵌めベルトにかざす。．．．すると、上空に巨大な魔方陣が出現し、そこから一体の巨大なドラゴンが現れた。

ウィザードラゴン『グオオオオ．．．!!!』

かすみ「ひ、ひええええ!?で、でつかい怪獣ですうー．．．!!!」

せつ菜「ドラゴン．．．ドラゴンですよー!!!」

愛「ちよ、せつつー！今は興奮してる場合じゃないから！」

太陽「ウィザード」「こいつは一応無害ですけど、念のため皆は離れてて!．．．それにしても、久しぶりだな、ドラゴン。」

ウィザードラゴン『．．．グルル。』

太陽「ウイザード」「……ああ、わかってる。行くぞ！」

グルルとしか言っていないのに太陽君には何を言っているのか理解しているらしく、太陽君は右手の指輪を先程の指輪に交換しベルトにかざすと、今度はバイクを魔方阵から取り出した。太陽君がそのバイクに乗り込むと一気に走り出し、上空のドラゴンと合体した。

太陽「ウイザード」「……さあ、行くぞ！」

ヘルマグマ《……ふんっ！返り討ちにしてくれますよ！》

召喚したドラゴンと共に巨大化したヘルマグマディヴエンジャーに向かっていく。ヘルマグマディヴエンジャーの放つ火球を躲しながら近づいていき、翼で強風を起こし怯ませると、口から火炎を放つ。

ヘルマグマ《くっ……おおっ……!?ぐわあああつ!?》

太陽「ウイザード」「……さあ、ファイナーレだ！」

『超いいね！キックストライク!!サイコー!!!』

新たな指輪を右手に嵌めてベルトにかざすと、太陽君は勢い良く飛び上がり、ドラゴンが足のような姿に変形していく……そして、太陽君が変形したドラゴンに脚を突っ込むと、炎が巨大な太陽君……いや、ウイザードを形作りそのままヘルマグマデヴィエンジャーに突っ込んでいく。

太陽「ウイザード」「はああああああつつつ……!!!」

ヘルマグマ《ぐつ……この私が……また、敗れるのかつ……!ぐわああ

あああああ
!?!?!》

太陽「ウイザード」「……ふい〜。」

ヘルマグマディヴェンジャーを倒した太陽君は、息を吐いて気を抜くと、変身を解除した。そして、少し離れたところで陽哉君と雷羽君の2人も敵を倒したらしい。

『必殺読破！烈火抜刀！ドラゴン！一冊斬り！ファイヤー！』

陽哉「セイバー」「はああああああ
!!!」

『ライジングインパクト！』

雷羽「ゼロワン」「おりやああああああ
!!!!」

太陽「……どうやらあつちも終わったらしいな」

せつ菜「太陽君！凄かったです！かっこよかったです！」

太陽「おおっと……！ありがとう、菜々」

私は、興奮のあまり変身を解除して間もない太陽君に向かって全力で抱き着いてしまった……が、流石は太陽君。私が身体にぶつからない様に優しく受け止めてくれる。そして、変身を解除した陽哉さんと雷羽さん、同好会のメンバーが私達の周りに集まり出す。

雷羽「お疲れ太陽……いや、ウィザード！」

陽哉「改めて君がウィザードだったなんてな……これからよろしくな！」

太陽「ああ！俺の方こそよろしく！」

エマ「凄かったねえ」

彼方「確かに……そういえば太陽君、魔法使いつて言っていなかった？」

侑「あ、そういえば魔方陣みたいなもの出していましたね」

せつ菜「太陽君は本物の魔法使いです！」

私達がそんな話をしていると、かすみさんが何やら悪い顔をしだし、太陽君に近づいて行く。

かすみ「え？確かに仮面ライダーらしいですけど、炎出したりとかは陽哉先輩も出来るし、本当に魔法使いなんですか？？」

しずく「ちよつと、かすみさん」

と、かすみさんのそんな言葉を耳にし、太陽君が笑顔で近づいて行き……

太陽「え？つと、かすみちゃん？だっけ？……ちよつと、これを付けてくれるかな？」

かすみ「え……ええっ!?!?!?!?!」

雷羽「ちよ、ウィザード!？」

な、なんと太陽君は取り出した指輪をかすみさんの右手にはめ、先程腰に巻いていたベルトと同じ手のひらの形をしたバツクルにかざす。

『スメル、プリーズ』

かすみ「へ?・・・うつ!くさあつ!？」

すると、かすみさんの身体から突然とんでもない・・・その、卵が腐った臭いや生ゴミの臭い等が一つになったとてつもなく酷い臭いが発生し出した。そして侑さん達は、鼻を抑えてかすみさんから距離を取る・・・ま、まあ私ですが。

侑「かすみちゃん・・・ちよつと、半径1m以内に近づかないでくれるかな？」

かすみ「ちよ、侑先輩っ!？」

雷羽「すまんかすみ．．．まじ近づかないでくれ」

かすみ「雷羽までっ!?!?．．．あ、歩夢先輩なら助けてくれますよね．．．?」

歩夢「．．．ごめんねかすみちゃん．．．私もこの臭いはちよつと．．．」

かすみ「そんなあっ!?!?うう．．．酷いですよお皆さん〜!」

あの歩夢さんまで拒否するとは．．．まあ、仕方がないのでしょうか．．．。けどそろそろ哀想ですし、太陽君に解いてもらいましょう。

せつ菜「太陽君、そろそろかすみさんが哀想なので解いてあげてください．．．」

太陽「ああ、そうだな」

そう言うと、太陽君は鼻を抑えながらかすみさんの方に近づいて行き、先程はめた指輪をかすみさんの指から外す．．．すると、先程までかすみさんが発していた臭いが

消えた。

かすみ「う、ぐすつ……。酷い目に遭いました……」

しずく「もう！元はと言えばかすみさんが失礼なこと言うからだよ？」

璃奈「そうだよかすみちゃん……。反省した？」

かすみ「うん……。あの、太陽先輩……。ごめんなさい」

太陽「いや、俺の方こそごめんね。女の子にすることじゃなかったね……」

雷羽「いや、謝る必要ねえーぞウィザード。今回はかすみの自業自得だ」

かすみ「ふぐうう……。雷羽が酷いいい……。」

愛「……。ま！何はともあれ無事終わったってことで！」

かすみ「ちよつと愛先輩！雑に締めないでくださいよ！」

そして、このやり取りを見た歩夢さんがくすりと笑うと、そこから一気に笑いが伝染し……しばらく私達は笑い合っていた——

第6話 ビルドなあいつとツナガル少女

— 璃奈視点 —

優木せつ菜さんの幼馴染である希魔太陽さんが仮面ライダーウイザードに変身してから一週間……特に「デイヴエンジャー」が街を襲ったり、新たな仮面ライダーが現れたりということが無く、スクールアイドルの練習をしつつ平和な日々を過ごしていた。ちなみに今日は運悪くみんな用事（あ、かすみちゃんだけ無かった……）があった為、お休みとなったので、折角ならと私はライブで使う電光璃奈ちゃんボードのメンテナンスと少しの改良をしてもらうため自分の家のお隣さんの家の前に来ていた。

璃奈「……よし、着いた。」

そして、私がお隣さんのインターホンを押すと、中から私と同一年の男の子、**駆桐龍兔**（くどう りと）君の声が聞こえてきた。

??? 「あゝい」

璃奈「……龍兎君？私、璃奈。」

龍兎「ん？あゝもうそんな時間か。璃奈、ちよつと待つて今開ける」

璃奈「……うん」

それから少し待つと、ガチャツ！と音が鳴り中から「入つていいよ！」と声が出たので私は龍兎君家のドアを開け「お邪魔します。」と言つて靴を脱ぎ中に入る。……ちなみに、龍兎君の家の鍵は龍兎君とご両親のスマホの遠隔操作で開けられる様に改造されてある。私の家も同じようにしてもらつた。（龍兎君曰く、管理人さんの許可は取つてあるらしい……）それはさておき、私は慣れた足取りで家の中を進んでいき、一つの部屋の前に立ち止まる。その部屋のドアには「R i T o」と書いてあるドアプレートがかかつていて、私はその部屋のドアを開ける。すると、先程の声の主である龍兎君が何か……レバーの付いた謎の機械を作っている最中だつた。

龍兎「後はこれを嵌めれば……よし、出来た！」

璃奈「龍兎君、何を作ってるの？」

龍兎「……あゝこれ？それがさくわかんないんだよなあ。何か、頭の中にパツ！と出てきたからとりあえず作ってみたんだけど……何に使うんだろうな、これ」

と、龍兎君は心底わからないと言った顔で自分の作った機械を見ている。とりあえず私もその機械を見てみると……変わった形をしており、真ん中に何かを収めるところが2つあり、右端にレバーが付いている……本当に、何に使うんだろう。

龍兎「……ま、これは後で考えるところ……璃奈ちゃんボードのメンテだっけ？」

璃奈「うん、後少し改良してほしいところがある。」

龍兔「改良？何処？」

璃奈「……………ここ。この間のフェスの後半でボードに表情が反映されるのが若干遅くなつてたのと内蔵カメラから投影される映像が一瞬固まつた。一応ライブをする分にはまだ問題ないけど、折角だし直しておきたい。」

龍兔「……………なるほどな、多分冷却装置が耐えられなかつたんだろうな。それじゃ、冷却装置を長時間耐えられる様に新しいのを作つて、それから回線を少しいじくるか」

璃奈「うん、私も手伝えることがあつたら手伝う。」

龍兔「その時は頼むな」

そう言うと、龍兔君はクローゼットの方へ行き、色んな部品が入っている箱をガサゴソと探る。……………が、少ししてクローゼットから戻つて来た龍兔君は、顎に手をやり「う〜ん……………」と唸っている。

璃奈「……………どうかしたの？」

龍兎「あゝ、ごめん璃奈！部品があると思ったんだけど、無くてさ……………だから今からアキバに行つてくるからちよつと待つててくれる？」

璃奈「……………それなら、私も行く。」

龍兎「……………え？まじで？」

璃奈「うん、最近何かと忙しかったし、龍兎君とお買い物も全然行けてなかったから……………その……………久々に一緒に行きたいなって……………／／／／／／／／」

龍兎「あ、ああ……………。じゃあ、行くか」

こうして、私と龍兎君は2人で秋葉原へ行くことになった。……………楽しみ。

龍兔視点

電光璃奈ちゃんボードの改良に必要な部品をかう為俺…… 駆桐龍兔は、幼馴染の天王寺璃奈と共に秋葉原に来ていた。……そして今は、アキバの裏路地にある小さなカフェで軽くお茶をし、帰路に就くところ。

龍兔「えーつと……うん、必要な物は大体買えたし、そろそろ帰ろっか」

璃奈「……了解。でも、龍兔君よくあんな裏路地にカフェがあること知ってたね？」

龍兔「最近見つけてさあ……あそこ、店長のノリが良くて好きなんだよね……まあ、コーヒーの味はイマイチだけど……」

と、俺は先ほど立ち寄ったカフェの店長が淹れたコーヒーの味を思い出し、うげつ！と顔をしかめる。……すると、璃奈は疑問に思ったのだろう、無表情ながら小首を

傾げ俺に聞いてきたので、俺はその疑問に答える。

璃奈「……………そう？ 私は美味しかったけど……………」

龍兎「あゝ、多分璃奈のは娘さんが淹れてくれたやつだな……………ほら、少し離れたテーブル席で接客してた女の子いたでしょ？」

璃奈「……………そういえば。でもどうして私のだけ淹れてくれたの？」

龍兎「……………それは、璃奈みたいな可愛い子に自分の父親が淹れた激マズコーヒーを飲ませたくなかったんだろ。」

璃奈「……………可愛い……………／／／／／」

俺がそう説明すると、璃奈が何故か顔を赤らめる……………それにしても、俺にも淹れてくれてもよかったのに……………畜生。

……………と、俺がそんな風に思っていると、俺達の前方から何か……………ロボット？

の大群が行進しながらアキバの街を破壊し始めた。……その時、俺は激しい頭痛と共に、俺の頭の中で何処か懐かしい映像がテレビの砂嵐の様なものに苛まれながらも、断片的に映る。何故かその映像には目の前にいるロボットも映っている……。

龍兎「……うぐつ!? ……なんだ、あいつ等……!? それに、頭の中に流れるこの映像は一体……!?!」

璃奈「龍兎君!?! ……あれは、マギア? ……でも、前見たのと形が違う……」

俺が頭痛に苛まれながらロボットの大群に驚いていると、隣で璃奈が俺を心配しつつ何かを言っていた……璃奈は、あのロボットの事知ってるのか? ……と、俺が思っていると、突然璃奈が俺の手首を掴んできた。

龍兎「ちよ、璃奈!?! 急になにして……!」

璃奈「説明は後、とりあえず逃げよう……つ!?!」

ガーディアン（ファウストVer）「……………！」

璃奈が俺の手首を掴みこの場から逃げようと振り返った……その時だった！俺達の後ろにいつの間にか街を破壊しながら行進しているロボット達と同じ形のやつが一体いて、そいつが璃奈を殴ろうとしたので俺は咄嗟に庇おうとすると、ロボットの振り下ろした腕が俺の持っていた部品が入った紙袋に当たり、宙を舞った紙袋はそのまま地面に落ちた。…………その瞬間、俺は頭痛のことを忘れ、プツツンした。

龍兔「…………お前、何してくれてんの？」

璃奈「…………龍兔…………君？」

龍兔「ごめん璃奈…………先逃げてて。俺はこいつに用があるから」

璃奈「…………でも…………」

龍兔「…………おりゃ！」

俺は璃奈の言葉を無視し、目の前のロボットに向けて渾身のドロツプキックをぶちかます。俺のドロツプキックを受けたロボットは、少し後ろに後退したが、全然ダメージは入っていない様に見える……が、俺はそんなのお構いなしにロボットへ向けて怒りをぶちまける。

龍兎「……お前だけは許さない。人の大事な発明品に必要な部品を壊しただけに飽き足らず、俺がこの世でもっとも大切に行っている幼馴染に手を出そうとするなんて……絶対に回収して家政婦ロボットにしてやる!!!」

璃奈「……何か、違うような……」

璃奈が何か言ったが、敢えてそれを無視する。……すると、怒りの感情に任せ頭痛がパンツ！と消えると、俺はあることを思い出す。……そう、それはこことは違う、別の世界での俺のもう一つの姿……。そして俺は、この記憶を思い出すと、あの物を懐から取り出す。

龍兎「……………やっと思ひ出した。こいつの使い方！」

璃奈「それ、さつき部屋で作ってた……………」

龍兎「今からこいつの使い方を見せてやるよ！」

『ビルドドライバー！』

龍兎「……………さあ、実験を始めようか。」

璃奈にそう答えると、俺は手に持っていた機械……………ビルドドライバーを腰に装着すると、上着のポケットの中に何故か入っていた赤と青のフルボトルを取り出し、それを軽く振ってから「シールディングキャップ」と呼ばれるキャップのラベルを正面に来る様に回し、2つのフルボトルをビルドドライバーに装填する。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

璃奈「……ベスト、マッチ？」

『Are you ready?』

龍兔「……変身！」

俺はビルドドライバーの“ポルテックレバー”と呼ばれるレバーを回し、前後にポトルのエネルギーで出来た赤と青のアーマーを出現させる。そして、俺が構えを取ると、前後のアーマーが俺の身体を挟みこみ……あの世界での、俺のもう一つの姿へと変身する……そう、俺は……

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイ！』

璃奈「……赤と青の、仮面ライダー……」

龍兔「ビルド」……俺は仮面ライダービルド。創る、形成するって意味のビルドね！」

璃奈「ビルド……」

龍兎「ビルド」「そ！……さあ、待たせたなロボット……いや、ガーディアン！約束通り家政婦ロボットにしてやるよ！」

ガーディアン「……！」

ビルドに変身した俺がビルドドライバーから「ドリルクラッシュヤー」という武器を生成すると、それを掴みガーディアンに向かっていこうとした……が、そのガーディアンが何かを取り出した。あれは確か……エグゼイドの……。そして、ガーディアンは取り出したそのボタンを押し起動させると、自身の身体に押し込んだ。

龍兎「ビルド」「エグゼイドのガシャット……いや、でも黒いな……つて、まじか！」

『マイティアクションX！』

すると、ガーディアンを黄色い物質が包み込み……次に姿を現した時には、黒いハット帽を被り、肩や脚にガーディアンだった時の装甲を付けた怪人が立っていた。

ソルディアンディヴェンジャー（以下、ソルディアン）「我が名はソルディアンディヴェンジャー！……仮面ライダー、ここで抹殺する！」

龍兎「ビルド」「……これはちよつと……まずいな……」

ソルディアンディヴェンジャーと名乗った怪人の後ろには、いつの間にか先程行進しながら街を破壊していたガーディアン達も来ており、さすがに璃奈を守りながらこの数相手にするのはやばいと考えた俺はひとまず璃奈を安全な場所へ行く様に指示する。

龍兎「ビルド」「璃奈！とりあえず安全な場所に隠れてろ！」

璃奈「わ、わかった……」

ソルディアン 「逃がしはしませんよ！行きなさい！」

ガーディアン群 「……！！！！」

龍兎 「ビルド」 「行かせる訳ないでしょ！はあっ！」

この場から逃げようとする璃奈を捕まえようと、複数のガーディアンが向かってきたが、俺はそれをドリルクラッシュャーで斬り付け阻止する。

ソルディアン 「目障りな……まずはその仮面ライダーからやってしまいなさい！」

龍兎 「ビルド」 「璃奈には指一本触れさせない！はあ！はあっ！！」

俺は、向かって来るガーディアン達を斬り倒していくが、数が多い為、中々減らない。そこで俺は、ボトルホルダーにこれまたいつの間にかあったハリネズミフルボトルを取

り出し、ドリルクラツシャーに装填して一掃することにした。

『ready、go! ボルテック、ブレイク!』

龍兎「ビルド」「はああああ．．．．．はあっ!」

ソルディアン「どうやら私が出なければならぬようですね．．．!」

龍兎「ビルド」「やっとボスのお出ましか。」

ソルディアン「見せてあげますよ．．．．．私の力を!」

そう言うと、ソルディアンと俺の周りに何か．．．特徴的な形をしたブロック調の岩みたいなのやつや土管が出現した。

龍兎「ビルド」「おおっ! なにこれっ!?!」

ソルディアン「私の力は空間をゲームのステージの様に変えること！さあ、この力で貴方を倒してさしあげましょう！」

璃奈「ゲーム……。もしかしたら……。！龍兎君！」

俺がソルディアンの言葉にまじか……。と思っていると、後ろで隠れていた璃奈が大声で何かを提案してきた。おお、璃奈ってあんな大声出せたんだな……。

龍兎「ビルド」「ん？どうした璃奈？」

璃奈「近くにある岩みたいなのを破壊してみてほしい。」

龍兎「ビルド」「え……。？なんで……。？？」

璃奈「いいから、やってほしい！私の憶測が正しければ、きっとあの岩とかのオブジェクトは龍兎君の力になると思う！」

龍兎「ビルド」「……ふむ、試してみる価値はあるな。それじゃ！」

『マツスル化！』

俺は璃奈の言うことを信じ、近くにあつた岩のオブジェを破壊する……すると、中から赤いメダルの様な物が出てきて、俺の身体に吸い込まれた。……その瞬間、俺は身体の奥から力が沸き上がるのを感じた。どうやら璃奈の言ったことは正しかったらしい。

龍兎「ビルド」「おお、何か力が溢れてくる！ 璃奈！ ありがとう！」

璃奈「大した事ない……。璃奈ちゃんボード【テレテレッツ……！】」

龍兎「ビルド」「それじゃ、行きますか！」

俺は先ほどのメダルで得た力が消える前に攻撃をする為、左脚部の跳躍強化バネ、ホップスプリングアーの力でソルディアンの元まで一瞬にしてジャンプし、ドリルクラッ

シャーで斬りつける。

ソルディアン 「何っ!?!ぐっ．．．!?!」

龍兎 「ビルド」 「おお、いつもよりパワーが上がってる．．．!?!」

ソルディアン 「調子に乗るなっ!」

龍兎 「ビルド」 「ぐ、ああっ．．．!?!痺れるっ．．．!?!」

ソルディアン 「これで終わりにさせてあげますよ!はあっ!」

ソルディアンが自身の左腕の大きな籠手の様な物を使い、地面に電流を放出させると、俺はその電流に痺れてしまう．．．その隙に、ソルディアンが電流を帯びた左腕の籠手で俺を殴りつけようと向かってきたが、俺は何とか痺れる身体を動かし、近くのおブジエを破壊する。

龍兎「ビルド」「そうは．．．させるかつ．．．！はあっ！」

『高速化！』

ソルディアン「何いつ?!」

俺がオブジェを破壊すると、今度は黄色のメダルが出現し先程の赤いメダル同様に俺の身体に吸い込まれる。すると、ソルディアンの攻撃が当たる前に俺は眼にも止まらぬ速さで回避し、逆にソルディアンの背後に回り込んだ。

龍兎「ビルド」「なるほど、黄色はスピードアップって訳ね！はっ！」

ソルディアン「ぐおっ?!」

龍兎「ビルド」「勝利の法則は．．．決まった！」

背後に回り込んでソルディアンをドリルクラッシャーで斬りつけた俺は、ボルテック

レバーをもう一度回す。

龍兎「ビルド」「…………ちよつと待つて…………はあっ！」

『Lady、go!』

ソルディアン「抜け出せ…………ないっ…………!?!」

レバーを回し終えた俺は、ソルディアンに背を向け走り出し、数歩先で右脚に力を込めて強く踏み込む…………すると、俺は地面の下に降下しその間に数式の様なもの、ソルディアンの身体を挟み身動きを取れない様にして、上空へと急上昇してから数式を滑る様にソルディアンに向けてキックを放つ。

『ボルテック、フィニッシュ！イエイ！』

龍兎「ビルド」「はあああああ……………はああつつつ!!!!」

ソルディアン「ぐあああああああああつつつつつつ
!?!?!?!?」

龍兔「ビルド」……よつと、ふう。」

ソルディアンを倒した俺が地面に着地し変身を解除すると、近くで隠れていた璃奈が駆け寄ってきた。

璃奈「龍兔君……。」

龍兔「お、璃奈！怪我とか無い？」

璃奈「うん、大丈夫。……それより、龍兔君が仮面ライダーだったなんて、驚いた。」

龍兔「……そういえばさつきも仮面ライダーのこと知ってる感じだったけど、もしかして俺以外の仮面ライダーがこの世界にいたりする？」

璃奈「……………うん。」

そこから俺達は、壊された部品をもう一度買い直し、何処か座れる所で先程の話の続きをすることにした。

龍兎「……………なるほどね。部活の先輩の幼馴染だったり、友達の小学校時代の同級生が仮面ライダーだった……………」

璃奈「……………うん。」

龍兎「ねえ璃奈？そいつらに会えたりする……………？」

璃奈「多分大丈夫だと思う……………。この後、連絡しておく。」

龍兎「よろしく！……………と、それにしてもまさか俺の他にもう3人も仮面ライダーがいるなんてなあ……………もしかしたら、他の連中もこっちの世界に無事来れてたり……………」

璃奈「・・・・・・・・龍兎君？」

龍兎「・・・・・・・・ん？ああ、なんでもない！それじゃ、帰ろうか」

璃奈「・・・・・・・・うん。」

俺が少し考え込んでいると、璃奈が心配そうに顔を覗き込んできたので、俺は心配いらないという風に笑顔で答え帰路に就く提案をした。・・・・・・・・本当に、あいつらも無事ならいいんだけど・・・・・・・・。とりあえず、まずは3人の仲間達に会いに行くとしますか！

第7話 疑惑の兄と、しずくの想い。

——璃奈視点——

昨日、私・・・天王寺璃奈の幼馴染の男の子、駆桐龍兔君と一緒に秋葉原へ買い物をしたに行ったんだけど、そこでディヴェンジャーに襲われて私達は絶対絶命に陥っちゃった。でも、龍兔君が赤と青の仮面ライダー・・・仮面ライダービルドに変身して敵をやっつけてくれた。・・・仮面ライダーに変身した龍兔君はかっこよくて、凄かった。そして今、部屋に私達同好会メンバーと龍兔君・・・それから仮面ライダーの皆が集まっていた。

龍兔「・・・なるほど、君達が・・・ね」

雷羽「ああ！俺は飛瀬雷羽！仮面ライダーゼロワンだ！」

太陽「俺は希魔太陽！仮面ライダーウィザード、よろしく。」

陽哉「俺は剣緋陽哉！仮面ライダーセイバー、またよろしくな！」

龍兎「セイバー、ゼロワン、ウィザード……。本当に、久しぶり！俺のこっちの名前は駆桐龍兎、こっちの世界でもよろしく！」

と、仮面ライダーの皆が各々自己紹介をするのを、私達は少し離れて見ていた。

果林「それにしても、仮面ライダーって結構いるのね？」

歩夢「陽くんが言うには、まだいるみたいですけど」

彼方「えー、ここまでくると、他にどんなのがいるのか気になるねえ」

しずく「確か、前に陽哉さんは他にメダルやスイッチを使う方もいるって言ってたよね」

愛「スイッチってどうやって変身すんだろねー？」

私達が他にどんな仮面ライダーがいるのか等、色々話していると、龍兎君達は自己紹介から、自分達がどうやって仮面ライダーとしての記憶を取り戻したかの話をしていった。

陽哉「——てな感じなんだけど、ビルドはどう思う？」

龍兎「なるほどなあー。話を聞く限り、俺達4人共仮面ライダーの記憶を取り戻す時には必ず激しい頭痛がしていた・・・と。なら、俺達の姿・・・あるいはディヴェンジャー等のあっちの世界の存在を見た時に激しい頭痛がした奴が次の仮面ライダーになるな」

太陽「・・・それか、他の皆はこの世界に来ていない・・・とか。」

龍兎「ああ。・・・まあ、そっちは可能性であることを信じたいな」

雷羽「皆、こつちの世界に來ているといいな……」

陽哉「ああ……」

龍兎「……それと、これは偶然なのか分からないが、俺達の知り合いには必ずこのスクールアイドル同好会のメンバーがいるのも気になる」

雷羽「た、確かに……」

太陽「と、言うことは……虹学の知り合いでかつあつちの世界での存在を見た時に激しい頭痛がする人が……仮面ライダーの可能性があるってことかな」

4人が何か話をしていると、侑さんが近づき、話しかける。その侑さんに、話に集中していた陽哉さんが顔をあげる。

侑「ねえねえ、4人共——！」

陽哉「……ん？どうした侑？」

侑「いやー、それがさ？今、私達で話してて、せっかくだし仮面ライダーの皆と私達で親睦を深める為にこれからここにいる皆で遊びに行かないかーって！……どうかな？」

陽哉「……うん、いいんじゃないか？」

太陽「俺も問題ないよ！」

龍兎「俺も、楽しそうだしいいかな」

雷羽「それじゃ、家の会社が経営してるゲーセン行くか？」

かすみ「雷羽……あんたどこ本当に、手を出し過ぎじゃない？」

こうして、侑さんの提案により、私達はみんなで飛瀬グループが経営しているゲームセンターに行くことになった。

——しずく視点——

同好会の皆で仮面ライダーの皆さんと親睦を深めようということで、私達は今ゲームセンターに向かっていている途中で、雷羽さんのお父さんがやっている会社の話になり……

しずく「……………それにしても、まさか飛瀬グループがゲームセンターまで経営していたなんて……………」

愛「……………前々から色々やっている会社だとは思ってたけど、ゲーセンまで行くかあ
〜!」

雷羽「あ、はは……。親父の奴、興味出たら失敗するしない関わらず、片っ端から手え出してるからなあ……。。」

かすみ「あく、あのお父さんならやりかねないかも……。。」

エマ「かすみちゃん、雷羽君のお父さんに会った事あるの？」

かすみ「まあ一応、小学生の時に何回か雷羽の家の別荘で……。ですけ……。ど……。。」

歩夢「……。かすみちゃん？」

果林「何かあったのかしら？」

私達が話していると、かすみさんが突然歯をガタガタと震わせ、顔がとんでもないほどに青ざめ始める。そして、頭を抱えて座り込み、何かぶつぶつとつぶやく。

愛「ちよ、かすかすっ!？」

彼方「かすみちゃん!? どうしちやったの……!?」

かすみ「そうです私はバカ野郎ですバカ野郎ですとんでもないあんちきしようなんですつ……!」

侑「か、かすみちゃん本当にどうしちやったの!?」

陽哉「なあゼロワン? お前なら何か知ってるんじゃない?」

突然のかすみさんの変わりように皆があわあわしている中、陽哉さんの指摘に雷羽さんがはあー……! つと深いため息をついた後、今だ座り込んでガタガタしているかすみさんの方へ行き、頭に軽くチョップを入れる。

雷羽「まあそれは今は置いておいて……おーい、かすみ! そろそろ戻ってこーい!」

かすみ「ふげっ!? ……はっ!? 私は今まで何を!? ……って、ら、雷羽教官ん
!? ひ、ひいいいい ……!!!」

しずく「ちよ、ちよつかすみさん!」

雷羽「かすみ? 正気に戻ろうな?」

かすみ「 ……ひゃ、ひゃい ……」

かすみさんこんなに震えて ……。それにしても教官つて ……かすみさんと雷羽さんの間に何があったんだろう ……。と、私が考えていると、後ろから声をかけられた。私はその声に戻ると ……そこにいたのは ……

??? 「 ……あれ? しずく? 」

しずく「 ……お、お兄様!?! どうしてここに!?! 」

??? 「僕はちよつと用事でね……って、そちらの皆さんは？」

しずく「あ、こちらの皆さんはスクールアイドル同好会の皆さんです！」

??? 「ああ、そうなんだ！……初めまして！いつも妹のしずくがお世話になってます。しずくの兄の桜坂碧映（おうさか あおば）です、よろしく！」

私の兄である碧映お兄様の登場に、同好会の……特に侑さん・歩夢さん・璃奈さんが緊張した様にアワアワし、彼方さん・エマさん・果林さん・愛さんは落ち着いているけど、軽く顔が驚いている。そんな中で、侑さんがしどろもどろしながらも何とか挨拶を返す。

侑「あ、えつと、しずくちゃんと同じスクールアイドル同好会で部長をしている高咲侑です。こちらこそよろしくお願いします！」

彼方「しずくちゃん、お兄さんいたんだねえ〜」

エマ「本当だねえ〜！」

碧映「……それで、そちらの方達も同じ部活の人？……あ、でも虹学って女子高だったような……」

しずく「あ、こちらの皆さんは同好会メンバーの幼馴染の方々なんです。最近知り合って仲良くさせてもらってるんです。」

碧映「あ、ああ……そうなんだ。しずくと仲良くしていただいてありがとうございます。」

陽哉「こちらこそ、しずくちゃんにはいつも侑達を支えていただいて、助かってます！」

陽哉さんが仮面ライダーを代表して挨拶してくれたんだけど……お兄様は陽哉さん達を見た瞬間、顔が若干強張った様な……。

しずく「こ、これって……」

陽哉「デイヴェンジャーだ！行こう皆！」

雷羽「ああ！」

爆発音が鳴り響き、仮面ライダーの皆さんが駆け出していく。……私はふと、お兄様の方を見ると……驚いているどころか、複雑そうな目で走っていく陽哉さん達を見ていた。私はそんなお兄様に違和感を覚え、恐る恐る声をかける。……すると、お兄様はすぐにいつもの笑顔を私に向ける。

しずく「お、お兄様……？」

碧映「……？どうしたのしずく？」

しずく「い、いえ……その、私達も早くこの場から離れましょう？」

碧映「あ、ああ……そうだね。」

——陽哉視点——

親睦を深める為、皆で遊びに出かけていた道中、桜坂ちゃんのお兄さんに遭遇し話している途中でシミーやトリロバイトマジア等が現れ、俺達は撃破に向かう。

陽哉「セイバー」「はあっ！」

雷羽「ゼロワン」「おりゃ！」

太陽「ウイザード」「ふっ、はっ！」

龍兔「ビルド」「そら！」

俺達は仮面ライダーに変身して大量のシミー等を倒していく。

雷羽「ゼロワン」「くっ……数が多いな」

太陽「ウイザード」「ああ、それに……ボス怪人がいない……」

龍兔「ビルド」「……確かに」

陽哉「セイバー」「とにかく、今はこいつらを片付けよう!」

俺達はボス怪人がいないことに違和感を覚えつつも、周りの怪人を撃破していき……そして、最後の一体を倒したが、結局ボス怪人は現れることはなかった。

雷羽「ゼロワン」「結局……ボス怪人は現れなかったな……」

龍兔「ビルド」「何か、後味の残る感じだな」

陽哉「セイバー」「……………とにかく、皆の所へ戻ろう」

太陽「ウイザード」「ああ……………」

こうして俺達は、どこか不気味さを抱えつつも変身を解除し、虹ヶ咲の皆の所へ戻った。

——しづく視点——

私達が安全なところに避難し、仮面ライダーの皆さんが無事に戻ってくるのを待っている……………少しして皆さんが戻って来た。けど、どこか浮かない顔をしている。

歩夢「陽くん！お疲れ様！」

陽哉「あ、ああ……」

かすみ「……雷羽？何かあった？」

雷羽「え？あ、えつと……」

せつ菜「太陽君？何かあったのですか？」

太陽「あった……というか、なかったというか……」

璃奈「……龍兔君？」

龍兔「まあ、何て言うか……実は、今回の敵の中にボス怪人がいなかったんだ」

エマ「……ボス怪人？」

陽哉「ええ、大体1体はいるはずなんです……ああ、ほら！この間のヘルマゲ

マとか、そういう意思を持った奴が今まで1体は必ずいたんですが、今回はいなくて……」

雷羽「それが不気味でさ……」

愛「そーいう日もあるってだけじゃないの？」

太陽「それならいいんだけど……」

そして、重い空気を無理矢理消す様に、太陽さんがお兄様へ向けて先程言いかけたことを言おうとしたのですが……

太陽「……そういえば、碧映さん。先程の話ですけ」

碧映「すみません、僕は貴方達が探している様な人ではないと思います！それでは、僕はやることがあるのでこれで……！」

お兄様が太陽さんの言葉を遮り、止める間もなくその場を立ち去ってしまった。

しずく「あ、お兄様……！」

かすみ「ちよ、なんなのあの態度！碧映お兄さんってあんな性格だったっけ？」

しずく「……最近、お兄様の様子が少しおかしくて……」

果林「何か訳ありみたいね……」

そうして私達は、暗い空気のまま遊ぶ気にもなれず、今日はこのまま解散ということになった。……が、私達はこの時気付いていなかった。私達を……陰から見ている者がいることに……

??? 「ふふふ……。ようやく見つけたよ……♪」

それから私は、鎌倉にある自宅に帰りお兄様と話をしようとお兄様の自室を訪れたんだけど……そこにお兄様の姿は無かった。

しずく「お兄様……まさかまたキャンプに……？」

そう、碧映お兄様は最近一人でキャンプに行く様になった……。元々アクティブな人ではあったけど、本当に、急にキャンプに行き始めたから何かおかしい感じがして……。それに、お兄様がキャンプに行く時はいつも辛そうで……。その姿は、まるで何かから逃げている様で……。そんなことを考えていると、私の眼に少し開いたお兄様の机の引き出しが映り、気づけばその引き出しを開けていた……。すると、そこにあつたのは……。

しずく「これ……メダル？3枚とも違う色が付いてる……。それにこっちの、3つの窪みがある機械は……」

そう、その引き出しの中にあつたのは、赤・黄・緑の3つのメダルと、3つの窪みがある……ベルトのバックルの様にも見える機械があつた。

しずく「これ……なんだろう……。あつ！」

そこで私は、以前した陽哉さんとの会話を思い出していた。

——しずく回想——

陽哉『……仮面ライダーは後8人いるよ！』

しずく『他の方も剣緋さんと同じで本を使って変身するのですか？』

陽哉『いや、色々いるよ！メダルとかスイッチとか、ボトルとかね！』

——しずく回想 終——

メダル……そうだ、メダル！確かにあの時、陽哉さんはメダルと言った。ということ……まさか……

しずく「……まさか、お兄様が……仮面ライダー……!?」

でも、それでは疑問が残る。お兄様が仮面ライダーだとして、どうして陽哉さん達の前に名乗りでなかったのか？逆に何故今日逃げる様に私達の前から去って行ったのか……？私の頭は生まれた疑問で頭がモヤモヤしていた。

しずく「お兄様……どうして……？」

結局その日、お兄様が帰ってくることは無く。帰って来たのは翌日のお昼だった……。

第8話 スタート・ユア・眠り姫

侑視点

現在放課後の部室内で私は、昨日のボス怪人がいなかったことを話し、今はしずくちゃんのお兄さんのことで話題に移っていた。

陽哉「……………で、昨日会った桜坂ちゃんのお兄さんが仮面ライダーだと思う？」

雷羽「……………違うんじゃないか？だってかすみから聞いたけど頭痛とかなかったんだろ？……………な？かすみ？」

かすみ「う、うん……………。一応雷羽達が戦つてるところを見れる位置で見ただけど、碧映お兄さんは頭痛なんてしてなかったよ？」

太陽「うくん……ビルドはどう思う？」

そこで、太陽君がさつきから黙って皆の話を聞いている龍兔君に話を振る。すると、龍兔君が静かに口を開く。

龍兔「……しずくの兄さん……碧映さんだっけ？あの人は仮面ライダーだな。」

侑「え？でも頭痛してないよ？」

陽哉「……そう確信する何かがあつたのか？」

龍兔「……まず、あの人は立ち去る時、僕は貴方達が探している様な人ではないと思います。……と言った。」

歩夢「その何が気になることなの……？」

それから、龍兔君は思っていたことを口にしていく。

龍兎「おかしいんですよ。だって俺達、誰一人として人を探している……何て言っていないんですから。」

雷羽「俺らの誰かからそういう雰囲気を感じ取った……とか？」

龍兎「うーん……ありえないかな。俺達があの時したのは挨拶だけで、ある程度の関係性があるんならまだしも、初対面の人間が何を考えているかなんて神か超能力者でもない限り無理。」

雷羽君の指摘に頭を振るい、さらに自分の考えを披露していく龍兎君に、愛ちゃんが思わず感嘆の声を漏らす。

愛「おおく！た、確かに……！」

龍兎「ああ言ううってことは、俺達の正体のことを知っている証拠。それともう一つ」

エマ「もう一つ？」

龍兎「あの人は俺達仮面ライダーを見た時露骨に動揺した。璃奈達には普通だったのに」

太陽「確かに、そこは俺も少し感じてた」

彼方「じゃあ、しずくちゃんのお兄さんが仮面ライダーだったとして、どうして名乗り出なかったのおく？何か事情があったとか？」

確かに彼方さんの言う通りだ。しずくちゃんのお兄さんは自分が仮面ライダーだとな名乗らずに、逆に逃げる様に行って行ったんだろう……。私がそんなことを考えていると、龍兎君は今までの真剣な表情を崩し、溜息をつくと一気に気だるげな表情になり両手を上げ顔を振る。

龍兎「それがわかれば苦労はないんですけどね。」

せつ菜「……せめてしずくさんがいれば何かわかるかもしれないのですが……」

果林「本人に直接聞くしかないのかしら？」

龍兎「それも難しいかもしれませんが。昨日は偶然会えたついでで普段は俺達を警戒している可能性があるので、断られると思います」

果林「……そうなると難しくなってくるわね……」

どれだけ考えても答えが出ることは無く、何か知っているかもしれないしずくちゃん
は今日は演劇部の方に顔を出している為、同好会の部室にいない。結局今日は軽くダン
ス練習だけしてすぐに解散ということになった。

しずくちゃんのお兄さんの話が行き詰った為、軽くダンス練習だけして解散となったので、私・・・近江彼方は晩御飯の買い出しをして愛しの妹、遙ちゃんの待つ家に帰る途中だった。

彼方「ふんふん♪はつるかちやくん！待っててねえ〜！」

るるん気分で帰っていると、私の家の近くにある公園で私と同年くらいの一人の男の子がブランコに座って携帯を見ていた。私はその男の子の所へ駆けていく。

彼方「あれは・・・やっぱりそーくん！」

??? 「・・・ん？おお、彼方じゃん」

彼方「おお、彼方じゃん・・・じゃないよ、勉強はどうしたの？」

??? 「ああ・・・それな・・・」

今私の目の前にいる男の子は「ソーくん」。本名を進導 走介（しんどう そうすけ）君と言って私の家のお隣さんでいわゆる幼馴染。小さい頃から何かと私や遙ちゃんの間柄を見てくれてとつても頼もしい男の子。今は警察学校に入る為に勉強している……んだけど、最近は何故かやる気を無くしてこんな風に携帯で動画を見たりしている。

走介「なんか最近、何で警察官になりたいのかわからなくなってきた。全然ギアが入らないんだよなあ……」

彼方「ええ……。う……ん、それじゃあ私の家で一緒にご飯食べない？」

走介「……え？なんで？」

彼方「遙ちゃんも家で待ってるし、久々に3人で食べようよ！」

走介「……わかった」

こうして私達は晩御飯を食べる為、家に帰ろうとした……その時だった。いかにもガラの悪い男の人が現れた。

??? 「おうおう、イチャコライチャコラしやがつてこの乳臭いガキ共がー！」

彼方「……そ、そーくん……！」

走介「彼方……俺の後ろに」

??? 「イライラするわあー！イライラするからボコボコにされても文句言えねえよなあー！」

そう言うと、ガラの悪い男の人の身体がアンドロイドの様な機械の身体へと変わる。

彼方「え……あれつて雷羽君が言つてたトリロバイトマギア……？てことは
デイヴェンジャーが近くに……!?」

??? 「あ？あんなロボットと一緒にすんじゃねえよ！俺様はロイミュードだ！」

走介 「ロイ……ミュード……いつて!？」

彼方 「そーくんっ!？」

??? 「俺はロイミュード……そしてこのヘルバイラルコアを使えば！俺様はもつと進化した存在となる！」

そーくんが突然頭を抑え苦しみ出し心配していると、ロイミュードと名乗った目の前の敵が象の様な形をした灰色のミニカーを取り出すと、それを身体に取り入れた。すると、両腕が巨大な手甲となった灰色の象の様な怪人に変わった。

??? 「俺様はアイファントデイヴエンジャー！見るがいい、この完璧な肉体を！ひねりつぶしてやるぜー！」

彼方 「そーくん！仮面ライダーなんでしょ？何か、思い出さない？」

走介「か、めん……ライダー？何言つて……！」

彼方「ええっ!? 思い出さないの!? ど、どうしよ……！」

アイフアントデイクヴェンジャー（以下、アイフアント）「……何ごちやごちややつてんだおらあつ!!!」

目の前の敵、アイフアントデイクヴェンジャーが何かを放つと、突然私達を含む周りの時間が止まった様にゆっくり動き始めた。

彼方（え、えええええ………なにこれええええ!!!）
!?!?!?

走介（くっ………これは、やばい………!!!）

わ、私達、どうなっちゃうの………
!?!?!?

—— 走介視点 ——

幼馴染の近江彼方と共に晩御飯を食べる為、彼方の家に行こうとした俺・・・進導走介は、突如現れたアイフアントデイヴエンジャーと名乗る謎の怪人に襲われ、俺と彼方は絶対絶命のピンチに陥っていた。

アイフアント「はっはっは！この中では自由に動けないだろー！」

走介（くっ・・・どう、したら・・・！）

怪人の謎の攻撃により動けなくなった俺が激しい頭痛に見舞われながらもどうしようか頭を巡らせていると、とんでもないことが起きた。

ボコオオオオ
!!!!

??? 『進ノ介！無事かー！ー！！！！』

アイフアント「何っ!?ぐおっ!?」

走介（地面からく、車が出て来たあっ!?）

彼方（ええええつつつつ!?!?!?）
 !?!?!?（

そう、何故か地面から赤いスポーツカーの様な独特な形をした車が出てきて、怪人を跳ね飛ばすと、俺の前に停車した。そして、誰も乗っていないにも関わらず、ドアが開き中から男性の声が出た。良く見てみると、ベルト?の様な機械があり、そこから声が聞こえていた。

??? 『無事か、進ノ介！』

走介（な、何なんだあの機械……俺に、話しかけてるんだよな?）

??? 『む? そうか、まずは重加速の中でも動ける様にしよう。……隣のお嬢さんにも。行け、シフトカーズ!』

ベルトの様な機械がそう言うのと、車の中からミニカーが2台走り出し赤い車体に白いラインが2本入ったミニカーが俺の元へ、もう1台のパトカーの様な白いミニカーが彼方の元へ向かってきた。その2台のミニカーが俺達の身体に触れると、ゆっくり動いていた俺達の身体が今まで通りに動ける様になった。

走介「……動けるっ!? なんだこのミニカー……」

彼方「う、動ける! やったー!」

??? 『これで少し話せるな、進ノ介!』

走介「そうだよ、あんた! 何なんだよ!? それに俺は進ノ介じゃなくて走介だ!」

??? 『……そうか、まだ記憶が戻っていないのか。……思い出すんだ! あの世

界でのことを！君のもう一つの姿を！』

走介「俺の……もう一つの姿……」

???『そうだ！君は仮面ライダーとして、人々の平和を守っていたんだ！……さあ、もう一度仮面ライダードライブとして、走り出すんだ！進ノ介……いや、走介！』

走介「仮面ライダー……ドライブ……あぐっ!？」

ベルトの言った言葉に、俺の頭の中で赤い装甲に身を包んだ戦士の映像が映る。その瞬間、さつきまで俺の頭を襲っていた頭痛と共に、最近ずっと抱えていた心のモヤモヤが晴れていくのを感じた。そうだった……俺は……

走介「ああやつと思ひ出したよベルトさん……俺は、警察官で仮面ライダー……ドライブだ！」

ベルトさん『行こう！走介！』

走介「ああ！脳細胞が……トップギアだぜ！」

ベルトさん『OK！スタート・ユア・エンジン!!』

走介「……変身!!」

全てを思い出した俺は、“シフトブレス”を左手首に装着し、ベルトさんを掴み自分の腰に巻く。そして“アドバンスドイグニッション”と呼ばれるキーを回し、手に持っている“シフトスピード”の後部を回しシフトブレスに装填しレバー起こす。すると俺の身体を赤い装甲が包み込み、最後に“トライドロン”という車からタイプスピードのタイヤが飛んできて俺の身体に収まる。そして俺は、もう一つの自分の姿へと変身する。

ベルトさん『ド、ラーイブ！ターイブ・スピード!!』

走介「ドライブ」……久々に変身したな。」

彼方「おおく……これがそーくんが変身した仮面ライダー……！かつこいいぜ〜！（でもあのタイヤ……痛くないのかな？）」

走介「ドライブ」「……あ、彼方！お前は危ないからトライドロンの中に入つてろ」
彼方「トライドロンってこの車？……わ、わかった。お邪魔します……」

俺が彼方をトライドロンの中に避難させていると、先程跳ね飛ばされたアイフアント
デイヴェンジャーが戻って来た。

アイフアント「くそっ！よくも跳ね飛ばしてくれたな……つて仮面ライダー!?
いつの間に!？」

走介「ドライブ」「……デイヴェンジャー！久々の運転だからな……ひとつ走り付き合えよ！」

彼方「イントライドロン」「いつけー!!そーくーん!!!」

走介「ドライブ」「はあああつ……はあつ!ふ、はあつ!」

俺はアイファントデイヴエンジャーに向かって走り、パンチやキックを食らわせていく……が。

走介「ドライブ」「……かつたつ!?なんだこいつの硬さ!」

ベルトさん『……どうやら、デイヴエンジャーとなったことで硬さが増した様だな』

アイファント「その通りだ!エレファントオルフェノクと融合した俺様の鉄壁の身体を前に落ちるがいい仮面ライダー!」

ベルトさん『……どうする、走介?』

ベルトさんに言われ、俺は少し考える。……どうすればあの硬い身体を崩せるのか。そこで俺は1つ対抗策を思い付き、実行に移すことにした。

走介「ドライブ」「……なら、ワイルドで対抗してや」

ベルトさん『あ、それは無理だ。走介……。』

走介「ドライブ」「……は？何で？」

ベルトさん『君の身体はあの世界ではない。今の君は機械で言うところの初期値に戻っている状態だ！残念だが今の君はタイプスピード以外のタイプチェンジは使えない。』

ま、まじか……。タイプチェンジが使えないとなると他の方法は……。つと俺が更に考えを巡らせると、アイフアントデイヴエンジャーが連続パンチを放ってきた。

アイフアント「今度はこっちの番だ！おらああああつ!!!」

走介「ドライブ」「しまっ!?ぐ、あ、ぐあっ……!?」

アイフアント「はっはっはー!!!俺様こそが最強!!!」

このままじゃ負けてしまうと思った俺は、ベルトさんにもう一つの案を提案する。

走介「ドライブ」「なあ、ベルトさん?タイプチェンジは無理でも、タイヤコウカンはいけるんだよな?」

ベルトさん『ああ、それなら大丈夫だ』

走介「ドライブ」「よし!なら、ちょうどいい奴がいる!」

ベルトさん『……そう言うことか!君のやりたいことは理解した!』

どうやらベルトさんは俺の狙いに気づいてくれた様で、すぐにある奴を呼んでくれ

た。

ベルトさん『来てくれ！マックスフレア！』

ベルトさんの呼びかけに、トライドロンからオレンジの炎の様なクリアボディを持つ
“シフトマックスフレア”が駆け付けてくれたので、俺はシフトスピードの時同様に後
部を回しレバーモードにしてシフトプレスに装填し、レバーを起こす。すると、トライ
ドロンからオレンジのタイヤが飛んできて俺の身体に収まる。

ベルトさん『タイヤ、コウカーン！』

彼方「i n トライドロン」「・・・タイヤ交換？」

ベルトさん『マックス・フレア！』

走介「ドライブ：マックスフレア（以下、フレア）」「よし！こいつのパワーなら・・・
おりゃあ！」

アイフアント「ぐおっ!？」

走介「ドライブ：フレア」「まだまだ行くぞ!はあ、はあっ!」

アイフアント「ぐ、がはっ!？」

俺は、シフトマックスフレアの力で両手に炎を纏わせ、アイフアントデイクヴエンジャーに攻撃していく。すると、先程とは違い攻撃が入り始める。そこで俺は、違うシフトカーを呼びシフトブレスに装填する。

走介「ドライブ：フレア」「今度はこいつだ!」

ベルトさん『ターイヤ、コウカーン!ファンキースパーイク!』

走介「ドライブ：ファンキースパイク（以下、スパイク）」「はあっ!」

俺は、今度は緑のクリアボディを持つ「シフトファンキースパイク」を使い、緑のトゲトゲしたタイヤの力を使ってアイフアントデイヴェンジャーへ向けて針を飛ばす。

アイフアント「いてっ！く、いたっ！ぐああっ!？」

走介「ドライブ：スパイク」「まだまだ！次はこいつだ！」

ベルトさん『ターイヤ、コウカーン！ミッドナイト、シャドウ！』

そして、俺は今度は紫のクリアボディを持つ「シフトミッドナイトシャドー」を装填し、手裏剣の様な紫のタイヤの力を使い、両手に手裏剣を出現させどんどんアイフアントデイヴェンジャーに投げていく。

走介「ドライブ：ミッドナイトシャドウ（以下、ミッドナイト）」「ほっよっはっ！」

アイフアント「ぐ、お、ぐあっ!？」

走介「ドライブ：ミッドナイト」「・・・よし、そろそろ決める！」

俺はもう一度シフトスピードに戻し、今度はキーを回しシフトブレスのボタンを押した後、レバーを起こすと必殺技の態勢に入る。

ベルトさん『ヒツサーツ！フルスロットル・・・スピード！』

アイフアント「な、なにっ!？」

彼方「イントライドロン」「え、ちよ、何で勝手に動き始めたのおお・・・!？」

アイフアントディヴェンジャーを両脇に出現した4つのタイヤで挟み込み、こちらに飛ばすと、彼方を乗せたトライドロンが自動でグルグルと回り、俺はそのトライドロンを足場に連続で蹴りを当てていき、最後に一発強力なキックを決める。

彼方「イントライドロン」「ぎゃあああああああ！目が回るうううう・・・!!!」

走介「ドライブ」「ふ、は、と、おりや、はあっ……はあああああああ
!!!!」

アイファント「ぐ、お、が、ぐあっ、ぐうっ!……ぐあああああああ
!!!!」

走介「ドライブ」「……ふう。」

ベルトさん『ナイスドライブ!』

そして、アイファントデイヴエンジャーを倒した俺は変身を解き、トライドロンの中
にいる彼方のところへ向かった。

走介「おい、彼方——!」

彼方「うおお……。目がクラクラするぜえくく……。――」

走介「わあああ!?!ご、ごめ——ん、彼方——!!!!」

ベルトさん『……やれやれだね』

こうして、目の回った彼方が回復するまで待ち、改めてベルトさんを紹介した。

走介「じゃあ、改めて。彼方、この人はベルトさん！俺の大事な相棒だ！」

彼方「へえ〜！よろしく、ベルトさん。私、近江彼方！」

ベルトさん『ああ、君が走介の新たなパートナーだね。こちらこそよろしく頼むよ、彼方』

彼方「うん！……あ、でも遥ちゃんになんて説明しよう？」

走介「あく確かに。……ベルトさん、一応隠しておいた方がいいのか？」

ベルトさん『……いや、それは君に任せるよ。それよりも、トライドロンを隠せるピットが欲しいところだね』

走介「あくじゃあ、遙は彼方の妹で俺の大切な妹でもあるからな！ちゃんと説明しよう！……でも、確かに問題はピットの方だな……」

俺がうくと唸っていると、彼方がポンツ！と手を打ちあることを提案してくれた。

彼方「あ！それなら彼方ちゃんいい人知ってるよ〜！」

走介「……いい人？」

彼方「うん、とんでもないお金持ちの人〜！まあ、今日はもう遅いし遙ちゃんもお腹空かせてるだろうから帰ろ〜」

走介「わ、わかった……」。

ベルトさん『そうだ彼方、君はそのままジャステイスハンターを持っていてくれ』

彼方「ジャステイスハンターってこのパトカーみたいなミニカーのこと？ どうして？」

ベルトさん『先程の様に重加速の中でも動ける様になる為にはシフトカーを持つている必要があるんだ』

彼方「……そっか、りょうかい！」

こうして、俺達は彼方の家に帰ることにした。ちなみに、買い物品は大丈夫か彼方に聞いたところ「卵が入ってなかったから大丈夫！」らしい。そういうもんなんだろうか。トライドロンは……とりあえず出て来た穴に戻ってもらった。

第9話 愛・友・キター！

—— 彼方視点 ——

昨日の夜、私……近江彼方の幼馴染の進導走介君が仮面ライダードライブに変身して敵をかつこよく倒してくれたんだ。……で、今は昨日約束した通りそーくんとベルトさんに仮面ライダーゼロワンこと飛瀬雷羽君を紹介してあげたよ。

走介「……まさか、彼方の知ってるいい人つてのがゼロワンだったとはな……」

ベルトさん『私も驚いたね』

雷羽「久しぶりドライブ！近江さんから話は聞いたぜ！早速なんだけどベルトさん、何処にピットを造ればいいか希望はある？」

ベルトさん『そうだね……やはり、人目につかない所となると地下を希望したい』

雷羽「わかった。ならドライブと近江さんが住んでいる県営住宅の地下に造ろう」

雷羽君の言葉に驚く私とそーくん。やっぱりお金持ちは発想が違うといふかなんといふか。

走介「……ぜ、ゼロワン。お前こつちでも金持ちなんだな……」

雷羽「まあな！」

彼方「うらやま〜」

彼方ちゃん達がそんな話をしていると、少し離れた場所で璃奈ちゃん・かすみちゃん・しずくちゃん・の1年生組と愛ちゃんが話していた。……特に璃奈ちゃんはベルトさんに興味深々の様子。

かすみ「ベルトが喋ってますよ……」

愛「いや、ああいうベルトもあるんだねえ」

しずく「色々あつて興味深いですね」

璃奈「あのベルト、どういう構造してるのか気になる。璃奈ちゃんボード【フランスツ
ー】」

愛「お！りなりーテンション上がってんねー！」

璃奈「うん。解体して中を見てみたい。璃奈ちゃんボード【ギラギラツ】」

ベルトさん『……今、何か悪寒がした様な……』

走介「機械が何言ってるんだよ、ベルトさん」

——愛視点——

あの後、遅れてきたゆうゆと歩夢を加えてダンスと発声練習を終えたアタシこと宮下愛は、時々お手伝いしてる老人ホームへ行こうとしたところ、ゆうゆが「皆で行こう!」とまた突然言い出し、今は皆で老人ホームへ来ていた。ちなみに、今この老人ホームの施設にアタシ・ゆうゆ・歩夢・かすかす・りなりー・カナちゃん・らいらい・そー（ペルトさん）が来ている。せつつーは生徒会、カリンはモデル業、エマっちは用事で部活にも来ておらず、しずくは演劇部に顔を出すということまでここに来ていない。

女性介護職員「いやー、愛ちゃんが来てくれて助かるわあく!それに今日はお友達も一緒なんてほんと楽になったわ。……けど、ごめんね?学校もあるのに大変でしょ?」

愛「ううん、愛さんもおばあちゃんおじいちゃんと関わって楽しいから全然問題無し!」

侑「私達も貴重な体験が出来てうれしいです！」

女性介護職員「そう言ってもらえると助かるわあ。……あ、そうそう！あの子、来てるわよ！」

愛「へえっ?! // // // な、何言ってるのお // // // //」

この老人ホームの従業員である女性介護職員の突然の発言に素っ頓狂な声を上げてしまったアタシ。そんなアタシを見て、隣にいた歩夢が話しかけてきた。

歩夢「……ねえ愛ちゃん、あの子って誰？」

愛「べ、別に誰でもないって言うか……誰でもあるって言うか……」

女性介護職員「あら？愛ちゃんお友達に紹介してないのね？」

愛「で、出来る訳ないじゃん!」

侑「……………これは、何か愛ちゃんから女の子の匂いがするねえ〜!」

歩夢「……………侑ちゃん、その発言は気持ち悪いよ?」

ゆうゆの気持ち悪い発言に流石の歩夢も若干引いたところで、あらかた介護の手伝いを終えたアタシ達はエントランスに戻って来た。すると、窓際のテーブルで将棋をしているおじいちゃんと一人のヤンキー風の男の子がいた。私は、思わずその男の子をじつと見てしまう。そんな私を心配そうに歩夢が声をかけてきた。その声で私は我に返る。

愛「……………」

歩夢「……………愛ちゃん?」

愛「……………えっ!?!どうしたの歩夢!」

歩夢 「いや、急に止まったからどうしたのかなって……」

愛 「あ、ああいや、なんでもないなんでもない！」

侑 「歩夢！愛ちゃんの邪魔しちゃダメだよ！ほら行くよ！」

歩夢 「え、ええ!?侑ちゃん!？」

すると、何か顔がニヤニヤし始めたゆうゆが歩夢の腕を引っ張り歩夢を連れてその場を離れて行った。……よし、後でゆうゆはお仕置きしよう。

愛 「はあく……本当にゆうゆは……」。

アタシがゆうゆのことで溜息をついていると、先程の男の子とおじいちゃんが一際大きな声を上げた。

??? 「これで王手!!!」

歳三おじいちゃん「かー!流石てんちゃん!強いなー!!!」

???「何言つてんだよじーちゃん!じーちゃんの教え方が上手いから俺もここまで上手くなれたんだよ!」

歳三おじいちゃん「嬉しいこと言ってくれるねえー!・・・おつと、もうこんな時間か、わしはもう行くよ」

???「おう!またやろうな!」

ヤンキー風の男の子と対局していたおじいちゃんが席を立ったのを見計らって、アタシはそれとなく男の子に近づくと、男の子が気付いてこっちにきてくれた。そしてアタシ達は友情握手という少し変わった握手を交わす。

???「お?愛じゃねえか!今日も来てたんだな!」

愛「やつほ、てんでん！てんでんも来てたんだね！」

この男の子の名前は友月 天弥（ゆづき てんや）。アタシはてんでんって呼んでるんだけど、てんでんと出会ったのは少し前で、アタシがここでお手伝いを始めて少し経ったくらいにさつきみたいな感じでおじいちゃん達と将棋をしてたんだよね。見た目はヤンキーなんだけど、とつても優しく、それを知ってからこうしてちよくちよく話しをしていく内に……ね。

愛「ねえ、ちよつと……話さない？」

天弥「ああ！いいぜ！」

そしてアタシ達は少し移動し、中庭のベンチに腰掛ける。

愛「それにしてもさ、愛さん達が出会ってもう2カ月だねえ〜！最初はびっくりしたよ？ヤンキーがおじいちゃん達と将棋打ってるって！」

天弥「俺だってびっくりしたぜ! パツキンギャルが介護やってんだもんよ!」

愛「あはは! だよねー!」

天弥「……でもさ、何て言うか……愛は普通のギャルじゃねえって言うか、じーちゃんばーちゃんだけじゃなくてみーんなに優しくてさ。俺、そういうお前のとこ好きだぜ!」

愛「……ひゃあいつ!? す、すすす……って急に何言ってるの! もう!」

天弥「え? 俺何か変なこと言ったか?」

本当にってるんはすぐ好きとか無自覚に言っちゃうんだからこつちの心臓が持たないよ……。と、アタシ達がベンチで話していると……。老人ホームの施設内の一部が爆発した。

天弥「うおっ!? な、なんだ!」

愛「爆発が起こったみたい！逃げようてんてん！」

天弥「……いや、もしかしたら逃げ遅れた人がいるかもしれないねえ。俺は行って来るから愛は逃げろ！」

愛「ええ〜!?ちよ、アタシも行くってー!!!」

そう言うと、てんてんは爆発のした方へ走っていく。そんなてんの背中を追ってアタシも急いでその場を後にする。

——天弥視点——

??? 「このデストオリオン・デイヴェンジャーの力！特と見るがいいわい！」

いつもの様に老人ホームで歳三じーちゃんと同棋を打っていた俺……友月天弥は、突然起きた爆発に人が巻き込まれていないか確認する為、急いでその場に向かう。が、そこには俺の予想外のことが起きていた。

天弥「……おいおい、アイツらはなんなんだよ……!?」

そう、俺の眼前の景色には爆発と共に何か……特撮番組で見るような怪人の群れが暴れ回っており、その中でも一層デカい怪人がそれらをまとめるリーダーの様に見える。俺が眼前の景色に驚いていると、愛が後ろから追いついてきた。

愛「ちよ、てんでん速いって……って、あれダイヴエンジャー!?嘘っ!?」

天弥「ダイヴエンジャー?愛……アイツらのこと何か知ってんのか!」

愛「う、うん……!あれはダイヴエンジャーって言って、人類を滅ぼそうとする怪人だよ!」

天弥「なに!? そいつは許せねえー……。ぜってー止める!」

愛「あ、ちよ、てんてん!」

俺は愛の声を無視し走り出すと、とりあえずリーダーぽい怪人にドロップキックをぶちまます。

天弥「おらあ、っ!」

デストオリオンディヴェンジャー（以下、デストオリオン）「ぐおっ! ……な、何者だ!」

天弥「俺は友月天弥! ダチを傷つける奴は……俺が許さねえ!」

デストオリオン「……て、てんちゃ……ふ、ふん! 誰かと思えばただの無謀者か。いいだろう、ならば貴様から消してくれ!」

天弥「行くぜえ!」

そして俺は、リーダー格の怪人へと走り出す。

——愛視点——

愛「ちよ、行っちゃったよ……。」

てんてんを追って爆発音がした場所へ来たアタシ……宮下愛は、そこでディヴェンジャーが暴れているのを見て驚愕していると、てんてんが突っ走って行っちゃった。アタシがそのことでボーゼンとしていると、らしいとそーの2人が駆け付けて来てくれた。

雷羽「宮下さん!」

走介「宮下！無事か！」

愛「らいらい！そー！よかった、来てくれて！」

雷羽「俺達が来たからにはもう大丈夫……って、なんだあいつ！生身で戦ってる!?」

走介「まじか……って関心してる場合じゃない！行くぞゼロワン！」

雷羽「おっけー！今日はこいつで行くぜ！」

そう言うと、らいらいはいつものキーではなく水色っぽい色のキーを取り出し、それをベルトに読み込ませる。すると、大きい熊？みたいな、ライダモデル？だっけ？……が、らいらいを包み込み氷の様なアーマーに身を包んだ水色のゼロワンに変身した。

『ブリザード！オーソライズ』

雷羽「変身！」

『プログライズ!』

『Attention freeze! フリージングベアー!』

『Fierce breath as cold as arctic winds.』

走介「行くぜ、ベルトさん！」

ベルトさん『OK! スタート・ユア・エンジン!!』

走介「変身！」

ベルトさん『ド、ライブ! タイプ・スピード!』

雷羽「ゼロワンフリージングベアー(以下、ベアー)」「とりあえず俺は燃えた所を凍

らせつつ周りのやつら倒してくるわ！」

走介「ドライブ」「わかった！」

そして、仮面ライダーに変身したらいらいとそーは走り出し、いらいは爆発で燃えた所を凍らせ、そーは今だ戦っているてんてんを助けに向かった。

走介「ドライブ」「はあー！」

デストオリオン「ぐおっ!？」

走介「ドライブ」「おいあんた！無茶なことすんな！」

天弥「うおっ!?!なんだお前!？」

走介「ドライブ」「えっと、俺は……仮面ライダー！ドライブ！」

天弥「うおー!!正義のヒーローキターー!!!!
!!頭いったっ!!」

突然そーがてんてんに対してキメツキメツの決めポーズを取り、てんてんがテンション上がった瞬間、頭を抑え始めた。

走介「ドライブ」「急に頭を抱えてどうし．．．いや、頭痛?．．．このタイミン
グでっ!!」

頭痛って．．．まさか、てんてんが仮面ライダー!?うっそ．．．。とアタシが思っている、夕方の空に何故か流星が流れ．．．それはどんどん小さくなっていきアタシ達．．．というか、てんてんの手のひらに形を変えて収まった。

天弥「これは．．．そうだ思い出した!こいつはフォーゼドライバー!んで俺は．．．
仮面ライダーフォーゼだ!」

てんてんが手に持っている機械を腰に巻くと、4つのスイッチを順番に押し右横にあ

るレバーを引く。

天弥「行くぜ！」

『3、2、1……』

天弥「変身！」

すると、てんてんの身体を光が包み……次の瞬間、白の宇宙服の様なスーツに身を包んだてんが立っていた。

天弥「フォーゼ」「宇宙……キターー!!!
!!!仮面ライダーフォーゼ！タイマン張らせ
てもらうぜ！」

愛「あれが……仮面ライダーになつたてん……」

天弥「フォーゼ」「……つーわけでドライブ！デイクヴェンジャーは俺がやっついてい

か？」

走介「ドライブ」「はあ……まったく、相変わらずだなフォーゼ。それじゃ、任せ
たぞ！」

天弥「フォーゼ」「おう！」

そう言うと、ソーは今も離れた場所で戦っているらしいの元へと向かっていく。そ
して、てんてんはベルトの右端のオレンジのスイッチを押し右腕にロケットを出現させ
る。

天弥「フォーゼ」「行くぜダイヴェンジャー！こつからは第2ラウンドだ！」

『ロケット、オン』

デストオリオン「う、うおおおおお!!」

天弥「フオーゼ」「はああああ！……つて、お、おお？とま、止まらねええええ……！！！！」

てんでんが右腕のロケットでデイヴエンジャーに殴りかかったが、一発ぶち込んだところで勢いが殺せずそのままあつちこつちに引つ張られ、最後は上空に上がり地面に落ちた。

天弥「フオーゼ」「お、お、おおおお………あ痛っ!?!」

デストオリオン「て、てんちゃん………」

天弥「フオーゼ」「だったら………こいつだ!」

『エレキ』

そう言うと、てんでんはオレンジ色に統一されたスイッチを取り出し、それを右端にセットすると、そのスイッチを起動する。……すると、白かったスーツが金色に変

わった。

『エ・レ・キ、オン』

天弥「フォーゼ：エレキ」「ビリビリにしてやるぜ！」

雷羽「ゼロワン：ベアー」「ちよ、フォーゼの奴いきなりステイツチエンジしたぞ！」

走介「ドライブ」「ま、まじか・・・!?」

天弥「フォーゼ：エレキ」「おおおお・・・りやあ!!!!」

デストオリオン「ぐあああっ!？」

金色のてんてんに切り付けられたダイヴエンジャーが転がった先・・・そこは、アタシの側だった。ダイヴエンジャーが起き上がりアタシの方をちらつと見たが、ヤバいと思つて駆け付けたてんてんに蹴られた。

デストオリオン「……!」

天弥「フォーゼ：エレキ」「やっべ！愛に手え出すな！」

デストオリオン「ぐおっ?!」

天弥「フォーゼ：エレキ」「……大丈夫か！愛！」

てんてんが心配して声をかけてくれたが、アタシはそれに答えられる状態じゃなかった。何故なら……

愛「ひっ!?か、雷いいい……!?!」

天弥「フォーゼ：エレキ」「……あ、そっか！」

そう、アタシは雷が苦手。今のてんてんを見てブルブル震えていると、それを察してくれたてんてんが謝りながら元の白のスーツに戻ってくれた。

天弥「フォーゼ：エレキ」「悪い！愛が雷苦手だったのすっかり忘れてた！今戻すから！」

愛「あ、ありがとてんてん」

天弥「フォーゼ」「ほんとごめんな！……それにしても、何か目がふらふらしてきたし、そろそろ決めるか！」

そう言うと、てんてんはまたロケットを出現させ、上空に飛ぶ。そして今度はロケットとは別にもう一つ、左の内側にある尖ったスイッチを起動させ、キックの態勢に入ると、レバーを引いた。

『ロケット、オン』

天弥「フォーゼ」「それと、こいつもだ！」

『ドリル、オン』

デストオリオン「な、何いつ!？」

天弥「フォーゼ」「行くぜええええ!」

『ロケット、ドリル、リミットブレイク』

天弥「フォーゼ」「ロケットドリルキーーック!うおりやああああああ!!!」

デストオリオン「ぐ、う、うおあああつああああ
!!!!!!」

天弥「フォーゼ」「お、お、おおおおお!目が回るううう・・・!」

デストオリオンデイヴエンジンジャーを倒したてんは、その勢いのまま左脚のドリルが地面に突き刺さり、身体がグルグル回っている。そして、身体の回転が治まると変身を解除した。

天弥「……ふう。やっと治まったぜ。」

愛「やったね! てんでん!」

天弥「おお! ……あ、あれ? 何か、身体の力が抜けて……」

愛「てんでん!?!」

アタシに親指を立てて答えてくれたてんでんが突然ふらつき後ろに倒れそうになったところを、戦いを終えて変身を解除したそーとらいらいに支えられた。

走介「おつと! ……大丈夫か?」

雷羽「いきなりステイツチエンジするなんて驚いたぜ」

天弥「お、お前らは……?」

走介「ドライブと……」

雷羽「ゼロワンだ！」

天弥「おお、ドライブとゼロワンか……ありがあとな、助かったぜ。」

その後、施設の人達を避難させていたゆうゆ達がアタシ達のところにやってきた。……そして、さつきデイヴエンジャーを倒した時の爆発が収まると……そこには……

歳三おじいちゃん「ぐっ……うう……！」

天弥「なっ!?じ、じーちゃん!？」

愛「嘘……なんで……!？」

そう、そこにはさつきてんと将棋していた歳三おじいちゃんが倒れていた。アタシとてんてんは驚きのままに歳三おじいちゃんの元に駆け寄った。

天弥「なんで……なんでなんだよ!・じーちゃん!・なんでこんなことしたんだよ!!!」

歳三おじいちゃん「てん、ちゃん……すまんかった。わしは……日々老いていく自分の身体が……出来ていたことが出来なくなっていくのを実感するのが怖かった……」

そこから、歳三おじいちゃんはぼつりぼつりと語っていく。

歳三おじいちゃん「わしが自身の身体のことと嘆いていた……そんなある日、とある奴が……わしにスイッチを渡してきたんだ。これを使えば、あなたの望みが叶うかもね……そう言って、そやつは去って行った。わしは……その誘惑に勝てんかった……」

天弥「……じーちゃん」

歳三おじいちゃん「あのスイッチを使ったら……気分が高揚して……自分が若いころに戻った様な感じがしたんだ……」

天弥「だからって……こんなこと……!」

歳三おじいちゃん「ああ……わかつとる……どんな理由があれ……許されることじゃない。わしは……自首する」

愛「そんな、歳三おじいちゃん!」

歳三おじいちゃん「愛ちゃんも……怖がらせて、すまんかったな。最後に……てんちゃん和将棋が出来て、嬉しかった……ありがとうな。」

その後……歳三おじいちゃんはやってきた警察の人に自首し、連れていかれた。歳三おじいちゃんを乗せたパトカーを見送りながらアタシは……てんてんに静かに聞く。

愛「ねえ、てんでん．．．あのスイッチって？怪人は人もなったりするの？」

天弥「ああ．．．。ゾディアーツスイッチ．．．それが、じーちゃんが使ったスイツチの原型。まあ、じーちゃんが使ったやつはあの野郎が改造したデイヴェンジャースイツチだろうけど．．．」

愛「それなら．．．どうしててんでん達は戦うの？守るはずの人と戦うってことだよね？」

天弥「．．．．そうだな、たまに．．．わからなくなんだ。どうして戦ってんだろうって．．．。でもさ、怪人の力に手を出した人の顔を見ると、辛そうなんだよ。だから俺達は、その人達を救う為にも．．．戦ってんだ。」

愛「そつか．．．．大変なんだね。戦うって．．．」

天弥「ああ．．．」

そうして、寂しさに沈むアタシ達の顔を・ ・ ・夕暮れの太陽が、優しく包み込むように照らしてくれた。

第10話 v i v i d!命大切少年!

—— 果林視点 ——

現在、私・・・朝香果林は、同じ同好会メンバーで親友のエマと共にある子を出迎える為、空港に来ていた。そして、待っている子が来る合間・・・私達は昨日の出来事を思い出していた。

エマ「昨日の話・・・びっくりしたね」

果林「そうね・・・」

私達は昨日、愛から2つの話を聞いた。まず、手伝いで行っている老人ホームで出会った男友達が仮面ライダーに変身したこと。そしてもう一つ・・・それは、人間が怪人になる場合もあるということ。この話を聞いた時は、さすがに私も驚きを隠せな

かった。

果林「まさか、人が怪人になることがあるなんて……」

エマ「もしこれからも……人がデイクヴェンジャーになったら……」

果林「……」

エマの言葉を聞いて、考えたくはないがその可能性は今後も出て来るだろうと私は思ってしまう。そして私達の間には重い空気が流れる。そんな中、私達が待っていた子が到着口からやってきた。

??? 「……あ！果林ねえ！」

果林「あら、来たわね。……切り替えましょ、エマ。」

エマ「うん、そうだね」

今私達の方に向かってきている男の子の名前は阿蘇 勇真（あそ ゆうま）。勇真は私と同じ島出身で歳は2つ下の幼馴染で、現在は私達が育った島の高校に通っている。ちなみに、勇真とエマはちょうど勇真が私にビデオ通話で近況を聞いてきた時に偶々エマもいて、その時に知り合ったの。

勇真「久しぶり果林姉え！……って、エマさん？どうして？」

果林「私はいって言ったんだけど……どうしてもって聞かなくて」

エマ「だって心配だったんだもん」

果林「まったく……勇真ももう子供じゃないんだし、大丈夫よ？」

勇真「いや……心配なのは果林ねえのことだと思っとうよ？」

勇真は何を言っているのかしら。……まあそれはさておき、どうして勇真が飛行

機に乗ってわざわざ東京まで来たのかというと、実は彼が通っている学校と東京のとある学校同士で一人ずつ交換留学をしようということになり、勇真はその交換留学生に選ばれたから。だから交換留学当日前に一度東京を案内してほしいということだったんだけれど……それをエマに話したところ「私も行く！」って聞かなくて……。

果林「まあいいわ……それで勇真？何処か行きたい所はあるのかしら？」

勇真「あゝ、そうだね……なら、花やしきに行きたいな！」

果林「ふふ、相変わらず渋い所が好きなのね」

エマ「果林ちゃん、花やしきって？」

果林「あら？エマはまだ行ったことなかったかしら？……なら、ちようどいいわね！行けばわかるわ♪」

そして私達は、花やしきへと向かった。

——勇真視点——

案の定果林ねえが迷った為、途中からエマさんの案内で浅草の花やしきにやってきた僕達は、花やしきのアトラクションを全力で楽しんでいた。

エマ「あははっ！楽しいねえ〜！」

勇真「はい！最後のスペースショットはドキドキハラハラでとても楽しかったです
！」

果林「まったくはしやいじやって、貴方達本当に高校生なのかしら？」

勇真「……え〜、昔は果林ねえの方がこういう所ではしやいだのに……」

果林「……勇真？何か言ったかしら？」

勇真「いえ、何も……」

エマ「本当に果林ちゃんと勇真君は仲良さだね」

果林「はあ……それで？次は何処に行きたいの？」

エマさんの言葉に、果林ねえが溜息を吐きながら質問してくる。果林ねえのこういう態度は照れ隠しだとわかっているので、敢えて触れず……僕は次に行きたい場所を提案する。

勇真「それじゃあ次は……神田明神に行きたいな！」

果林「神田明神？あそこに行ってどうするのよ？」

勇真「うん……なんとなく気になったから……かな」

果林「……ま、行きましようか」

こうして僕達は、次に神田明神に行くことになった。

—— 果林視点 ——

勇真の希望により神田明神に来た私達は、お祈りを終えおみくじをしていた。

エマ「わあ〜！大吉だよ〜！」

果林「あら、よかったじゃない！……私は中吉ね。」

勇真「中吉でもいいじゃん！僕は……半凶」

果林「凄いわね、初めて見たわ」

勇真「僕も」

エマ「何て書いてあるの？」

勇真「え〜と・・・待人、望まぬ者が現れる。・・・え〜」

そんな話をしていると、階段の方から人の悲鳴が聞こえた。

「きゃー！！！！」

「や、やめてくれー！！！！」

果林「なんだか、階段の方が騒がしいわね」

エマ「何かあったのかな？」

勇真「行ってみましょう!」

果林「あ、ちよ、勇真!・・・もう、私達も行くわよエマ!」

そして私達が悲鳴のする階段近くに行ってみると・・・そこには二足歩行の青い馬がいた。

???「はっはっはー!お前達人間は所詮俺の養分だ!もつともつとお前達のライフエナジーを寄こせ!」

果林「・・・う、馬?しかも喋ってるじゃない・・・」

勇真「・・・なんだよアイツ・・・人を襲ってる・・・」

エマ「・・・ね、ねえ果林ちゃん、あれ・・・デイヴエンジャーなんじゃ・・・」

果林「……た、確かに……。それじゃ、ここにいたら私達も危ないじゃない!?」

勇真「デイ……ヴェン……。?あぐつ!?」

私達がその場から離れようとした時、勇真が突然頭を抑え悶え始めた。

エマ「大丈夫!勇真君!」

果林「立てるかしら?」

勇真「う、うん……。!」

私とエマが苦しんでいる勇真を抱き上げようとした瞬間……。いつの間にかデイヴェンジャーが私達の前まで来ていた。……。そして、デイヴェンジャーの言葉に勇真がキレた。

勇真の初めて見る怒りの表情に驚いたエマが戸惑いつつ私に聞いてきた。

エマ「か、果林ちゃん．．．勇真君、どうしちやったの．．．？」

果林「ああ、エマは勇真の怒ったところ初めて見るんだったわね。あの子はね．．．小さい頃、治療するのは難しいって言われてた難病に罹ってたのよ．．．でも、あの子はそれでも諦めなかった。そして、勇真はその難病を乗り越えた．．．だからあの子は、誰よりも命の尊さを知ってるの．．．あの子は．．．勇真は、命に対して本気で想い、本気で怒れる子なの」

エマ「．．．そうなんだ。そんなことが．．．」

ホース刀「だったらどうする？」

勇真「許さない．．．お前だけは絶対に許さない!!!」

その時、勇真の腰にレバーの付いたベルトが出現し、そして勇真の胸．．．ちよう

ど、心臓部分から何か、小さくて丸い物が出て来た。それを掴んだ勇真は、静かにつぶやく。

ホース刀「な!?それは眼魂!?どうしてお前が!？」

勇真「これは……ゴースト眼魂!?そっか、そうだった……僕は、ゴースト。仮面ライダーゴースト!」

『ア—イ!』

『バッチリミナー!バッチリミナー!』

そして、小さくて丸い物(確か、眼魂って言ってたかしら?)の左横のボタンを押し、それをベルトにセットすると、ベルトから黒にオレンジのラインが入ったパーカーが出て来た。

エマ「な、なにあれ!？」

果林「パーカー!?・・・あ、そ、それよりエマ!ここは危険よ!離れましょ!」

エマ「う、うん!」

ベルトから出て来たパーカーがデイヴエンジャーに攻撃している間に、勇真がベルトのレバーを引く。

ホース刀「ぐ、なんだこいつ!あ、ぐ!くそっ!」

勇真「・・・変身!」

『カイガン!オレ!レッツゴー!覚悟!ゴ・ゴ・ゴ!ゴースト!』

すると、勇真の身体を黒いスーツが包み、パーカーを羽織ると、そこには角が生え、パーカーを着た仮面ライダーが立っていた。

ホース刀「仮面ライダーか……なら、数で潰してやる！」

眼魔コマンド集団「……………!!!!!!」

勇真「ゴースト」「行くぞ！」

デイヴェンジャーが召喚した黒いお面の集団が勇真に襲い掛かる。勇真は敵の攻撃の勢いを手でいなしたり、キックを決めていく。

勇真「ゴースト」「ふ、は、はあっ！」

眼魔コマンド集団「……………!?!?!?!」

勇真「ゴースト」「ふう、ちよつと多いな……よし！」

そう言うと、勇真はベルトから剣を出現させると、それを手に取り斬りかかっていく。

勇真「ゴースト」「は！く、はあ！はあああ！」

眼魔コマンド集団「「「「「」」」」」」

!!!!!!!

勇真「ゴースト」「お前たちにあまり時間をかけてられないんでね。終わらせるよ！」

『ダイカイガン！オレ！オメガドライブ！』

勇真「ゴースト」「はあああ……はあつ！……よし。」

ホース刀「やはりコマンドでは駄目だなあ……なら俺も眼魂を使うまでだ！」

勇真が黒いお面の集団を倒して一息ついていると、デイヴエンジャーが何か小さい物を取り出しつつ勇真に近づいてきた。そしてそれを身体に吸収させると、両肩に燕を乗せた袖無し羽織を羽織り右腕を大きな刀に変化させた。

ホース刀「ふっふっふ……！さあ、一騎討といこうじゃないか？」

勇真「ゴースト」「わかった……って、ん?」

今にも2人が戦い始めようとした時、勇真の元に赤い何か飛んできた。

勇真「ゴースト」「これ……ムサシさん!お久しぶりです!」

ホース刀「ムサシの眼魂か……」

勇真「ゴースト」「ムサシさん……お力、お借りします!」

『ア—イ!』

そして、勇真は赤い眼魂をベルトにセットすると、今度は赤い袖無しパーカーが出現し、勇真がそれを羽織ると、持っていた剣を2つに分けた。

『カイガン!ムサシ!決闘!ズバツと!超剣豪!』

勇真「ゴースト：ムサシ」「行くぞ！はあああ！」

ホース刀「はあああ！」

勇真「ゴースト：ムサシ」「ふ、は、はあ！」

ホース刀「く、ふ、おらあ！」

そして、勇真とダイヴエンジャーは互いに剣戟を披露していく。勇真が剣を振り下ろせばダイヴエンジャーはそれを自身の刀で受け流し、逆にダイヴエンジャーが刀で突きをしてくれば勇真はそれを避け左腕で弾き隙が出来たとこを剣で突くが、ダイヴエンジャーが左脚で蹴り上げる。……そして2人は距離を取り互いに睨み合う。

ホース刀「……お前、なかなかやるな」

勇真「ゴースト：ムサシ」「……そっちこそ、正直さつきまでの印象が変わったよ」

ホース刀「ふっ……はあ!」

勇真「ゴースト：ムサシ」「やあ!」

そして、勇真とデイヴエンジャーは再び戦い始める。私とエマは2人の剣戟に目で追うのがやつとの状態で、そんな中勇真の剣を弾いたデイヴエンジャーが勇真のお腹へ蹴りを入れる。その光景に私は思わず声を上げてしまう。

ホース刀「はっ!」

勇真「ゴースト：ムサシ」「……ぐっ!」

果林「な、ちよつと!今のは卑怯じゃない!」

エマ「か、果林ちゃん……!」

ホース刀「……卑怯？何を言う！これは戦いであってお前ら人間がやってる試合じゃない！飛んでくるのが剣だけだと思っうな！」

果林「な、そんな……！」

デヴィエンジャーの言葉に私が反論しようとしたら、勇真が私を擁護するわけではなく、まさかのデヴィエンジャーの言葉を肯定した。

勇真「ゴースト：ムサシ」「……いや、果林ねえ……こいつの言う通りだよ。むしろこいつ、さっきの言動とか嘘みために正々堂々としてる。」

ホース刀「……ふん、この姿になったからか……剣の戦いに無粋な真似はしたくない」

勇真「ゴースト：ムサシ」「……そっか。もし別の出会い方をしていたら友達になれたかもね」

果林「どうして……勇真、あいつの言葉を否定しないの……?」

ホース刀「安心しろ女……こいつを倒した後にゆつくりとお前たちのライフエナジーをいただく」

果林「……くっ」

私とエマがデイベンジャーの言葉に怯むと、勇真が元氣付ける様に声をかけてくれた。

勇真「ゴースト：ムサシ」「大丈夫だよ。果林ねえ、エマさん!……絶対に勝つから。」

果林「……勇真」

エマ「勇真君……」

勇真「ゴースト：ムサシ」「さあ、終わらせよう……この戦いを！」

『ダイカイガン！ガンガンミナー！ガンガンミナー！』

ホース刀「……そうだなあ、行くぞ！」

勇真「ゴースト：ムサシ」「……命、燃やすぜ！」

そして、勇真がさつきとは違い剣に光を集めると勇真とダイヴェンジャーは互いに走り出す。そして、ダイヴェンジャーの突きに合わせて2つに分けた剣をギヤリギヤリと音を鳴らしながら滑らせダイヴェンジャーの懐に当てる。

ホース刀「何っ!?! ……ふ、まさかこの俺が剣で負けるとはな。」

勇真「ゴースト：ムサシ」「……君との戦い、悪くなかったよ」

ホース刀「……俺もだ。お前との剣戟は楽しかったぞ。」

『オメガスラッシュユ!』

ホース刀「ぐああああああっつっつっつ
!!!!」

戦いの末、遂に勇真がデイヴエンジャーを斬り倒した。そして、変身を解除した勇真が私達の場所までやってきた。

『オヤスミ〜』

勇真「果林ねえ! エマさん! 怪我は無い?」

エマ「うん! 大丈夫だよ、ありがとう勇真君!」

果林「私も大丈夫よ! それからお疲れ様、勇真」

勇真「へへっ うん!」

果林「さ、帰りましょ♪」

そして私達は帰ることにした。因みにうちの寮は手続きさえすれば家族は泊めていってことになってるから今回は勇真を私の弟として私の部屋に泊めることになっている。

果林「……そういえば、貴方以外にも仮面ライダーがいるのよ♪」

勇真「えっ!? そうなのっ!？」

第11話 エヴァーグリーン・果実武者!

—— 侑視点 ——

果林さんの地元の幼馴染である阿蘇勇真君って子が仮面ライダーゴーストに変身したことを知って5日……私は今、陽哉と2人で買い物に来ていた。

侑「いや、陽がついてきてくれてほんと助かったよ!」

陽哉「まあちようど暇だったし、いいよ。……でも、歩夢はよかったのか?」

侑「あ、歩夢は今日せつ菜ちゃんとしずくちゃんと用事があるらしくってさ」

陽哉「なるほどな」

こんな感じで話していると、私は向かいの歩道で衝撃的なものを眼にする。

侑「それじゃ、今日はもうかえ……って……んなあつ!？」

陽哉「ど、どうした侑!？」

侑「う、うせやんっ……誰か嘘って言ってー!!!」

陽哉「ちよ、侑!人が見てるから!一旦落ち着けて!何があつたんだ!」

侑「はっ!?!……は、陽……あれを見て」

陽哉「……え?」

そして私は自分が見たものを陽にも見せる。そう、私の眼に映つたのは……

陽哉「あれは……エマ、さん?」

侑「隣にいる男の人は誰なの!？」

陽哉「いや、俺に言われても……」

エマさんと知らない男の人が仲良く歩く姿だった。そんな光景を目にして、私は何もたつてもいられず後を追うことにした。

侑「行こう!」

陽哉「ちよ、何する気だよ侑!」

侑「もちろん、あの2人を追う!」

陽哉「え、ちよ、待てて侑!」

——エマ視点——

私……エマ・ヴェルデは今、武田 紘輝（たけだ こうき）君という大学生の男の子と一緒に買い出しに来ていた。

紘輝「いや、それにしても助かったぜエマ！買い出し手伝ってくれてサンキュ！」

エマ「ううん、私も今から『フルーツ・パラダイス』に行こうと思ってたから気にしないで！」

紘輝「そっか！……なあ、こんなにうちの店に来てくれるんだし、やっぱりバイトする気は無いか？」

エマ「……うん、ごめんね？今はスクールアイドルに集中したいから」

紘輝「いや、気にすんな！スクールアイドル頑張れ！」

エマ「うん! ありがとう絢君!」

今私の隣を歩いている武田絢輝君との出会いは、私がこの日本に初めて一人で来た時に右も左もわからずふらつと立ち寄ったお店“フルーツ・パラダイス”というカフェ屋さんで絢君がバイトで接客してくれて、その時日本語や私の知らない日本の文化のこととか教えてくれて、それ以降私はお店に通ってわからない日本語を教えてください、現代文の勉強を絢君に見てもらってるんだあ。

エマ「それでね、この間侑ちゃんが」

絢輝「……ははっ!」

エマ「急に笑い出してどうしたの、絢君?」

絢輝「ああごめん、何て言うか最近エマってその侑ちゃんって子の話しばっかりで本当に好きなんだなって思ってたさ!」

エマ「ええ〜！そ、そんなに侑ちゃんの話しばっかりかなあ〜？」

紘輝「最近は同好会の子達の話しも聞くけど、一番多いのは侑って子と前に会った果林の話しだな」

エマ「全然気づかなかったよお〜」

紘輝「俺も会いたくなってきたな〜」

私達がそんな話をしていると、近くの建物の壁から何か、ファスナーの様な模様が出た瞬間、そのファスナーの様な模様が開き、中から怪人の集団が出て来た。

初級インベス「キュキューー!!!」

ヤギインベス「ヤアアアアアア!!!」

シカインベス「シーーーーー!!!」

エマ「う、うそっ!? 壁からデイクエンジャーが!?!」

紘輝「な、何だこいつ等!?!」

突然現れたデイクエンジャーに私達が驚いていると、後ろから声が聞こえた。

陽哉「エマさん! 隣の人! しゃがんで!」

エマ「え、う、うん!」

紘輝「わちよ、エマ!?!」

陽哉「はあっ!」

私とその声に従い咄嗟に紘君の頭を掴んで一緒にしゃがませると、私達の頭上を人影

が通り過ぎ、目の前のデイヴエンジャーの集団を斬りつけた。私はその人を見て驚愕する。

エマ「ええっ!? 陽哉君!? どうしてここに!?!」

紘輝「だ、誰だあんた!?!」

陽哉「話しは後です! . . . 侑! 2人を頼んだ!」

侑「おっけー!」

エマ「ゆ、侑ちゃんまで!?!」

何とびつくりすることに、いつの間にか陽哉君だけじゃなく侑ちゃんまで現れて私の頭は軽くパニックになりはじめていた。そんな中、陽哉君が火炎剣烈火をベルトに収めてブレイブドラゴンワンダーライドブックを取り出すと、ページを開きベルトに収め変身する。

『ブレイブドラゴン!』

『烈火抜刀!』

陽哉「変身!」

『ブレイブ、ドラゴン!』

陽哉「セイバー」
「……行くぞ!」

絃輝「うおっ!?何か、すげえのに変身しやがった!?!」

絃君が仮面ライダーに変身した陽哉君に目を輝かせていると、その後ろで侑ちゃんが必死に絃君の腕を引っ張っていたのが見えたので、私も手伝うことにした。

侑「うううう! 済みません、ここ危険なので……避難してくださいさうういつ!!!」

エマ「こ、絃君！ここ危険だから一緒に逃げよう！」

絃輝「え？でもあいつ大丈夫なのかよ？」

侑「陽は大丈夫なので、行きましょう！」

絃輝「あ、ああ・・・わかった」

そして私達は路地裏に隠れようと陽哉君が戦っている場所から離れたんだけど、そこには見たことも無い植物が無数に生えていた。

エマ「なに・・・この植物・・・」

侑「見たこと無い・・・」

絃輝「あれ、何だ・・・」

絃君が謎の植物の中から、ツタが絡まっている“何か”を拾った瞬間……頭を抑え苦しみ始めた。

絃輝 「いつてえ……!? なんなんだよ、こんな時に……!?」

エマ 「絃君! 大丈夫!?!」

私が頭を抑え蹲っている絃君に駆け寄っていると、私達の後ろで侑ちゃんが震えた声で言葉を発する。

侑 「エマさん……ま、前……!?」

エマ 「……え?」

??? 「グルルオオオオオオ!!!」

紘輝 「エマ！危ねえ!!!」

エマ 「きやつ!?!」

侑ちゃんの声に私が顔を上げると、そこには全身に刃物が生え、右手の爪が巨大化したデイヴエンジャーが立っていて、今にも私達に襲い掛かろうとしたところでいち早く反応した紘君が私を抱えて後ろへ飛んでくれた。

紘輝 「大丈夫かエマ!」

エマ 「う、うん……ありがとう、紘君」

紘輝 「こいつ!……えっと、あんた、侑って名前……だよな? エマを頼めるか?」

侑 「え、あ、はい……!」

エマ「絢君……何する気なの？」

絢輝「こいつ、ぶっ飛ばす」

エマ「え、あ、危ないよお!？」

絢輝「……!」

絢君は私の声を聴くこと無く走り出す。絢君に向かってダイヴエンジャーが左腕の刃物で斬撃を放ったと同時に絢君が壁へ飛びそのまま壁を蹴り、ダイヴエンジャーの首に右脚で蹴りを入れる。

絢輝「おらっ!」

???「グルツ……ガア!」

絢輝「しまっ!……ぐっ!？」

デイヴエンジャーの首に蹴りを入れた絃君だったけど、デイヴエンジャーには効いていなかった様で、右腕で殴り返されてしまった。

エマ「絃君!?!大丈夫!?!」

絃輝「ぐ、うう……!頭痛で威力が落ちちまった……!」

侑「エマさんっ……!!!」

エマ「え、あ……」

侑ちゃんの声に反応して私が上を向くと、今にも腕を振り下ろそうとしているデイヴエンジャーがいた。私がもうダメだと諦めかけた……その時だった。

陽哉「セイバー」「何とか……間に合った!」

エマ「陽哉君……!」

侑「陽!……よかった」

陽哉「セイバー」「少し時間かかっちゃったけど、全部片づけて来れた……さて、はあっ!」

??? 「グガアアツツツ!」

駆け付けて来てくれた陽哉君がデイヴエンジャーの刃物を防いでくれた。そして、刃物を弾きそのまま剣で斬り距離をあける。こつちを向いた陽哉君が絃君の持っている物を見ると驚愕する。

陽哉「怪我は無いですか……って、それ戦極ドライバー!? どうしてここに!」

絃輝「戦極……ドライバー……? お、おお? 何か……頭痛が少しずつ消えてすうーつとして……あぁー!」

陽哉君の言葉に眉をひそめ少し首を傾げた瞬間、突然絃君が大声を上げた。

エマ「絃君!?!どうしたの急に大声上げて!?!」

絃輝「思い出したぜ……全部!」

そう言うと、絃君は勢いよく立ち上がり、持っていたものを腰に巻いた。そして、近くに実っていた謎の実をもぎ取ると、錠前の様な不思議なアイテムに変わった。

陽哉「セイバー」「まさか……!」

絃輝「ああそのまさかだセイバー!……エマ、お前は俺が守る!」

エマ「へ、ええっ!?!そんな、急に……!?!」

侑「青春だね……エマさん」

絢君が持っている錠前の様なアイテムを開錠する。すると、絢君の頭上に果物のオレンジの様なものが出現する。

絢輝「……変身！」

『オレンジッ!』

エマ「わあ!?!絢君の頭の上にオレンジが！」

『ロックオン!』

そして、絢君が錠前の様なアイテムを腰に巻いたバックルにセットし右端のブレードを倒すと、頭上にあつたオレンジが絢君の頭をすっぽりと覆い、絢君の身体を紺色のアンダースーツが包むと、オレンジが展開し……紺色のスーツにオレンジ色の鎧を着た日本の歴史に出て来る武者の様な姿をした絢君が立っていた。

『ソイヤツ!』

『オレンジアームズ!花道・オンステージ!』

エマ「オレンジ色の……ムシヤ?」

紘輝「鎧武」「俺は仮面ライダー鎧武!……ここからは、俺のステージだあ!」

陽哉「セイバー」「鎧武……久しぶり、だな」

紘輝「鎧武」「久しぶりだなセイバー!……とここであいつ、素体はビヤッコイン
ベスだが……あの全身の刃物はどっかで見た様なく……?」

陽哉「セイバー」「……多分、ブレイドが戦つたりザードアンデッドじゃないか?」

紘輝「鎧武」「あゝ、なるほど……んじや、剣士と武将コンビで……行くか!」

陽哉「セイバー」「……ああ!」

話し合いを終えた陽哉君と仮面ライダーに変身した絃君は、軽く顔を見合わせ2人同時に走り出す。少し絃君が先行すると、デイクエンジャーがそれに反応し右腕の大きな爪で攻撃してきたのを2つの剣で受け止める。

ビヤツコリザードデイクエンジャー（以下、ビヤザード）「グルアアアア!!!」

絃輝「鎧武」「ぐっ……おおお!」

そして、デイクエンジャーの攻撃を受け止めた絃君が大きな声で叫ぶと、それに答えた陽哉君が壁を蹴り真横から炎を纏わせた剣でデイクエンジャーの背中の刃物を全て破壊する。

絃輝「鎧武」「……セイバー!!!」

陽哉「セイバー」「ああ、任せろ!はあああああ!!!!!!」

ビヤザード「グッガアアアアア
!?!?!?」

絃輝「鎧武」「おつらあ!!!」

ビヤザード「グギヤアアアアア
ツツツツ
!?!?!?」

陽哉君に背中中の刃物を破壊させたデイヴエンジャーが仰け反った隙を、絃君が思いっきりパンチを入れる。そして、そのパンチの威力にデイヴエンジャーは後方に飛ばされ、壁に激突する。

絃輝「鎧武」「・・・よく俺の狙いがわかったなセイバー」

陽哉「セイバー」「まあ、これでもあつちの世界で一緒に戦ってた仲間だからね」

絃輝「鎧武」「ははっ!・・・さすが!」

そして、お互いの拳をトンツ!とぶつけた絃君と陽哉君はダイヴェンジャーへと向き直る。

ビャザード「グルルツ……」

絃輝「鎧武」……それじゃ、そろそろ終わらせるか!」

陽哉「セイバー」「おっけー!」

ビャザード「グルガアア!!!」

絃君と陽哉君に向かってツタの様なものを出したダイヴェンジャーに対し、2つの剣を繋げナギナタの様な形に変形させると、ベルトに付いている錠前をナギナタにセットすると、ぶんぶん振り回しダイヴェンジャーの攻撃を防ぐ。

『ロックオン!』

『一、十、百、千、万……!』

絃輝「鎧武」「おりやりやりやりやりや……!!!!!」

エマ「……す、すごい……!」

侑「私さつきから空気だけど、本当にすごい……!」

そして、攻撃を防ぎきった絃君はオレンジ色の斬撃をディヴェンジャーに放ち果物のオレンジの形のオーラに閉じ込める。

絃輝「鎧武」「はっ!せいっ!」

ビャザード「グルツ……!?!」

絃輝「鎧武」「セイバー!」

陽哉「セイバー」「ああ!物語の結末は、俺が……俺達が決める!」

陽哉君が剣をベルトに納刀し、剣のトリガーを引くと炎を纏わせた剣でオーラに閉じ込められたディヴエンジャーに連続で斬り付けていく。

『必殺読破!』

『烈火抜刀!ドラゴン! 一冊斬り!ファイヤー!』

陽哉「セイバー」「……火炎、十字斬つ!!!」

ビャザード「グ、ガ、グルアツ……!?!」

陽哉「セイバー」「とどめだ、鎧武!」

そして最後に絃君が剣のトリガーを引いてエネルギーを解放させると、ディヴエンジャーを真つ二つに斬り裂いた。

紘輝 「おう、エマ! 怪我してないか?」

エマ 「うん! 平気だよ!」

侑 「お疲れ、陽!」

陽哉 「……侑、お前随分慣れてきたな」

侑 「まあ、さすがにねえ」

私と紘君、侑ちゃんと陽哉君で話をしていると、紘君が陽哉君へ気になっていたことを聞く。

紘輝 「そういえばセイバー? 仮面ライダーは俺とお前だけなのか?」

陽哉 「いや、ゼロワン達もいるよ!」

紘輝 「て言うことは、俺で全員揃った感じか？」

陽哉 「あ、いや……最後に1人、残ってる……」

紘輝 「その言い方……何か訳ありみたいだな？」

陽哉 「う、うん……訳は皆が揃った時に話すよ」

エマ 「そういうえば、侑ちゃんと陽哉君はどうしてここにいたの？」

陽哉 「あ、えつと……それは……」

侑 「何と言うか……そのおろ、エマさんが知らない男の人といたから気になった
といますか……途中からちよつと楽しくなってきたところにデイヴエンジャーが
来たといますか……」

エマ「そっかあ〜! とりあえず陽哉君は巻き込まれた感じみたいだし、
ちゃんは後で私と2人でお話しようね?」

侑「ひゃ、ひゃい」

絃輝「あの子、終わったな」

陽哉「あ、あはは」

その後、私と侑ちゃんは2人でゆっくりと話し合いをしました。

.ただ、この時の私達はまだ知らなかった。近い日に、しずくちゃんの家であ
んな大規模な戦闘が起こるなんて。

第12話 桜坂邸の攻防。碧映の決意としずくの叱咤 前編

—— 碧映視点 ——

僕が仮面ライダーとしての記憶を取り戻したのは、少し前のこと。当時はSNSで軽く話題になり始めた映像が、ニュース番組で取り上げたのを見た時だった。

碧映「この映像……作り物じゃないんだ……うぐっ！」

その映像には、セイバーがデイクエンジャーと戦っている映像で、僕はそれを見た瞬間……激しい頭痛と共に、ある映像が頭の中に流れる。そう、それは僕があつちの世界でしていたもう一つの姿、仮面ライダーオーズが戦う映像。

僕は頭に流れる映像が何なのか理解すると、頭痛は晴れて、目を開けた時……僕

の手には、オーズドライバーと全てのコアメダルが入ったオーメダルホルダーが握られていた。

碧映「そうだ、僕は仮面ライダー。……仮面ライダーオーズ！」

仮面ライダーであることを思い出したその日から、僕は同じ夢を見る様になった。……それはかつての仲間達が次々と倒れていく夢、そして僕の後ろには、大切な仲間達の屍でいっぱい、僕の身体は仲間達の血で真っ赤に染まっていた。

碧映「……うわあああああああ?!?!?!? はあ、はあ……また、この夢……」

それから僕は、オーズドライバーやオーズに関連する武装を封印し、その夢から逃げる様にキャンプを始めた。……キャンプをしていると、心が落ち着くから。

とある休日、私を含めた同好会のメンバーと陽を含めた仮面ライダーの皆でしずくちゃんのお家にお勉強会という体で遊びに行くことになり、今はしずくちゃんの部屋で絶賛勉強中。

わからないところは勉強が出来る組に聴きながら、進めていると……不意に太陽君がしずくちゃんに問いかけた。

太陽「……そういえば、今日はお兄さんはいる？」

しずく「えっと……いるにはいるのですが、今日は朝から自室に籠ったままでして……」

太陽「そっか、ごめんね。急にこんなこと聞いて」

しずく「い、いえ……」

天弥「しずくの兄貴って……確か、オーズの可能性がある奴だよな？」

「龍兎「可能性っていうか、ほぼ確でオーズかな」

と、私達がこんな話をしている中・・・桜坂邸の外では、予想外のことが起きていた。

—
??? 視点
—

??? 「さて・・・それじゃあ、存分に暴れていいよ！お前達！」

「！！！！！！」
「グオオオオオオ」
「！！！！！！」

—
陽哉視点
—

しずくちゃんの家で雑談を交わしつつ勉強会をしていた俺達だったが、突如桜坂邸の正門から爆音を響いた。

天弥「うおお!?!びっくりした!?!」

走介「なんだっ!?!」

勇真「……あれ!外を見てください!」

ゴーストが指を指す方を見た俺達は、信じられないものを眼にする……それは、桜坂邸の庭に無数の怪人達が侵入し始めているところだった。

雷羽「な、なんだあの数!?!」

龍兎「30……いや、50以上はいるかもな」

太陽「とにかく急ごう！」

陽哉「だな！……皆はここにいて！」

歩夢「陽君……気を付けてね」

陽哉「……ああ！」

そして俺達は、各々のベルトを手に部屋を出る。外に出た俺達の眼前には庭を覆いつくす怪人達で溢れていた。

紘輝「こんな間近に見ると、気持ち悪いな」

勇真「ええ、軽くトラウマになりそうです……」

陽哉「……皆、行くぞ！」

「……………変身!!!」

そして俺達は扉の前で横一列になり同時に変身する。

『ブレイブ、ドラゴン!』

『ライジングホッパー!』

『嵐を呼ぶ巨塔! キリンサイクロン! イエーイ!』

『カイガン! ビリー・ザ・キッド! 百発! 百中! ズキューン! バキューン!』

ベルトさん『ド、ライブ! タイプ・スピード!!』

『オレンジアームズ! 花道・オンステージ!』

『ハリケーン！プリーズ。フー！フー！フー！フー！フー！フー！』

陽哉「セイバー」「行くぞ！……はあああああ！！！！」

各々が仮面ライダーに変身してそれぞれの武器を手に無数の怪人達へ立ち向かっていく。

陽哉「セイバー」「ふっ、はあっ！」

雷羽「ゼロワン」「お……りやあっ！」

紘輝「鎧武」「はあ！」

走介「ドライブ」「よっ、はあ！」

龍兔「ビルド：キリンサイクロンフォーム（以下、キリンサイクロン）」「鬱陶……し……い！」

太陽「ウイザード：ハリケーンスタイル（以下、ハリケーン）」「風の力を食らえ！はあぁあ！」

勇真「ゴースト：ビリー・ザ・キッド（以下、ビリー）」「は、はあ！はあぁあ！」

天弥「フォーゼ」「おらおらあぁあ！」

途中で3・3・2のチームに分かれながらも、俺達は遂に残り半分まで敵を減らすことが出来た……だが。

???「ふうん……なかなかやるね、仮面ライダー……だけど、まだあいつが出てきていない……どうやら炙り出すしかないようだね！」

どこかから指を鳴らす音が聞こえると、突如俺とゼロワンの前に闇が出現し、それは徐々に形を成していく。

雷羽「ゼロワン」「なんだ!？」

陽哉「セイバー」「……………なんだこの闇、何か形を作っていく……………」

その闇が晴れると、そこにいたのは……………。

カマキリベローサ「……………」

雷羽「ゼロワン」「……………な!？」こいつ、俺がこつちの世界で初めて変身した時に倒したダイヴエンジャーじゃねえか!？」

ゴーレロス「……………」

陽哉「セイバー」「……………こつちは2回目に変身した時に戦ったゴーレロスダイヴエンジャー……………!？」

俺達が前に戦ったダイヴエンジャー達が怪しく目を輝かせながら復活した。

陽哉「セイバー」「……これ、まさか俺達の前だけ現れた……って訳じゃないよな？」

雷羽「ゼロワン」「他の連中の所にも現れてる可能性はあるな……」

—— 龍兔視点 ——

俺、ドライブ、鎧武の3人で周りの怪人を倒していた最中……何処からか指を鳴らす音が聞こえた瞬間、俺達の前に闇が現れ徐々に形を成していき……それは俺達の前に倒したデイヴェンジャーになった。

ビヤツコリザード「……」

アイフアント「……」

ソルディアン「……………」

絃輝「鎧武」「おいおい……………まじかよ！」

龍兔「ビルド：キリンサイクロン」「……………まさか、こいつらが復活するなんて……………」

走介「ドライブ」「……………どうする？」

龍兔「ビルド」「どうするって、やるしかないでしょ……………他の奴らのところにも現れてるだろうし」

絃輝「鎧武」「……………それじゃ、行くか！」

デストオリオン「……………」

ホース刀「……………」

ヘルマグマ「……………」

天弥「フォーゼ」「まじ……かよ……!?!」

勇真「ゴースト：ビリー」「そんな……どうして……!?!」

太陽「ウィザード：ハリケーン」「こいつら、意思を感じられない……2人共、油断せずに行こう!」

俺達の前に何故か倒したはずのデイヴエンジャー達が現れた。

陽哉視点

陽哉「セイバー」「とにかく、急いでこいつらを倒そう！」

雷羽「ゼロワン」「そうだな！一回倒してるし、楽勝だろ！」

そして俺とゼロワンは復活したディヴェンジャー達に立ち向かっていった……が。

雷羽「ゼロワン」「はあっ！」

陽哉「セイバー」「……はっ！はあっ！」

ゴーレロス「……」

カマキリベローサ「……」

2体のダイヴェンジャーには俺達の攻撃はまったく効いていなかった。

陽哉「セイバー」「効いて……ないのか？」

雷羽「ゼロワン」「……ていうかこいつら、前より硬くなってないか？」

陽哉「セイバー」「まさか、強化されてる……!?」

ダイヴェンジャー達が強化されていることに気付いた瞬間、ダイヴェンジャー達の眼が赤く光り、俺達に攻撃し始めた。

ゴアレロス「……ゴアア!!!」

カマキリベローサ「……オオオオ!!!」

雷羽「ゼロワン」「なにっ!?……ぐおっ!?」

陽哉「セイバー」「ぐっ……ああっ!？」

雷羽「ゼロワン」「くっそ! コンビネーションで行くぞ、セイバー!」

陽哉「セイバー」「ああ!」

そして、俺とゼロワンの2人は、コンビネーションでデイヴエンジャーに攻撃を加えていく。例えば、俺がカマキリベローサに火炎剣烈火で斬り付けた後、上へ軽く火炎剣烈火を投げ、それを俺の後ろから跳び箱の様に俺の背中に手を着き飛び越えたゼロワンが逆手持ちに受け取り、ゴーレロスに振り下ろした。

陽哉「セイバー」「……はあっ!」

カマキリベローサ「……!」

陽哉「セイバー」「ゼロワン、受け取れ!」

雷羽「ゼロワン」「おう！．．．おりやあ！」

ゴーレロス「．．．．．！」

だが、2体のデイヴエンジャーは俺達の攻撃に少し後ろに下がるだけで、特にダメージを受けている印象がない。そして、ゴーレロスが右腕に石や土を集め巨大化させると、その右腕で俺達を殴りつけてきた。俺とゼロワンはその攻撃の勢いに負け、後方に吹き飛ばされてしまう。

雷羽「ゼロワン」「．．．ぐあつ!？」

陽哉「セイバー」「ぐああつ!？．．．く、こうなったらこれでいくしか．．．！」

俺が取り出した2冊の本を見て、ゼロワンは俺に問いかけて来る。

雷羽「ゼロワン」「セイバー！お前、大丈夫なのかよ．．．？」

陽哉「セイバー」「ちよつとくらい無茶をしなきや．．．こいつらには勝てない！」

そして俺は、一度火炎剣烈火をソードライバーに納刀し、次に2冊の赤い本のページを開き、ソードライバーに収める。

『ストームイーグル！』

『西遊ジャーニー！』

『とあるお猿さんの冒険記、摩訶不思議なその旅の行方は．．．』

陽哉「セイバー」「．．．はっ！」

『烈火抜刀！語り継がれし神獣のその名は！クリムゾンドラゴン！』

『烈火三冊！真紅の剣が悪を貫き、全てを燃やす！』

陽哉「セイバー・クリムゾンドラゴン（以下、クリムゾン）」「何とかなれた……さあ、行くぞ！」

雷羽「ゼロワン」「まじか……じゃあ俺はこれだ！」

クリムゾンドラゴンになった俺を見て、ゼロワンはマゼンタのプログライズキーを取り出し、起動させる。

『ウイングーオーソライズ』

雷羽「ゼロワン」「ほいほいっと！」

そして、マゼンタのプログライズキー……フライングファルコンプログライズキーをゼロワンドライバーにスキャンさせると、ハヤブサのライダーモデルがゼロワンの周りを飛び回る様に出現し、ゼロワンに近づいてきた瞬間バラけて、マゼンタ色のアーマーパーツとなってゼロワンの身体に再構築される。

『プログラーイズ!』

『Fly to the sky! フライイングファルコン!』

『Spread your wings and prepare for a force.』

雷羽「ゼロワン：フライイングファルコン（以下、ファルコン）」「……飛び上がっていくぜえ!」

互いにフォームチェンジをしてデイヴエンジャー達と戦い始めた俺達。だがそこで、先程と同じ様に指を鳴らす音が聞こえた。

??? 「ふうん、そうくるんだ。なら……!」

陽哉「セイバー：クリムゾン」「……また、指を鳴らす音……!」

雷羽「ゼロワン：ファルコン」「おい、あれ……!!」

デイヴェンジャーと戦いながらゼロワンの視線の先を見ると、敵の援軍が空からとそして、地上からも出現し始めた。

陽哉「セイバー：クリムゾン」「まだ、増えるのか……」

雷羽「ゼロワン：ファルコン」「セイバー！空は俺が行くからこいつら頼めるか？」

陽哉「セイバー：クリムゾン」「……わかった！気を付けろよ！」

雷羽「ゼロワン：ファルコン」「おう！行つて来る！」

そう言うと、ゼロワンは空高く飛び上がって行った。別のところからウイザードが飛んでいくのが見えた。

陽哉「セイバー：クリムゾン」「……さて、こつちも踏ん張らないとな！」

侑視点

怪人の軍勢に仮面ライダーの皆が迎撃に向かい、最初の方こそ優勢だった仮面ライダーの皆だったけど、復活したデイクエンジャーが現れたことと、空や地上から突如敵の援軍が現れたことで、状況が一変……仮面ライダーの皆は劣勢に立たされ初めていた。

果林「これ、勇真達は大丈夫かしら？」

せつ菜「太陽君達が今までに倒したはずのデイクエンジャーが復活して、一気に状況が変わりましたね……。とはいえ！太陽君達は今まで危機を脱してきました！今回もきつと！」

愛「そ、そうだよね！せつつーの言う通り、てんでん達を信じよ！」

かすみ「……………ああ!? 雷羽あ!?」

かすみちゃんの声に反応して外を見てみると、空に現れた怪人の迎撃に向かった雷羽君と太陽君の2人が撃ち落されていた。

雷羽「ゼロワン：ファルコン」「ぐ、ああ……………!?」

太陽「ウイザード：ハリケーン」「くつ……………あ、あつ!?」

せつ菜「太陽君っ!?」

歩夢「どうしよう……………!このままじゃ、1人で戦ってる陽君が……………!」

侑「……………」

私達が不安に駆られる中、私がふとしずくちゃんの方を見ると、何か真剣な表情をし

て下唇を噛んでいた。そして、すつと立ち上がると扉の方へとずんずん歩き出す。

しずく「……………!」

侑「ちよ、しずくちゃん!何処行くの!」

しずく「すみません、少し行かなければならない所があるので、皆さんはここにいてください」

エマ「今出たら危ないよ!」

しずく「大丈夫です、家の中から出ることはないのです。……………それでは、ちよつと行ってきます!」

かすみ「あ、ちよ、しず子!」

そう言うのと、しずくちゃんは走って行ってしまった。

歩夢「しずくちゃん、大丈夫かな・・・？」

侑「・・・今は信じよう、しずくちゃんを」

そして私達はしずくちゃんの無事を祈りつつ、外の戦闘へと目を向ける。

——しずく視点——

自分の部屋を出て、私が向かった先・・・そこは私の兄、桜坂碧映の部屋。今日お兄様が家にいるのはわかっていて・・・そして、今外で行われている戦闘を見ていることも容易に想像できる。だから私は、いつもはドアをノックしてから入るけど、今回ばかりはノックをせず勢いよく開ける。・・・そこには、ドアの音に驚いてこちらを見るお兄様の姿があつた。

碧映「し、ずく……!?!?どうしたの……?」

しずく「どうしたの?……ではありませんお兄様! 貴方はここで何をしていますか! どうして、仮面ライダーの皆さんと一緒に戦わないのですか!」

碧映「え、えつと……どうしてつて……なんのこと?」

しずく「惚けないでください! お兄様が仮面ライダーであることは知ってるんです!」

碧映「えつ……どうしてそのことを……!?!」

お兄様の問いに、私はあの日のことを話します。

しずく「ごめんなさい……前にお兄様と街で会ったあの日に、お兄様の机の引き出しが開いてて……それで……」

碧映「そっか、ちゃんと閉めたと思ったんだけど、開いてたんだね……」

しずく「あの、それで……」

碧映「……ごめん、それでも僕は戦えない」

しずく「……どうして、ですか？戦える力があるのに、どうして何もしないのですか！このままでは、皆さんが……！」

私がそこまで言うとお兄様は手を握り締め、声を荒げて私に怒りをぶつける。

碧映「……しずくにはわからないよ！戦う力の無い君に！今まで隣で戦ってた仲間を失う怖さが！」

しずく「……っ！」

碧映「ねえ、わかる？自分の腕の中で仲間の身体が冷え、その命が消える感覚……」

仲間を守れなかった自分の無力さを思い知らされる感覚が……しずくにはわかるの
!!!」

しずく「そ、れは……」

お兄様の言葉に、私は言葉を詰まらせることしか出来ないでいた。そしてお兄様は、
今までため込んでいた気持ちを吐き出していく。

碧映「……僕は、怖いんだ……仮面ライダーとして戦うことが。記憶を取り
戻した時、皆と一緒に戦おうとも思った……けど、あの時のことを考えると、手が
震えて、脚が動かなくなつて……また仲間が死ぬ所を近くで見ると、もう一度仲間を失うくらいなら、最初から戦わない方がいい……そう思つて僕はベ
ルトを封印したんだ。」

しずく「……」

私はお兄様の言葉を聞き、静かに歩み寄り今度は自分の想いを口にする。

しずく「……確かに、私は戦えないのでお兄様の気持ちはわかりません。……
ただど！その気持ちを聞いて、思いやることは出来ます！確かにお兄様は昔、辛いこと
があったのかもしれませんが……それでも、貴方はこのまま何もしないで受け入れる
のですか？」

碧映「……え？」

しずく「貴方はこのまま、何もしないで仲間の皆さんが倒れていくのをただただ見て
いるだけでいいのですか！私からしたらそちらの方が苦しいですよ。……もし、こ
のまま戦って皆さんが負けるのだとしても、そんな運命を辿るのだとしても……最
後まで抗いなさい！何もしないで運命を受け入れるより……その運命をぶち壊すほ
ど抗って抗って運命と戦い続けなさい！」

そして私は、お兄様の机の方へ行き、例のベルトが仕舞ってある引き出しを開けて中
のベルトと3枚のメダルを手に取りお兄様に突き出す。

しずく「お兄様にはそう出来るだけの力がある！ならば仮面ライダーとして戦いなさい、桜坂碧映！」

碧映「っ！……それでも、僕は……」

しずく「……それでも怖さや不安で押し潰されそうになった時は私がお兄様の心を支えます！涙を拭い続け、笑顔にさせ続ける……貴方の心の拠り所になります！」

私の言葉を聞いたお兄様は、驚いた顔をした後すぐに、柔らかな笑顔を浮かべ、私を力強く抱きしめた。

しずく「……ひゃっ！お、お兄様！急に何を……！」

碧映「……ありがとう、しずく。君のおかげでようやく目が覚めたよ。」

そう言うとお兄様は、私がついていたベルトと3枚のメダルを手に取り、部屋の扉の方へ行くと、真剣な顔で私の方を振り返る。

碧映「しずく、行って来るよ！君の言う通り、例え負ける運命だとしても、僕は抗う！抗って抗って……しずくや、仲間達とその運命をぶち壊してやる！」

そしてお兄様は走って行った。そんなお兄様の背中に向けて、私は静かにつぶやく。
しずく「……………行ってらっしゃい、お兄様。」

——陽哉視点——

空へと飛び立ったゼロワンが撃ち落されてしまった後も、俺は劣勢に立たされていた。因みにカマキリベローサは、ゼロワンを追って行った。

陽哉「セイバー：クリムゾン」「くっ……はあ、はあ……まずい、体力が……！」

ゴーレロス「……………」

陽哉「セイバー：クリムゾン」「これだけやって、まだやれるのか……………」

片膝をつき肩で息をしていると、突然俺の後ろにある桜坂邸の扉が開いた。そして、
中か

ら出て来たのは……………」

碧映「……………」

陽哉「セイバー：クリムゾン」「碧映……………さん？……………つ、それ！」

桜坂邸から出て来たのは、腰にオーズドライバーを巻いた桜坂碧映さんだった。

陽哉「セイバー：クリムゾン」「オーズドライバー……………って、ことは！」

碧映「やっと決心がついたよ。……大事な妹の為にも、大切な仲間達の為にも、僕は戦う！兄として……仮面ライダーとして！……変身っ！」

第13話 桜坂邸の攻防。碧映の決意としずくの叱咤 後編

碧映「やっと決心がついたよ。……大事な妹の為にも、大切な仲間達の為にも、僕は戦う！兄として……仮面ライダーとして！……変身っ！」

『タカー！トラ！バッター！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！』

碧映さんは、オーズドライバーにメダルを嵌めながら、俺の方へと近づき、オーズキャナーという装置をベルトに滑らせ、装填された3枚のメダルをスキャンすると、碧映さんの身体をオーラが包み、碧映さんは仮面ライダーオーズに変身した。

碧映「オーズ」……はっ！」

陽哉「セイバー：クリムゾン」碧映さん……いや、オーズ！また、俺達と戦って

くれるのか？」

碧映「オーズ」「うん．．．ごめんね、迷惑かけて．．．これから、一緒に戦おう！」

陽哉「セイバー：クリムゾン」「迷惑だなんてそんな．．．でも嬉しいよ！また一緒に戦えて！」

俺がオーズの復活に喜んでいるのも束の間．．．何者かが、俺達の前に降って来た。

??? 「やっと現れたね！．．．オーズ！」

碧映「オーズ」「お前は．．．カザリ!？」

そこにいたのは、かつてオーズが倒したグリードの一体．．．カザリだった。

碧映「オーズ」「まさか、お前も．．．!？」

カザリ「うん、彼の力で復活したよ？……と言っても、僕は他の怪人の力を掛け合わされた訳ではないけどね？」

陽哉「セイバー：クリムゾン」「どういう……ことだ？」

カザリ「簡単な話さ！僕は他の怪人の力を掛け合わせる必要が無いほど、強いってこと！」

碧映「オーズ」「どうして……」

カザリ「どうして？そんなの決まってるだろう？……オーズ！お前を倒す為だ！お前とアंकがいないければ……僕の思い通りに全て上手くいったのに！」

復活したカザリは、オーズに向けて激しい怒りをぶつける。そんなカザリを前に、オーズは一步前に出てる。

碧映「オーズ」「セイバー……カザリは僕に任せて、君はダイヴェンジャーの方を頼む！」

陽哉「セイバー・クリムゾン」「任せて大丈夫か？一緒に戦った方がいいんじゃない？」

碧映「オーズ」「あいつの狙いは僕だ……なら、君は他を相手にして、被害を最小にした方がいい。」

陽哉「セイバー・クリムゾン」「……わかった、すぐに倒して加勢するから」

オーズの提案に乗り、俺はカザリの後ろにいるゴーレロスに視線を向ける。

カザリ「話し合いは終わった？じゃあ……行くよ!!!」

碧映「オーズ」「行くよ、セイバー！」

陽哉「セイバー・クリムゾン」「……ああ！」

そして俺達は、互いの敵に向かっていく。

陽哉「セイバー：クリムゾン」「……………はあっ！」

ゴーレロス「……………！」

陽哉「セイバー：クリムゾン」「……………く、やっぱり決定打にならない……………一体どうしたら……………」

どんなに斬っても、ゴーレロスに対して決定打にならず、悩んでいると……………上の方で俺を呼ぶ声が聞こえた。

歩夢「陽君！」

侑「陽！」

陽哉「セイバー：クリムゾン」「……歩夢、侑!?ちゃんと隠れてなきやダメだろ!」

侑「いいから……」

歩夢「これ、使つて!」

しずくちゃんの部屋の窓から顔を出した歩夢と侑は、俺に向けてあるワンダーライドブックを投げてきた。俺はそれを何とか受け取り表紙を見ると驚愕する。歩夢と侑が俺に渡したライドブック、それは……

陽哉「セイバー：クリムゾン」「……これ、キングオブアーサー!?何でこれ!」

それは、スカイブルーのライドブック「キングオブアーサー」。俺の持つライドブックの中でも、かなりの攻撃力を誇る本ではあるものの、今の俺に扱えるかどうかかわからない。……すると、俺の問いかけに歩夢と侑が答えた。

侑「それ、前に陽がかなり強いって言ってた本でしょ?」

歩夢「だから、それを使って勝ってほしいの！」

そう、俺は仮面ライダーセイバーの記憶を取り戻してから、自分が戦闘の時に持てない分のライドブックを歩夢と侑の2人に預けていた。そして、預ける際にある程度の説明はしていた、が……

陽哉「セイバー；クリムゾン」「……今の俺に、使えるのか？……いや、折角歩夢と侑が俺を信じて渡してくれたんだ。なら、俺もあの2人を信じなきゃダメだよな！」

俺は最初こそ不安な気持ちに駆られたが、この本を渡してくれた2人のことを思い、信じることで、キングオブアースアのライドブックを開く決意をする。

決意を固めた俺は、ソードライダーからストームイーグルと西遊ジャーニーを外し、歩夢と侑を守りたいという気持ちを胸に、一度火炎剣烈火を納刀し、キングオブアースアライドブックを開く。

陽哉「セイバー」……伝説の騎士王に振るわれし剣よ！頼む、もう一度俺に力を貸してくれ!!!」

『キングオブアーサー!』

『とある騎士王が振り下ろす、勸善懲悪の一太刀……』

キングオブアーサーライドブックの表紙を開いた俺は、一度ページを閉じソードライバーの物語枠に収めると、一気に火炎剣烈火を抜刀した。

『烈火抜刀！二冊の本を重ねし時、聖なる剣に力が宿る!』

『ワンダーライダー!』

『ドラゴン！アーサー王！二つの属性を備えし刃が、研ぎ澄まされる!』

火炎剣烈火を抜刀した俺の左手に聖剣に匹敵するほどの力を秘める大剣 “キングエ

クスカリバー”を握り、火炎剣烈火との二刀流になり、左肩にキングエクスカリバーの顔が、左腰にローブでは無く剣の刃の様な物”マグネイトエッジ”が出現した。

陽哉「セイバー：ドラゴンアーサー」……………これで、決める！」

俺は左手に持つキングエクスカリバーのトリガーを5回引くと、空中にある巨大なキングエクスカリバーの斬撃をゴーレロスに叩き落とした。

『キングスラッシュー!』

陽哉「セイバー：ドラゴンアーサー」「はあああああああああ!!!」

ゴーレロス「……………!!!
!?!?!?!?!」

そして俺は力いっぱい巨大なキングエクスカリバーを振り下ろし、その威力に耐えていたゴーレロスは、ついに耐え切れずキングエクスカリバーに斬られ爆散した。

陽哉「セイバー：ドラゴンアーサー」「…………ふう。やっと倒せた…………。後は空か…………よし！」

俺は空に目をやった後、カザリと戦っているオーズの方をちらつと見て、心の中で（そつちは任せた…………！）とつぶやくと、もう一度空に目をやりキングエクスカリバーにキングオブアーサーライドブックをリードし、空の巨大なキングエクスカリバーを人型ロボットに変形させる。

『キングオブアーサー！ からの、剣が変形！ 巨大な剣士が目を覚ます！ キングオブアーサー！』

キングエクスカリバー「……………！」

人型ロボットに変形したキングエクスカリバーは…………ガシツと俺を掴む。その瞬間、左腰のマグネイトエッジが頭部に移動し、俺は一本の剣へと変形した。

陽哉「セイバー：ドラゴンアーサー」「あ、うん、この感じ…………久しぶりだけどおおお

！」

キングエクスカリバー「……………!!!」

陽哉「セイバー：セーバーセイバーモード」……………あ、よし。……………行くぞ！」

そして俺はキングエクスカリバーと共に、飛び立ち空の怪人達に斬撃を与えていく。

『キングスラッシュユ！キングスラッシュユ！キングスラッシュユ！……………』

陽哉「セイバー：セーバーセイバーモード」……………まだまだあ！」

——雷羽視点——

空から落とされた俺は、鎧武と合流し、俺を追ってきたカマキリベローサとビヤッコリザードと対峙していた。

雷羽「ゼロワン：ファルコン」「おらあ！」

カマキリベローサ「……………」

雷羽「ゼロワン：ファルコン」「…………くうく、硬つてえ〜！」

絃輝「鎧武」「…………ゼロワン！セイバーが戦つてる方見てみる！」

雷羽「ゼロワン：ファルコン」「…………ん？」

戦いの最中、鎧武に言われた通りセイバーが戦っている桜坂邸の玄関扉前を見ている…………すると、そこにはオーズドライバーを腰に巻いた桜坂碧映がいて、そのままオーズに変身した。

雷羽「ゼロワン：ファルコン」「おお!?オーズだ！」

紘輝「鎧武」「よっしゃ！これで仮面ライダーが全員揃ったな！」

雷羽「ゼロワン：ファルコン」「ああ！テンション上がって来たー！来い！ブレイキングマンモス！」

オーズが復活してテンションの上があった俺は、ブレイキングマンモスプログライーズキーを腰のホルダーから取り出し起動させる。

『プレス！オーソライズ』

起動させたブレイキングマンモスプログライーズキーをベルトに読み込ませると、ジェットフォーム形態のブレイキングマンモスが俺の頭上に現れた。

雷羽「ゼロワン：ファルコン」「お！来たな！・・・それじゃ！」

『プログライーズ！』

『Giant Waking! ブレイキングマンモス!』

『Larger than life to crush like a machine.』

俺はそのままキーをベルトに挿し込み、ブレイキングマンモスの機内に搭乗する。それを見た鎧武が、スイカロックシードを取り出し、開錠させると現れた巨大なスイカの中に入った。

紘輝「鎧武」「おおー! いつ見てもデカいなあー! . . . なら俺も行くぜ!」

『スイカ! ロックオン!』

『ソイヤ! スイカアームズ! 大玉ビックバン!』

紘輝「鎧武: スイカ」「行くぜ!ゼロワン!」

雷羽「ゼロワン：ブレイキングマンモス（以下、マンモス）」「おっけー！」

そして、俺はジェットフォームのまま、鎧武はスイカアームズをジャイロモードに変形させてまずは空の敵を殲滅に向かった。

雷羽「ゼロワン：マンモス」「おりゃー！！！！」

絃輝「鎧武：スイカ」「くらえー！！！！」

空に飛んだ俺達は敵に突っ込んだり、マシンガンをぶっ放したりしてその数を減らしていった。あらかた片付け終えたところで、鎧武が俺に提案してきた。

雷羽「ゼロワン：マンモス」「よし、あらかた片付いたかな・・・」

絃輝「鎧武：スイカ」「なあゼロワン！地上の奴らを一扫する為にこのままコンビネーション必殺技やってみねえか？」

雷羽「ゼロワン：マンモス」「コンビネーション必殺技……それ乗った！」

鎧武の提案に乗った俺は、ブレイキングマンモスをジェットフォームから人型ロボに変形させ一度地上に降りる。一方鎧武はその間に、ジャイロモードから大玉モードに変形し準備に入る。

俺は鎧武が大玉モードに変形させるのに合わせ飛び上がると、オーバーヘッドキックの構えに入る。

雷羽「ゼロワン：マンモス」「うおおおお！必殺っ！」

紘輝「鎧武：スイカ」「ボールは友達！」

雷羽「ゼロワン：マンモス」「オーバーヘッドキック……！！！」

俺がかなりの威力で蹴ったスイカアームズ大玉モードは、音速を超えた様に超加速して地面に落ち、地上にいるカマキリペローサやビャッコリザードを含めた怪人達をまとめて一掃することに成功した。

紘輝「鎧武：スイカ」「ぐぎやああああ!?目が回るうううう………!?!?!?」

カマキリベローサ「……………!?!?!?」

ビヤツコリザード「……………!?!?!?」

地上に着地し、ブレイキングマンモスから降りた俺は、ふらふらと目を回しながらスイカアームズから出て来た鎧武とハイタッチを交わす。

雷羽「ゼロワン：マンモス」「やったな！鎧武！」

紘輝「鎧武：スイカ」「お、おう……おえつ。」

勇真「ゴースト：ビリー」「くっ……。あなたとは、こんな形で再会したくはなかったですね……」

ホース刀「……」

勇真「ゴースト：ビリー」「反応無し、ですか……。やっぱり、意思が無くなってるんですね……」

ホース刀から意思が剥奪されていることに少しの寂しさを覚えつつ、対抗策を考えていると……。フォーゼさんがデストオリオンに飛ばされてきた。

天弥「フォーゼ」「おわあああつ……。!?」

勇真「ゴースト：ビリー」「え、ちよっ！フォーゼさん!?……。あぐっ！」

天弥「フォーゼ」「わりい……。あいつ、強すぎる……。!」

デストオリオン「……………」

勇真「ゴースト：ビリー」「この状況をどうにか打開しなくちゃ……………」

今この状況を変える為、僕が悩んでいると……………桜坂邸の方から黄色い眼魂が飛んできた。

勇真「ゴースト：ビリー」「……………うわっ!?こ、これ……………エジソン眼魂!……………エジソンさん!お力、お借りします!」

僕の元に飛んできたエジソン眼魂のスイッチを押し、ベルトに装填した後レバーを引いてビリー・ザ・キッド魂からエジソン魂にチェンジする。

『アーイ!バッチリミナー!バッチリミナー!』

『カイガン!エジソン!エレキ!ヒラメキ!発明王!』

勇真「ゴースト：エジソン」「打開策を閃くには……フォーゼさん！」

天弥「フォーゼ」「……お？なんだゴースト！」

勇真「ゴースト：エジソン」「エレキステイツになっただけませんか！」

天弥「フォーゼ」「エレキステイツ？……ふ、は！……なんで？」

勇真「ゴースト：エジソン」「エジソン魂で閃くには、電撃の力が必要なんです！だから！」

僕は打開策を閃く為にフォーゼさんにエレキステイツになってもらおうと思いついたけど、帰って来た答えは……

天弥「フォーゼ」「……わりい！それ、無理！」

勇真「ゴースト：エジソン」「え、ええ!? どうして!？」

太陽「ワイザード」「……それは俺から説明するよ」

フォーゼさんからの予想外の答えに驚いていると、近くで戦っていたワイザードさんが代わりに答えてくれた。

勇真「ゴースト：エジソン」「ワイザードさん! ……えっと、フォーゼさんがエレキになれない理由って……?」

太陽「ワイザード」「……宮下さんが雷嫌いなんだよ。だからフォーゼはエレキステイツにはなれない」

天弥「フォーゼ」「ま、まあ……そういうことだ」

勇真「ゴースト：エジソン」「そ、そんな……」

僕がウィザードさんからフォーゼさんがエレキステイツになれない理由を聞き肩を落としていると、ウィザードさんが励ましてくれた。

太陽「ウィザード」「ま、俺にいい方法があるから任せて！」

勇真「ゴースト：エジソン」「いい方法って……？」

太陽「ウィザード」「……じゃ、行つて来る！」

『テレポート、プリーズ』

そして、僕の言葉に答えること無くベルトにリングをかざしたウィザードさんは、魔方阵の中へと消えていった。

勇真「ゴースト：エジソン」「あ……行っちゃった。」

——せつ菜視点——

しずくさんのお兄さん、桜坂碧映さんが仮面ライダーに変身した後にしずくさんが戻って来て皆で仮面ライダーの皆さんの戦いを見守っていると、突如この部屋に赤い魔方陣が出現し、その中から太陽君が出て来た。

太陽「ウイザード」「……よつとー！」

せつ菜「た、太陽君!?! どうしてここに!?!」

太陽「ウイザード」「やあ菜々! ちょっと用事があつてさ……」

そう言うと、太陽君はきよろきよろと辺りを見回し……愛さんを視界に捉えると愛さんの方へと歩いて行った。

太陽「ウイザード」「あ、いたいた! 宮下さん、ちょっとこのリングを嵌めてくれるか

な？」

愛 「これつけばいいの? . . . ほしい! これでもいい?」

太陽 「ウイザード」 「うん、ありがとう! . . . それから、ごめんね」

愛 「.へ?」

そう言うと、愛さんの指に嵌めたリングをベルトにかざす。すると. . . .

『スリープ、プリーズ』

愛 「え、スリープ. . . . て. . . . Z z z」

リングの魔法を受けた愛さんは徐々に目が据わっていき、ついには寝てしまった。

せつ菜 「え!? ど、どうして愛さんを眠らせちゃったんですか!?!」

太陽「ウイザード」「フォーゼのエレキステイツが必要なんだ……だから悪いけど、フォーゼがエレキステイツを使っている間はこのリングを外さないでくれる？」

せつ菜「な、なるほど……わかりました」

太陽「ウイザード」「それじゃ、よろしく！」

そして太陽君はまた魔方陣を出現させ、その中へと消えて行った。

——勇真視点——

ウイザードさんが魔方陣の中へ消えて少し経ち、僕とフォーゼさんで戦いを継続していると、また魔方陣が出現しその中からウイザードさんが出て来た。

太陽「ウイザード」「……ただいま！」

勇真「ゴースト：エジソン」「おかえりなさい！どこに行ってたんですか？」

太陽「ウイザード」「ちよつと菜々達のところにね……それよりも、フォーゼ！エ
レキステイツになってくれ！」

天弥「フォーゼ」「はあ!?愛が見てんだから無理だつて！」

太陽「ウイザード」「そこは大丈夫！宮下さんはスリープリングで眠らせてあるから、
今ならエレキステイツになって問題ない！」

ウイザードさんのその言葉に僕は（なるほど、それでさつき同好会の皆さんのところ
に行ってたのか……）と納得し、フォーゼさんはウイザードさんの言葉を聞いてエ
レキスイッチを取り出した。

天弥「フォーゼ」「……まあ、そういうことなら遠慮なく行くぜ！サンキューウイ

ザード！」

『エレキ』

『エ・レ・キ、オン』

天弥「フォーゼ：エレキ」「しゃ！行くぜえ！」

エレキステイツにフォームチェンジをしたフォーゼさんがそのままダイヴエンジャー達に向かって走って行こうと……したところで脚を止め、くるりと僕の方へ振り返った。

天弥「フォーゼ：エレキ」「……ところで、何で俺をエレキステイツにフォームチェンジさせたんだ？」

勇真「ゴースト：エジソン」「あ、えつと……電撃を僕にお願いします！」

天弥「フォーゼ：エレキ」「おつけー！そんなじゃ行くぜえ！．．．大サービス100億ボルトを受け取れー！！！」

僕からのお願いを聞いたフォーゼさんはピリッザロッドに電撃を纏わせ、それを一気に僕に向けて放った。

その電撃をパーカー頭部のアンテナで受けた僕は、マスクの電球が光つたと同時に敵を一掃するある方法をひらめく。

勇真「ゴースト：エジソン」「．．．ピカッと閃いた！これならいけます！．．．ウイザードさん！ちよつといいですか！」

太陽「ウイザード」「ふ、はあっ！．．．なに？」

勇真「ゴースト：エジソン」「僕が今からエレキボールを上空に撃つので、僕が合図したらそれを撃ち抜いていただけませんか？」

太陽「ウイザード」「は？．．．ええ！」

僕の提案に驚いたワイザードさんだったが、すぐに僕の意を汲んでくれた。

太陽「ワイザード」「な、なんだかよくわからないけど……わかった!」

勇真「ゴースト：エジソン」「ありがとうございます……では、行きます!」

『ダイカイガン！オメガシユート!』

ガンモード形態のガンガンセイバーをベルトとアイコンタクトさせ、ガンガンセイバーの銃口に強大な電気の弾丸を形成し、それを上空に打ち上げた。

そして、僕が放ったエレキボールが上空に到達したところで、僕はワイザードさんに合図を出す。

勇真「ゴースト：エジソン」「……ワイザードさん!今です!」

太陽「ワイザード」「……了解!」

『キャモナ・シユータイング・シエイクハンズ』

『フレイム！シユータイングストライク！ヒー！ヒー！ヒー！』

太陽「ウイザード」「……はあっ！」

僕の合図と共に、ウイザードさんがウイザーソードガンの“ハンドオーサー”という手型を起動させ、左手の変身リングを翳し必殺技の態勢に入る。上空のエレキボールに狙いを定めたウイザードさんは、そのまま炎を帯びた弾丸を撃ち、見事エレキボールに命中させてみせた。

すると、エレキボールが弾け電流を帯びた炎がまるで雨の様に無数に地面へと落下していき、大量にいた地上の敵を一掃、ディヴェンジャーに深手を負わせることが出来た。

太陽「ウイザード」「お、おお……！これは凄い……！」

勇真「ゴースト：エジソン」「……よし！計算通りです！」

天弥「フォーゼ：エレキ」「……名付けて、雷炎（らいえん）雨（う）だな！」

フォーゼさんが何か言っていたけど、僕もウィザードさんも敢えて何も返さなかった。そして僕たちは、先程の攻撃で膝をついているデイヴエンジャー達に向き直り、とどめの必殺技の態勢に入る。

太陽「ウィザード」「それじゃあ……最後の仕上げと行きますか！」

勇真「ゴースト：エジソン」「はい！」

天弥「フォーゼ：エレキ」「おう！」

『キャモナ・スラッシュ・シエイクハンズ』

『ダイカイガン！ガンガンミナー！ガンガンミナー！』

『リミットブレイク』

ウイザードさんはウイザーソードガンをソードモードに変形させ、先程と同じ様にハンドオーサーにリングを翳し、フォーゼさんはエレキスイッチをビリーザロッドにセットさせ、僕は先ほどと同じ様にベルトにアイコンタクトさせデイヴエンジャーに向ける。

『フレイム！スラッシュユストライク！ヒー！ヒー！ヒー！』

太陽「ウイザード」「はあっ!!!」

『オメガシュート!』

勇真「ゴースト：エジソン」「やあっ!」

天弥「フォーゼ：エレキ」「ライダー100億ボルトシュート!!!」

ヘルマグマ「……………!？」

ホース刀「……………!?!？」

デストオリオン「……………!?!?!？」

それぞれに必殺技を放った僕達は、何とか復活したダイヴエンジャー達を倒すことが出来た。

太陽「ウィザード」「……………ふい。何とかこっちは終わったな」

勇真「ゴースト：エジソン」「……………はい！」

天弥「フォーゼ：エレキ」「あゝ、そろそろエレキから戻つとかねえとな。ウィザード！愛のことまた頼めるか？」

太陽「ウィザード」「それなら大丈夫、菜々にフォーゼがエレキステイツを使っている

間はリング外すなって言ってるから、このままフォーゼがベースステイツに戻れば菜々がリングを外してくれるはずだから」

天弥「フォーゼ：エレキ」「おお、そかそか！……んじや、戻るか」

天弥「フォーゼ」「……あー、久々のエレキステイツでがつつり戦うの気持ちよかったです……！」

—— 龍兔視点 ——

龍兔「ビルド：キリンサイクロン」「……へえ、コンビネーション必殺技ね。俺達もやってみる？」

走介「ドライブ」「そうだな。そろそろこいつらと戦うのも飽きてきた。」

ソルディアン「……………」

アイフアント「……………」

俺の提案を受けたドライブは、黄緑色のシフトカー“シフトテクニック”を取り出しそれをシフトプレスに装填させると、赤いボディから黄緑色の作業車を模したボディへと変わる。

ベルトさん『ド、ラーイブ！タイプ・テクニック！』

走介「ドライブ：タイプテクニック（以下、テクニック）」「さらにこいつだ！」

そう言うと、今度は紫のクリアボディの“シフトミッドナイト”を装填し、手裏剣型の紫のタイヤへと、タイヤコウカンする。

ベルトさん『タイヤ、コウカン！ミッドナイト、シャドウ！』

走介「ドライブ・テクニクシャドー」「クールに、的確に、お前が望む通りに援護してやるよ」

龍兎「ビルド：キリンサイクロン」「それはありがたい……なら俺も、さあ！実験を始めようか！」

そして俺は、紫色のボトルと黄色のボトルを振り、ベルトに装填させレバーを回す。俺の前と後ろに現れた紫のハーフボディと黄のハーフボディが重なり合い、俺はニンニンコミックフォームにフォームチェンジを果たす。

龍兎「ビルド：ニンニンコミックフォーム（以下、ニンコミ）」「それじゃあ……任せろドライブ！」

走介「ドライブ：テクニクシャドー」「ああ、任せろ！」

デイヴェンジャー達に向かって走り出した俺に合わせてエネルギー体の手裏剣を4

つ出現させ、ドライブは俺に並走させる形それを放つ。

そして俺は4コマ忍法刀のトリガーを1回引き、分身の術を発動させると、並走しているエネルギー体の手裏剣に乗り、一気にデイヴェンジャー達との距離を詰める。

『分身の術！』

龍兎「ビルド；ニンコミ」「はっ！．．．行くぞ！」

龍兎「ビルド：分身体」「ああ！」「」

走介「ドライブ：テクニクシャドー」「行け！ビルド！」

龍兎「ビルド：ニンコミ」「はあああああ．．．！これが俺達の必殺技！忍牙風雲斬（にんがふうんざん）！！！」

デイヴェンジャーの周りを、俺と俺の分身の3人が竜巻の様に回転しながら無数に斬撃を与えていき、最後に一斉に飛び上がり俺1人に戻ると、4コマ忍法刀に4つの手裏

— 碧映視点 —

仮面ライダーオーズとしてももう一度戦うことを決めた僕は今、あつちの世界からの因縁であるカザリと対峙していた。

碧映「オーズ」「はあーふ、やあつー！」

カザリ「あつはは！甘い甘い！……ん？」

が、他の場所で仮面ライダーの皆が他のデイヴエンジャーや怪人達を倒しているのを見て、カザリは戦闘態勢を解いた。

カザリ「……なくんだ、他の奴らは皆やられちゃったのか。」

碧映「オーズ」「カザリ！後はお前だけだ！」

カザリ「うくん、流石に分が悪いかな。．．．それじゃ、今回は君達の勝ちつてことにしといてあげるよ」

そう言つてカザリはこの場を去ろうとするが、流石に逃がすわけにはいけないので、僕はベルトのメダルをオースキャナーでスキャンし、必殺技の態勢に入る。

碧映「オーズ」「待て、カザリ！」

『スキャンニングチャージ！』

碧映「オーズ」「はああああ．．．ていやあああああ！！！！」

カザリ「おっと、まだ僕は死ぬわけにはいかないんだよ．．．ね！」

僕がカザリに向けてタトバキックを放つと、なんとカザリは近くにいた怪人達を盾にして僕の攻撃を回避してみせた。

屑ヤミー「ウウゝゝ．．．!?」

グル「グオオオ．．．!?」

オーズ「くっ．．．。仲間を盾にするなんて．．．」

そして、爆風が晴れた時．．．そこにはもう、カザリの姿は無かった。

碧映「オーズ」「．．．いない。逃げられたか．．．」

カザリを逃がしてしまったことに悔しきを感じていると、セイバー達が駆け寄ってきた。

陽哉「セイバー」「オーズ！カザリは．．．?」

碧映「オーズ」「ごめん、逃げられた．．．」

雷羽「ゼロワン」「マジカー……!」

天弥「フォーゼ」「ま、いいじゃねえか!こうしてオーズが戻って来てくれたんだし!」

絃輝「鎧武」「それもそうだな!」

僕達がこんな風に話していると、しずくとお友達の皆が駆け寄って来て……しずくがその勢いのまま僕に抱き着いてきた。

しずく「……お兄様!」

碧映「オーズ」「おっとつとー……しずく、急にどうしたの?」

しずく「あ、いえ……つい／＼／＼／」

かすみ「あゝ!しず子、顔赤くなってるゝ!」

しづく「も、もう！かすみさん！」

碧映「オーズ」「あつはは！」

正直、カザリが次に何を仕掛けてくるかわからない。だけど僕は、今僕の腕の中にいるしずくと、頼りになる仲間達がいれば・・・どんなことだろうと抗い、戦い抜いて見せる。そう、僕は心に誓うのだった。

第14話 語られること。

—— 侑視点 ——

侑「いや、それにしても仮面ライダーが9人も揃うと、何かこう……壮観だね!」

陽哉「あはは、何か照れくさいな……」

碧映「だね……えっと、改めて仮面ライダーオーズこと桜坂碧映です! しづく共々よろしくね! 同好会の皆さん!」

彼方「しづくちゃんのお兄さん、何だか明るくなつたねえ」

かすみ「あれが本来の碧映お兄さんですよ」

今日は陽達仮面ライダー最後の1人、仮面ライダーオースこと桜坂碧映さんが正式に仲間入りしたことで、お祝いをしようということになり今現在、同好会の部室でお菓子パーティーが開かれていた。

そんな中、果林さんが陽達仮面ライダーへ向けこんな疑問を放ってきた。

果林「……ところで、ずっと気になっていたのだけれど」

勇真「どうしたの？果林姉え？」

果林「いや、改めて思ったんだけど……貴方達って、何なの？」

そして果林さんのこの発言で、部室内の空気が一気に変わる。

せつ菜「何なのって果林さん……太陽君達は仮面ライダーですよ？」

果林「そうじゃないわよ。」

侑「じゃあ、どうということなんですか？」

果林「ずっと不思議に思ってたの……貴方達仮面ライダーは、私達の前で初めて変身した時『全て思い出した』とかそれに関連することを言っていたわよね？それって仮面ライダーであつたことを忘れていたってことよね？……でも、勇真とは小さい頃からずっと近くにいるけど、勇真が私の前で変身したことなんて無いわよ？」

しずく「言われてみれば、そうですね……私もお兄様がオーズに変身したところを見たことがあります……」

エマ「私は紘君とは高校生になってから知り合ったけど、確かに紘君が変身してるところを見たこと無いかも……」

彼方「……彼方ちゃんも、そーくんが変身したところ今まで見たこと無いかもお」

果林さんの言葉を聞いて、同好会の皆は次々に思い返したことを話していく。いつし

か私達の視線は陽達に向けられ、仮面ライダーの皆は困った様に顔を見合わせている。そして、ついに陽が意を決した様に口を開く。

果林「教えてくれるかしら？ 貴方達は何者？ デイヴエンジャーって何？ どうして急に現れたの？」

陽哉「……そう、ですね。話しましょう、俺達のこと。」

雷羽「おい、セイバー……」

陽哉「同好会の皆にはいつも助けてもらってる。ずっと黙ってる訳にもいかないだろう？」

雷羽「そうだけどさ……」

陽哉「……大丈夫。」

雷羽君が何か言いかけたのを止め、陽は話を続けていく……。

陽哉「まず、結論から言うと……俺達仮面ライダーと、そしてデイクヴェンジャーは……この世界の者ではありません。」

歩夢「え、それってどういうこと……？」

侑「全然話が見えないんだけど……」

陽哉「えっと……皆がいるこの世界とは別に、複数の世界があつて、俺達はその中の1つにいたんだ。」

せつ菜「それはつまり、パラレルワールドの様なもの……ということでしょうか？」

陽哉「ああうん、そんな感じ！」

かすみ「……………ぜんっぜんわからないんですけど……………」

果林「同じく……………」

陽の話にかすみちゃんと果林さんが頭に？マークを浮かべていると、龍兎君が陽の代わりに前へ出て来た。

龍兎「じゃあ、ここからは俺が。……璃奈、璃奈ちゃんボードに使ってるスケッチブックの白紙のページ一枚貰っていい？」

璃奈「うん。……はい、どうぞ。」

龍兎「ありがと！……………さて」

璃奈ちゃんからスケッチブックの白紙のページを一枚受け取った龍兎君は、それを横向きにし真ん中に縦線を一本入れ、その縦線を挟んで右と左に1つずつ○を書く、左にA右にBと書いて私達に見えやすい様にその紙を向けて私達が質問したらその都

度答えるといった感じで説明を始めてくれた。

龍兎「まずは、今俺達がいるこの世界……つまり、貴女達の世界をA、俺達が元々いた世界をBとします。この2つに限らず、世界とは1つだけではなく複数存在します。」

かすみ「この真ん中の縦線は何？」

龍兎「これは空間の壁。これがあるから、世界と世界は繋がることは無く、それぞれ独立した別々の空間となってる。」

エマ「空間の……壁？」

龍兎「空間の壁は、世界と世界を隔てる神秘の壁。何人もこの壁を破壊することは出来ません。例えば、俺達仮面ライダーやデイヴエンジャーであつても……。」

歩夢「……じゃあ、その空間の壁が無くなると、どうなるの？」

龍兎「……この空間の壁が無くなると、世界と世界は融合し、互いを異物と判断した世界同士は……消滅します。」

せつ菜「消滅……それをさせない為に、守護を？」

龍兎「ええ、ここにいる俺達と、俺達以外の仲間の仮面ライダー達で空間の壁を守っていたんです」

かすみ「えっ!?仮面ライダーって雷羽達以外にもいたの!？」

雷羽「ああ、いた。それも数え切れないほどに……」

エマ「じゃあ、その人達ももしかしたらこっちの世界にいるの？」

鉦輝「いいや、いねえ。俺達以外……死んじまったからな……」

侑「死んだって……な、何があつたの……?」

私は震える声で陽に聞く。すると、陽を初め仮面ライダーの皆が下唇を噛み、悔しそうな表情になる。……そして、陽が静かに語り出す。

陽哉「……あれは、俺達がいつも通り空間の壁を守っている時のことだった……。ある日、ゼウーデスって奴が大量のデイヴェンジャーを連れて攻めてきたんだ。」

歩夢「ゼウー……デス?」

陽哉「ゼウーデスってのは俺達が今まで倒してきた怪人達の怨念の集合体で、厄介な力を持った奴なんだ」

しずく「厄介な力……ですか?」

陽哉「俺達が倒した怪人の魂を蘇らせる力……しかも、他の怪人の魂と融合させて蘇らせることも出来るんだ」

歩夢「それって……！」

陽哉「……そう、皆もよく知るデイヴエンジャーはこのゼウーデスって奴が作り出していたんだ。」

果林「前に言ってたとある奴ってというのがそのゼウーデスなのね？」

陽哉「ええ。……それから俺達仮面ライダーとゼウーデス率いるデイヴエンジャーの軍勢とで大規模な戦いが繰り広げられました。……俺達は必至に戦いましたが、1人、また1人と仲間が倒れていき……最後にはここにいる俺達9人だけが残りました。」

しずく「……お兄様が前に言っていたのは、このことだったんですね……」

碧映「……うん。」

陽哉「俺達9人は、後1歩のところまでゼウーデスを追い詰めることが出来ただけ
ど………」

雷羽「……………奴は、最後に悪あがきをしてきたんだ。」

かすみ「悪あがきって……………」

陽哉「奴は俺達にやられる直前に空間の壁に穴を開けたんだ。」

彼方「ちよつと待って〜？空間の壁って、破壊とは出来ないんじゃないか？」

走介「普段はな……………だが、空間の壁を破壊……………もしくは穴を開ける方法が1つ
だけある」

せつ菜「その方法とは……………」

太陽「……………その世界の『鍵』となる者を消すんだ。」

太陽君のその言葉に、私達同好会メンバーは戦慄する……。

愛「消すつて……まさか、殺すつてこと？」

天弥「ああ……まあ、そう……だな。」

璃奈「……その鍵つて何なの？」

龍兎「鍵は空間の壁を維持する為のその世界の象徴となる存在のこと。そして、世界によつて人数が違い、1人のところもあれば20人以上なんてのもある。」

果林「じゃあもしかして、貴方達の世界の鍵つて……」

勇真「……僕達、仮面ライダーだよ。」

陽哉「俺達仮面ライダーの数が減ったから、俺達の世界の壁が維持できなくなり、そ

こをゼウーデスに突かれたんだ」

侑「じゃあ、陽達はそれでこっちの世界に？」

陽哉「ああ……と言つても、ただこっちに來れた訳じゃない。」

歩夢「……どう言うこと？」

陽哉「空間の壁が無くなると、世界が消滅するつて言つただろ？ あれは、空間の壁の中に『空間の狭間』という灰色の空間が原因なんだ。この空間の狭間には特殊な力があつて、1つは全ての物質を飲み込む強力な引力。そして2つ目はあらゆる存在を消滅させる力。……俺達はゼウーデスの攻撃でこの空間の狭間に飲み込まれ……肉体が消滅した。」

同好会メンバー「「「「「ええっ!? 肉体が消滅っ!?」」」」」」

歩夢「そ、それつて……陽君達も死んだつてこと？」

陽哉「うん、まあ……。」

侑「嘘……。」

かすみ「信じられません……。」

せつ菜「簡単には受け入れられることではありませんが……でも、それなら太陽君達はどうやってこちらの世界へ？陽哉さんの話では、空間の狭間というところはあらゆる存在を消滅させるほどの力があるのですよね？」

陽哉「……ちよつと、これを見てほしいんだけど……。」

そう言うのと陽を初め、仮面ライダーの全員が各々のバックの中から色んな形の……石？を取り出し、机の上に置いていく。

陽達が置いた石を私達が不思議そうに眺めていると、陽が説明してくれた。

かすみ「何ですかこの石？雷羽も皆さんも、こんな集める趣味があつたんですか？」

雷羽「いや、違いよ……」

歩夢「陽君が取り出した石、ライドブックに似てるけど……ちよつと分厚いのばかり……」

陽哉「これは、俺達仮面ライダーのパワーアップアイテムだ。」

侑「ていうことは、この4つの石もライドブックってこと？」

陽哉「ああ！」

果林「……眼魂にしては、これだけ大き過ぎないかしら？」

勇真「それはベルトとして使うんだよ、果林姉え！」

エマ「……でも、これと絃君達がこっちの世界に来た理由と、どう関係してるの？」

陽哉「このパワーアップアイテムの力を使って、魂だけはギリギリ守り抜き……この世界に流れ着きました。だけど、空間の狭間から抜け出す時の衝撃で記憶が飛んでしまったみたいで……」

せつ菜「……なるほど、つまり皆さんはこの世界に転生する際、記憶が飛んでしまい……再度仮面ライダーのアイテムを手にしたことで記憶が戻った……と、こういうことですか？」

陽哉「うん、まあ……そんな感じかな。」

侑「……」

知らなかった。まさか陽や仮面ライダーの皆にそんな過去があったなんて……。少し、ほんの少しだけ、陽のことを考えると不思議な気持ちになったのを実感した。けど、

私はこの気持ちは何なのか分からず、振り払う様にふと思ったことを口にする。

侑「そう言えば……その、陽達を空間の狭間に飛ばしたゼウーデスって奴はどうなったの？」

陽哉「うーん……デイベンジャーがこの世界に現れたから、奴もこつちの世界に来てるんだろうけど……どうやって来たのかまではわからないかな。」

雷羽「……案外、他の怪人達の魂を犠牲にしてこつちに来たのかもなあ。」

陽哉「あり得るかもな……。あ、兎に角！皆は俺達を守るから安心して！」

侑「頼りにしてるよー！陽！」

歩夢「でも、あまり無理しないでね……？」

陽哉「……ああ！」

こうして、仮面ライダーの皆の過去を聞いた私達は、少しだけ複雑な空気になっちゃったけど、その後はその空気をかき消す様に部屋でパーティーの続きをし、家に帰ったのは夜の7時をちよつと過ぎたくらいで……めちやくちや親に怒られた。

——陽哉視点——

歩夢と侑を家に送った後、仮面ライダーだけで再び集まっていた。

天弥「……っか、愛達にほんとのこと言わなくてよかったのかよー？」

龍兎「大体は本当のことだけど……まあ、あれ以上は璃奈達も混乱するでしょ。」

走介「……まあ、いずれは話さないといけないだろうけど、今はこれでいいのかな」

そう、俺達はまだ侑達に隠していることがある……それを侑達に話す時は、きつと……と、そこで話を変える為、俺はあることをビルドに尋ねる。

陽哉「……そういえばビルド、少し前から調べてたあれはわかったのか？」

龍兎「確信はまだ持てない……が、ほぼ確定だと思う。」

鉦輝「おいおい、何の話だよ？」

走介「俺も聞いてないな……」

勇真「僕にも教えてくださいよ！」

天弥「仲間外れは無しだぜ〜？」

碧映「ま、ライダーは助け合いでしょ？」

太陽「あ、そっか。鎧武達はまだ記憶を取り戻してない時だったっけ……。実は少し前からビルドに頼んできたことがあつてさ」

走介「頼んできたこと……？」

雷羽「この世界の象徴……。鍵についてだ。」

ゼロワンのその言葉に、オーズ・フォーゼ・鎧武・ドライブ・ゴーストの5人の空気が変わる。

絃輝「それか……」

勇真「それで、何かわかったんですか？」

龍兎「それを今から言うよ。……この世界の象徴は、スクールアイドルで間違いない。そして、その中でも鍵の可能性が最も高い存在、それは……恐らく、虹ヶ咲スクールアイドル同好会のメンバー全員だと思う。」

ビルドのその言葉に、俺達は驚ろきを隠せないでいる。それもそのはず、まさかこの世界の鍵の可能性があるのが、侑達全員だなんて。

走介「で、でも……まだ完全に決まった訳じゃないんだろ？」

龍兎「ああ、確定じゃない……けど、合ってると思う。」

太陽「そう思う根拠は？」

龍兎「皆も不思議に思ってただろ？ デイヴエンジャーが現れるところに、大体ニジガクのメンバーがいること。」

勇真「それは……確かに」

龍兎「鍵は悪を引き付ける……それに当てはめると、璃奈達が一番鍵の可能性が高い。」

雷羽「それはそうだけどさ……」

龍兎「……まあ、他の可能性もあるかもしれないし、もうちょっと調べてみるよ。」

ビルドの言葉を聞きながら、俺は疑問に思ったことを口にする。

陽哉「……もし、侑達が鍵だったとして……ゼウーデス側はそのことに気付いているのか？」

龍兎「……正直向こうもまだ気づいてないだろう……が、気づくのは時間の問題だろうな。」

俺はその言葉を聞き、ある決心をする。

陽哉「そつか・・・なら、絶対に侑達を守らないとな！」

陽哉以外の仮面ライダー「「「「「「「「「「・・・ああ（はい！）!!!!」「」「」「」」

こうして、俺達は決意を新たに、この先の戦いへの覚悟を決める。

カザリ「……………はあくあ。まさかあの軍勢で撤退に追い込まれるなんてねえ」

都内にあるとある豪邸で、僕が物思いにふけっていると……………僕の背後から誰かが近づくと足音が聞こえ、僕は背後に目をやることなく、その足音の主の声に声を掛けた。

カザリ「……………何の様？」

???「……………やあカザリ君、ご機嫌斜めだったかな？」

カザリ「別に。それより質問に答えなよ……………何の様？あいつ等なら心配しなくても僕が倒すよ。」

???「それは頼もしい限りだけど、次は彼に任せたくてね。」

足音の主の言葉に、僕が振り向くと……………そこには誰もおらず、代わりに足音の主の左手に小さな本が1冊、右手に濃い紫と濃い緑色をした禍々しい剣が握られていた。

カザリ「……………彼って、その本と剣のこと？」

???「ああそうさ。……………まあ、見ててくれ。」

そう言うと、足音の主の手から本が浮かび上がり、本から漏れ出た闇が人型に形成されていく……………その人型が完全に形を成すと、足音の主はその怪人に話しかけた。

???「……………なんだあ？ここは……………？俺はあの時本ごと消滅したはずだが？」

???「やあデザスト君。君の本は私の力で修復させたよ……………少し、パワーアップさせただけだね」

デザスト「……………ふん、で？俺がお前に協力するとかおもってんのか？」

???「この世界にいる仮面ライダーを倒してほしい……………それも9人だ。」

デザスト「ははっ！9人！そんなにいんのかよ！……………その中に炎の剣士はいるん

だろうな？」

??? 「もちろんさ……そこで、君にはパワーアップさせた君自身の本とこの剣を使つてほしい。」

そう言うと、足音の主は右手に持っていた禍々しい剣を差し出した。本から出現した怪人……デザストは、その剣を握ると、ニタツと笑った。

デザスト「……ははっ！こいつはマジかよ！何でこの剣がここにあるのか知らねえが……いいぜ、やってやるよ！」

??? 「よろしく頼むよ、デザスト君。」

僕は、2人の会話を聞きながら……また空に視線を移した。

動き出した悪編

第15話 雷羽教官による追試対策プログラム!

—— 侑視点 ——

ある日の日常、今日は特に部活は無い……んだけど、皆暇みたいで同好会のメンバーは皆部室にいて陽達仮面ライダーも、もう当たり前前の様に同好会の部室にいる。

陽哉「……今更なんだけど、俺達もうナチュラルにこの部室にいるけど問題無いんだらうか?」

絃輝「あゝ、それは確かに……」

碧映「……僕と鎧武に関しては大学生だし、変に思われてないかな……？」

陽達が本当に今更ながらの疑問を口にする。まあ、確かに今考えれば他校の陽達が頻繁にこの学校に出入りしているのはどうなんだろう……と、私がそんなことを考えていると、せつ菜ちゃんがこの疑問を解消してくれた。

せつ菜「それなら心配いりませんよ！先生方には他校の教育法を知る為に仲のいい皆さんを呼んでいるということになっていたので！」

走介「いや、それでいけたのか……大丈夫かこの先生達……」

太陽「まあ逆に、それだけ菜々への信頼が厚いつてことなんだろうけど……」

知らなかった！まさかそんな理由があったなんて！でも先生達、いくらこの学校の校

風が比較的自由だからってその理由でOKしないですよ……。まあ、そのおかげでこうして陽に会えてるんだけど……。と、私達がこんな会話をしていると、少し離れた所にいた一年生組の会話が聞こえてきた。

雷羽「そういえばこの間、期末テストがあつたんだって?皆どうだった?」

しずく「うーん、今回はちよつと順位が落ちちやつたくらいかな」

璃奈「私は絶好調だった。璃奈ちゃんボード【ブイツー!】」

雷羽「やつぱ流石だなー2人共!。。。で?かすみは?」

かすみ「わ、私も絶好調だったけど!それが何か!」

と言いつ切ったかすみちゃんだったけど、その発言を聞いた雷羽君の目から光が消

え．．．霧囲気が一変した。

雷羽「．．．へえ。なら数学の点数を言ってみろ。」

かすみ「．．．はっ!?こ、このモードは．．．」

雷羽「．．．正座あ
!!!!」

かすみ「ひや、ひやいいいい
!?!?!?」

霧囲気が変わった雷羽君の一喝に目にも止まらぬ速さで正座したかすみちゃん。それにしてはどうしちゃったんだろう雷羽君、何か怖い．．．。

雷羽君に正座させられ再度問われたかすみちゃんは、冷や汗を大量に掻き、目が泳ぎまくってくる。そして、かすみちゃんは震える唇でたつぷりと間を開けて答える。

雷羽「もう一度聞く……数学のてん・す・う・は?」

かすみ「……………は、82点。」

雷羽「しずく、璃奈!」

璃奈「22点…………」

しずく「…………です♪」

かすみ「りな子!しず子!裏切ったなあ!」

22点……何か前もこんな点数取ってた気がするなあかすみちゃん。ていうか、しずくちゃんは どうしてあんなにニコニコしてるんだろう?

しずくちゃんの謎の笑顔に少々恐怖を感じながら見ていると、次の雷羽君の言葉で、

かすみちゃんの顔は真っ青を通り越して真っ黒になり始める。

雷羽「随分盛ったなーかすみ？これは・・・あれやるしかないよな？」

かすみ「あ、あれえ!?い、嫌だ！絶対嫌あ！」

雷羽「お前の意見は聞かん！・・・今週の土日にやるぞ。」

かすみ「嫌だああああ!!!」

2人の会話を聞いて只事ではないと感じていた私だったけど、ふと3年生が座っているソファの方に目をやると、果林さんの手が小刻みに震えていた。すると、突然果林さんの隣に座っているエマさんが果林さんにとって最悪なことを口にする。

果林「……………!」

エマ「……………そういえば果林ちゃん、今回の期末で赤点が多かったって言ったの?」

果林「エ、エマ!?急に何を言い出すの!」

彼方「あゝ、彼方ちゃんも見たく!とんでもなかったよね。」

果林「か、彼方まで!?やめなさい貴女達!標的がこつちになったら……………!」

エマさんと彼方さんの言葉に、更にガタガタと震えだし、持っていたティーカップの中の紅茶が果林さんのスカートにこぼれている。あ、熱くないのかな……………

そんな果林さんを今までかすみちゃんにあれこれ言っていた雷羽君がぐりんと首を回し果林さんを睨む。

雷羽「へえ々？果林さん赤点だらけだったんですかあ々々？」

果林「ひいつ!?!?・・・ち、違うのよ！普段はそうでもないのだけれど、こ、今回は調子が悪かったっていうか・・・」

勇真「・・・あれ？でも果林姉え、小学生の頃から1桁台じゃなかったっけ？」

果林「・・・ゆ々々う々々ま々々々？」

勇真「ひ、ひいつ・・・!?!」

と、更に余計なことを口走った勇真君を般若の顔で睨みつける果林さん。・・・それにしては果林さんと勇真君、ビビった顔がまったく一緒だったなあ。流石幼馴染、尊いねえ。

そしてまた1人、犠牲になる者が・・・

愛「……この際だし、てんてんもらいらいに勉強教わつたら? いつも赤点ばかりだしさ!」

天弥「やめろ愛!今のゼロワンはやべえ!」

雷羽「お前もかフォーゼ!……3人共正座あ!!!」

かすかりてん「は、はいいいいい……!?!?!?」

雷羽「高校生にもなつて赤点ばかり……恥を知れこのバカ共!!!」

果林「な!?!私はバ、バカじゃ……」

雷羽「言い訳無用!……大丈夫、バカなあんだ達でも2日で学年1位を取れる様にしてやるよ……」

そう言う雷羽君の顔は・・・めちやくちや悪人な笑顔を浮かべている。雷羽君の言葉にビビりながらも若干疑問の顔をする果林さんと天弥君の2人に比べ、かすみちゃんの顔は絶望に彩られ、汗が滝の様に流れ水溜まりが出来初めていた。

かすみ「あわわわ・・・!!!」

雷羽「・・・・・・・・飛瀬雷羽考案！勉強苦手な君でもすぐに学年1位を取れる勉強合宿！開催だあああああ!!!」

かすみ「・・・・・・・・堪忍してええええええ!!!」

こうして、雷羽君主催の勉強合宿が始まるのであった・・・。あ、私は参加しないよ？

あれから2日経ち、今日は日曜日。私・歩夢・陽・愛ちゃん・しずくちゃん・エマさんの6人で雷羽君達がいるという無人島に来ていた。

侑 「いやー、着いたねー! 無人島!」

愛 「ていうか無人島まで持つてるとか、らいらいん家金持ちすぎっしょ!」

そう、私達がいるこの無人島は雷羽君のお家が所有する島。総額は聞いてないけど、多分億いってると思う。ちなみにこの無人島めちやくちや広くて、218, 260 m²・・・え〜つと、大体66, 023. 6坪くらいあるらしい。木々が島の大半を占めてて、船の発着場の近くに地上37階計190室のホテルが建ってるんだけど、周りの海がすつごく綺麗でもうときめいちゃってるんだー！いいなあ、かすみちゃん達・・・ここで勉強できるなんてサイッコーに捗るよね！

歩夢「かすみちゃん達、ここで勉強会してるんだよね？」

陽「そのはずだけど・・・凄い高いホテルだなあ。」

しずく「近くで見たら首が痛くなりそうですね・・・」

エマ「凄いねえ〜！果林ちゃん達、こんな大自然の中で勉強してるなんてすつごい捗りそう！」

侑「ね!ね!早く行こう!早く行こう!」

愛「こら、ゆうゆう!あんまりはしやぎ過ぎると迷子になるぞー!」

こうして私達はホテルに向かって歩き出した。ホテルの前まで着くと、タキシードを着た高齢のダンディーな男性が立っていた。

侑「うわー!近づくとさらにおつきいねー!」

歩夢「ほんとー!・・・って、あれ?誰か出入口の前に立ってる?」

愛「おおー!めっちゃダンディーなおじいちゃん!」

しずく「あのタキシードの着こなし・・・ただ者ではありませんね!」

男性は綺麗に私達にお辞儀をし、名前を名乗ってくれたんだけど……ぶふつ W その名前がちよつと面白くつて W 私と愛ちゃんは思わず吹き出しちゃった。……まあさすがに歩夢に怒られちゃったけど……。

??? 「……坊ちやまのご学友の皆様ですね。お待ちしておりました、私、飛瀬家に仕えております……セバ・ス・チャンと申します。」

ゆうあい 「……ぶふつ W W W」

歩夢 「ちよつと、2人共！失礼だよ！」

侑 「ご、ごめん……！でも…… W」

愛 「……執事で名前が、セバ・ス・チャンつて…… Wあまりに直球な名前つて
いうか…… W」

歩夢に怒られても、あまり反省しなかった私と愛ちゃんだったけど……流石にエマさんは怖かった。

エマ「2人共、ちゃんと謝ろうね……?」

侑「はい、本当に申し訳ありませんでした……」

愛「以後、この様なことが無い様に努めますので、どうかお許し頂けると幸いです……」

さつきまでの私と愛ちゃんの態度で怒らせちゃったかな……つと思っただけど、私達の謝罪を聞いて、今度はセバスさんが吹き出し……次のセバスさんの言葉に私達は驚いた。

セバス? 「……ふふつwいえ、こちらこそ申し訳ございません……w実は私、本当はセバ・ス・チャンという名前ではないんですよ……w」

ゆうあい 「「え、ええっ!? そうだったんですか!」」

しずく 「このお方……中々策士ですね……」

陽哉 「しずくちゃん、何だかテンション高いね?」

歩夢 「あ、あの……では、本当はなんというお名前なんですか?」

セバス? 「では、改めまして……私、瀬場涼ノ介（せばすずのすけ）と申します。以後、よろしく願います……」。

改めて私達に自己紹介したセバスさんこと瀬場さんは、私達に背を向け右耳のインカムに手をやり、多分雷羽君に連絡を入れる。

涼ノ介「少し失礼いたします・・・坊ちやま、瀬場でございます。」

雷羽《ああ、すーさん？何かあつた？》

涼ノ介「ご学友の方々がお越しになりましたので、今からそちらへご案内いたします。」

雷羽《あく、もう来たか。うん、よろしく！・・・おらあつ！寝んなかすみい！》

涼ノ介「・・・というわけですので、皆様まずはエレベーターへお乗りください。」

侑「は、はい・・・」

最後に漏れ出た雷羽君の怒鳴り声に一体何が起こっているのかと不安に持っている
と、雷羽君との連絡を終えた瀬場さんが渡した私達をエレベーターに案内してくれ、私
達はエレベーターで上の階へ。しばらく乗っていると、エレベーターは最上階へ到達
し、その階の一番右端の部屋「雷羽の勉強部屋」というプレートがかかった一室に案内
された。

涼ノ介「……さ、着きましたよ皆様。このお部屋に坊ちやま達がおります。」

歩夢「ここまで案内して頂いてありがとうございます！」

涼ノ介「いえいえ、それでは私はこれで……」

陽哉「雷羽の勉強部屋……まんまの名前だな。それじゃ……」

瀬場さんが私達にお辞儀をしてこの場を去つてすぐ、陽がドアノブを回しドアを開ける……

雷羽「お前らしい加減にしろ!!!この蛆虫共が!!!」

エマ「きやあつ!」

愛「うわっ!?な、なににな!」

しずく「と、兎に角中へ入つてみましょう……!」

そして私達は意を決して部屋の中へと入る。すると、部屋の中はまさに地獄絵図状態で、かすみちゃん・果林さん・天弥君がそれぞれ背もたれ付きの椅子に両脚と胴体を縛り付けられ、腕や脚に何かが貼り付けられている。そんな3人はもうボロボロで、目が

完全に据わっている。そんな3人に容赦なくホワイトボードに書いた問題を解かせようとする雷羽君。

雷羽「いいか、かすみ！問題行くぞ！・・・次の多項式を、 a について降べきの順に整理し何次式になるか答えよ。また、定数項を求めよ！」

$$(1) \quad 5 - 2a - 2 - 5a + \boxed{3}a - \boxed{2} + 7a + 3$$

かすみ「はい！次数は4で定数項は3であります！」

雷羽「全然違うわこの○○○○（ピーー）が！次数が2で定数項が8だろうが！何度言ったらわかるんだこの○○○○（ピーー）！」

かすみ「うぎやあああああつつつつつ
!?!?!?!」

雷羽君の出題した問題を間違えたかすみちゃんに何かボタンが3つある機械を操作した雷羽君。

次の瞬間、かすみちゃんの身体がビクンビクンと震え、机にぐったりと力なく倒れる。そんな光景には目もくれず自身のノートに目をやりブツブツと何かを呟き続けている果林さんと天弥君……。この光景に啞然としていた私達だったけどいち早く我に返った陽が引き攣った顔で雷羽君に声をかける。

陽哉「……お、おい……ゼロワン……?」

雷羽「あゝ?……って、なんだセイバーか。よく来たな!」

陽哉「お、おう……」

陽の声に反応した雷羽君は、すっごい鬼の形相で睨みつけて来たけど、私達だと認識するといつもの雷羽君の性格に戻った。そこで、私達は勇気を出して自分達がつけて来

たお弁当を雷羽君に見せながらお昼にしようと思案してみたんだけど、何故か雷羽君は顎に手をやり何か考え込む。

侑「あ、あのさ……雷羽君？私達お弁当作って来たんだけど……」

雷羽「ふむ……」。

エマ「どうしたの？」

愛「もうお昼食べちゃったとか？」

雷羽「いえ……今食事を与えてもいいものか考えてたんですよ。」

しずく「ええ、朝早起きして作ったんだよ？かすみさん達も苦しそうだし、休憩にしようよ！」

陽哉「せっかく皆が作ってくれたんだし、もったいないだろう？」

雷羽「それもそうだな・・・よし。」

しずくちゃんと陽の説得で決心した雷羽君は、今だぐったりしているかすみちゃん達に声をかける。

雷羽「・・・喜べ貴様等!!! 同好会の皆が食事を持ってきてくれたぞ! 28時間ぶりの食事だぞ! 今やってる問題を解いた者から食ってよし!」

かすかりてん「「・・・・・・・・!!!!」」

歩夢「に、28時間ぶり・・・!?!」

侑「何でそんな時間まで食べさせなかったの!?!」

雷羽「いや、集中してたらそんな時間に……」

雷羽君の言葉に、ぐったりしていた3人は一気に覚醒し、問題を解いていく。そして、3人ほぼ同時に終わらせ雷羽君にノートを提出する。

3人の解答を確認した雷羽君はOKを出し、晴れて皆でお弁当を食べることになったんだけど……」

エマ「果林ちゃん、お疲れ様！」

かりん「うええ〜ん！ママ〜ん！かりんね、かりんね！いっぱいがんばったんだよお〜ん！なのにあのお兄ちゃんがいじめるのお〜ん」

エマ「か、果林ちゃん……!?」

陽哉「な、何がどうなって……」

エマさんを視界に捉えた果林さんは、まるで子供の様に抱き着きわんわんと泣いている。そんな果林さんを見て愛ちゃんが何かを勘付いたのか、エマさんに抱き着いている果林さんに歩み寄り、しゃがんで笑顔で話しかける。

愛「これは……」

侑「愛ちゃん? どうしたの?」

愛「んー、ちよつとね! ……さて、かりんちゃん? 今いくつ?」

侑「ちよ、愛ちゃん!? 何言ってるの!」

愛「まあまあ!」

かりん「…………ぐすつ。かりん…………5しやい…………」

愛「やつぱり…………。そつかそつかー！お勉強頑張つて偉いねえー！」

かりん「えへへ…………♪」

愛ちゃんの質問に、子供の様に手を開いて自分の年齢を答える果林さん。ていうか、5歳つてどういうこと？私は訳がわからず、戻つて来た愛ちゃんに声をかけた。

侑「愛ちゃん、これどういうこと？もう訳わかんないんだけど…………」

愛「あくカリンなんだけど…………幼児退行してるっぽいんだよね。」

歩夢「幼児退行!？」

しずく「何故そんなことが……」

愛「多分、過度な勉強のストレスと恐怖がカリンの精神を追い込んで、幼児退行しちゃったんだと思う」

侑「確かにそれは……そうなるのもわかるかも」

愛ちゃんの言う様に、あの現状はどう考えても地獄というか幼児退行を起こすのもわかるというか……

私がそんなことを考えていると、どうやら性格が変わってしまったのは果林さんだけではなかった様で……

しずく「た、大変です皆さん!」

侑「どうしたのしずくちゃん!」

しずく「か、かすみさんと天弥さんが……!」

エマ「かすみちゃんと……」

歩夢「天弥君……?」

しずくちゃんの言葉に私達がかすみちゃんと天弥君の方を見ると、2人は完全にダークなオーラを放出し、膝を抱え俯いてブツブツ何かを呟いていた。しかも目からハイライトが消えている……。

かすみ「ふふふ……どうせ私何て蛆虫ですよ、あんちきしょうなミジンコ以下な存在ですよ……」

天弥「いいよなあ、勉強出来る奴は……どうせ俺なんか……」

陽哉「す、すごい……」

愛「卑屈……!」

侑「3人の性格がこんなにも変わるなんて……」

陽哉「ほぼ真逆……。何やったらこうなるんだ……」

雷羽「いやー、爆発する砂浜を走らせていち早く問題解かせたり、撒菱を敷き詰めた地面の上に棒を設置してそれを渡らせたり、この無人島を20周させたり……」

しずく「それはやりすぎだよ雷羽君!!!!」

その後、何とか3人を落ち着かせた私達はお昼を済ませ、少しだけ海で遊んだ後帰路

についた。ちなみに海に行こうとした時、渦中の3人も行こうとしたんだけど、雷羽君に首根っこ掴まれ引きずり込まれてしまった。大号泣してたよ、特に果林さんが……。

果林「いやあ！かりんもいくのおー！ママ、ママあゝゝ！おべんきようもうやあつ！うみいくのおー！……！！！！」

雷羽「ああもう！我儘言うんじゃありません！ほら行くぞ！」

果林「やなのおおおー！！！！」

あれから一日経ち、今日は月曜日。今日は祝日だけど補習の為、かすみちゃんと果林さんはニジガクへ天弥君は自分が通っている学校へそれぞれ向かうことになっている。

だけどその前に私達は港で雷羽君達が乗っている船が着くのを待っていると、海の向こうから船が一隻やって来て、私達は雷羽君達を出迎える。雷羽君を先頭に、船から降りて来たかすみちゃん・果林さん・天弥君の3人は何処か兵士の様な面持ちで額に“必勝”の文字が書かれたハチマキを巻いている。

侑「あ! かすみちゃん達降りて来た!」

歩夢「あれ? でも何か頭に巻いてる?」

陽哉「ていうか何であんなに凛々しい顔になってるんだ?」

しずく「先日とは随分顔付きが違いますね……」

雷羽「……よし！お前等整列！」

かすかりてん「……サーイエツサー!!!」

船から降りて来たかすみちゃん達は雷羽君の号令で軍隊の様に横並びに整列し、身体の後ろで腕を組む。す、すごい統率の取れた動き……。

雷羽「いいか！お前等が蛆虫を卒業し人間になれるかはお前等次第だ！」

かすかりてん「サーイエツサー!!!」

雷羽「うん、いい顔だ！お前達はこの俺のプログラムをやり遂げた！自信を持って行ってこい！」

かすかりてん 「「サーイエツサー!!!」」

侑 「……何これ？」

陽哉 「さ、さあ……？」

愛 「てか、カリンの幼児退行治ってるし……」

こうして、何故か軍兵と化したかすみちちゃんと果林さんと天弥君は、学校へ行進をしながら向かって行った。あ、ちなみに天弥君とは途中で別れ、天弥君に愛ちゃんがついて行った。

そうして同好会の部室で待つこと3時間くらい経って果林さんとかすみちちゃんが部屋にやって来た。

果林「失礼します！サーイエツサー！」

かすみ「只今補習を終えてきました！サーイエツサー！」

雷羽「よし！では、果林から順番に結果を答えろ！」

果林「サーイエツサー！自分は、全教科100点だったのであります！」

かすみ「自分も、全教科100点だったのであります！サーイエツサー！」

雷羽「よくやった！これでお前達は晴れて蛆虫を卒業し、人間となった！……本
当によくやった！」

かすみ「いえ！全ては雷羽教官の教えあつてのことです！」

果林「本当に教官にはお世話になりました！」

雷羽「お前等……!」

敬礼をしながら答えるかすみちゃんと果林さんの言葉に、涙ぐむ雷羽君。今だにこの空気についていけないけど、2人共補習一発合格でよかった……。後は天弥君の結果か……。

と私が思っていると、また部室の扉が開き天弥君が入って来た。

天弥「只今戻りました!サーイエツサー!」

雷羽「よし!結果を言え!」

天弥「サーイエツサー!結果は全教科満点でした!」

雷羽「よくやった!……本当に、よくやった!俺は誇らしいぞ!」

かすかりてん 「「きよ、きょうかーん！！！！」

天弥君の言葉に喜びが溢れたのか涙が溢れ始める雷羽君……。4人は抱き合いながらおんおん泣き喚き、それを微妙な表情で見つめる私達……。

その後、何とか3人を元の性格に戻すことが出来ただけど、これがもう大変で大変で……。まあでも、何とか元に戻ってよかったあ！いや、でも……。

侑「……………やっぱりあの空気は意味ワカンナー……………イ！！！！」

第16話 もう何でもありのガチンコース

——陽哉視点——

侑『……さあ始まりました！9人の仮面ライダーによる意地とプライドを賭けたガチンコース！仮面ライダー最速は一体誰なのか！実況は私、高咲侑が担当します！』

雷羽「ゼロワン」「勝つのは俺だ！」

龍兎「ビルド」「いいや、勝つのは俺！これ確定事項だから！」

走介「ドライブ」「ドライブの名が伊達じゃないってとこ、見せてやるよ！」

陽哉「セイバー」「……はあ。」

俺達仮面ライダーは今、ゼロワンの会社が経営しているサーキット場でそれぞれのマシンに乗り、エンジンを吹かしている。

何故こんなことが起きてるのか、それは昨日の放課後に遡る……。

——陽哉視点（昨日の放課後）——

放課後、俺・侑・歩夢・ゼロワン・ビルド・ドライブ・かすみちゃん・璃奈ちゃんと
いう珍しいメンバーでゲーセンに遊びに来ていた。

現在、ドライブとゼロワンの2人がレースゲームで競っている。

雷羽「次のカーブで・・・勝負だ!!!」

走介「残念だけど・・・お前と俺じゃ、勝負になんねえ・・・よっ!」

そう言うと、ドライブは自身が操っている車を道路の雨水溝という溝に近づけそのまま溝側のタイヤ（正確にはイン側のタイヤというらしい）をその溝に落としドリフト走行よりも速いスピードでコーナーを曲って見せた。

そんなドライブのテクニクに、俺達観戦組は感嘆の声を漏らす。

陽哉「おおく!すごいな・・・!」

龍兎「あの技ゲーセンで使う人初めてみたわ・・・」

璃奈「璃奈ちゃんボード【感嘆ッ！】」

侑「走介さん、かっこいいー！」

歩夢「すごーい！」

かすみ「ぐぬぬ……！」

そんな中、一人だけ悔しそうな表情をしているかすみちゃん……かすみちゃんは今だドライブに追い付こうと運転しているゼロワンの肩をバンバン叩く。

かすみ「ちよつと何やってんの、雷羽！このままじゃ敗けるじゃん！」

雷羽「わかつ、い、いたつ！ちよ、やめろ！肩をバンバン叩くな！手元が狂う！」

かすみ「ほら速く追い付いて！」

雷羽「わかってる！……待て——！！」

走介「……もうゴールしたわ。」

雷羽「……な、なに——！！！！」

結局かすみちゃんとゼロワンがあれこれやりとりしている間に、ドライブがゴールを決め、この勝負の勝敗が決した。

そして、この勝負を見ていた璃奈ちゃんがある疑問を隣にいるビルドに投げかける。

雷羽「く、くそ……！」

かすみ「もー！雷羽がもたもたしてるから！」

走介「じゃあ、ジューズ奢りな？」

雷羽「く、わかってるよ……」

璃奈「……龍兎君、ちよつと思っただけど、いい？」

龍兎「ん？どうした？」

璃奈「龍兎君達は自分専用のマシンを持つてるんだよね？だったら……」

そしてこの璃奈ちゃんの一言が、全ての始まりだった……。

璃奈「誰のマシンが一番速いの？」

りとらいそう「……………」

璃奈「……………龍兔君？」

かすみ「ら、雷羽…………？」

3人の不穏な空気に表情は変わらないものの声音が怯えている璃奈ちゃんと歩夢の腕を掴み声音も顔もビビりが滲み出ているかすみちゃん。

そしてついに、ビルドが口を開く。そんなビルドへ速攻で反論するゼロワンとドライブ……………。

龍兔「……………おいおい璃奈？そんな俺が一番速いに決まってるだろ？」

雷羽「……………は？俺に決まってんじゃん」

走介「いや、最速は俺達だろ？な、ベルトさん？」

ベルトさん『e x a c t l y、君の言う通りだ走介！』

龍兔「は？」

雷羽「あ？」

走介「はあ？」

3人の気迫が増していき、バチバチと睨み合いを続ける。そんな3人を見て、最早ビビっているのはかすみちゃんだけじゃなく侑と歩夢、更には璃奈ちゃんまでもが俺にしがみついている。

かすみ「ひ、ひいいい……!」

侑「ちよ、ちよつとあの3人やばいよ!」

歩夢「こ、怖いよ陽君……」

璃奈「……璃奈ちゃんボード【ガクガクツ……!】」

陽哉「ちよ、ちよつと皆……!色々当たる!当たるから!」

そんな俺の状況には意にも介さず、今だ睨み合いを続ける3人。そして痺れを切らせたゼロワンが、大声で叫ぶ。

雷羽「ああわかった!!!なら、勝負しようぜ!仮面ライダー全員参加のガチンコレースだ!!!」

龍兔「その話乗ったあ!!!!」

走介「おっしやあ!!!! やったらあ!!!!」

陽哉「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

こうして、仮面ライダー全員参加（3人以外強制参加）のとんでもないレースが幕を開けることになった。

——陽哉視点（現在）——

あれから数日が経ち、俺達はゼロワンの会社が経営しているサーキット場に来てい
る。ちなみに、あの時いかなかったメンバーにはここへ来る途中に経緯を説明した。オー
ズとゴーストは冷静に流し、ウィザードは俺と一緒に呆れていたけど、鎧武とフォーゼ
に関してはやる気に火がついたらしい。

そんな俺達はサーキット場のそれぞれのピットの中でマシンを整備している。あ、同
好会のメンバーはそれぞれの仮面ライダーのサポート役として共にピットの中へ。俺
の所には歩夢がいるが、侑はピットに2人サポート役がいるのは平等じゃないってこと
で実況になった。

歩夢 「まさかこんなことになるなんてね……陽君大丈夫?」

陽哉 「まあ、何とかやってみる……ほんつとあの3人は。」

俺が呆れながら歩夢と共に俺の専用マシン “ディアゴスピーデー” の整備を行っ

ていると、実況席にいる侑からアナウンスが入る。

侑『仮面ライダーのみんなー！ー！そろそろレース開始なんで、出てきてくださーい！』

陽哉「……………それじゃあ、行って来るよ歩夢。」

歩夢「行ってらっしやい陽君！……………うふふつ、今の夫婦みたいだね？」

陽哉「はへっ!? な、な、何言ってるんだ歩夢!？」

歩夢の突然の言葉に俺は驚き、顔を赤らめた俺は恥ずかしさの余り急いでピットから出た。

陽哉 「まったく歩夢は、たまにああいうことをしれつと言うから困る……」

雷羽 「ゼロワン」「おせーぞセイバー！とつとと変身しろ！」

陽哉 「わかってるよ……」。

『聖剣ソードライバー』

『ブレイブドラゴン！』

俺がグリッドに出ると、先に準備していたゼロワンが怒鳴って来たので、俺は気怠げに答えソードライバーを腰に巻きブレイブドラゴンワンダーライドブックを開くと、ソードライバーに収め火炎剣烈火を抜き、セイバーに変身した。

ちなみに、何故変身したのかというと、今回のレースは俺達仮面ライダーの持つサポートメカやアイテムをフルに使って全力でやるというものなので、危険性を考慮し、こうして変身して挑むことになった。

『烈火拔刀!』

陽哉「……………変身」

『ブレイブ、ドラゴン♪』

そして、セイバーに変身した俺はディアゴスピーディーに乗ったと同時にまた侑のア
ナウンスが入る。

侑『……………さあ始まりました! 9人の仮面ライダーによる意地とプライドを賭けた
ガチンコレース! 仮面ライダー最速は一体誰なのか! 実況は私、高咲侑が担当します
!』

雷羽「ゼロワン」「勝つのは俺だ!」

龍兎「ビルド」「いいや、勝つのは俺！これ確定事項だから！」

走介「ドライブ」「ドライブの名が伊達じゃないってとこ、見せてやるよ！」

陽哉「セイバー」「……………はあ。」

侑『さあ！仮面ライダー達がそれぞれのマシンのエンジンを吹かしながらレースが始まるのを今か今かと待ち望んでいます！……………そして今、シグナルが赤から青に……………変わった！さあ、レーススタートです！』

天弥「フォーゼ」「しゃあー！ぶっ飛ばすぜー！！！！」

シグナルが青に変わってレースが始まった瞬間、フォーゼが自身の専用マシン「マシンマツシグラー」の後部に取り付けられている小型ブーストノズルを吹かし、一気にスタートダッシュを決めた。

侑『ああーつと！天弥選手！いきなりぶっ飛ばしてキターー！他の仮面ライダーはどう対処するのか！』

雷羽「ゼロワン」「あいつ！いきなりやりやがったな！」

碧映「オーズ」「わ、やるね。フォーゼ！」

フォーゼが先頭を独占する中、ある男が動いた。

太陽「ウイザード」「ここは俺の出番かな……」

ウイザードがそう言うと、右手のリングを交換し、それをベルトにかざす。すると、先

頭を走っていたフォーゼのマシンマツシグラーの前輪に魔方陣が出現し、その魔方陣から出て来た鎖がマシンマツシグラーの前輪に絡みロックすると、マシンの勢いも相まってフォーゼはマシンマツシグラーから投げ出され、地面に何回かバウンドした後、芝生に頭から突っ込んでしまった。犬神家の有名な「あれ」状態だ。

『バインド、プリーズ』

天弥「フォーゼ」「このままいっ……おっ？ぎや、あ、ぐぎや、ぐへっ、ごはっ、ぶべらっ……もごっ!!!」

侑『あぁーっとお！トップを走っていた天弥選手！突然現れた鎖に前輪をロックされてマシンマツシグラーから振り落とされてしまったー!!! 芝生に頭から突き刺さった姿はもはや犬神家の有名な「あれ」状態だぁー!!!』

あ、俺と同じこと思ったな侑。……なんて俺が思っていると、余程すっぱり嵌ったらしくジタバタともがいていたフォーゼがやがて……動かなくなった。そんな

フォーゼの姿を見て、フォーゼピットにいた愛ちゃんの悲痛な叫びが木霊した。

天弥「フォーゼ」

!?!?!?

・・・・・・・・。

侑『ああー！！もがいていた天弥選手！ついに動かなくなったー！！天弥選手り
タイアです！』

愛（inフォーゼピット）「て、てんてーんん・・・・・・・・」

!!!!!!

フォーゼの一部始終を見た俺は、隣を走るウィザードに話しかける。

陽哉「セイバー」「ウィザードお前、俺と一緒にあんまりこのレース乗り気じゃなかつただろ・・・・・・・・？」

太陽「ウイザード」「……………まあ、郷に入つては郷に従えって言うしき。偶には付き合うのもいいかなって」

陽哉「セイバー」「お前……………それにしたって鎖で前輪ロックはやりすぎだろ？」

太陽「ウイザード」「そう？俺の予想的にこんなはまだ可愛いものだと思うけど？今のアイツ等的にこの後の展開の方がヤバイと思う」

陽哉「セイバー」「……………否定出来ない。」

そう、否定出来ない。今のゼロワン達がこのままただのレースをすれば到底思えない。ていうかそもそもこのレースのルールに自分が持つてるサポートメカやアイテムをフルに使用するってのがあるし、完つ全に何かする為に付けただろこのルール。そして今度は、フォーゼの後ろを走っていた鎧武が繰り上がりで1位になった。

鉦輝「鎧武」「ここからは、俺のステージだーーーー!!!」

エマ（in 鎧武ピット）「頑張つてーーーー! 絃くーーーーん!」

鉦輝「鎧武」「おう! サンキューエマ! うおおおお!!!」

鎧武ピットからのエマさんの声援で俄然やる気が出た鎧武はさらにスピードを上げて行く。その光景を見ていた俺とウイザードの所へ、ゴーストがやって来て心配そうな声で話かけて来た。そう、何故ゴーストが心配しているのかというと、鎧武の専用マシン「サクラハリケーン」には一定の速度まで上げると、とある機能が発動する……. だけど、あの調子だと忘れてるよなあ。

勇真「ゴースト」「……あれ、大丈夫なんですかね?」

陽哉「セイバー」「うおっ!? ゴースト!? ……うくん、どうなんだろうな……」

太陽「ウイザード」「……忘れてるっぽいよな、あれ」

俺達がそんなことを話していると案の定というか何というか、鎧武の周りに桜の花びらが舞い、空間に出来た裂け目の中へと消えて行った。

これを聞かされていなかったエマさん含め、同好会メンバーは驚きで声を上げる。

鎧輝「鎧武」「うおおおお……お、お、お？や、やべえ!?忘れてたああああ……」

!!!!
」

エマ（in鎧武ピット）「え……ええ!?絃君!?どこ行っちゃったの!？」

かすみ（inゼロワンピット）「ええ!?消えちゃいましたよ、鎧輝先輩!？」

果林（inゴーストピット）「何処行っちゃったのよ、鎧輝さんは!？」

同好会メンバーが驚く中、実況席から侑のアナウンスが入る。

侑『ええ!? 絃輝さん消えちゃったよ!? ……え、何ですか? これを読め? なになに? ……え、え、今のはサクラハリケーンの機能の一つなので、直に戻るから心配しなくていい? ……っていうことはリタイアは? ……え? サポートメカの機能の一つなのでリタイア扱いにはならない? あ、そうなんです。 ……という事で、絃輝選手は直に帰ってくるそうなので安心してくださーいエマさーいん!!!!』

エマ (in 鎧武ピット) 「なくんだあ〜! 帰ってこれるんなら良かったあ〜!」

侑の言葉に安堵するエマさん。とりあえず今後またこういった混乱が起きない様に改めて同好会のメンバーには俺達の武器とかサポートアイテムについて説明しとかないな ……。

俺がそんなことを考えていると、遂に厄介組の一人であるゼロワンが動き始めた。

雷羽「ゼロワン」。「…………リタイア扱いにならないのか……なら、鎧武が戻ってくるまでに勝負を決めてやるぜー！かすみー！！あれの起動準備だ！」

かすみ『おっけー！雷羽！』

ゼロワンが自身のピットにいるかすみちゃんへ通信で何かを指示すると、かすみちゃんが何かの機械を操作し始めた。いや、それにしたってあれってなんだあれって！何をする気なんだゼロワンの奴！

俺がゼロワンへ対し少し恐怖に思っていると……突如、空からビームが降り注いだ！

陽哉「セイバー」「お、おいっ！今のあれなんだ!？」

太陽「ワイザード」「ビ、ビームが空から降って来た……」

走介「ドライブ」「……おい！まだ来るぞ！」

勇真「ゴースト」「……へ？」

空から突如降って来たビームは俺達に当たるとはなかった為、驚きながらも安堵している……今度は無数のビームが降り注ぎ、遂にゴーストがその1つに当たってしまった。

勇真「ゴースト」「ぎゃあああああ……!!?!?!?!?!?!?!」

陽哉「セイバー」「ゴ、ゴーストおー!?」

果林（inゴーストピット）「そ、そんな……勇真ー!??!?!?!?!?!?!?!?!?!」

侑『おおーっつと！突如謎のビームが降り注ぎ、勇真選手に直撃してしまっ
たあー！あのビームは一体何なのでしょうか！』

今の光景に俺達が戦慄していると、後ろからゼロワンの高笑いが聞こえて来た。

雷羽「ゼロワン」「あーはっはっはー！見たか！これが衛星ゼア //改// の力
だあー！！！！」

走介「ドライブ」「え、衛星だとっ!？」

果林（inゴーストピット）「ちよつと！そんなの卑怯よ！」

かすみ（inゼロワンピット）「ふっふっふー！残念ながら卑怯じゃありませんよ果林
先輩！」

雷羽「ゼロワン」「その通り！衛星ゼア 改 だって俺のれつきとしたサポートメカだ！」

陽哉「セイバー」「くっ、ゼロワンの奴……あからさまに調子に乗り始めたな」

そして、こんな状況の中このレースが始まってからずっと沈黙を守っていた厄介組のあの男が遂にその沈黙を破る為に動き出す。

龍兎「ビルド」「……………そろそろかな……………璃奈、作戦開始！」

璃奈『……………了解。』

ビルドと璃奈ちゃんがこんなやり取りをしていることは露知らず、ゼロワンとかすみちゃんは調子に乗り続ける。

雷羽「ゼロワン」「あーはっはっは！もう何人たりとも俺の前を走らせねえ！どんどんやれかすみ！特にドライブだ！ドライブにぶち当てろ！」

かすみ『りようかーい！！』

走介「ドライブ」「ちよつと待て！完全に私怨じゃねえか！」

璃奈『龍兎君、システム完全掌握まで10秒待つて欲しい。』

龍兎「ビルド」「10秒ね．．．了解。」

先のゲーセンでの出来事の恨みを晴らすように、ドライブにビームの雨を降らせるゼロワン。ドライブは持ち前のドライブینگテクニクで避けていく．．．が、それもギリギリになり始めた．．．次の瞬間、突如そのビームの雨が止んだ。

璃奈『…………龍兎君、システム完全掌握完了。いつでも行ける。』

龍兎「…………じゃ、よろしく!」

璃奈『…………了解。』

走介「ドライブ」「うおおおおお……………!!!」

雷羽「ゼロワン」「もっとだ!もっと……………ん?」

陽哉「セイバー」「なんだ?急にビームが止んだ……………」

碧映「オーズ」「飽きた……………とか?」

オーズのその言葉に、俺はゼロワンの方を見るがゼロワン自身も何が起きたのかわ

かっついていない様子だった。そして、俺達が訝し気に思っていると、また空がキラリと輝いた。

俺はゼロワンの攻撃が再開されたのだと思い、警戒していた……が、今度のビームは俺達ではなくゼロワンに降り注いだ。

——雷羽視点——

雷羽「ゼロワン」「……っ!? お、おおおおお! あ、あぶな!」

太陽「ウイザード」「今度はゼロワンに? ……誤操作?」

何とか空からのビームを避けた俺は、衛星ゼア「改」を操作しているかすみに文句を言つてやろうと通信を入れた。

雷羽「ゼロワン」「おいかすみ!!!俺に向けて撃つとか何やってんだ!危うく当たりかけただろ!!!」

かすみ『私だって知らない!今のかすみんじゃないよ!』

雷羽「ゼロワン」「そんな訳ないだろ!お前が操作パネル持つてんだ!お前以外に誰がいるんだよ!」

かすみ『本当にかすみんじゃないよ!だって・・・』

そこで、かすみが驚くべきことを口にする。

かすみ『だって私！今、操作パネルのボタン押して無いもん！』

雷羽「ゼロワン」「……………は？」

かすみの言葉に、俺は一瞬冗談かと思つたが、声音的に焦っているのがわかる。こういう時のかすみは本当のことしか言わない。だからこそ俺の頭は混乱してしまった。

かすみじゃないなら誰だ？瀬場さんは侑さんのサポートの為、実況席にいるし……まさかハッキンググーいや、でも、こんな短時間で衛星ゼア“改”を乗っ取れる奴なんて……………。そこで、ある人物の顔が頭に浮かんだ俺は、そいつの方へ顔を向けた。

龍兔「ビルド」「……………！」

雷羽「ゼロワン」「やっぱりアイツか！」

ビルドの方へ顔を向けると、俺の視線に気づいた奴は少し俺の方に顔を向けて左手の親指を立てて来た。俺はそれを見て確信する、ビルドは今仮面の下で絶妙にイラつくにやけ顔をしていると……だが、俺もまだ諦める訳にはいかない。俺はビルドに乗っ取られた衛星ゼア“改”からのビーム攻撃を避けながら打開策を必死に考えるが……

雷羽「ゼロワン」「……………ダメだ！いい手が思いつかねえ！」

一番いいのはワクチンプログラムを作ることだが、俺は運転中でビームを避けながらなんて到底無理だ。一瞬かすみに頼もうかとも思ったが、あいつの頭でワクチンプログラムを作るなんて天地が裂けても無理だろう。

俺が打開策を考えている間も空から攻撃は止まず、徐々に追い詰められていく俺は仮面の下で歯齧みをする。こんなことならサポート役を2人OKにして瀬場さんをピッ

トに入ればよかった！くそ、くそ……

雷羽「ゼロワン」……………覚えてろよ！ビルド—————!!!」

ビルドへ向けて精一杯の悔しい気持ちを叫んだ俺の身体は、ビームの光の中に包まれて行った……………。

——— 龍兔視点 ———

侑『ああーつとお！自身のサポートメカだと豪語していた雷羽選手！そのサポートメカである衛星ゼア“改”からの攻撃で敢え無く撃沈した—————！』

侑さんのアナウンスを聞きながら、俺は仮面の下でほくそ笑んだ。それにしてもゼロワンは惜しかった、後もう数秒逃げ切れれば、衛星ゼア「改」の権限を元に戻せたのに。

そう、衛星ゼア「改」はこの世界でもっともセキュリティが高いがえげつないシステムを持った衛星だ。多分名うてのクラッカーでも突破は難しい、だから俺は璃奈と協力して3分間の間だけ乗っ取れるウイルスを作った。

仕掛けたタイミングは、このレースが始まる前に璃奈がゼロワンピットに行き、かすみとゼロワンの注意を引いている間に俺が衛星ゼア「改」を操作するパネルにウイルスが入った機器を挿しウイルスをインストールさせる。後は、ゼロワンが調子に乗り始めたタイミングでウイルスを起動させればこの通り。因みに、ゼロワンがリタイアしてすぐにウイルスの効果が切れた為、もう俺達であの衛星を操作できない。

龍兔「ビルド」「相手が調子に乗った所で一気に突き落とす！のが超クールってね！……それじゃ、次はこいつの出番だ！」

『りとりなちゃんブースター! (璃奈ボイス)』

そして俺は、自分の専用マシン「マシンビルダー」の後部に新しく搭載した璃奈との合
作「りとりなちゃんブースター (璃奈命名)」を起動させる。

龍兎「ビルド」「勝利の法則は、決まった! はあああ……!!!」

侑『おおーつと! 今度は龍兎選手が仕掛けて来たー!!! 速い速い! どんどん追い越
して行くー!!! 他の選手達はどう対処するのか!』

陽哉「セイバー」……は、速っ!?

碧映「オーズ」……全然追いつける気がしない……!」

太陽「ワイザード」「ここは俺がやるのか。……ちやうどコイツも暴れたいみたいだし！」

『ドラゴライズ！プリーズ』

ワイザードドラゴン『グオオオオ!!!』

侑『おっとー！ここで太陽選手が内なるドラゴンを召喚し、龍兎選手の前に出たー！ー！一体なにをする気だー！ー！?』

そう言うと、ワイザードは右手のリングを再度交換しそれをベルトにかざすと、上空に巨大な魔方阵が出現しそこから巨大なドラゴン“ワイザードドラゴン”が出現した。

そして、ワイザードの専用マシン“マシンウインガー”を変形させてワイザードドラゴンと合体したワイザードは、驚異的な速さで俺を追い越し、振り向き様に俺に向かって強風を浴びせて来た。

太陽「ウイザード」「これで・・・どうだ！」

ウイザードラゴン『グオオオ・・・!!』

龍兔「ビルド」「くっ・・・！風が、強すぎる・・・！前に進まない・・・！」

太陽「ウイザード」「このまま吹き飛ばす！」

龍兔「ビルド」「そうは・・・行くか！最大出力！」

ウイザードラゴンの発生させた強風のせいであつた前に進めなくなった俺は、負けじとブースターの出力を最大にし強風に対抗したが、ウイザードは更なる攻撃を仕掛けて来た。

太陽「ウィザード」「……しぶといな。なら、これでどうだ!」

ウィザードラゴン『グル……オオオオオ……!!!!』

龍兎「ビルド」「……はあっ!?う、嘘お!」

ウィザードが仕掛けて来た更なる攻撃……それは、ウィザードラゴンの鋭利な爪を使つて地面を抉つてそれを俺に放つて来た。ただでさえ強風で操作しづらくなつている上でこの攻撃は避けられるはずも無く、ウィザードの攻撃が当たろうとした……次の瞬間、忘れられていたあの男が帰ってきた。

鉦輝「鎧武」「……しゃあ!帰ってきたぜ……つて、うおおおおお!!?!?!?」

龍兎「ビルド」「ちよ、鎧武!?あ、くつそ、避けられな……あああああああ!!?!?!?!?」

侑『ああーっとお！太陽選手が召喚したドラゴンが抉った地面が龍兎選手と、突如帰って来た絃輝選手に直撃ー！！！！2人とも後方へ吹き飛んでいったー！！！！これにより龍兎選手と絃輝選手は共にリタイヤだー！！！！絃輝選手は運がない！！！！』

エマ（in 鎧武ピット）「絃くー！！！！ん！！！！」

——陽哉視点——

ビルドと突如戻って来た鎧武をリタイヤさせたウィザードはドラゴンを自身の中へ戻すと、再びマシンウインガーをバイクに変形させ普通にレースに戻って来た。

太陽「ウイザード」「……ふい。お疲れ、ドラゴン。」

ウイザードラゴン『……グルル。』

陽哉「セイバー」「お前……やっぱり楽しんでるな？」

太陽「ウイザード」「まあね、だんだん面白くなってきた！けどまあ、ドラゴン召喚してちよつと魔力使っちゃったし、後はこのまま普通にレースかな」

陽哉「セイバー」「それならいいんだけど……」

と、俺達がこんな会話をしていると、後ろの方でオーズが動いた。オーズはまずベルトのメダルを3枚全て交換し、スキヤンすると猫科動物をモチーフにした形態。ラトラーターコンボにチェンジした。

そして、ラトラーターコンボにチェンジしたオーズはしずくちゃんに通信で指示を出

す。

碧映「オーズ」「よし！僕も動くか！……まずは！」

『ライオン！トラ！チーター！ラタ・ラタ・ラトラアターア！』

碧映「オーズ：ラトラター」「よし、次は……しずく！トラカンドロイドをお願い！黄色の奴ね！」

しずく『わかりましたお兄様！』

オーズの指示を受けたしずくちゃんはカンドロイドが入っているアタツシユケースから黄色の缶“トラカンドロイド”を取り出すと、プルタブを開けオーズへ向けて放り投げた。

しずく（inオーズピット）「お兄様に……届け！えいっ！」

走介「ドライブ」「いや、全然違う方向行ってんじゃねえか！」

ドライブの言う通り、しずくちゃんが投げたトラカンドロイドは変な方向に飛んで行ったが、巨大化すると同時に自動でオーズの元まで飛んで行き、そのままオーズの専用マシン「ライドベンダー」と合体しトライドベンダーになった。しずくちゃん……とんでもないノーコンだったんだ……。

しずく『うう……ごめんなさいお兄様。』

碧映「オーズ・ラトラーター」「あまあ……投げる練習はまた今度しようか……でも、大丈夫大丈夫！こうして僕の元に来たから！結果オーライ！ね、しずく！」

しずく『お兄様……！はい！』

碧映「オーズ：ラトラーター」「さて……それじゃ行きますか!」

走介「ドライブ」「来い! 返り討ちにしてやるよ!」

そしてそのままオーズとドライブの戦闘が始まる。まず、オーズがメダル型の光弾をドライブの専用マシン“トライドロン”へ浴びせる。

メダル型の光弾を避けながらドライブは反撃に前輪から剣型の武器“ハンドル剣”を後方のオーズへ射出する。

碧映「オーズ：ラトラーター」「……はあああああつ!」

走介「ドライブ」「そんな攻撃……当たらねえよ!……今度はこつちから行くぜ! はあ!」

碧映「オーズ：ラトラーター」「おっと！させない！」

しばらくの間、オーズとドライブは互いに武器と光弾を撃ち合っていたが、痺れを切らせたドライブが彼方さんへ通信を入れる。

走介「ドライブ」「ああもう！罅があかねえ！・・・彼方！」

彼方『何々？そー君？』

走介「ドライブ」「気が抜けるなく・・・じゃなくて！ジャステイスハンターとドリームベガスをこっちにくれ！」

彼方『おっけー。・・・ジャス君ドリ君、行つといで〜！』

ドライブの指示を受けて、彼方さんは眠たい目を擦りながら傍に並べてあったシフトカーからジャステイスハンターとドリームベガスの車体を撫で、トライドロンに向かわせた。

ジャステイスハンターとドリームベガスがトライドローンの内部に入り込むと右前タイヤにジャステイスハンター、左前タイヤにドリームベガスのタイヤが装備されると、ドライブはトライドロンを半回転させオーズと向き合う様になった。

ベルトさん『ジャステイスハンター！ド、ドリームベガス！……タイヤフェール！』

走介「ドライブ」……はあつ！」

侑『わあ、凄い！タイヤを2つ装備したトライドロンを半回転させ、碧映選手と向き合っただままバックでトライドロンを走らせる！最早高校生とは思えないドライブینگテクニクだ！』走介選手は本当に高校生なのかな？』

走介「ドライブ」「おい！失礼な奴だな！一応高校生だ！……まあ、今はいいか。覚悟しろよオーズ！」

碧映「オーズ：ラトラーター」「……一体、何をやる気なんだ？」

侑に文句を言ったドライブは気を取り直し、オーズに向けてまずはジャステイスハンターのタイヤを飛ばすと、オーズの頭上で巨大化した円形の柵“ジャステイスケージ”が檻を形成し、オーズを閉じ込める。

碧映「オーズ：ラトラーター」「なっ、閉じ込められた!？」

走介「ドライブ」「お次は賭けの時間だ!」

檻に閉じ込められたオーズは、何とか抜け出そうと攻撃を試みるが、檻の中は電気が流れており、容易に破壊出来ない。

そんなオーズへ向けて、今度はスロットのリールを模したドリームベガスのタイヤと

一緒に2つの「ドラムシールド」というスロットのリールとチップを模した盾を放つ。檻の前でタイヤと2つの盾が重なりスロットマシンの様に回転し出し……徐々にそのスピードを落としていき、遂に3つの絵柄が決まる。3つの絵柄は全て「7・7・7」で揃った……つまり、大当たりだ。

3つの絵柄が揃った瞬間、大量のコインがまるで滝の様に射出され檻の中のオーズを飲み込んでいく。

走介「ドライブ」……おつ、ラッキー!大当たり!」

碧映「オーズ：ラトラーター」「え、ちょ……う、うわあああああああ
!?!?!?!?!?!」

侑『ギャンブル攻撃を仕掛けた走介選手!見事大当たりを引き当て見せました!タイヤから射出された大量のコインが滝の様に檻に閉じ込められている碧映選手を飲み込んでいく……!!!!!!残念ながら碧映選手はここでタイアです!……さあ、このレースも遂に佳境!勝つのは陽哉選手か!それとも太陽選手か!はたまた走介選手か!』

ドライブは、オーズを倒してすぐにトライドロンをもう一度半回転させ元の走行に戻ると、俺とウイザードに追い付く為に速度を上げて来た。

俺達は横一列となり、もう誰が勝つても可笑しくない状況になった。そしてこの状況を狙っていた俺はストームイーグルのライドブックを取り出し、ソードライバーから火炎剣烈火を抜くと、シンガンリーダーに読み込ませる。

ストームイーグルの力を得た火炎剣烈火の刀身を後ろに向け炎の竜巻を放ち、一気にスピードを上げた。

走介「ドライブ」「うおおおおお………!」

太陽「ウイザード」「追い付いてきた!?!………はあああああ!」

陽哉「セイバー」「ここまで来たたら勝つ!」

『イーグル!ふむふむ………習得一閃!』

陽哉「セイバー」「……はあっ!!!」

走介「ドライブ」「なっ!?!あの野郎!今更仕掛けてきやがった!」

太陽「ウイザード」「……セイバーの奴、狙ってたな」

炎の竜巻の力で一気に勝負を決めに来た俺は、ウイザードとドライブの追撃をさせる暇を与えることなくそのままゴールを決めた。

侑『炎の竜巻を背後に放った陽哉選手!もの凄いスピードで他の2人を引き離して行く!そして、そのまま……ゴ……ル……!このレースを制したの……は……仮……面……ラ……イ……ダ……ー……セ……イ……バ……ー……!……剣……緋……陽……哉……選……手……だ……!……お……め……で……と……!……陽……!!』

陽哉「……ふう。」

ゴールし終えディアゴスピーデーから降りた俺は変身を解き、一息ついているとピットから歩夢が走って来てそのままの勢いで俺に抱き着いてきた。

歩夢「……陽君!!!」

陽哉「……うわっ!?!」

歩夢「凄い、凄いよ陽君!」

陽哉「いやー、最後は不意打ちみたいなものだったし、素直に喜んでいいものか……」

抱き着いてきた歩夢の頭を撫でながら自分のやったことに素直に喜んでいいのか迷い顔を搔いていると、レースを終えたウイザードとせつ菜ちゃんがやって来た。

太陽「ウイザード」「いいんじゃない？もっとヤバイことした奴とかいたし」

せつ菜「そうですね！太陽君が優勝出来なかったのは残念でしたけど、それでも！陽哉さんは誇つていいと思います！それに、太陽君はドラゴンさんを出してまで勝てなかったのですから！それに比べたら陽哉さんのやったことは範囲内ですよ！」

太陽「ちよ、ちよつと菜々……？」

せつ菜ちゃんの言葉に、ウイザードが軽くショックを受けていると、他の皆もやってきた。

天弥「あ——！悔し——！」

愛「てんでんそつこーで終わったもんね！」

天弥「それを言うなよ愛！」

碧映「ごめんよしく、勝てなかった……」

しずく「いいんですお兄様！私はお兄様が何位だつて気にしません！」

鉦輝「くつそー！今回ぜんぜん活躍出来なかつた！」

エマ「絃君、ドンマイだよ」

勇真「……あんな終わり方をしちゃうなんて……」

果林「そんなに肩を落とさなくてもいいんじゃない？貴方はよく頑張ったわよ。」

龍兎「……今後の為にも、まだまだ色々発明品を見直す必要がありそうだな。璃奈、手伝ってくれる？」

璃奈「うん。任せて。璃奈ちゃんボード〔につこりん!〕」

走介「あー! 走り自慢の俺が負けるとか、めっちゃ悔しー!」

彼方「ドンマイそー君。今日は彼方ちゃんが腕によりをかけてお料理振る舞っちゃうぜー!」

雷羽「ちくしよー! 衛星ゼア // 改 // まで使って負けるとか! . . . あー! 悔しい!」

かすみ「もう! 雷羽がもつとちゃんとシステム管理徹底してたら勝てたのに!」

侑「いやー、何はともあれお疲れ陽! おめでと!」

陽哉「ああ、ありがとう侑!」

それぞれに悔しい気持ち等を口にしていく中で、ゼロワンが次に言った言葉に、俺は背後に黒いオーラをにじませる。それを見た今回の発端を作った厄介組の3人は萎縮し、歩夢と侑以外の同好会メンバーは2人の背後に隠れるぐらいビビってしまった。

雷羽「いやー！まあ、悔しかったけどなんだかんだ楽しかったよな！またやろうぜ！」

陽哉「……………ああ、またやろう……………今度は常識的な範囲で、な？」

りとらいそう「……………は、はい。」

歩夢・侑以外の同好会メンバー「……………ひ、ひい!」「……………」

ゆうぼむ「……………あ、あはは〜」

こうして、色々あった……………ほんとーに！色々あったレースは幕を閉じた。はあ、ほ

んつと疲れた。まあこの後、歩夢の家で久々に3人で食卓を囲んだのは嬉しかったな。この幸せがずっと続けばいいと……そう、思ってたんだけどな……

まさか俺のせいで、この2人があんなことになるなんて……

第17話 復活の魔人、死風となりて。

——陽哉視点——

桜坂邸での戦い以降、姿を見せなくなつたディヴエンジャー。俺達はいつまた現れても対処出来る様に警戒していた。……そんな中で、今日は歩夢と侑と3人で久々に遊びに来ていた。

陽哉「こうして3人で遊びに来るなんて久々だな！」

侑「最近は色々あつたしねー！……前3人で遊んだのつて陽が私達の前でセイバーに変身した時だっけ？」

歩夢「そうだよ侑ちゃん！あの時の陽君、かつこよかつたよね！」

陽哉「あ、あはは……何か恥ずかしいな……」

俺達がそんな会話をしていると、家電量販店のショーウィンドーに飾られた液晶テレビがニュース番組を映していた。

俺達はそのニュース内容に足を止め少しだけ聞き入った。

『……次のニュースです。先週から都内で起きているスクールアイドルばかりを狙う連続殺人事件ですが、まだ犯人は見つかっておらず、被害は日に日に増えている模様です。この件を受けて、警察庁は不要な外出は控えるように呼び掛けております。』

侑「……これ、まだ犯人捕まってなかったんだ……。許せないよね、スクールアイドルばかりを狙うなんて……」

歩夢「……確か、死因が分からないんだよね？刃物で切られたわけでもないし、銃

で撃たれた訳でもないって……」

陽哉「被害者の状態もバラバラで、何人かは獣の爪で引き裂かれたみたいなきず痕があったり、他の何人かは何かに刺されたみたいに首に3cm大の痕があったり……本当に謎だよな、2人共気を付けろよ？」

侑「そうだね……でもまあ、陽がいるし大丈夫でしょ！」

歩夢「……私、ちよつと怖い……」

あつげらかんとする侑に対し、少し体を震わせて俺の服の袖を掴む歩夢。そんな歩夢を安心させる様に頭に手をやり、侑には半目で睨む。

陽哉「……まあ、そりゃ俺が守るけどさ……とりあえず危機感くらいは持つててくれよ？」

侑「おっけーおっけー！」

歩夢「もう、侑ちゃんったら調子いいんだからー……！」

俺達はそんな会話をしつつまた歩き出そうとした時、歩夢が何かを見つける。

歩夢「……あれ？」

陽哉「どうした？歩夢？」

歩夢「あそこにいるの、太陽君と走介さんじゃない？」

はるゆう「……え？」

歩夢が指さす方向を見てみると、そこには何かを話し合っているウィザードとドライブの姿があつた。俺達が2人に近づくと、こつちに気が付いたドライブが手を上げて出迎えた。

陽哉「本当だ……」

歩夢「2人で何やってるんだろう？」

侑「気になるし行ってみようよ！」

陽哉「あちよ、侑！……たく、俺達も行こうか歩夢。」

歩夢「う、うん……」

太陽「……使い魔達に探させてみたけど、これといった手がかりが掴めない……」

走介「うくん、やっぱそっちもダメだったか……ん？おお、セイバーに侑に歩夢！」

太陽「……………え？あ、ほんとだ。」

陽哉「2人共こんなところで何してんだ？」

侑「2人で遊びに来たとか？」

俺達の言葉に、少し難しい顔で見合わせるウイザードとドライブ。そして、ドライブが口を開いた。

走介「……………お前等、今起きてる連続殺人事件のこと知ってるか？」

陽哉「あの毎日ニュースでやってる？ちようど俺達もその話をしてたんだよ」

歩夢「それがどうかしたんですか？」

走介「実はちよつと怪しいって思つててき。ウィザードに頼んで一緒に痕跡を追つてたんだ」

侑「怪しいってどういうことですか？」

太陽「被害状態からして、人間の仕業に思えなくて……」

陽哉「……まさか、デイヴエンジャーか？」

走介「……その可能性が高い。だから俺達はその手がかりを追つてたんだが……これがなかなか見つからなくてな。今から最初の被害現場に行こうかって話して……」

太陽「そこでセイバー達に遇ったって訳」

どうやらドライブは今回のこの事件を人間ではなく、デイヴエンジャーの仕業ではないかと睨んでおり、プラモンスターと呼ばれる使い魔を使役出来るウィザードに協力を頼み、シフトカーと使い魔を使って独自捜査をしていたと。

だけど、明確な手がかりが見つけられず、最初に起きた事件現場に行く相談をしていたところで俺達と遭遇したらしい。

侑「じゃあさ、私達も一緒に行かない？」

陽哉「侑、お前……遊びじゃないんだぞ？」

侑「わかってるよ！だけども、人数が多い方が気付くことってあると思うし！」

歩夢「それはそうだけど……」

走介「まあ、何かあっても俺達3人がいれば何とかなるし、一緒に行くか？」

侑「いいんですか！やったー！」

こうして俺達も一緒に事件現場に行くことになった。事件現場に向かっている道中、彼方さんとせつ菜ちゃんがいらないことを聞いてみると、彼方さんはスーパールのバイトでせつ菜ちゃんは生徒会の仕事で学校らしい。

そして、初めて起きた事件現場の廃工場跡地に到着すると、どうやら警察が現場撤収をした後らしく所々の柱に傷こそあれど、他は綺麗さっぱり元通りになっていた。

侑「うわ……ここで事件が起きたのって遂この間なのに、もうほとんど元に戻ってる……」。

陽哉「所々の柱に傷があるな……この傷、やっぱり刃物じゃないっほいな……」

歩夢「そうなの？」

陽哉「うん。……確かに刃物でも柱に傷を付けることは出来るけど、ここまで抉った様なのは無理だ……」

走介「何だこの傷……本当に獣の爪痕なのか？もつと別の何かの様な……」

太陽「この跡から伝わる気配……風？……そうか！鎌鼬！」

俺達が柱に付けられた傷痕を訝しく見ていると、痕に触れたウィザードが何かを感じ取ったらしい。

走介「ウィザード！何かわかったか？」

太陽「ああ。この柱に付けられた痕……これは、鎌鼬の痕だ」

歩夢「かまい・・・たち？」

侑「何、それ？」

太陽「鎌鼬っていうのは・・・まあ簡単に言うと、突風がまるで刃の様に物体を切り裂くことなんだよ。」

陽哉「エレメントの力を使うワイザードだから感じ取れたって訳か・・・。」

走介「しつつかし、鎌鼬とはな・・・こんなの、人間には無理だな・・・。」

陽哉「ああ、となると・・・。」

ワイザードのおかげで、傷痕の謎を解明出来た俺達。そんな中、俺が今回の事件の犯人を言いかけたところで・・・俺達が入って来た入口とは反対方向の出入口から声

が響いた。俺達が声のする方へ顔を向けると、そこには信じられない奴がいた………。

—— 侑視点 ——

最近起きている連続殺人事件を探る為、私達は最初に起きた廃工場跡地に来ていた。そして、太陽君のおかげで柱と今までの被害者に付いた切傷の謎がわかった私達の前に現れたのは……何というか、めちやくちや怖い見た目をしたデイヴエンジャーだった。

??? 「へえ、まさかそんなやり方で割り出すとはなく。やっぱ面白れえな、仮面ライダー！」

陽哉 「……誰だ！」

??? 「へへっ……よお、久しぶりじゃねえか炎の剣士！」

陽哉 「なっ！……お前は……デザスト!?」

どうやら目の前にいる不気味な怪人はデザストというらしい。……ていうか、陽は知り合いなのか？何か、凄い驚いた顔してるけど、何があったんだろう……？

陽哉 「デザスト！何でお前がここにいるんだ！だって、だってお前は……！」

デザスト「緋道蓮に倒されたはずなのに……か？」

陽哉「くっ……ああ、そうだ！お前はあの時本ごと破壊されたはずだ！」

デザスト「おいおい忘れた訳じゃないだろ？お前等が今戦ってる奴等の大元はどんな力を持ってた？」

陽哉「死んだ怪人の……蘇生と融合。ていうことは、やっぱりお前もか……」

デザスト「ああ、まあな。」

緊迫した空気の中で、陽とデザストの会話は続いていく。そんな中で、私はデザストって怪人が言っていた「緋道蓮」という名前が気になり、隣にいる太陽君に話しかける。

侑「ねえ、太陽君？・・・緋道蓮って誰？それに、あのデザストってなんなの？何か、陽と知り合いっぽいけど・・・」

太陽「緋道蓮はセイバーの仲間の1人で、風の聖剣に選ばれた剣士・・・そしてあのデザストは、セイバーとその仲間達が最も苦戦した相手らしいんだ・・・」

侑「そう・・・なんだ・・・」

私達が話してる間も、陽とデザストとのにらみ合いは続き・・・そして、デザストが思い出したかのように、陽に腰に挿してある剣を見せて来た。

デザスト「・・・おお、そうだ！せつかくの再会の記念に、お前に見せてやるよ！俺の新しい剣を・・・ほらこれ、見覚えあるだろ？」

歩夢「何、あの紫と緑に彩られた禍々しい剣・・・！」

陽哉「……………つ!?ま、まさか……………その剣は!?!」

デザスト「ああそうだ。……………懐かしいだろう?」

デザストが見せて来た剣、それは濃い紫と濃い緑に彩られた禍々しい形をした剣だった。私達はその剣が何かわからなかったけど、陽には心当たりがある様で……………それを見た陽は、今までに見たこともないほどに激昂し、デザストに向かっていく。

陽哉「何で、お前がそれを持つてるんだ……………!」

デザスト「……………言っただろ?俺の剣だつて。」

陽哉「……………ふぎ……………けるな!!!!
変身!!!!」

『ブレ〜イブ、ドラゴ〜ン♪』

陽哉「セイバー」「それはアイツの．．．蓮の剣だ！お前の物じゃない!!!」

デザスト「はっ、その蓮はもういねえだろうが！それによお、この剣はもう俺用にカスタマイズされてんだ．．．よ!!!」

陽哉「セイバー」「ぐはっ．．．!」

デザスト「コイツはもう聖剣『風双剣翠風』じゃねえ．．．魔剣『死風剣翠風』（しつぷうけんはやて）だ！見せてやるよ．．．コイツが俺の物になった証．．．そして、俺の新しい姿を！」

陽を蹴ったデザストは、懐から取り出した一冊の本を開き死風剣翠風に収めると、2つの剣に分離させ、新たな姿へと変身した。

—— 太陽視点 ——

俺達の前に現れたデザストという怪人は、かつてセイバーの仲間の1人が持っていた聖剣の1振りを手に、懐から取り出した禍々しい形をしたワンダーライドブックによく似たアルターブックという本を開いた。

『魔蠍死風忍者伝（まかつしつぷうにんじやでん）！』

『とある死界に忍は死風！あらゆる毒牙でいざ候・・・』

デザスト「……………行くぜ。」

『双刀分断！壺の手、手裏剣！弔の手、二刀流！死風剣翠風！』

『翠風の巻！冥界の双剣が、死風となりて世界に刃を突き立てる！』

アルターブックを剣に収め、死風剣翠風を2つに分割すると、紫色と緑色の風がデザストの身体を包んでいき……その風が晴れた時、そこには背中に蠍の尻尾を生やした仮面ライダーと怪人が混ざった様な姿をしたデザストが立っていた。

陽哉「セイバー」……………っ!？」

侑「えっ、変身……………した……………!」

走介「マジかよ……………」

歩夢「ねえ、太陽君？あれも、仮面ライダーなの……？」

太陽「いや……わからない……」

デザスト「所々に剣斬の面影があるだろ？そうだなあ……この姿の時は、デザストームデイヴェンジャーとでも名乗るところか。」

新たな姿に変身したデザストことデザストームは、愉快そうにしながら持っている死風剣翠風をクルクルと手元で振り回す。

陽哉「セイバー」「くっ、……あああああああああ
!!!!!!返せ！その剣を返せ!!!!!!」

デザストームデイヴェンジャー（以下、デザストーム）「ははっ、そうだ！来い！炎の剣士！」

そんなデザストームの姿を見て、更に怒りを露にするセイバーは、その怒りの感情のままにデザストームに火炎剣烈火を振っていくが、デザストームはそれを全て躲して合間合間にセイバーへ攻撃を加える。

陽哉「セイバー」「お前だけは、お前だけは倒す！・・・はあっ！」

デザストーム「・・・おいおい、そんなもんか？そんなんじゃ俺どころかアイツさえ倒せないぜ！・・・おらよっ！」

陽哉「セイバー」「ぐ、がはっ・・・！まだ・・・まだだ・・・まだだ!!!」

何度斬られても、怒りに任せて攻めていくセイバーを見て、こんなセイバーの姿を今まで見たことが無いという風に、侑と歩夢が戦慄している。そんな中で、俺とドライブ

は冷静に状況を見ている。

歩夢「……陽君、どうしちゃったんだろう……」

侑「わかんない……あんな陽、見たこと無いよ……」

走介「……ウイザード、今のセイバー……ちよつとやばくないか？」

太陽「……ああ、完全に我を忘れてる……あんなの攻撃じゃない、ただ怒りに任せて棒きれを振り回してるのと同じだ。あれじゃ、あのデザストームとかいう奴は倒せない……」

走介「……じゃあ、どうする？」

太陽「……俺がセイバーを止める。だからその間、ドライブにはデザストームの相手をしてほしい」

俺がそう言うのと、ドライブは一瞬めんどくさそうな目をしたが、一息吐くと俺の提案を呑んでくれた。

そして、俺は黄色いリング “ランドウイザードリング” を左手に嵌め、ドライブは黒いシフトカー “シフトワイルド” をプレスに装填し、変身した。

走介「うへ……。……。はあー、わかった。それで行くか。」

太陽「……。じゃあ行こう！」

『ドライバオン！』

『シャバドウビタッチヘーンシーン！シャバドウビタッチヘーンシーン！』

ベルトさん『スタート・ユア・エンジン！』

「そうたい」「・・・変身っ！」

『ランド！プリーズ』

『ドツドツ、ド・ド・ド・ド・ドンツドンツ、ドツドツドン！』

ベルトさん『ド、ラーイブ！ターイブ、ワイルド！』

それぞれ、ランドスタイルとタイプワイルドに変身した俺達は、セイバーとデザストームの間に割って入る。

陽哉「セイバー」「次こそ！はああ・・・！」

太陽「ウイザード：ランド」「ちよつと待て、セイバー！」

陽哉「セイバー」「なっ!?!は、放せウイザード!俺はあいつを倒さなきゃいけないんだ!」

太陽「ウイザード・ランド」「いいから落ち着くんだ!デザストームに弄ばれてるのが分からないのか!・・・ドライブ!」

走介「ドライブ:ワイルド」「・・・ああ!任せろ!」

デザストーム「・・・なんだ?今度はお前が相手してくれんのか?」

走介「ドライブ:ワイルド」「ああ!ひとつ走り付き合っつてやるよ!」

俺がセイバーを羽交い絞めで止めている間に、ドライブとデザストームの戦闘が開始される。

ドライブは、タイプワイルドのパワーで果敢に攻めていくが、デザストームはそれを

まるで忍の様に軽々と避けていく。

走介「ドライブ：ワイルド」「ふ、はあっ！おら！」

デザストーム「・・・ほお、中々威力のある攻撃だなく！だが、攻撃力に振ってるせいで速さが無い！そんなんじや俺を捕らえられないぜ！」

走介「ドライブ：ワイルド」「・・・くっそ！ちよこまかと！」

デザストーム「ははっ！そんなもんか？」

ドライブとデザストームの戦闘が続く中、セイバーは今もなおデザストームに斬りかかるうと俺の腕を振りほどこうともがいている。

陽哉「セイバー」「……ぐ、うう!……ああ!」

太陽「ウイザード：ランド」「くっ……!セイバー!落ち着くんだ!このままじゃお前は……!」

陽哉「セイバー」「うるさい!あいつは……あいつは俺が殺さなきゃいけないんだ!」

太陽「ウイザード：ランド」「……っ!」

俺は、今のセイバーの言葉に戦慄した。そう、こいつは今“倒す”ではなく“殺す”と言ったんだ。これはまずい、セイバーの中で怒りが殺意になり始めている。何とかしなければいけない……そう思っていた時、デザストームと戦っていたドライブが吹き飛ばされてきた。

走介「ドライブ：ワイルド」「……ぐああああっ
!?!?!?」

太陽「ウィザード：ランド」「……ドライブっ!?」

しかし俺がドライブに気を取られてしまった瞬間にセイバーが俺の腕から抜け出し、デザストームへと斬りかかって行つた。

陽哉「セイバー」「……っ!」

太陽「ウィザード：ランド」「……っ!?しまった!?待てセイバー!」

陽哉「セイバー」「デザストーム……!!!」

デザストーム「デザストームだつて言つてんだろ。……まあいいか、来いよ!」

陽哉「セイバー」「……はあっ!!!」

俺の制止を聞かずにデザストームに向かって行つたセイバー。デザストームと鏝迫り合いになったその時、セイバーの身体からほんの一瞬赤黒い炎が漏れ出した。

陽哉「セイバー」「はあ ああ ああ ああ ああ ああ
!!!!!!」

太陽「ウイザード：ランド」「.なんだ、今一瞬.」

走介「ドライブ：ワイルド」「どうしたウイザード. . . . ?」

太陽「ウイザード：ランド」「.いや、今一瞬セイバーの身体から赤黒い炎が. . .」

走介「ドライブ：ワイルド」「.そうか？俺には見えなかったけど」

太陽「ウイザード：ランド」「.」

ドライブの言葉を聞いて見間違えだったのかと思っていたら、その炎の影響なのかデザストームを弾き飛ばすことが出来た。

デザストーム「……うおっ!?やるな!……だがいいのか?その感情に身を墮とせばお前……終わるぜ?」

陽哉「セイバー」……黙れ!!!」

デザストーム「……ちっ、聞く気無しかよ。……しよーがねえ、ちよつと正気に戻すか。」

陽哉「セイバー」「何をごちやごちやと……!」

デザストーム「……いいのか?俺にばかり気を取られて?そんなんじや、大事

なもんを失つちまうぜ?」

陽哉「セイバー」「何を言つて……………」

ゆうほむ「……………きゃあ—————」
!!!!!!
「」

セイバーが聞き返そうとしたその時、俺達の後ろから悲鳴が聞こえた。セイバーを含め俺とドライブも後ろを振り向くと、そこには地面から生えた蠍の尻尾に襲われている侑と歩夢の姿があつた。

蠍の尻尾を見て俺はもう一度デザストームを見ると、そこにはいつの間にか背中から生えていた蠍の尻尾を地面に突き刺していたデザストームがいた。そう、つまりデザストームはセイバーの剣を受けつつ地面に尻尾を突き刺し、侑と歩夢を襲つたということ。

陽哉「セイバー」……………侑!歩夢!

走介「ドライブ：ワイルド」「なっ?! いつの間にも!」

太陽「ワイザード：ランド」「……くっ!」

侑「……う、うう……!」

歩夢「……く、苦しい……!」

デザストームの蠍の尻尾に刺された侑と歩夢は、突如苦しみだしその場に倒れる。そんな2人の姿を見て呆然とするセイバーをデザストームが俺達の方まで蹴り飛ばす。そして俺は即座にドライブに侑と歩夢を助ける様に指示する。

太陽「ワイザード：ランド」「……ドライブ! マッドドクターを! 早く!」

走介「ドライブ：ワイルド」「……ああ！」

ベルトさん『タイヤ、コウカーン！マッドドクター！』

走介「ドライブ：ワイルドドクター」「ちよつと痛いだろうけど我慢してくれよ！侑、歩夢！」

侑「……うぐつ！あ、ああああ！！！！」

歩夢「い、痛い！痛い痛い……！！！！」

陽哉「セイバー」「……侑、歩夢……」

毒で苦しんでいる2人を治そうとしている俺達を、あざ笑う様にデザストームは更なる絶望を俺達……特にセイバーに叩きつける。

「デザストーム「解毒しようとしても無駄だぜ？俺の毒は特殊でな！あと12時間後はその2人はぼっくりだ。」

陽哉「セイバー」「そ、そんな……！」

太陽「ワイザード：ランド」「くっ……ドライブ！」

走介「ドライブ：ワイルドドクター」「今やってる……ベルトさん、どうだ？」

ベルトさん『……残念ながら、奴の言っていることは本当の様だ。この毒は特殊過ぎて分析に時間がかかる……解毒剤が出来たとしても早くて一週間はかかるだろう。』

走介「ドライブ：ワイルドドクター」「……なっ!?それじゃ間に合わない！」

陽哉「セイバー」「どうすれば……侑……歩夢……」

デザストーム「……まあ、その毒を消す方法ならあるけどな？」

太陽「ウイザード；ランド」……なんだって？」

デザストーム「俺を倒せばいい。完全に、本ごとな？」

そのデザストームの言葉に、セイバーは再び火炎剣烈火を握り斬りかかろうとしたが、デザストームはその前に死風剣翠風を手裏剣の形に変え、俺達に向かって必殺技を放って来た。

陽哉「セイバー」「だったら今すぐ殺してやる……！」

デザストーム「……今のお前にさせる訳ないだろ？」

『回転！ニンニン！翠風速読撃！ニンニン！』

デザストーム「……………死風嵐絶斬（しっぷうらんぜつざん）。」

デザストームは絶大な威力の紫色と緑色の2つの竜巻を俺達に飛ばしてきた。2つの竜巻は1つに重なり、その威力を増していく。俺は皆を守る為、右手のリングを交換しそれを何度もベルトにかざし俺達の目の前に5枚の土で出来た壁を地面から出現させる。

太陽「ウィザード：ランド」……………まずい！」

『デイフェンド！デイフェンド！デイフェンド！デイフェンド！デイフェンド！』

デザストーム「……………じゃ、また会おうぜ。」

デザストームの放った竜巻が5枚の壁をことごとく破壊していき、何とか最後の壁が破壊されたと同時にデザストームの必殺技を防ぐことが出来た……が、土煙が消えた瞬間、すでにデザストームの姿は無かった。

太陽「ウイザード：ランド」……まさか、5枚の壁全て破壊されるなんて……！」

陽哉「セイバー」……デザスト！あいつは、あいつはどこだ！」

太陽「ウイザード：ランド」「逃げられた……」

陽哉「セイバー」「くそ……くそおおおおお
!!!!!!」

セイバーの声が、廃工場に木霊する。
人1体に・・・惨敗した。
・・・俺達3人は、デザストームという怪

第18話 赤き剣士は鎧を纏いて騎士となる。

——せつ菜視点——

生徒会の仕事を終え帰り支度をしていたちようどその時、太陽君から連絡を受けた。現在、歩夢さんと侑さんは飛瀬グループが業務提携している病院で入院しているというので、私は急いでその病院へ向かった。……歩夢さんと侑さんのいる病室に着くと、そこには人工呼吸器を付け静かに眠る2人の姿と、そんな2人の手を握りずつと謝っている陽哉さんの姿があった。

ゆうぼむ「…………ふうー…………ふうー…………」

陽哉「…………ごめん…………ごめん2人共…………俺の所為で…………ごめん…………！」

せつ菜「……………これは、一体……………」

私が病室の状況に呆気にとられていると、後ろから太陽君が来て私を病室の近くにあら休憩所に来るように言ってきた。

太陽「……………ああ菜々、来たね。早速で悪いんだけど、ちよつとこつちに来てくれるかな？」

せつ菜「……………え、え？太陽君、これは一体？どうして歩夢さんと侑さんは人工呼吸器に繋がれているのですか！」

太陽「その説明をするから、こつちに来て。」

せつ菜「……………は、はい……………わかりました。」

太陽君に連れられて休憩所に行くと、そこには同好会の皆さんと仮面ライダーの皆さんが揃っていた。

私達が休憩所に入ると、かすみさんが掴みかかる勢いで太陽君に詰め寄ってきた。

かすみ「……あ！太陽先輩！あれは一体どういうことなんですか!?お2人は大丈夫なんですよね!」

しずく「ちよつとかすみさん!」

璃奈「落ち着いて!」

太陽「……とりあえず今から説明するから、皆心して聞いてほしいんだ。」

そこから、今起きている連続殺人事件の調査をしている最中にデザストームという怪人が現れたこと。そして、侑さんと歩夢さんがそのデザストームの毒にやられてしまっ

たこと。今は、シフトマッドドクターというシフトカーの力で作った強力な鎮静剤を打ち静かに眠っていること。そして最後に、陽哉さんのあの状態のことも……。

絃輝「セイバーのあの状態はそういうことか……」

碧映「ドライブが打った鎮静剤の効果って後どれぐらい？」

太陽「ベルトさん曰く、未知の毒だから効力はそこまで無いかもしれない……」

エマ「そんな!?じゃあ、いつまた苦しみだしても可笑しくないって……?」

太陽「……はい。」

果林「何か、その毒を消す方法はないのかしら？」

太陽「……1つだけ。あいつの言うことを信じるなら、デザストーム本人を完全に倒せば、2人に注入した毒を消すことが出来るらしいんですが……」

天弥「……だつたら早く行こうぜ！」

太陽「ああ、だからセイバーとドライブを残して俺達でデザストームを倒しに行こうとおも……」

と、太陽君が言いかけたところで龍兔さんがそれを遮る様に手を上げて来た。

龍兔「ちよつと待った、俺はここに残ろうと思うんだけど。」

天弥「はあ!?何でだよ！」

龍兔「そんな特殊な毒なら、ドライブとクリムさんだけに分析させる訳にもいかないでしょ。だから俺も一緒に毒のデータを分析してみようと思う。人数は多い方が早く分析出来るだろうし……ってことで、璃奈も手伝ってくれないか？」

璃奈「わかった。私で力になれるなら、何だつてする。」

確かに龍兎さんと璃奈さんの2人がいれば、毒の分析もスムーズにいくかもしれないね……。そして龍兎さんの他にもう1人、勇真さんも手を上げここに残ることを提案してきた。

勇真「あの、僕もここに残ろうと思います。」

果林「……あら、貴方も残るの?」

勇真「……うん。ヒミコさんの力を借りれば、毒を浄化……。まではいなくても、痛みを抑えることは出来ると思います!」

太陽「なるほど……。じゃあ、ドライブとビルドとゴーストはここに残るってこと

で。残りのメンバーは俺と一緒にデザストームを探そう！」

と、太陽君が言い切ったと同時に、休憩所のドアが勢いよく開き、外から陽哉さんがとても辛そうな顔で出て来た。

陽哉「待ってくれウイザード！俺も行く！今度こそあいつを倒してみせる……！」

太陽「…………いや、それはダメだ。」

陽哉「な、何でだよ……！」

太陽「…………お前は今自分を見失ってる。そんな状態で連れて行く訳にはいかない。」

陽哉「でも…………！」

太陽「…………お前は普段、その剣に何を込めて戦ってる？」

陽哉「え…………何だよ急に…………」

太陽「いいから答えて。」

陽哉「えつ…………と、それは…………」

答えに詰まる陽哉さんを見て、太陽君はふうつと溜息を吐き踵を返す。そして、太陽君の言葉に陽哉さんは悔しそうに下唇を噛んでいる。

太陽「…………それが分かるまで、セイバーを戦わせる訳にはいかない。」

陽哉「…………っ！」

せつ菜「……………」

そしてそのまま、太陽君は病院を後にした。

—— 太陽視点 ——

病院を後にした俺達は、前回の戦いで惨敗したあの廃工場跡地に来ていた。

紘輝「……………ここが、お前等が戦った場所か」

碧映「……………でも、どうしてまたここに？」

太陽「……………なんとというか、奴はまたここに現れる様な気がして」

雷羽「犯人は事件現場に戻ってくる的な？」

太陽「まあそんな感じ……………」

デザスト「……………はあ〜ん。どうやら仮面ライダーは探偵ごっこが好きらしいな？」

俺達が話をしていると、何処からともなく声が響いた。その聞き覚えのある声の主は、まるで風のように気配を感じさせること無く俺達の背後に現れた。

太陽「……………っ!?! デザストーム!?!」

天弥「こいつが!?!」

碧映「まったく気配を感じ無かった……………!?!」

デザスト「その名前は変身した時のなんだがな……………まあいちいち訂正すんのもめんどくせえしいいか……………で? 炎の剣士はどうした?」

太陽「……………セイバーは今、戦える状態じゃない……………!?!」

デザスト「ははっ、だろうな……………じゃあお前等が俺の相手をしてくれるってことか?」

雷羽「侑さんと歩夢さんの為にも、お前を倒す!」

デザスト「いい心掛けだ……………じゃあ、行くぜ。」

『魔蠍死風忍者伝!』

そう言うと、デザストは自身の本を開く。それに合わせて俺達もそれぞれのアイテムを手に変身する。

たいてんこうあおらい 「!!!」
変身!!! 「!!!」

『ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー!』

『エ・レ・キ、オン!』

『オレンジアームズ!花道オンステージ!』

『タカ!トラ!バッタ!タ・ト・バ!タトバ!タ・ト・バ!』

『ライジングホッパー!』

太陽「ウイザード」「皆、大雑把な攻撃はなるべく無しで！慎重に行こう！」

天弥「フォーゼ：エレキ」「うおおおおお・・・!!!」

太陽「ウイザード」「あ、ちよ!？」

俺の言葉を無視し、フォーゼがデザストームへと向かっていく。フォーゼはビリーザロッドのプラグを3つのコンセントの内の1つに差し電撃を纏わせると、デザストームへ向けて電磁ネットを飛ばし捕まえて見せた。そう、これこそがフォーゼの狙いだっただ。

天弥「フォーゼ：エレキ」「・・・せい！」

デザストーム「……おお？」

天弥「フォーゼ：エレキ」「こうすれば忍者みてえなことは出来ないだろ？」

太陽「ウイザード」「あ、ああ……そういうことね。」

雷羽「ゼロワン」「折角フォーゼが作ってくれた機会だ！一気に行くぜ！」

碧映「オーズ」「うん！」

絃輝「鎧武」「……おっしやあ！これで終わりだ！」

フォーゼの作った攻撃の機会を逃すまいと、ゼロワン・鎧武・オーズの3人がそれぞれ武器を出し、必殺の態勢に入る。

『タイガーズアビリティ！チャージライズ！フルチャージ！』

『フレイミングカバンダイナミック！』

『トリプル・スキヤニングチャージ！』

『イチ！ジュウ！ヒャク！オレンジチャージ！』

雷羽「ゼロワン」「おりゃあー！」

碧映「オーズ」「せいやー！」

絃輝「鎧武」「せいはー！」

ゼロワン達3人の斬撃が電磁ネットの囚われているデザストームを襲う……だ

が、当のデザストームは何故か俺達の後ろに現れた。

デザストーム「おー、いいねえ。大爆発じゃねえか。」

鉦輝「鎧武」「・・・なっ!？」

太陽「ウイザード」「なんで・・・」

デザストーム「ここについて？お前等が倒したのは俺の分身体だけ？」

碧映「オーズ」「・・・そんなっ!？」

デザストームの言葉に俺達は一齐に振り返る・・・すると、そこには倒れたデザストームの姿があつたが、そのデザストームは風となつて消えた。

雷羽「ゼロワン」「手ごたえはあつたはず……！」

デザストーム「ははっ！それだけ俺の分身が高度だったってことだろ？……まあそれよりも……おらよっ！」

たいてんらいあおこう「」「ぐあああ……!?」「」

デザストーム「おーおー！今度はお前等が吹っ飛んだなあ！」

俺達の後ろに現れたデザストームは、剣に風を纏わせて俺達に放つて来た。俺達は不意打ちのその攻撃に反応出来ず、もろに受けてしまった。

天弥「フォーゼ：エレキ」「ぐ、ああ……！何つー威力の斬撃だよ……！」

雷羽「ゼロワン」「くっそ……！全然反応出来なかった……！」

デザストーム「……俺とお前等。どっちが先に潰れるか……面白くなって来たなあ！」

太陽「ウイザード」……くっ。」

——せつ菜視点——

太陽君達が病院から去った後、龍兎さんと璃奈さんはお手伝い要員としてしずくさん・エマさん・彼方さんの3人を連れて、歩夢さん達が寝ている個室の隣の個室で毒の分析を行っている走介さんとクリムさんの元へと向かって行った。残された私達のいる休憩所には重苦しい空気が流れる……。そんな中、歩夢さん達が眠る個室から2人の苦しむ叫び声が響いた。

ゆうぼむ「……………あ、あああああああ
!!!!!!」

かすみ「歩夢先輩！侑先輩！」

勇真「鎮静剤の効果が切れたんだ……………！」

果林「……………行くわよ、せつ菜！」

せつ菜「……………はい！」

私達が個室へ向かうと、そこには毒の痛みで跳き苦しんでいる歩夢さんと侑さんの姿があった。そんな2人を見て、私はかすみさんと果林さんの2人にタオルを持ってくる様にお願いと、2人はすぐに個室から出て行った。

ゆうほむ「……………うううぐつ……………!!!」

果林「……………歩夢！」

かすみ「……………侑先輩！」

せつ菜「凄い汗……………果林さん！かすみさん！2人はタオルを取って来てください！」

果林「……………ええ！」

かすみ「わかりました！」

かすみさんと果林さんが個室を出て行くのと同時に、勇真さんが腰にゴーストドライブバーを巻き手にはピンク色の眼魂を持ち、私の前へ立つ。

せつ菜「……侑さん、歩夢さん……」

勇真「……せつ菜さん、ここからは僕の出番です。」

せつ菜「勇真さん……」。

勇真「……任せて下さい。」

『アーイ！』

『バッチリミナー！バッチリミナー！』

勇真 「ヒミコさん、お力．．．お借りします！変身！」

『カイガン！ヒミコ！未来を予告！邪馬台国！』

ピンク色の眼魂をベルトにセットすると、そこからピンク色の半袖にロング丈のパーカーが出現し仮面ライダーゴーストに変身すると、勇真さんは歩夢さんと侑さんへ向けて淡いピンク色のオーラを放つ。

勇真 「ゴースト：ヒミコ」 「．．．はあ！」

せつ菜 「こ、これは．．．」

勇真さんの放ったオーラに包まれた歩夢さんと侑さんは、苦しそうだった顔が徐々に収まっていき、穏やかな顔になっていった。

勇真「ゴースト：ヒミコ」「……しばらくはこれで大丈夫だと思います。」

せつ菜「凄いですね……今のはどうやって？」

勇真「ゴースト：ヒミコ」「ヒミコさんには、浄化の能力があるんです！」

せつ菜「流石は一国の女王様ですね！ありがとうございます！勇真さん！ヒミコさん！」

勇真「ゴースト：ヒミコ」「……本当は毒自体を消すことが出来れば良かったんですが、すいません。」

せつ菜「いえ、気にしないでください。勇真さんがいなければ、走介さんとクリムさ

んを呼ぶことになっていました。．．．そうなれば、毒の分析が遅れ、歩夢さんと侑さんが苦しむ時間が長くなっていました。．．．重ねて、ありがとうございます。」

勇真「ゴースト：ヒミコ」「．．．そう言っていたら嬉しそうです。」

目の前にいる勇真さんには言えませんが．．．こう言う時、私にも何か力があつたらと、つい無い物強請りをしてしまいますね．．．。

そんな中、ふと周りを見渡すと、陽哉さんの姿が無いことに気付く。

せつ菜「．．．．．そう言えば、陽哉さんの姿が見えませんかね」

勇真「ゴースト：ヒミコ」「多分、まだ休憩所かと。．．．ウイザードさんに言われたことが、相当堪えたんでしょう。」

せつ菜「．．．．．その、太陽君は何故、陽哉さんにあんな．．．突き放す様なことを

言つたんでしよう？仲間なら、もつと励ますとか……してあげてもよかつたのでは？」

勇真「ゴースト：ヒミコ」……そうですね、その方法もあります。ですが、それは時として本人の為にはならないんですよ。ウィザードさんは信頼しているからこそ、教えてセイバーさんを突き放し、自分で考え、立ち上がるきっかけを与えたんです。」

せつ菜「……なるほど、励ますだけが信頼の形ではない……そういうことで
すね。」

勇真「ゴースト：ヒミコ」「ええ、そういうことです。」

太陽君が信じるなら、私も信じます。陽哉さん、貴方なら必ず立ち上がると！……少し悔しいですが、歩夢さんと侑さんを救えるのは貴方しかいません！

陽哉視点

俺が剣に何を込めるのか……。俺はウィザードに言われてから、火炎剣烈火を見つめながらずっと考えていた。

陽哉「俺が剣に、火炎剣烈火に何を込めて振るっているのか……。」

俺は、火炎剣烈火に何を込めて戦っているんだろう……。元の世界では、芽依ちゃんやゆきさん達を守りたい……。その一心だった。それはこの世界でも変わらない……。はずだった。けどあの時、デザストと戦っていたあの一時だけは……。歩夢と侑を、

守るべき人達のことを……忘れていた。

陽哉「そうか……。俺が火炎剣烈火に込めていたのは、大切な人達を守りたいって心……。ははっ、こんな大事なことをほんの一時でも忘れていたなんて……。」

大切なことを思い出した俺は、歩夢と侑が眠っている個室へと向かった。

——勇真視点——

せつ菜さんが隣の個室へ様子を見に行き、個室で僕1人だけになっていると、突如ド

アが開き、その音に振り返ると、セイバーさんが入って来た。

勇真「……！ああ、セイバーさん。」

陽哉「……ゴースト1人だけ？皆は？」

勇真「ビルドさんと璃奈さん、それからエマさんとしずくさんと彼方さんはドライブさんの居る個室です。せつ菜さんはさつきまでここに居たんですが、今は様子を見に隣の個室に行ってます。」

陽哉「そつか……あれ？じゃあ、かすみちゃんと果林さんは？」

勇真「あく……。せつ菜さんに頼まれてタオルを貰いに行つたんですが、多分果林姉えが迷子になつてるんだと思います。」

陽哉「……ああ、なるほど」

僕との会話を終えると、セイバーさんは歩夢さんと侑さんが眠っているベッドの真ん中へ立ち、2人の手をそつと握る。

ゆうぼむ「……ふうー……ふうー……」

陽哉「歩夢、侑……ごめんな。俺、2人のこと忘れてた。忘れちゃいけなかったのに、あの時、仲間が持ってた聖剣を取り返さなきゃ、それを持つてるデザストも、与えたゼウーデスも殺さなきゃ……そればかりだった！本当にごめん！でももう忘れたりなんてしない！だから……だから見てくれ！これからの俺を！」

勇真「……その様子だと、もう大丈夫そうですね。」

陽哉「ああ！ゴーストも心配かけてごめんな？」

勇真「いえ、セイバーさんなら自分の力で立ち上がれると信じていたので！」

陽哉「そっか、ありがとう！」

勇真「……さあ！お2人の為にも、ウィザードさん達の所へ行つてください！ここは僕達に任せてください！」

陽哉「ああ、行つて来る！2人のことをよろしく！」

そして、セイバーさんは分厚い本の形をした石を手に持ち、この場から去って行った。そして、セイバーさんを入れ替わる様にせつ菜さんが隣の個室から戻つて来た。

せつ菜「……今の、陽哉さんですか？」

勇真「ええ、セイバーさんはもう大丈夫です。きつと……いえ、絶対にデザストー

ムを倒してくれませよ！」

せつ菜「……そうですか、良かったです。本当に。」

その後、セイバーさんがこの場を後にしてから10分後にとても申し訳なそうにして
いる果林姉えと額に怒りマークを付けたかすみさんが帰って来た。

—— 太陽視点 ——

デザストーム「おいおい、この程度か？お前等本当に世界を救った仮面ライダーかよ
？」

天弥「くっそ……!!」

紘輝「せめてジンバー系が使えれば……!!」

碧映「ごめん、2人共……!!」

デザストームの斬撃を食らい、吹き飛ばされてからも果敢に攻めていた俺達だっただけ、フォーゼ・オーズ・鎧武の3人が変身解除させられてしまい、残るは俺とゼロワンの2人だけとなっていた。

雷羽「ゼロワン」「どんだけ速いんだよ、あいつ!」

太陽「ウイザード」「こっちの攻撃が全然当たらない……!!」

「デザストーム「あーあ、炎の剣士も来ねえみたいだし……じゃあな、仮面ライダー！」」

デザストームが俺達に近づき、本を死風剣翠風に読み込ませ様とした……その時だった。

陽哉「……ちよつと待った！」

デザストーム「……ああ？」

雷羽「ゼロワン」「……セイバー！」

廃工場跡地の出入口に、セイバーが立っていた。セイバーは手に分厚い本の形をした石を持ちながら俺達の方に近づいてくる。

デザストーム「よお！炎の剣士！やっと来たなあ！」

陽哉「デザスト・・・いや、デザストーム！俺が相手だ！」

デザストーム「ああ！来いよ！」

陽哉「ドラゴニックナイト・・・！大切な人達を守る為に、もう一度俺に力を貸してくれ！」

そう言うと、セイバーは持っていた石を前へ突き出すと、石にヒビが入り、中から赤と銀が混ざった光が漏れ出す。次の瞬間、石が砕けて中の本体が姿を現す。

『ドラゴニックナイト！』

『ドでかい竜をド派手に乗りこなす、ド級の騎士のドラマチックバトル・・・』

封印から解放された“ドラゴニックナイトワンダーライドブック”を開いたセイバーは、もう一度本を閉じ、腰のベルトへ収めると、火炎剣烈火を抜刀する。

陽哉「・・・変身!!!」

『烈火抜刀! Don't miss it! (The knight appears. When you side,)』

『ドメタリックアーマー! (you have no grief and the flame is bright.)』

『ドハデニックブラスター! (Ride on the dragon, fight

t.)
『』

『ドハクリヨックライダー！（Dragonicknight.）』

『ドラゴニックナイト！』

『すなわち、ド強い！』

陽哉「セイバー：ドラゴニックナイト（以下、ドラゴ）」「……………」

そこに立っていたのは、銀色の鎧に身を包んだセイバーだった。

陽哉視点

ドラゴニックナイトへと変身した俺は、目の前のデザストームと向かい合う。

デザストーム「ようやく、なったな？その姿に！」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「まるで、待ってたみたいなの言い方だな？」

デザストーム「ああ待ってたぜ？強い力と戦わなきゃ面白くねえからなあ！」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「……はあっ！」

向かってきたデザストームとの激しい剣戟の中で、デザストームは気になることを言

い始めた。

デザストーム「ふ、はっ！おおらあっ！」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「く、はっ、はあっ！」

デザストーム「……さっきの続きだけだよお？別に待ってたのは俺だけじゃないんだぜ？」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「……どういうことだ？」

デザストーム「すぐわかる。……あいつが出て来るまで、俺と遊ぼうぜ！」

そんな言葉と共に、またデザストームが俺に向かってきて、俺は火炎剣烈火で死風剣翠風を弾き、隙が生じたデザストームを斬った……が、その瞬間デザストームは風

となつて消えた。

デザストーム「……おおらあつ！」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「ふつ、はあつ！……っ!?」

そのことに一瞬驚くと、俺の背後にデザストームが現れ、死風剣翠風を突き刺そうと飛びかかって来た。だけど、俺は斬ったのが分身であるのは気付いていたから、左腕に装備されている「ドラゴニックブースター」の口を展開し、ブレイブドラゴンワンダーライドブックをリードして強力な火炎放射を後ろのデザストームに向けて放った。

デザストーム「残念だったな！そいつは分身だあ！」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「……ああ、分かつてる！」

『ドラゴニックブースター!』

『ワン!リーディング!』

『フレイムスパイシー!』

陽哉「セイバー：ドラゴ」「・・・はあっ!」

デザストーム「おお!?マジか!」

俺の放った火炎放射に驚いたデザストームだったが、流石は元の世界でも脅威だった戦闘センスを持つデザストーム。火炎放射が当たる寸前で自身の本を死風剣翠風を読み込ませると、紫の風を刀身に纏わせ火炎放射を斬った。

2つの強力な力がぶつかり、俺とデザストームは互いに吹き飛ばされた。

『一連！ニンニン！翠風速読撃！ニンニン！』

デザストーム「……はあっ！」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「……く、うあっ!？」

デザストーム「……うおっ!？」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「……はあ、はあ……!？」

デザストーム「……ははっ！楽しいなあおい！炎の剣士！もつともつと楽しもうぜ
！」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「この……戦闘狂！」

そうして再び俺とデザストームは剣戟を繰り返して行く。そして、もう何度目かの鏖
迫り合いの時……それは起こった。

デザストーム「……どうだ炎の剣士？だんだん楽しくなつて来ただろ？」

陽哉「セイバー：ドラゴ」そんなこと……あるか！俺は守るんだ！侑を！歩夢を！
この世界に生きる皆を！お前に……お前達に、この世界を思い通りになんてさせて
たまるか!!!」

俺の叫びに応える様に、火炎剣烈火が光を放ち始める。……すると、そんな火炎
剣烈火に呼応する様にデザストームの持つ死風剣翠風も光出した。

陽哉「セイバー：ドラゴ」……っ!?なんだ、これ!？」

デザストーム「……お！ようやくか。……じゃあな、炎の剣士。あつちでアイツがお待ちだぜ。」

デザストームのその言葉を最後に、俺の意識は途切れた……。

??? 「おーい！飛羽真、起きろ！……起きろって……言ってるんだろ！」

陽哉「……ぶほっ!？」

突如俺のお尻に激痛が走り、その衝撃で俺は目を覚ます。焦った俺が後ろを振り返る

と、そこにいたのは……

陽哉「痛ったあー！一体誰が……って、え？」

???「お前マジないわ……！」

陽哉「何で……ここに、蓮が……!?」

そう、そこに立っていたのはかつて俺と共にメギドやディヴェンジャーと戦った仲間
の一人……デザストームの持つ死風剣翠風の本来の姿である風双剣翠風に選ばれた
風の剣士の緋道蓮だった。

蓮「久しぶりだな飛羽真！……って、今は陽哉だったっけ？」

陽哉「本当に、蓮なのか・・・？ていうか、ここ何処っ!？」

蓮「いつぺんに質問すんなよ!・・・まずここだけど、ここはお前の精神世界だ!」

陽哉「精神・・・世界。この白い空間が・・・?」

蓮「・・・そ!それで俺のことだけど、俺は緋道蓮であつて緋道蓮じゃない。」

陽哉「・・・ど、どうということ?」

蓮「俺は風双剣翠風・・・あゝ、今は死風剣翠風になつちまつたけど、俺はその死風剣翠風に宿る残留思念みたいなもんだ。」

残留思念・・・。ということとは、やつぱり本物の蓮はもう・・・。俺の心を感じ取ったのか、目の前にいる蓮が答えて来た。

蓮「お前が思っている様に……本物の俺はもう死んでる。それはお前も見ただろ？」

陽哉「あ、ああ……」

そう、本物の蓮は俺の目の前で、ゼウーデスに四肢を斬られ、最後に首を刎ねられて死んだ。あれで生きている……という方が無理がある。実際に目の前の蓮は現実世界ではなく俺の精神世界に現れた……ということは、この目の前の蓮が言っていることは本当だということになる。

陽哉「……ちよつと待てよ？残留思念ってことは……お前は……」

蓮「……まあ、あんま時間は無いなあー。正直これも賭けだったし。」

陽哉「……賭け？」

蓮「・・・そ。今回のこの現象を起こすのに、お前にはドラゴニックナイトを使える様になつてもらふ必要があつたんだよ。」

陽哉「何でドラゴニックナイトを？他じゃ駄目だったのか？」

蓮「・・・キング・オブ・アーサーならギリギリだけど、确实にってなるとドラゴニックナイトの方がいいな。」

もう少し蓮と話をしていたいが、そんな時間が無いんだと思う。目の前にいる蓮は本題を切り出してきた。

蓮「もうあんま時間無いな・・・。じゃあ本題だけどさ・・・陽哉！」

陽哉「は、はい！」

蓮「……お前、まだ死風劍翠風を取り返して元に戻そうとしてるだろ？」

陽哉「え……何で……」

蓮「火炎劍烈火を通してお前の考えてることが流れてきたんだよ。で？ 実際そうなん
だろ？」

陽哉「それは、まあ……。だって、あれはお前の大事な聖劍じゃないか！」

蓮「それなんだけどさ……」

するとここで、蓮が信じられないことを口にする。

蓮「無理なんだよね。翠風を元に戻すのは。」

陽哉「……それって、どういう……!?」

蓮「あの剣は、ゼウーデスの力でデザストと一体化してる。デザストを倒せば翠風も消える。だけどデザストを倒さなきゃお前が守ろうとしてるあの女2人は死ぬ。」

陽哉「そんな……。それじゃあ、どうしたら……。」

俺の迷いにイラついた蓮が、俺の胸ぐらを掴んできた。

蓮「お前……! 何悩んでんだよ! お前は守りたい奴等がいるんだろ! その為にここにきたんだろ! だったら迷ってんじやねえよっ!」

陽哉「けどそれじゃあ、お前が……!」

蓮「……確かに俺は……いや、俺達は死んだ。けどな！俺や、賢人君や倫太郎、尾上さんに大秦寺さん！他の皆も！俺達の意味は、お前の中で生きてる！形見とか無くても……それはずっとずっと変わらない！だからお前は！お前の守りたい者（もん）の為に戦え！」

陽哉「蓮……。分かった！約束する！俺はお前達を忘れない！絶対に！だから……だから俺と一緒に戦ってくれ！」

蓮「……最初っからそのつもりだ！だからまずは、あの骸骨野郎をぶっ倒してこい！」

そして、蓮との誓いを胸に、俺の意識は再び現実世界へと戻った。

蓮「……賢人君、倫太郎……。やっぱりあいつなら……。陽哉なら……。きつと2人のことを……」

現実世界へと帰って来た俺が認識した時、さつき精神世界に行く直前のデザストームとの鏝迫り合いの最中だった。

陽哉「セイバー：ドラゴ」「……はっ！ここは、現実世界か!？」

デザストーム「……よお、帰って来たなあ。どうだった？久しぶりのアイツの顔は。」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「……嬉しかったよ。残留思念とはいえ、久しぶりに蓮

に会えて……本当によかった。」

デザストーム「そうか……じゃあ、どうすんだ？」

陽哉「セイバー：ドラゴ」……ああ、蓮との約束を守る……デザストーム！
お前は俺が倒す！そして、侑と歩夢は俺が助ける！」

デザストーム「……はっ、そうかよ……だが俺はそう簡単にやられねえぞっ！」

『一連！ニンニン！翠風速読撃！ニンニン！』

そう言うと、デザストームは死風剣翠風に本を読み込ませ、刀身に風を纏わせて俺に向かって来る。俺はそれを避けることなく、激痛覚悟で肩で受けた。

デザストーム「……何っ!？」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「……ぐっ、あつ……！」

デザストーム「……お前、バカか？そんなことしたら死ぬぜ？」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「お前を倒すなら、多少は身体を張らないとな……！それに……これでお前を捕らえることが出来た！」

デザストーム「……おまつ、最初からこれが狙いか!？」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「行くぞ!……物語の結末は、俺が決めるっ!!!!」

デザストームの技を肩で受けた俺は、逃げられない様にデザストームの腕を掴んだまま、火炎剣烈火をソードライバーに納刀してドラゴニックナイトワンダーライドブックを押し込み、もう一度火炎剣烈火を抜刀して必殺技を発動した。

炎の斬撃を0距離で受けたデザストームは吹き飛んでいった。数メートルまで飛ばされたデザストームふらつきながらもゆっくりと立ち上がる。だが、その身体は徐々に綻び始めていた。

デザストーム「……ちっ、油断しちゃった。はあ、はあ……。ははっ、いいなあ！最高だぜ炎の剣士！……最高ついでに1つ警告しといてやるよ。」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「……警、告……。？」

デザストーム「……心は強く持てよ？」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「……待て！どういう意味だ！」

デザストームの警告に、俺は意味が分からず聞き返そうとしたが、その答えが返って

くることは無かった。何故ならデザストームは……その言葉を最後に身体が消滅し、死風劍翠風も消え……最後に残ったアルターブックも地面に落ちた瞬間に、粉々に崩れて消えた。

変身を解除してもなお、デザストームの最後の言葉が引つ掛かり、呆然としていたら、ウイザードたちが駆け寄って来た。

太陽「……やったな、セイバー。」

陽哉「……あ、ああ。」

雷羽「ていうかお前！その傷大丈夫かよ！」

陽哉「え？……あ、痛っ!?あいたたたっ!？」

ゼロワンの指摘に、さっきデザストームから受けた肩のダメージの痛みが来て、俺は

その場に崩れ落ちた。

碧映 「これは、大丈夫じゃないね・・・」

紘輝 「とりあえず、病院に戻ろうぜ！歩夢たちのことも気になるし！」

天弥 「よっしゃー！じゃあ俺がセイバーを運んでくぜ！」

こうして、俺はフォーゼの肩を借りて、ゼロワンの病院へと戻った。

俺達が病院に戻り、歩夢と侑が寝ている個室の前まで来ると・・・中からかすみちゃんとせつ菜ちゃんの泣き叫ぶ声が聞こえ、俺達は慌ててドアを開いた。

雷羽「ちよ、なんだなんだ!?!めっちゃ声響いてんだけど!」

陽哉「と、とりあえず中に入ってみよう!」

俺達の中へ入ると、そこにはベッドから起き上がっている歩夢と侑の姿があり、かすみちゃんや侑を、せつ菜ちゃんが歩夢に抱き着きわんわん泣いている。他にも部屋を見渡すと、同好会の皆がそれぞれ抱き合ったりして泣きながら喜んでいる。

すると、俺達の存在に気付いたゴーストが、果林さんに抱き着かれて身動きが取れない中、なんとか片腕を出し、俺達を迎え入れた。

勇真「・・・あ、皆さん!戻って来たんですね!」

歩夢「え！陽君帰って来たの!？」

侑「陽——!」

陽哉「……歩夢、侑……！目が、覚めたんだな！よかった……本当によかった
！」

侑「ちよ、陽っ!?!どうしたのその傷!？」

歩夢「まさか、私達のせいで……?」

陽哉「いや、全然気にしなくていいから！ほんと！すぐ治るし！な、ドライブ！」

走介「ちよ、突然振るなよ!……まあ、治すけどよ？痛みは我慢しろよ?」

陽哉「わ、わかった……!」

こうして、俺の肩の傷はドライブのマッドドクターの力で治してもらった。……めつつつつちや痛かったけど。そして傷の治った俺は、侑と歩夢の手を取り、再び約束を交わす。

陽哉「……侑、歩夢。約束を破つてごめん。……だからもう一度させて欲しい。俺はもう2度と2人を危険な目に遭わせない！約束する！今度こそ俺が2人を守る！」

歩夢「陽君……！うん！よろしくね！」

侑「頼りにしてるよー！」

陽哉「……ああ！」

—蓮視点—

陽哉が去って、俺はまた死風劍翠風の中へ戻って来た。すると、何者かの気配を感じ振り返ると、デザストが立っていた。

蓮「・・・よお、まさかお前が俺に協力してくれるなんてな。・・・意外だった。」

デザスト「はっ、単なる暇つぶしだ。あんな奴の言いなりになるのなんてごめんだしな。」

蓮「蘇らせてもらったのか？」

デザスト「……関係ねえよ。つーか、本当にドラゴニックナイトだけでいいのかよ？ どうせなら最後まで解放させた方が良かったんじゃないか？」

蓮「いや、まあドラゴニックナイトだけじゃ駄目だろうな。だけど、俺の維持時間的にもドラゴニックナイトを解放させた時しかこうして話せなかつたし、しよーがねえよ。」

デザスト「ほーん。……で？ 勝てるのか？ あいつは？」

蓮「今のままじゃ無理だろうな。クロスセイバーの力も失われちゃってるし……けど、あいつなら大丈夫だ！ きつと……あの2人のことも……」

デザスト「……そうかよ。……ちつ、もう時間か。じゃあ、行くか？」

蓮「……ああ、そうだな。」

こうして、俺とデザストは2人で光の向こうへと消えていく。陽哉・・・お前は9人の中で一番辛く、苦しい戦いを強いられるだろうけど、お前なら大丈夫だ！この世界のこと、鍵のことを任せただぞ！

デザスト「・・・つーかお前、紅シヨウガ入れられる様になつたのかよ？」

蓮「・・・うっせ。」

第19話 闘魂デッドヒート!

——勇真視点——

デザストームとの戦いから1週間、今日は土曜日で僕・果林姉え・彼方さん・ドライブさんの4人で東雲学園という学校に来ていた。それは何故かというところ……

彼方「ラブリー・はるかあ!ラブリー・はるかあああ!!!」

走介「マイエンジエーはるか!!!!
ふうっふうううう
!!!!!!」

勇真「……え、えつと……果林姉え?お2人共どうしちゃったの?」

果林「彼方には遙ちゃんっていう妹さんがいるのよ。彼方は遙ちゃんをすっごい溺愛していて、遙ちゃんの出るライブの時はいつもこうなの。・・・まさか、走介もだつたなんてね。・・・ほら、あそこ。ちょうどセンターにいるのが遙ちゃんよ。」

勇真「・・・な、なるほど・・・」

そう、今日は彼方さんの実妹さんの近江遙さんが所属している東雲学園スクールアイドル部の定期ライブがあり、僕はドライブさん達に連れて来られていた。でもまさか、あのいつもおっとりしている彼方さんだけじゃなく、ドライブさんまで暴走しちゃうなんて・・・。

彼方「ちよつと2人とも！何やってるの！速くそのサイリウムを振って遙ちゃんを応援して！」

走介「速くしろよ！1分1秒でも無駄にすんじゃねえ！遙の可愛さをその眼に・・・い

や、眼球の裏まで焼き付けまくれ!

勇真「ひ、ひいい……!」

果林「……勇真、ここは大人しく従った方がいいわ。」

勇真「う、うん……。」

こうして僕と果林姉は、彼方さんとドライブさんの鬼の指導を受けながら何とか東雲学園スクールアイドル部のライブを観終えた。

そして数分後、東雲の制服に着替えた遥さんが、僕達の所へやって来た。

遥「お姉ちゃーん! お兄ちゃーん!」

彼方「遥ちゃーん!!! 今日可愛かったよーー!!!」

走介「最高だったぞ遥！俺、俺・・・！おっと、思い出したら目頭が熱く・・・」

遥「も、もぉー！お姉ちゃんもお兄ちゃんも、大袈裟過ぎるよぉ！」

果林「ほんと、彼方も良く疲れないわね。そのテンション・・・」

遥「・・・あ！果林さん！すみません、挨拶が遅れちゃって・・・！」

果林「ふふつ、気にしないでいいわ。それよりも今日のライブ、とっても良かったわ
！」

遥「ありがとうございます！それから、えつと・・・阿蘇勇真さん、ですよ？初め
まして！近江彼方の妹の、近江遥です！」

突然の遥さんからの挨拶に、一瞬キョドってしまった僕だったが、何とか挨拶が出来

た。そんな僕を見て口元を抑えて笑ってるのをバレない様になっている果林姉え。

勇真「あ、あ、えつと・・・は、初めまして！阿蘇勇真です！」

果林「・・・ぷふつ、慌てすぎよ勇真www」

勇真「ちよ、果林姉え！笑いすぎ！」

そんな僕の肩に手を回し、うんうんとつつごいうざがらみをしてくるドライブさんと
彼方さん。

走介「いやー、しょうがねえよ！遥みたいな天使に声かけられたら誰だつてキョド
るつて！な、彼方？」

彼方「そうそう！天使の存在に我を忘れるのは人間の性だから、自信持っていいたいんだよー君！」

勇真「．．．う、うざい。僕、初めてこの2人がうざいって思いました．．．。」

遥「ご、ごめんなさい！お姉ちゃんもお兄ちゃんも、こうなったら私の話を聞かなくて．．．。」

勇真「い、いえ．．．気にしないでください。遥さんの所為ではないので．．．。」

ちよつとうざいけど平和な日。僕はこういつた日が嫌いじゃない。だけど、僕が仮面ライダーである以上．．．こういつた平和な日々は突如として壊される。

???「あれあれあれ．．．？そこにいるのは正義の味方の仮面ライダードライブじゃないかな．．．？」

走介「……っ! 誰だ!」

??? 「よお、久しぶりだな泊……いや、進導走介君♪」

走介「アンタは……仁良、光秀……!?」

突如ドライブさんと呼ぶ声、その声に振り向くと……そこにはメガネを掛けた嫌味
そうな顔の男性が立っていた。ドライブさんはその男性のことを知っているらしく、ひ
どく驚愕している。

仁良「おやおやおや……? 聞き間違いか……? 今上司を呼び捨てにしなかったか
? 進導くん?」

走介「何で、何でアンタがここにいる! アンタはあっちの世界で刑務所に入ってたは

ずだ！」

仁良「ゼウーデス様に忠誠を誓う代わりにこの世界に連れてきてもらったんだよくん
！」

彼方「……そー君、知り合いなの？この人……」

遥「お兄ちゃん……」

走介「……2人共、俺の後ろに隠れてるんだ。」

目の前の仁良と言われた男性に敵意を感じた僕とドライブさんは、果林姉え達を自分達の後ろに隠す。そして、そんな行動が気に食わなかったのか、仁良はイラつきながら懐から少し形の違うバイラルコアを取り出す。

仁良「……ちつ、いいご身分で羨ましいなあく進導！本当に癩に障る奴だぜ……！」
こうなったらお前の大切にしてるもん全部ぶっ壊してやるよお！」

走介「……彼方。遙のことを頼む。」

彼方「う、うん……！わかった！」

仁良がバイラルコアを自身の身体に埋め込もうとした……その時、ステージの表の方で観客に来ていた人達の悲鳴が聞こえた。僕達はその声に驚いたが、仁良はニヤニヤと不気味な笑顔を浮かべる。

果林「な、なにっ!？」

勇真「表の方で何かがあつたんだ！」

仁良 「ヒツヒツヒツ！ここに来たのが俺一人だなんて言っていないぜえ？」

走介 「ということは、あつちにもか・・・！」

勇真 「ドライブさん！あつちは僕が行きます！」

走介 「ああ！任せた！」

果林 「待って！私も行くわ！」

こうして、僕と果林姉は仁良をドライブさんに任せ、表の方へと向かう。

—— 遥視点 ——

私の所属する東雲学園スクールアイドル部の定期ライブが終り、ステージ裏で待つてくれているお姉ちゃん達と合流し、話をしていると・・・走介お兄ちゃんの知り合いらしい不気味な雰囲気のある人が現れ、空気が一変した。

遥 「果林さん達大丈夫なの・・・？」

彼方 「・・・勇真君、強いから大丈夫だよ！それよりも遥ちゃんは絶対に彼方ちゃんから離れちゃ駄目だからね！」

遥 「う、うん・・・。」

私自身、走介お兄ちゃんや勇真さんが仮面ライダーというヒーローになることは前にお姉ちゃんとお兄ちゃんから聞いていた。けど、実際にそれを見たことが無い私はどうしても不安に思ってしまう。……そんな中、ステージ裏に走介お兄ちゃんの愛車のトライドロンが現れる。

ベルトさん『……走介！彼方と遙も無事か！』

走介「ベルトさん！待ってたぜ！」

ベルトさん『何か、良からぬ気配を察知してね。敵は……まさかつ、仁良光秀か？しかし、何故彼が？』

走介「……どうやらゼウーデスの奴に連れて来られたらしい。」

ベルトさん『……ふむ、そういうことか。』

走介「行くぞベルトさん！彼方達を守るんだ！」

ベルトさん『OK！スタート・ユア・エンジン!!』

仁良「アンタは進導にいつもくっ付いてるベルト……！いいだろう、お前達2人共俺の力でぶっ倒してやるよお！そして、ゼウーデス様に褒めてもらうんだ！」

ベルトさんを腰に巻いた走介お兄ちゃんは、シフトカーを左腕のブレスレットに挿し、仮面ライダードライブに変身する。走介お兄ちゃんが仮面ライダーに変身すると同時に、仁良と言う人もシフトカーによく似たミニカーを身体に埋め込むと、怪物に変身した。

走介「……変身!!!」

ベルトさん『ド、ライブ！ライブ・スピード!!』

仁良「……うあああああ
!!!!!!」

遙「お兄ちゃんが変身したところ、初めて見た……!」

彼方「……見てて遙ちゃん！ここからのそー君は凄いよ!」

走介「ドライブ」「仁良のあの姿……やっぱただのシーフロイミュードじゃないよな？」

ベルトさん『……うむ。あの螺旋状の角やあの特徴的な武器……用心に越したことは無いだろう。』

走介お兄ちゃんとベルトさんが警戒する中、怪物に変身した仁良という人は、自慢げに語る。

ギ・シーフ・バディヴェンジャー（以下、ギ・シーフ・バ）「ヒヒヒッ！驚いたか？驚いたよな？これが俺のディヴェンジャーとしての姿！その名も、ギ・シーフ・バディヴェンジャー！……さあ、お前のその軟らかそうな装甲を砕いてやるぜえ！」

走介「ドライブ」「やれるもんならやってみろ！……はあっ！」

仁良さん……こと、ギ・シーフ・バディヴェンジャーは下がトゲ付きハンマーの二又の槍を振り回しながら走介お兄ちゃんに向かっていく。走介お兄ちゃんは車のハンドルが付いた剣で迎え打った。

ギ・シーフ・バ「ヒヒヒッ！おらおらあ！これでも食らええ！」

走介「ドライブ」「ふ、ほ、くうっ、はあっ！」

ギ・シー・バ「……ぐああああ!? ……なーんてな! そんな攻撃じえんじえん効きましえーん!」

走介「ドライブ」……なにつ!?

ギ・シー・バの攻撃をいなしつつ反撃をした走介お兄ちゃんだったけど、相手にはまったく効いていないらしく、ギ・シー・バは煽る様な仕草をして走介お兄ちゃんをバカにしてくる。

ベルトさん『……どうやら相当頑丈な様だね。』

走介「ドライブ」……性格諸共かなり厄介になつてるな……」

ギ・シー・バ「おほほお〜! 流石は仮面ライダー! お強いですなあ〜? なら、こつ

ちならうだ!」

二又の槍で攻撃をしていたギ・シーフ・バは、今度は武器を半回転させてハンマーを主武器に変えて攻撃してきた。

ギ・シーフ・バ「おーらっよっ!」

走介「ドライブ」「はっ! は、え、はあっ!? ハンドル剣が折れたあ!」

ギ・シーフ・バ「ギャハハハハッ! ざまあーみる! バーカー!」

ギ・シーフ・バの上段から振って来たハンマーに合わせてハンドル剣（やつぱりお兄ちゃんは独特なネーミングセンスがあるなあ . . .）を振り上げた . . . けど、相手のハンマーが頑丈過ぎたのか、ハンドル剣の刀身が折れてしまった。

ギ・シーフ・バ「……………それじゃあそろそろ終わりにしてやるよ。じゃあな、仮面ライダー。」

走介「ドライブ」……………ぐあああああ
「?!?!?!」

彼方「そー君！」

遥「お兄ちゃん！」

ギ・シーフ・バの振り上げたハンマーの威力が強すぎたのか、ドライブの胸部装甲が凹んだだけじゃなく変身も強制解除され、走介お兄ちゃんは生身になってしまう。

走介「ぐ、あ……………!や、やばい……………!」

ギ・シーフ・バ「ヒヒヒヒッ! 変身解けちゃったなあ? かわいそーに!
じゃあそのベルトを壊して完全に終わらせてやるよ進導おお!

走介「たとえば変身が解除されても 彼方達だけは守る!」

ギ・シーフ・バ「 はんっ! どこまでもかっこいいこつたなあ! だがなあ
? 死んだら意味ねーんだよお! 今度こそ親父と同じ所に送って や る」

遙「 ?」

ポロポロになりながらも両腕を広げて私達を守ろうとする走介お兄ちゃんに、ハンマーを振り下ろそうとしたギ・シーフ・バだったけど、私と目が合った瞬間、ポロリとハンマーを地面に落とした。

ギ・シーフ・バ「……お、おおお！俺好みの可愛い子がいるじゃねえかあー！お、おいそのツインテールのエンジェルちゃん？名前は……何て言うんだ？」

遥「え、私……ですか？えっと、近江遥……です。」

彼方「遥ちゃん駄目だよ！知らない人に名前教えちゃ！」

遥「あ、ご、ごめんね。お姉ちゃん……」

突然名前を聞かれ、思わず教えてしまった私は、お姉ちゃんが叱ってくれたことで我に返ったけど、目の前のギ・シーフ・バは身体をクネクネさせて何故か興奮？している。

ギ・シーフ・バ「遥……遥たん！何て素晴らしく、可愛らしい名前なんだ！これは神が……ゼウーデス様が授けて下さった出会い！デュフ、デュフ……！決めた！遥たんを俺の妻にする！一生俺の側で愛でてあげるよ、遥たーん！」

遥「ひ、ひい……!」

何故かハアハアと息を荒くしながら私を見て来るギ・シーフ・バ。そんな不気味なギ・シーフ・バにおびえていると、今まで黙っていた走介お兄ちゃんがむくりと立ち上がる。と……その顔は、途轍もない程に怒りに満ち溢れていた。

走介「……おいこら仁良。何俺のマイエンジェルに気持ち悪い目向けてんだ？」

ギ・シーフ・バ「貴様!また俺のことを呼び捨てにしたな!それに何だ上司に向かってその物言いは!」

走介「……うるせー!!!もう駄目だ……完全にぶち切れちゃったよ。俺の脳細胞が……いや!全細胞がオーバーヒート起こしそうだ!!!」

彼方「そーだそーだ！ 遙ちゃんに付く悪い虫を追い払っちゃえそー君！」

遙「お、お姉ちゃん……!?」

見ると、隣にいるお姉ちゃんのいつもおっとり優しい目が、怒りで信じられないくらいつり上がっている。そしてもう一つ……

ベルトさん『……むむ。走介！ どうやら今の君の感情に反応して、デッドヒートが解放された様だ！』

走介「……来……い……!!
 !!!
 デッドヒート……!!
 !!!
 !!!」

ベルトさんの言葉に返事する代わりに空に向かって叫んだ走介お兄ちゃん。数秒後、サイドカーが付いたバイクの様な形をしたシフトカー“シフトデッドヒート”が現れ、

ギ・シーフ・バを攻撃した後に走介お兄ちゃんの手元にやってきた。

ギ・シーフ・バ「……お、な、何だ!? 痛でっ!?」

走介「今の俺について来れるのはお前だけだ! 行くぞ、デッドヒート!」

ベルトさん『……ほ、程々に頼むよ、走介……。』

走介「……変身つつつつつ

!!!!!!!」

ベルトさん『ド、ライブ! タイプ・デッドヒート!』

車の窪みにバイクの様な模したパーツを嵌め、左腕に巻いているブレスレットに怒りのままに装填すると、さっきまでのドライブとは違う、白のボディスーツに赤い装甲を纏い、肩掛けタイヤの他に右肩に小さなタイヤを装備したドライブに変身した。

ギ・シーフ・バ「・・・なっ!? そ、その姿は・・・!?」

走介「ドライブ：デッドヒート」「俺の大切なマイエンジェルに手を出そうとしたんだ・・・こっちの世界に来たことを後悔させてやるよ!!!!!!」

ギ・シーフ・バ「ひ、ひいいい・・・!!!」

東雲学園のステージの観客席にいた眼魔スペリオル・デスパーフエクトダイヴェンジャー（以下、眼魔スペリオルD）を発見した私と勇真。勇真が急いでゴーストに変身してダイヴェンジャーと交戦している間に私は残っている観客の人達を避難させていた。

果林「さあ！皆落ち着いて行動して！大丈夫よ！必ずゆう．．．あの人を助けてくれるわ！」

あらかた避難誘導を終えると、勇真がダイヴェンジャーの攻撃を受けて吹き飛ばされていた。

果林「．．．ふう。あらかた避難は済んだわね．．．」

勇真「ゴースト」「ぐああああ．．．！！！！」

果林「……っ！勇真っ!？」

勇真に近づきたいけど、私の位置は眼魔スペリオルドを挟んでいる為、近づくことが出来ない。それでも私は何とかしたくてある事を思い付いた私は、預かっていた勇真のリュックの中にある巾着袋と私のバツクの中を漁る。

果林「……あつたわ！ベンケイ眼魂！それと……クモランタン！お願い、勇真を助けて！」

自分のバツクからクモランタンを取り出し、アニマルモードに変形させた私は、ベンケイ眼魂をクモランタンの背に乗せ、勇真の元へ向かわせた。

クモランタンは勇真の元へ行く際に眼魔スペリオルドの顔に特殊な糸を放出し、時間を稼ぐと勇真の元へと駆け付けた。

眼魔スペリオルド「……ぐっ、何っ!？」

勇真「ゴースト」「……クモランタン?それに、ベンケイ眼魂まで!そっか……
果林姉えが。有難く使わせてもらうね!クモランタン!力を貸してくれ!」

クモランタン「……!」

勇真「ゴースト」「ベンケイさんも、お力……お借りします!」

ベンケイ眼魂のスイッチを押した勇真は、腰のゴーストドライバーに装填する。すると、丈が腰までしかない白いパーカーが出現し、そのパーカーを羽織ると、今度はガンガンセイバーをナギナタモードに変形させてクモランタンを先端に取り付け、ガンガンセイバーハンマーモードに変形させた。

勇真「ゴースト：ベンケイ」「……これなら！」

眼魔スペリオルド「……ほう。如何にもパワーが有りそうですね？ではこちらも、これを使わせて貰いましょう。」

そう言うと、眼魔スペリオルドは前にも見たことがある眼魔アイコンとは少し形の違う眼魔アイコンを取り出し、スイッチを押すと左腕に装備されたブレスレットに装填した。

すると、そのブレスレットから鎧の様なロング丈のパーカーが出現し、それを羽織ると、カブトムシの角の様な形をした槍を手に取る。

『ライノセラスビートルオルフェノク！』

『ローディング！』

眼魔スペリオルDライノセラスピートル（以下、眼魔スペリオルDR）「さあ、行きま
すよ！」

勇真「ゴースト：ベンケイ」「・・・はあっ！ふ、はあっ！」

眼魔スペリオルDR「・・・なるほど、これは確かにパワーが有りますね。・・・
ですが！」

勇真「ゴースト：ベンケイ」「ぐっ、がはっ!？」

勇真の攻撃に避けながら冷静に分析していた眼魔スペリオルDRは、右手で勇真の振
るったガンガンセイバーハンマーモードを受け止め、無防備になった勇真の身体を槍で
斬り上げた。

眼魔スペリオルDR「……貴方はまだまだ力が弱い。その武器も、振り回されているではありませんか。」

勇真「ゴースト：ペンケイ」「ぐ、うう……！そんな、こと……！」

眼魔スペリオルDR「認めないのは勝手です。では、今度はこれで終わらせてあげましょう。」

そう言うと、眼魔スペリオルDRは別の眼魔アイコンを取り出すと、さつきと同じ様に左腕のブレスレットに装填した。

すると今度は、丁度みぞおちのところぐらいまでしかないパーカーが出現し、それを羽織ると、刀身が枝分かれした剣を手取る。

『ダイアーアンデッド！』

眼魔スペリオルDD「おや、身体を消し去るつもりで電撃を放ったのですが……流石は仮面ライダーですね。」

勇真「ま、だ……まだだ！僕は、負けない……！」

眼魔スペリオルDD「……ふむ。理解出来ませんね……。貴方は確かに力は弱い……。ですが、人間としては、良い物を持っていると思います……。だからこそ分らない。どうして貴方は卑しく、平気で他者を罵り悦に浸る人間共を守るのです？仮面ライダーだから？違うでしょう？貴方はそんな理由で戦っている様には見えない。」

変身が解除させられても、立ち上がろうとする勇真を見て、眼魔スペリオルDDは顎に手を置き、疑問を投げかけて来た。そんな眼魔スペリオルDDへ、勇真はふらついた脚で立ち上がりながらゆっくりと、静かに口を開く。

勇真「……確かに、多くの人間は自分を肯定し、他者を蔑み貶す人達ばかりだよ。ただどね、全ての人間がそうじゃない。人の中には、現状を変えようと世界の理不尽に抗う人達がいる。そんな人達の心の火種は小さくて、何かあるとすぐに消えてしまうけど、火種っていうのは1つ1つが手を取り集まると、火になるんだ。そして更に集まると、火は猛々しく燃え上がる炎になる！僕はね、その火種から炎になる過程を見るのが好きなんだ……だから僕は戦うんだ！いつの日か世界中にいる皆が1つの炎になって、手を取り合える……そんな幸せに溢れた世界を見る為に！！！」

果林「勇真……何っ!？」

勇真の心の叫びに呼応する様に、眼魂が入っている巾着袋の中が光出す。その光に思わず巾着袋の口を開けると、1つの眼魂の形をした石が浮上し、勇真の方へと飛んで行った。

果林「石が・・・光って・・・きやつ！」

勇真「・・・!?こ、これは・・・そっか、力を貸してくれるんだね。僕と一緒に、僕の心の炎と共に、燃え上ろう！行くよ、闘魂ブースト眼魂!!!!」

飛んで行った石を勇真が掴むと、石が砕け赤と黒の眼魂が姿を現すと、勇真はその眼魂のスイッチを押した瞬間、勇真の身体が炎に包まれる。その炎の中で眼魂をブーストドライブバーに装填すると、所々炎を模したパーカーが出現し、勇真は通常のブーストとは違う赤いスーツに身を包むと、炎を模したパーカーを羽織る。

『一発闘魂!』

『アーイ!』

『バッチリミナー!バッチリミナー!』

勇真「……変身!!!」

『闘魂カイガン! ブースト! 俺がブースト! 奮い立つゴースト! ゴー! ファイ! ゴー! ファイ! ゴー! ファイ!』

眼魔スペリオルDD「姿が変わったからなんだというんです!!!」

勇真「ゴースト: 闘魂ブースト」「……行くぞ!」

『サンングラスラッシュャー!』

新たな姿に変身した勇真に、フードの角から電気を発生させ角と角の間に電気玉を作り、それを放つ眼魔スペリオルDD。勇真は臆することなく立ち向かう為、ゴーストドライバーから独特な形をした赤い剣“サンングラスラッシュャー”を出現させ、電気玉を弾く。

眼魔スペリオルDD「これでも食らいなさい！」

勇真「ゴースト：闘魂ブースト」「ふ、はっ・・・やあっ！」

眼魔スペリオルDD「な、なになっ!？」

勇真「ゴースト：闘魂ブースト」「まだまだ！はっ、はあっ！」

眼魔スペリオルDD「ぐ、がっ・・・!？」

眼魔スペリオルDDから放たれる電気玉を弾きつつ近づいて行く勇真。そして、剣先の届く範囲まで迫った勇真はそのまま2回、眼魔スペリオルDDを斬り、サンダラスラッシュャーを放り投げると、ゴーストドライバのレバーを引き、右脚に炎を纏わせ必殺技の態勢に入る。

勇真 「ゴースト：闘魂ブースト」 「命、燃やすぜ！」

『闘魂ダイカイガン!』

勇真 「ゴースト：闘魂ブースト」 「はああああ．．．．．!」

眼魔スペリオルDD 「ぐ、う．．．．．!」

『ブースト! オメガドライブ!』

勇真 「ブースト：闘魂ブースト」 「はあああ．．．やあああああ
!!!!!!」

眼魔スペリオルDD 「ぐ、あ、がああああ．．．
!?!?!?!?!」

勇真の必殺技を受けた眼魔スペリオルDDは、その身体に火花を散らせながら一言呟くと、爆散した。

眼魔スペリオルDD「……………お見事です、仮面ライダーゴースト。」

勇真「……………ふう、終わった。」

果林「……………勇真！大丈夫！」

勇真「あ、果林姉え……。こうしちゃいられない、ドライブさん達の所に行こう。」

果林「……………とりあえず、肩貸すわ。」

こうして、眼魔スペリオルDDを倒した私達は、今も戦闘中の彼方達の方へと向かう。

——遥視点——

走介お兄ちゃんがタイプ・デッドヒートに変身すると、ギ・シーフ・バに向かって更に燃やす怒りをぶつけている。

走介「ドライブ：デッドヒート」「はあああ・・・おりやあつ!!!」

ギ・シーフ・バ「ぐぎやあつ!」

走介「ドライブ：デッドヒート」「あー！俺の怒りが燃え上がる！もつと、もつとだー！ー！ー！ー！ー！！来い！！！！マックスフレア!!!!」

ベルトさん『タイヤ、コウカーン!』

走介お兄ちゃんがそう叫ぶとシフトマックスフレアが現れ、左腕のプレスレットへ装填して肩掛けタイヤをオレンジ色の炎の様なタイヤに変えた。両腕から炎を纏う走介お兄ちゃんから「ゴゴゴゴゴ……!」という擬音が聞こえて来そう。

ベルトさん『マックス・フレア!』

走介「ドライブ：デッドフレア」「見えるか仁良?この俺の身体から溢れる怒りの炎が……」

ギ・シーフ・バ「い、いや、それは今使ってるそのミニカーの力だろ!」

走介「ドライブ：デッドフレア」「うるせー!!!
!!!怒りの業火で燃やし尽くしてやる

ぜ・・・・・・・・。そのメガネごとなあ
!!!!」

ギ・シーフ・バ「いや、今俺、メガネしてないだろ!」

先程の煽る様な余裕な態度が見る影も無くなったギ・シーフ・バに向かって何度も何度も炎を纏ったパンチをぶつけていく走介お兄ちゃん・・・・・・・・。

走介「ドライブ・デッドフレア」
「これは気持ち悪い目で見られた遥の分!」

ギ・シーフ・バ「ぐふっ!」

走介「ドライブ・デッドフレア」
「これは不気味でねっとりした手で触られそうになつた遥の分!」

ギ・シーフ・バ「そんなことしてな・・・・・・・・ぶべっ!」

走介「ドライブ：デッドフレア」「これはぬとぬとした身体で迫られた遥の分！」

ギ・シーフ・バ「ぬとぬとはしてな……あぎやあつ！」

走介「ドライブ：デッドフレア」「まだまだこんなもんじゃねえぞ……！」

ベルトさん『そ、走介！そろそろゲージが振り切れるぞ！早く決めるんだ！』

まだまだ攻撃を加えようとした走介お兄ちゃんだったけど、ベルトさんの声に少しだけ冷静になったのか、その場で足を止めブレスレットのシフトカーをもう一度シフトデッドヒートに戻すと、車のキーの様なところを回すと、ブレスレットのボタンを押しシフトカーを起こすと、必殺技の態勢に入る。

走介「ドライブ：デッドヒート」「……ちっ。」

ベルトさん『ヒツサーツ！フルスロットル……デッドヒート！』

走介「ドライブ：デッドヒート」「はあああ……らあああああ!!!」

ギ・シーフ・バ「う、嘘だろ！また、お前に負けるのか！くそ、くそおおお!!!」

走介「ドライブ：デッドヒート」「……じゃあな、仁良ロリコンメガネ。」

走介お兄ちゃんは全身に炎を纏ってギ・シーフ・バにキックを放つ。ギ・シーフ・バはそのキックに耐えられる訳も無く、吹き飛ばされていった。

すると、その威力が強かったのか、ギ・シーフ・バは仁良という人に再び戻って、身体中に火花を散らせながら爆散した。

仁良「せめて、せめて最後に遙たんの手に触れたか……つた。」

走介「ドライブ・デッドヒート」「はあっ!? お前まだそんなこと言うのか! 絶対にそんなことさせてたまるか!!! 俺の命に代えても絶対阻止してやるからな!!! マイエンジェル
の守護神と言われた俺を舐めるなよ!!!」

ベルトさん『お、落ち着きたまえ、走介……。君はそんなこと言われたことは無いだろう……。』

爆散していく仁良という人に掴みかかろうとした走介お兄ちゃんだったけど、急にその動きを止めた。

私が不思議に思っていると、右肩の小さなタイヤのゲージが振り切つたらしく、肩掛けタイヤの模様が変わった。

走介「ドライブ・デッドヒート」「あ、やべ、ゲージが……。あ、あ、ヤベー!」

ベルトさん『だから言っただろう走介!』

遥「お、お兄ちゃん……?」

彼方「ええく……どうしちゃったの、そー君!」

走介「ドライブ：デッドヒート」「……ちよ、あ、止めて、誰か止めてええ……!」

走介お兄ちゃんが突然暴れ回っているのを見て私とお姉ちゃんがあたふたしている
と、観客席の方で戦っていた果林さんと勇真さんがやって来た。

遥「ど、どうしたら……」

果林「遥ちゃん!」

勇真「……………こ、これは……………」

遙「果林さん！勇真さん！ちょうどいい所に！お兄ちゃんを止めてください！」

走介「ドライブ：デッドヒート」「ダ、ダレカタスケテ—————!!!」

なおも暴れ回る走介お兄ちゃんを止めて貰う為、勇真さんをお願いする……………けど……………」

勇真「……………すみません、ドライブさんを止めたいのは山々なのですが、さっきの戦闘で力を使い過ぎちゃって……………」

遙「そ、そんな……………じゃあ、どうしたら……………」

勇真さんのその言葉に、私はどうしたらいいのか悩んでいると、突然お姉ちゃんが自信満々の顔で立ち上がる。

彼方「もおー！仕方がないなあーそー君はあ！」

遥「お、お姉ちゃん？」

果林「か、彼方？危ないわよ？」

彼方「まあ見てて〜」

お姉ちゃんがそう言うと、グツと足に力を入れ暴走している走介お兄ちゃんの方へと走って行った。ある程度の距離まで行くと、お姉ちゃんはジャンプし、さっきの走介お兄ちゃんと同じ様なポーズで走介お兄ちゃんにキックを決める。

すると、お姉ちゃんのキックの威力が強かったのか、その衝撃で走介お兄ちゃんは飛ばされ、変身が解除され暴走も止まった。

彼方「・・・とおっ！彼方ちゃん・・・キーーーーック!!!」

走介「ドライブ：デッドヒート」「・・・へ？ぐはっ!？」

ベルトさん『・・・ナ、ナイスキック。』

遥「お、お姉ちゃん・・・そのブーツは一体?」

彼方「あ、これ?これはね?ベルトさんが前に自衛の為にしてくれたんだあ!」

勇真「なるほど、強化ブーツですか。流石ベルトさん・・・」

果林「私にとってのゴーストガジェットみたいな物ね」

この後私達は、倒れている走介お兄ちゃんを連れて果林さんと勇真さんも一緒に私達のお家に帰った。ちなみに今日の晩御飯は暴走して迷惑をかけたということで走介お兄ちゃんとお姉ちゃんが合作で作った御馳走だった。

第20話 緊急戦闘001！

雷羽視点

ドライブとゴーストの2人が強化フォームを解放させたと聞いたニジガクからの帰り道。俺は、あるプログライズキー型の石を手に持ちながら眺めていると、隣にいますみが覗き込んできた。

かすみ「それ、さつきから持つてるけど何なの？」

雷羽「・・・これ？これは俺が強化フォームになる為のプログライズキーなんだけ
ど・・・」

かすみ「……石のままじゃん。」

雷羽「そーなんだよなー! ぜんっぜん反応しないんだよなあ! ドライブとゴーストも強化フォームを解放させたっていうのに……」

かすみ「そこまで根を詰めなくてもいいんじゃない?」

かすみの言葉に答えることはせず、手に持っている石を見ると、かすみは俺がいつも持っているゼロワンドライバーが無いことに気付いた。

かすみ「……あれ? そういえばゼロワンドライバーは?」

雷羽「……ああ、それなら今家の会社でメンテ中なんだよ。だからこうして取りに行くところって訳。」

かすみ「あー、だからかあ！……って、それやばくない！」

雷羽「ああ、やばいな。正直今デイクエンジャーなんかに来られたらひじょーに迷惑だ！」

そう、只今絶賛ゼロワンドライバーメンテナンス中の為、デイクエンジャーに来られるとまずい。対策の方法はあるにはあるが正直使いたくない。……だがこれがフラグになった。

??? 「……貴様か? 仮面ライダーゼロワンは?」

雷羽 「……っ! デイヴエンジャーか!」

かすみ 「ふ、ふええ……! 来ちやつたよお!」

雷羽 「かすみ、下がつてろ。」

??? 「私は、^ザthe・^ッone。デイヴエンジャーthe・one。」

雷羽 「the・one……。ていうか、その声! ……父さん!」

かすみ 「え、ええ!?! お父さん!」

俺達の目の前に現れた特徴的な剣と盾を持つ何処か見覚えのある姿をしたダイヴエ
ンジャー……ダイヴエンジャーthe・one（以下、the・one）の声に
は聞き覚えがあつた。聞き間違えるはずも無い、その声は正しく元の世界で俺を導き、
育ててくれた……飛電^{ひでん}其雄^{それお}の声だつた。

the・one「……父さん？そうか、私のデータ元になつたのは貴様の父の物
だつたか。」

雷羽「データ元……ということは、本物の父さんじゃないってことか。」

the・one「……兄の抹殺命令が出ている。今この場で貴様の首を斬る。」

雷羽「……そんなこと、させてたまるかよ!」

かすみ「ゼロワンドライバーも無いのにど、どうするの、雷羽?」

雷羽「……まあ見てろ!」

そう言つてかすみを下がらせると、俺は自分のバックからゼロワンドライバーではない別のベルト「フォースライザー」とライジングホッパープログライズキーを取り出し、フォースライザーを自分の腰に巻きプログライズキーを起動した。

『フォースライザー!』

雷羽「……ぐっ、あゝあゝあゝあゝ
!!!!」

かすみ「それ! 敵と同じやつじゃん!」

『ジャンプ!』

雷羽「……変身!!!」

『フォースライズ!』

起動したプログライズキーをフォースライザーに挿し、レバーを引いてプログライズキーを展開すると、出現したバッタのライダモデルが更にバラバラのアーマーパーツを出現させ、俺の頭上で旋回する。

雷羽「う あ あ あ あ あ あ あ あ
!!!!!!」

『ライジングホッパー!』

『A jump to the sky turns to a rick
k.』

『Break down.』

その後、無数の黒い蝗状になったライダーモデルが俺の身体に纏わりつき、いつものゼロワンのベーススーツとは形状の違うベーススーツを形成すると、旋回するアーマーパーツをスーツから出現させたベルトが引っ張り、スーツに装着すると、いつもとは違うゼロワン……仮面ライダー001に変身が完了する。

雷羽「001」「ああー！痛ってえー！！！」

かすみ「ゼロ……ワン？」

雷羽「001」「……いや、この時の姿は001……仮面ライダー001だ! 緊急用にフォースライザー作って良かったわ……。」

the・one「……変身したから、何だというんだ?」

雷羽「001」「とりあえず、これでお前と戦える! 俺の首はそう簡単に渡さねえぞ!」
the・one「……貴様がどの姿になろうと、貴様を抹殺することには変わりはない。」

001に変身した俺は、the・oneと戦闘を開始する前に、かすみに耳打ちする。

雷羽「001」「……かすみ。俺が隙を作るから、その間にお前は家の会社に行つてゼロワンドライバーを取つて来てくれるか？」

かすみ「……え、ええ!?それって大丈夫なの?さつき苦しそうにしてたけど……」

雷羽「001」「……まあ、あんま大丈夫じゃないな。あまりゆっくりしてられないから、急いでくれると助かる。」

かすみ「……わ、わかった。」

少し不安がりながらも了承してくれたかすみ。そして俺は、変身する時に俺のバック

と共にかすみに渡していたアタツシユカリバーを受け取り、ブレードモードに変形させる。

『ブレードライズ!』

雷羽「001」「じゃあ、よろしくな!かすみ!おらあああ!」

t h e ・ o n e 「 はあ! 」

雷羽「001」「ふ、はあ!おりゃあ!」

アタツシユカリバーを持って the・one に斬りかかって行つた。何度か斬り結び、罅迫り合いになつた時に体重を乗せて the・one を押す。そしてその隙にかすみを会社へと向かわせる。

雷羽「001」「……かすみ！今の内に行つてこい！」

かすみ「う、うん！気を付けてね雷羽！」

the・one「……逃がすと思うか？」

雷羽「001」「お前の抹殺対象は俺だろ？俺をほっぽつていいのかよ？」

t h e ・ o n e 「・・・ならすぐに倒すまでだ。」

雷羽「001」「やってみろ!はあっ!」

かすみを行かせた俺は、かすみを追わせない為に果敢に攻めていくが、 t h e ・ o n e は無駄のない動きで俺の攻撃を避け続ける。

雷羽「001」「・・・どうした!避けてばかりじゃ俺は倒せないぜ!その盾は飾りか!」

t h e · o n e 「．．．．．あまり駄口を叩くなよ。」

雷羽「001」「．．．何？」

t h e · o n e 「貴様の手法は理解した。ここから先．．．．貴様の剣が私に届くことは無い。」

t h e · o n e の言葉通り、俺の剣が届くことは無かった。袈裟斬り・右薙・左切上・切り落とし・突き．．．と、色々な剣技をやってみたが全てを避けられてしまう。それどころか、t h e · o n e の攻撃は全て当たってしまう。

雷羽「001」「ぐあつ!はあ...はあ...!くそつ!何でそっちの攻撃ばかり
当たるんだ...!」

the one「言ったはずだ。貴様の剣は届かないと。」

雷羽「001」「それでも俺は、諦めない!」

the one「...なるほど、貴様は余程死にたいらしいな。」

くそ、父さんの声だから頭が混乱する!戦い方も、所々に父さんの面影がある気がする...。それに、こつちもこつちでフォースライザーはゼロワンドライバーと勝手が違うから戦いにムラが出るな...。

t h e · o n e 「 時に。」

雷羽「001」 「 ? 」

t h e · o n e 「 先程の娘。兄にとってはどういう存在だ? 」

雷羽「001」 「 は? 何でそんなこと聞くんだよ? お前には関係ないだろ? 」

t h e · o n e 「 いいから答えろ。斬るぞ。 」

雷羽「001」 「 理不尽だろ! 」

くそ、なんなんだよ急に……。それにしても、俺にとつてのかすみの存在か……。そんなの……。

雷羽「001」「……言えるか——!!!!何でお前に言わなきゃなんないんだよ!」

the・one「……そうか。」

ああーもう!調子が狂う!何なんだこいつ!父さんの声だから余計にもー!
!……つて、そつか。父さん……か。もし父さんが生きてたら……こ
ういう、親子の会話とか出来たのかな……。

雷羽「001」「……っ！何考えてんだ俺は——！！！」

the・one「……どうした。気でも狂ったか。」

雷羽「001」「うるせえーな！主にお前の所為だよ！」

the・oneとの謎のやり取りに困惑しつつ、俺はかすみに戻ってくるのを今か今かと待っている。早く戻って来てくれ——かすみ——！！！！！！

——
かすみ視点
——

雷羽に頼まれて、全力疾走で飛瀬グループ本社ビルにやってきた私。

かすみ 「ああー！ やつと着いたー！！！」

受付嬢 「え、えつと・・・どうされました!？」

かすみ 「ぜえー・・・! ぜえー・・・! べ、ベルト・・・!」

受付嬢「・・・・・・・・ベルト？」

かすみ「雷羽・・・・・・・・の！・・・・・・・・ベルト！取りに来ました・・・・・・・・！」

息を切らしながらも、何とか自分の伝えたいことを伝えることが出来た・・・・・・・・けど、受付のお姉さんは訳が分からないという風に困惑している。

私がどうしようか迷っていると、エレベーターが開き中からアタツシユケースを持った瀬場さんが出て来た。瀬場さんは私に気付くと、近寄って声をかけてきてくれた。

瀬場「これはこれはかすみ様！ご無沙汰しております。」

かすみ「……あ、瀬場さん！」

瀬場「……ところで、坊ちやまはご一緒でないのですか？そろそろお見えになる
と思つて、頼まれていた物を持ってきたのですが……」

かすみ「あ、えつと、雷羽は今戦つてて！私が代わりに取りに来たんです！」

私の言葉に察したのか、瀬場さんは受付のお姉さんに私のことを軽く伝えると、エン
トランスの端に連れて来た。

瀬場「……あ、この方は雷羽坊ちやまのお友達の方です。私がお話を聞きますので、貴女は業務に戻ってください。」

受付嬢「……あ、はい！わかりました！」

瀬場「……さ、かすみ様。こちらへ。」

かすみ「……あ、はい。」

受付のお姉さんに頭を下げて一礼した後、私と瀬場さんはエントランスの端へ移動。瀬場さんから端に移動した理由を聞いた後、そこで改めて息を整えた私は瀬場さんに今の状況を説明した。

瀬場「すみません、坊ちやまが仮面ライダーであることは私と旦那様しか知らないのです。」

かすみ「……え、あ、そうだったんですか。かすみんもごめんなさい、知らなくて……」

瀬場「いえいえ……それで、改めて状況を聞いてもよろしいでしょうか？」

かすみ「あ、そうです！実はここに来る途中にダイヴエンジャーに襲われちゃって！雷羽がゼロワンドライバーじゃないベルトで今戦ってるんですけど……」

瀬場「……フォースライザーをお使いになったのですね。」

かすみ「知ってるんですか！雷羽が使ったベルトのこと！あれ何なんですか！」

そこから雷羽がさつき使ったベルトについて瀬場さんから聞くことが出来た。

瀬場「私も坊ちやまから聞いたのですが、坊ちやまがお使いになったベルトはフォー
スライザー。……スペックとしては、ゼロワンを上回ることが出来ると言っており
ました。」

かすみ「え、それって凄いいんじや……！」

瀬場「……ただ、このベルトは人間が扱うには難しい代物らしく、プログライズ
キーを強引に開く為、キーに負荷がかかりそれが原因で身体にも激痛を伴うらしいので
す。」

かすみ「あ……だからベルトを巻いた時、苦しそうにしてたんだ……。でも、それならどうして作ったんだろう……。作るにしても、人間に合わせるとかできたんじゃない……」

瀬場「……。坊ちやま曰く、ゼロワンドライバーを破壊、もしくは何かしらの理由で使用出来ない時の為にフォースライザーは必要だったらしいのです。そしてフォースライザーはじゃじゃ馬らしく、人間の身体に合わせて作ればベルトそのもののパフォーマンスが落ち、戦いにならないらしいのです。ですから、どんなに負担がかかっても、100%で作るしかない……と。」

かすみ「……。そう、なんだ。」

あれ……。そんなにやばいベルトだったんだ……。じゃあ、使い続けてたら危ないんじゃない……!

かすみ「早くゼロワンドライバーを届けなきゃ！」

瀬場「かすみ様、こちらを！メンテナンスも完了しております！」

かすみ「ありがとうございます！じゃあ、行つてきます！」

瀬場さんが持っていたアタッシュケースの中のゼロワンドライバーを受け取った私
が急いで出て行くこうすると、瀬場さんに呼び止められ危うく転びそうになった。

瀬場「……あ！お待ちくださいかすみ様！」

かすみ「……へっ!?わ、と、と、とお!な、なんですか瀬場さん!」

瀬場「急に呼び止めてしまって申し訳ありません!こちらも持つて行つてくださ
い!」

私を呼び止めた瀬場さんが持っていたのは、大きな銃の様な武器だった。私が瀬場さ
んからそれを受け取ると、ズシッと重みが来た。

かすみ「お、重つ……!なんですか、これ……!」

瀬場「こちらは、オーソライズバスターと言います!坊ちやまにゼロワンドライバー

と共にメンテナンスを頼まれておりまして……。きつと、坊ちやまの助けになると
思いますので、重いかと思いますが持つて行つてください！」

かすみ「わ、わかりました！このかすみんに任せてください！」

瀬場「……。はい、よろしくお願い致します！」

こうして私は、ゼロワンドライバーとオーソライズバスターを抱えて、飛瀬グループ
本社ビルを後にした。

かすみ「……。待つてね！雷羽……。！」

雷羽視点

the・oneとの戦闘を再開した俺だったが、やっぱり俺の攻撃が当たることはない、逆に腹に1発食らった後に斬撃を受けてしまい吹っ飛ばされた。そしてその衝撃で右目の装甲が壊れてしまった。

雷羽「001」「……ぐはっ！」

the・one「……もう理解しただろう。兄の攻撃が効かないことは。最早兄が私に勝つ可能性は1%も無い。」

雷羽「001」「……お前が！勝手に決めんな！まだ、まだだ……！俺の可能性は俺が諦めない限り0になることはない！1%の可能性を掴むまで、何度だって諦めない！」

the・one「……何故そこまでやる。マスクも壊れ、満身創痍……兄がそこまでする理由はなんだ。かつて兄が抱いた夢は、この世界では意味をなさないだろう。」

雷羽「001」「それって……！」

the・oneが言っている俺が抱いていたかつての夢。それは、ヒューマギアと人間が一緒に笑える世界にすること。確かにこの世界にヒューマギアはいない……けど……

雷羽「001」「・・・あのな、夢ってのは1つで終りじゃないんだよ・・・！1つ、また1つと枝の様に分かれた新しい夢を持つことで人は成長し、進化していくんだ！それが人間の！未来という名の可能性だ！」

the・one「・・・では貴様にもあると言うのか？新しい夢というものが」

雷羽「001」「・・・ああ、見つけたよ。この世界での夢を・・・」

フォースライザーからバチバチと火花を散らしながらも、俺はヨロヨロと立ち上がる。すると、俺の夢に興味を持ったのかthe・oneが動きを止めた。

t h e · o n e 「……………ならば聞かせて貰おう。貴様の夢と言うのを」

雷羽「001」……………いいぜ、俺の夢……………それは……………」

俺がそこまで言いかけた時、t h e · o n e の後ろで俺を呼ぶ声が聞こえた。俺が声のする方を見ると、そこにいたのはゼロワンドライバーを抱えて息を切らせているかすみだった。

かすみ「ぜえー……!ぜえー……!ら、雷羽ーーー!!!」

雷羽「001」……か、かすみ!

the・one「……先程の娘か。」

雷羽「001」……!

かすみが現れたことで、the・oneの意識がかすみへと向いた。俺はその瞬間を逃すまいとこつちに意識が戻る前にthe・oneへ走り、力いっぱいアタッシュカリバーを振った。the・oneを弾き飛ばした時にフォースライザーの限界が来たらしく、かすみの元へ向かう途中に変身が解けた。

雷羽「001」「……はあっ！」

the·one「……ぐっ!？」

雷羽「……かすみ！」

かすみ「雷羽！はいこれ！」

雷羽「助かった、サンキュー！」

『ゼロワンドライバー！』

かすみから受け取ったゼロワンドライバーを腰に巻いた俺は、ライジンググホッパーで

はないあるプログライズキーの形をした石を手に the・one に向き直る。

the・one「今更ゼロワンになったところで、意味はない。私を超えない限り、貴様の攻撃は私には届かない。」

雷羽「言ったろ? 1%の可能性を掴むまで諦めないって!」

かすみ「あ! それさっきの石!」

雷羽「……………そう言えば、さっきの質問に答えてなかったな」

the・one「……………?」

俺はそのまま左に立っているかすみの頭に手を置き the one に向けて声を放つ。

かすみ「……ふえっ／＼／＼／＼／」

雷羽「この世界で守りたい大切な奴の笑顔を見続けること……それが俺の夢だ。」

かすみ「え……えっ!? そ、それって……／＼／＼／＼／」

うわー、かすみの顔赤つかー。あ、ちよー恥ずかしい!やばいやばい、俺の顔も赤くなりそう。でももう止められないなこの空気!行くしかねえー!

雷羽「だからお前を倒すことが砂粒程の可能性だったとしても、俺はその可能性を掴むまで諦めない!俺の夢を・・・叶える為に!」

t h e ・ o n e 「この、光は・・・!」

かすみ「ふええ・・・!石が光ってる!」

俺の言葉……いや、心に反応する様に、持っていた石にヒビが入り光輝く。そして石が砕けた瞬間、プログライズキー本来の姿が出現する。

雷羽「これが俺の掴んだ……1%の可能性だ！」

『シャイニングジャンプ！オーソライズ』

雷羽「……変身!!!」

第21話 掴んだ1%の可能性

——雷羽視点——

雷羽「これが俺の掴んだ……1%の可能性だ！」

『シャイニングジャンプ！オーソライズ』

雷羽「……変身!!!」

シャイニングホッパープログライズキーを起動させた俺は、ゼロワンドライバーに読み込ませ、天高くキーを掲げる。するとキーに光が照射され円型のゲートが出現し、鍵

を開ける様な仕草でゲートを開くと輝く大きなバツタのライダーモデル、シャイニングホッパーがオンブバツタの様に一緒に現れたライジングホッパーのライダーモデルを背に乗せて現れる。

かすみ「ふわあっ!?お、おつきい・・・!」

t h e ・ o n e 「・・・!」

俺に向かって跳ぼうとしたところでデータネットがライダーモデルを捕らえて、俺の身体に覆い被さる様に身に着けた。

『プログラーイズ!』

『The rider kick increases the power by adding to brightness!』

『シャイニングホッパー!』

『When I shine, darkness fades.』

ライドモデルを身に着けた俺は、新たなゼロワンの姿。仮面ライダーゼロワンシャイニングホッパー”に変身した。

シャイニングホッパーに変身した俺を見たかすみが、その容姿の違いに驚いている。

かすみ「・・・な、何か豪華になった！」

雷羽「ゼロワン：シャイニング」「・・・アンタを超えられるのはただ一人・・・俺だ！」

the・one「私を超える・・・か。新たな姿を手にしただけで、随分なことを言う。」

雷羽「ゼロワン：シャイニング」「じゃあ・・・試してみるか？」

そうして俺がthe・oneに向かおうとしたその時、かすみ呼び止められた。かすみの方を見てみると、その手には大型の銃の様な武器“オーソライズバスター”が握られていた。

かすみ「……あ！ちよつと待つて雷羽！」

雷羽「ゼロワン：シャイニング」「おおつとおビックリしたあ！……どうしたかすみ！」

かすみ「……これ！瀬場さんに頼まれて持つてきたの！雷羽の助けになるからつて！」

雷羽「ゼロワン：シャイニング」「これ……オーソライズバスター！流石瀬場さん！すげー助かる！かすみはどっか物陰に隠れててくれ！」

かすみ「う、うん……！」

かすみからオーソライズバスターを受け取った俺は、フリージングベアアッププログライズキーをオーソライズバスターに装填し、the・oneに向けてホツキョクグマの頭部を横したエネルギー弾を強烈な冷気と共に放った。

『ブリザード!』

『Progress key confirmed. Ready for bust
er.』

雷羽「ゼロワン：シャイニング」「これでも食らえ!」

『バスターダスト!』

the・one「そんなもの。．．．．．なにつ!？」

俺が放った冷気を帯びたエネルギー弾を斬ろうとしたthe・oneだったが、直前で足元に落ちthe・oneの足元は凍り付いた。

足元を凍らせて身動きが取れない内に俺は高速移動でthe・oneの懐に潜り込み、ガンモードのオーソライズバスターをそのままthe・oneに向け、ライジングホッパープログライズキーを読み込ませるが、状況を素早く理解したthe・oneは剣で足元の氷を砕き、後ろに跳びながら左腕の盾で俺の攻撃を防ぐ様に構える。

雷羽「ゼロワン：シャイニング」「……今度は、こいつだ！」

『ジャンプ！』

『BusterAuthorise.』

the・one「……くっ。はあっ！」

雷羽「ゼロワン：シャイニング」「うおらああああ
!!!!」

『プログライズボンバー!』

the・one「……ぐっ!おおおおお……!!」

ほぼゼロ距離で黄色い稲妻のようなエフェクトを帯びた斬撃を受けたthe・oneは後方へと吹き飛ばされる……。が、盾と身体の装甲をほぼすべて失うだけで完全に倒しきることは出来なかった。

雷羽「ゼロワン：シャイニング」「マジかよ……。今ので倒しきれないとか……。」

t h e · o n e 「・・・なるほど、確かに先程までの貴様ではない様だ。だが感謝する。私の装甲を破壊してくれたことに。」

雷羽「ゼロワン：シャイニング」「・・・どういう意味だよ。」

t h e · o n e 「兄のその速さに着いていけると言う・・・ことだ！」

雷羽「ゼロワン：シャイニング」「なっ!?!はやっ・・・!?!」

t h e · o n e が脚に力を入れた瞬間、その場から姿を消した・・・。

— かすみ視点 —

新しい仮面ライダーゼロワンに変身した雷羽が、オーソライズバスターを使つて the・one に稲妻みたいなエネルギー弾を放つて吹き飛ばしてこれで終わった！・・・と思つたんだけど、the・one は盾で防いで装甲が剥がれるだけで倒すことが出来なかつた。それどころか、雷羽みたいに高速移動し、私が気付いた時には雷羽の右横に現れた。

雷羽は the・one が振るつてきた剣をオーソライズバスターで防ぐと、そこからもう何も見えないくらいに雷羽と the・one は互いに高速移動の戦いを繰り返す。

かすみ「ふ、ふええ……！何も見えないよお！」

雷羽「ゼロワン：シャイニング」「ふっ！はっ！……おりやあ！」

the・one「はっ。ふっ。……はあっ！」

ごくたまに、オーソライズバスターをアックスモードに変形させた雷羽と斬り結ぶthe・oneが見える。

雷羽「ゼロワン：シャイニング」「おおお……らあ！」

the・one「ふ！……はあっ！」

高速戦闘を繰り返しながら、更にその速度を上げていく雷羽と the・one。雷羽がオーソライズバスターで左から斬りかかれば the・one は後ろに回りこみ突きをするけど、雷羽はそれを斬りかかった勢いのままオーソライズバスターを後ろに流し背中を防ぐ。 the・one の突きを弾くと、再び2人は斬り合いを始める。

……多分これで合ってると思う。うん、多分。だって、だって……

かすみ「速すぎて見えないんだもーん!!! これ読んでる皆だって訳わかんないよおーん!!!」

雷羽「ゼロワン：シャイニング」「かすみ……! 何言ってるんだ……!」

the・one「……娘。メタ発言は辞めておけ。」

かすみ「じゃあもつと分かりやすく戦つてよおー!」

雷羽「ゼロワン：シャイニング」「ああもうわかったよ!しょうがねえな!……
じゃあ、あれ……使うか!」

the・one「……何?」

私の叫びに一旦戦いを止めて反応した雷羽とthe・one。すると、雷羽はオーソライズバスターをthe・oneに投げつけthe・oneがオーソライズバスターを弾いたと同時に雷羽……というか、ゼロワンの眼が光つて、the・oneの周りに複数のゼロワンが出現した。

the・oneが一回右横のゼロワンを斬り付けたけど、それは偽物だったらしく、本

物の雷羽が後ろからthe・oneをアタツシユカリバーで斬り付けた。

雷羽「ゼロワン：シャイニング」「……………はあつ！」

the・one「……………ぐはっ！」

雷羽「ゼロワン：シャイニング」「届いたな……………俺の剣。」

the・one「……………くっ。」

雷羽「ゼロワン：シャイニング」「そろそろ決めるぜ……………！」

そう呟くと、雷羽はまたその場から消えthe・oneの周りに複数現れた。the・oneは今度は前と後ろを攻撃したけど当たらず、今度は左からアタツシユカリバーで斬り付け高速で右に移動し斬りつけ、同じことを繰り返し徐々にthe・oneを上空に上げていく。

雷羽「ゼロワン：シャイニング」「ふっ、はっ！・・・はああああああああ！！！！」

the・one「ぐっ！がっ！うっ！あ、っ！ぐ、あああああ・・・！！！！」

そしてある程度・・・んぐ、多分5階建てのマンションくらいの高さまで上がったところで雷羽がthe・oneのお腹を蹴って距離を開け、ゼロワンドライバーのシャイニングホッパープログライズキーを押し込む。

すると、雷羽はもう一人のエネルギー体の自分を出現させ、右脚にエネルギーを溜め始める。それに対抗する様に the・one も右脚に深藍色のエネルギーを溜める。

『シャイニングインパクト!』

雷羽「ゼロワン：シャイニング」
「ふっ! . . . はあっ!」

『鋼兜 終焉』

the・one「はっ! . . . はあっ!」

雷羽「ゼロワン：シャイニング」
「おおおおおおおおお
!!!!!!!」

the・one「はあああああああ
!!!!!!!」

ジロ

・ツ

エキ

ンン

ドグ

シャ

イ

ニ

ン

ト ク パ ン イグ

同時に跳んだ雷羽×2とthe・oneの同時に放ったキックは激しくぶつかり合う。激しさを増しながら拮抗していた2人のキックはそのまま2人の身体を吹き飛ばす結果になった。

雷羽「ゼロワン：シャイニング」「ぐっ、あああああああ
!?!?!?」

the・one「ぐっ、おおあああああ
!?!?!?」

雷羽「ゼロワン：シャイニング」「く、そ……!」

the・one「どうした……私を超えなければ貴様の夢見る未来は来ないぞ

！超えてみせろ……この私を！」

雷羽「ゼロワン：シャイニング」「やってやるよ……！アンタを超えて……俺は俺の望む夢を掴む！」

その叫びと共に、雷羽はライジングホッパープログライズキーを4回読み込ませ、最後にゼロワンドライバーにさきついているシャイニングホッパープログライズキーを押し込むと、今度は3体のエネルギー体を出現させ4人同時にthe・oneにキックを放つ。

『ビットライズ！バイトライズ！キロライズ！メガライズ！』

『シャイニングメガインパクト！』

ガ

インパクト

4人の雷羽がキックを放った瞬間、the oneは一度腕を上げて対抗しようとしたけど……突然その腕を力なく下ろした。

雷羽視点

4人に分身した俺がシャイニングメガインパクトを放ち、the・oneに当たる瞬間……俺にだけ聞こえる声でthe・oneが囁いた。

the・one「それでいい。よくやった……或人。」

雷羽「ゼロワン：シャイニング」……っ！まさかアンタ……本物の！」

俺のその言葉に答えることが無く俺のキックを受けて吹き飛んだthe・one……いや父さんは、身体中から火花を散らしながら爆散していった。

t h e ・ o n e 「 その娘の笑顔を見続ける未来。 その新たな夢
に向かって飛べ、飛瀬雷羽。 我が自慢の 息子よ。」

雷羽「とう、ざん ! 父さあああああん
!!!!!!」

父さんが爆散する瞬間 俺は、見えないはずの父さんの顔に微笑みが浮かんだ
のを見た気がした。

the・oneを倒してから泣き続ける雷羽の首に手を回し、私は黙って泣き止むまで雷羽の頭をゆつくりと、優しく撫で続けた。私には、それくらいしか出来ないから……。

その後、泣き止んだ雷羽からthe・one……お父さんのことを聞いた。

かすみ「……ねえ、the・oneのこと父さんって言ってたけど、もしかして……」

雷羽「……ああ。the・oneは……あの人は、元の世界での俺の父さんなんだ。最初は俺も気付かなかったけど、何て言うか、父さんらしいって言うか……」

かすみ「……………雷羽の元の世界のお父さんのこと……………もつと聞いてもいい？」

雷羽「……………ああ。俺の父さんはさ、人間じゃなくてヒューマギアだったんだ。ヒューマギアでも、父さんは俺に色んなことを教えてくれたんだ……………ある事件で死んでしまうその時まで。」

かすみ「……………そうなんだ。」

雷羽「……………あ！そう言えば一度だけ！過去に行つて父さんと戦つたことがあるんだ！その時も自分の身を犠牲にして俺に大切なことを教えてくれて……………」

かすみ「凄いいお父さんだったんだね。雷羽のお父さんつて……………」

雷羽「……………本当に……………俺の憧れだよ、あの人は。」

かすみ「雷羽も……………お父さんみたいな凄いい人になれるといいね！」

雷羽「……………！」

そう言うかすみの笑顔は……沈む夕日に照らされて、眩しいほどに可愛く、キラキラと可憐に輝いていた。

見ていてくれ父さん。俺は絶対に……………この笑顔を守ってみせるから。

第22話 攫われたせつ菜・・・・。

——せつ菜視点——

・・・はあ、今日は生徒会の仕事を立て込んでいますね・・・。

せつ菜「・・・やはり今日は部活に顔を出せそうにありませんね・・・。太陽君も今日はこちらに来れないと言っていましたし、久しぶりに帰りは一人ですか・・・。」

生徒会室の壁に掛けられた時計を見つつそんなことを呟きながら、机の上の山積みの書類に判を押ししていく。因みに副会長は片付いた書類を職員室へ、右月さんと左月さんは書類の不備があつた部活へと行つてもらつてゐる。その為、現在生徒会室は私一人……いつも私が一人で生徒会室にいるタイミグでこつそりと魔方陣を通つて太陽君が来てくれるのですが……

せつ菜「……まあ、それを思つても仕方ありませんね。暗くなる前に残りをさつさと片付けてしまひましょう！」

それから集中すること一時間、残つてゐる書類を片付けた私は、戻つて来た副会長達を先に帰らせ生徒会室の鍵を職員室に返した後、帰路に就いた。

外は少し薄暗くなり始めていて、秋の夜風が少し不気味さを感じさせる。こんな時は早く帰るに限る、そう思い私は足早に校門を抜ける。……少し歩いた先の横断歩

道で信号待ちをしていると、メガネを掛けた20代後半のサラリーマン風な男性の方が声をかけて来た。そして、私^がその声に振り返った瞬間……

せつ菜「……………」

??? 「……………あの、すみません。少々お聞きしたいことがあるのですが……………」

せつ菜「え……………」

私の視界が真っ暗になった……………」

—— 太陽視点 ——

太陽「……よし！新しい手品が出来た！菜々、喜んでくれるといいな……」

自宅で菜々に見せる新しい手品を完成させた俺が固まった身体を伸ばしていると、俺のスマホの着信音が鳴った。画面を見てみると、そこには「菜々」の文字と菜々の笑顔が映し出されていた。俺はナイスタイミングだと思い、内心ウキウキしながらその電話に出る……が、電話の向こうから聞こえて来たのは菜々の声ではなく、聞きなれない男性の声だった。

太陽「……菜々！ちようど良かった！実は今、新しい手品が出来……」

???《……ふつつ。随分テンションが高いですねえ？仮面ライダーウィザード。》

太陽「……っ!?誰だ！」

???《まあまあそう警戒せずに。私の名はアルジャヴァルキリーデイヴエンジャー。結論から言うならば……貴方が大切になっている娘……中川菜々さんでしたか？その娘は預かりました。》

太陽「……なんだってっ!?菜々は……菜々は無事なんだろうな!!!」

アルジャヴァルキリーデイヴエンジャー（以下、アルジャ）《あつはつはつ！焦ってますねえ？勿論今は無事ですよ？い・ま・は・ね。》

太陽「何が……目的だ。」

アルジャ《貴方一人で港にある？と書かれた空き倉庫に来なさい。他のライダー達を呼んだらこの娘がどうなるか……貴方ならわかりますね？》

太陽「……………わかった。菜々は絶対に返してもらおう！」

俺は怒りのままに電話を切ると、急いで外へ出て指定された港の空き倉庫までマシンウインガーを走らせた。デイヴェンジャーに捕らわれた菜々を助ける為に……………！！

——せつ菜視点——

私を捕らえ攫つたデイヴエンジャー・・・アルジャヴアルキリーデイヴエンジャーは私から奪つた携帯で太陽君に電話を掛け通話が終わると、それを投げ捨てる。因みに今は先ほどもまでの20代後半のサラリーマンの姿から異形の怪物の姿へと変わつてゐる。

アルジャ「・・・さて、彼はああ言つてはいましたが・・・本当に来ますかね？」

せつ菜「・・・来ます！太陽君は絶対に来てくれます！そして貴方を、必ずや倒してくれます！」

アルジャ「・・・あつはつは！信頼しているのですね彼を。・・・ですがあまり希望を持ち続け無い方が良いでしょう？大きすぎる希望は絶望した時の喪失感が凄いで

すからね。……まあ、私はその方が嬉しいですが」

せつ菜「私は絶対に絶望なんてしません……！」

アルジャ「いい眼だ……。では私は希望に輝くその瞳が暗く絶望に染まった深淵になるのを楽しみにするとうしましょう。」

私は自分の中の恐怖心を覚られない様に懸命に目の前にいるアルジャを睨みつけるが、当のアルジャはまったく意に介していないらしく、飄々としている。

それから30分くらい経った時……。私達がいる倉庫の外側からブロロ……。というバイクのエンジン音が聞こえ数秒後、遂に倉庫の扉が開かれた。

私とアルジャは扉が開かれる音に目を向けると、そこに立っていたのは既にウイザードドライバーを腰に巻き右手にウイザーソードガンを持った太陽君だった。

太陽「……………菜々を、返してもらいに来た。」

せつ菜「……………太陽君！」

アルジャ「やつと来ましたか。……………ですが、それは出来ませんねえ。貴方はここで私に倒されるのですから！」

太陽「やつぱりそうなるかな……………」

太陽君を認識したアルジャは右手に槍を出現させてから私の側を離れ、積み上がっているコンテナから飛び降りて太陽君と対峙する。

太陽君は自前に予測していたらしく、ウィザードドライバーを操作して左手のフレイ

ムウイザードリングをかざし、仮面ライダーウイザードに変身する。

『シャバドウビタツチヘーンシーン！シャバドウビタツチヘーンシーン！』

太陽「……………変身！」

『フレイム！プリーズ』

『ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！』

太陽「ウイザード」……………行くぞ！」

アルジャ「……………はあっ！」

太陽「ウイザード」……………くっ！……………はあっ！」

アルジャに走って行く太陽君へ向けてアルジャは自身の槍の「穂」という刀身を前へ放って太陽君の胸を狙う様に突いてきたところをウイザーソードガンの剣身で受けながら前に出る。

ギャリギャリツ……という金属同士が擦れ合う音を響かせながら槍の半分くらい距離まで来た太陽君は右に身体を回転させその勢いのままアルジャに胴斬りをした……が、アルジャは右腕でウイザーソードガンを弾き飛ばす。

アルジャ「……ふんっ！」

太陽「ウイザード」「……くっ！だったら！」

『キャモナ・スラツシユ・シエイクハンズ』

『フレイム！スラツシユストライク！ヒー！ヒー！ヒー！』

ウイザーソードガンを弾かれた太陽君は一度距離を取り、手形型の機械「ハンドオーサー」を起動させ左手のフレイムウイザードリリングをかざし、剣身に炎を纏わせ炎の斬撃をアルジャに向けて放った。

アルジャは抵抗する間もなく炎に包まれた。

太陽「ウイザード」「……はあっ！」

アルジャ「くっ……ぐああああ
!!!!」

せつ菜「……や、やりましたか！」

太陽「ウイザード」「菜々！……それフラグ。」

せつ菜「……え？」

太陽君のその言葉を聞いた次の瞬間、アルジャの全身を包んでいた炎が内側から発生した突風により消失。その突風の中心には無傷のアルジャがいた。

アルジャ「……温い。これは本当に炎なのですか？あまりに温過ぎて火の粉かと思いましたよ。」

せつ菜「む、無傷……」

太陽「ウイザード」「流石に今ので倒せたと思つてなかつたけど、無傷か……」

アルジャ「……さあ、次はどう来ますか？」

アルジャに挑発された太陽君は、左手のフレイムウイザードリングを外し、ウオーターウイザードリングを嵌めるとウイザードライバーにかざしスタイルチェンジする

と、今度は右手のリングを交換し、それをウイザードライバーにかざす。

太陽「ウイザード」「だったらこれでどうだ！」

『ウォーター！プリーズ』

『スイ〜スイスイスイ〜♪』

太陽「ウイザード：ウォーター」「……次にこれだ！」

『リキッド！プリーズ』

アルジャ「……ほう。」

せつ菜「か、身体が……!?」

リキッドウイザードリングを使い、自身の身体を液状化させた太陽君は、素早くアルジャの背後に移動する。

一方のアルジャはまったく驚いていない様で、突然自身の後ろを振り向くことも無く槍を振う。すると、まるでわたつていたかの様にアルジャの槍が奇襲を仕掛けようと液状化から戻った太陽君を切り裂いた。

アルジャ「ふむ……そこですね！」

太陽「ウイザード：ウォーター」「……なにっ!?ぐあああっ！」

せつ菜「太陽君・・・・！」

太陽「ウイザード：ウォーター」「な、何で・・・・！」

アルジャ「貴方・・・・焦ってますね？早くあの彼女を助け出したいと。それが漏れちゃってるんですよ。攻撃してくださいって言ってる様なものですよ？」

太陽「ウイザード：ウォーター」「・・・・くっ。」

どうやら太陽君の焦りが彼の動きを鈍くしていたらしく、そこをアルジャに突かれてしまった・・・・。私が捕まったばかりに・・・・ごめんなさい太陽君・・・・。

すると、太陽君はウォーターウイザードリングをハリケーンウイザードリングに交換

し、ハリケーンスタイルにチェンジすると、空気を操り、太陽君の周りに風で出来た螺旋状の槍を無数に作り出し、それをアルジャへと放つ。

『ハリケーン！プリーズ』

『フー！フー！フーフー、フーフー！』

太陽「ウイザード：ハリケーン」「はああ……はあっ！」

せつ菜「……凄い！空気が集まって、風の槍になりましたよ！これなら……！」
アルジャ「……」

太陽君の放った無数の螺旋状の風槍は一直線にアルジャに向かつていく。アルジャは特に慌てる様子も無く、自身の槍を回し始める。……すると、無数の風槍がアルジャの槍に吸い込まれていき、お返しと言わんばかりに倍の威力にした竜巻を太陽君に放った。

太陽君は即座にデイフェンドウィザードリングをかざし、風で出来た壁を出現させる……が、アルジャの放った竜巻の威力に耐え切れず、簡単に突破されてしまい、竜巻に飲み込まれ後方の壁に激突させられた。

アルジャ「……微風。あまりに微風！倍にして返してあげましょう！はあっ！」

太陽「ウィザード：ハリケーン」「まずい……！」

『ディフェンド！プリーズ』

太陽「ウイザード：ハリケーン」「くっ……！おおおおお……！！！！」

アルジャ「無駄なことを……」

太陽「ウイザード：ハリケーン」「ぐう……あ、ぐあああああ！！！！」

せつ菜「……太陽君!!!」

太陽「ウイザード：ハリケーン」「……ぐ、あつ……！！」

アルジャ「……どうです？もう諦めては」

太陽「ウイザード：ハリケーン」「諦める訳には……いかない！」

壁に叩きつけられ、ヨロヨロと立ち上がった太陽君はハリケーンウイザードリングをランドウイザードリングに換え、ランドウイザードリングをウイザードライバーにかざしランドスタイルにチェンジすると、右手のリングをドリルウイザードリングに換え、それをウイザードライバーにかざし地面に潜った。

『ランド！プリーズ』

『ドツドツ、ド・ド・ド・ド・ドンツドンツ、ドツドツドン！』

『ドリル！プリーズ』

太陽「ウイザード：ランド」「はっ！」

アルジャ「攻撃を覚られない様に地面に潜りましたか……はあ……。そんなことをしても無駄ですよ！」

アルジャは溜息を付くと、槍の穂に風を纏わせ、それを地面に突き刺す。すると、地面のあちこちから風の柱が噴き出し、その中の1つから太陽君が地面の中から弾き出されてしまった。

地面から弾き出され宙に舞った太陽君は、重力に引つ張られ背中から激しく地面に打ちつけ、それがトドメとなったのか、変身が解けてしまった。

太陽「ウイザード：ランド」「……がはっ!？」

アルジャ「……おや、変身が解けましたね？」

太陽「まだ……だ!一か八か……これで!」

アルジャがゆっくりと近づいて行く中で、太陽君は指輪の形をした石を左手にはめ、ウイザードライバーにかざす………だけど………

太陽「……っ!まだ……駄目なのか……!」

アルジャ「どうやら、万策尽きた様ですね。．．．では、敗けた貴方に命令を下します。」

太陽君がはめた石は反応すること無く、何も起きなかつた。その結果に太陽君は齒噛みをし、悔しそうな表情を浮かべる。そして、その間に眼前まで近づいたアルジャが、無情にも太陽君の首に槍の穂先を突きつける。次の瞬間、アルジャが放った言葉は．．．私と太陽君にとって、信じられない．．．非情なものだつた。

太陽「命令．．．だつて？」

アルジャ「当然でしょう？敗者は勝者にもの……では命令です。貴方以外の残りの仮面ライダーを……一殺しなさい。」

太陽「……なっ!？」

せつ菜「そんなこと、出来る訳ありません!」

アルジャ「別に貴女に聞いてないですよ。……さあ、ウィザード。どうしますか？別に断つてもいいのですよ？その場合……そこにいる彼女を殺すだけなので」

太陽「そんなこと、させない……!」

アルジャ「ではどうしますか！今まで共に戦ってきた仲間を殺してあの娘を救うか……それとも、この世界で出会った彼女を犠牲にして仲間を取るか……さあ！貴方が選ぶのは2つに1つですよ!」

太陽「くっ……!」

せつ菜「太陽君！私のことはいいので皆さんと共にデイヴエンジャーを倒してください！」

アルジャ「うるさいですよ……！」

私の叫びにイラついたアルジャが、槍を太陽君に向けたまま右手に風を纏わせ、風の斬撃を私目掛けて放って来た。

幸い、アルジャの放った斬撃は私の首元から1m離れていたが、恐怖を植え付けられるのには十分だった。

せつ菜「ひっ！」

アルジャ「少し黙っててもらえますか？……でないと、次は本気でその首、落としますよ？」

せつ菜「あ、ああ……！」

太陽「やめろ！」

アルジャ「では選びなさい！私の命令を聞いて仲間を殺すか……それとも、聞かずに彼女を殺すか！」

そして、太陽君は震える声で．．．悔しそうに呟いた。

太陽「．．．．．わかった．．．．．お前に従う．．．．．」

アルジャ「くくつ．．．あっははははははは
!!!!!!」

せつ菜「そんな．．．．．」

この時、絶望という二文字が．．．．．私の心を支配した。

第23話 裏切りのウィザード・．．．．。

——陽哉視点——

自分が通う学校の授業と放課後にやることを終えて、今は虹ヶ咲学園の校門前で侑と歩夢が来るのを待っていた。

まあ、

陽哉「．．．．ん？何か、学園内が騒がしい？」

2人を待っている間にスマホをいじっていると、虹ヶ咲の学園内から悲鳴の様な声が聞こえた。それに1つだけじゃなく、2つ3つ・・・もつと多くの声が聞こえた。するとそこへ、1人の女生徒が顔に恐怖を滲ませながら逃げて来た。

女生徒「はあ、はあ・・・！な、何なのよあの化け物く〜！」

陽哉「あ、あの・・・」

女生徒「・・・ひっ！・・・って、やだイケメン！な、何でございましょうか？あ、私絶賛彼氏募集中ですわよ？」

ええー。何言ってるんだらうこの子．．．。どうしよう彼氏募集中とか言われたんだけど．．．．でも中の状況知りたいし、とりあえず彼氏云々はスルーして聞いてみるか．．．．。

陽哉「あの．．．．中で何かあったんですか？悲鳴とか聞こえたんですけど．．．．」

女生徒「．．．．へ？あ、ああ．．．．！学園内に気色悪い化け物みたいなのがいっぱい出てきて、学園内で暴れてるの！」

陽哉「何だって!?!早く行かなきゃ！」

女生徒「え、行く気ですか！やめた方がいいですよ！」

陽哉「……大丈夫！だけど、君はちゃんと逃げてね！」

女生徒「ひゃ、ひゃいっ！」

こうして、ちょっとおかしな女生徒と別れた俺は、急いで校門を抜け、学園内へと入って行った。

——
侑視点
——

部活も終わって陽が待っている校門へ向かおうとした．．．その時！何と校庭に．．．えつと、あれは確か．．．そう！グールやシミー等の下級怪人が多く現れて、絶賛パニック中！私と歩夢は何とか物陰に隠れて様子を見ている。

侑「もぉー！一昨日からせつ菜ちゃんと連絡が取れないから様子を見に行こうとした矢先に何で急に怪人が出て来るのー！」

歩夢「侑ちゃんしっ！気付かれちゃうよ！」

侑「あ、そつか。ごめんごめん……で？陽に連絡ついた？」

歩夢「……それが、陽君全然出てくれないの……」

侑「ええ!?!どうしよう、このままじゃいつかバレちゃう……」

陽と連絡が取れないことに焦っていると、さつきから聞こえているこの学園の子達の悲鳴ではなく怪人の呻き声？の様なもの聞こえ、気になってそつと覗いてみると、そこには火炎剣烈火を手に下級怪人と戦う陽の姿があった。

陽「……………はあっ！」

グルル「グウウツ……………！」

侑「……………あれ!?陽じゃん!？」

歩夢「うそ!？」

陽哉「……………ん?あれ、侑と歩夢!?そんなところに……………」

私の声に振り返った陽は、物陰からひよこつと顔を出した私と歩夢を見てちよつと驚いた様に目をぎよつとさせていたが、すぐに正気に戻ってこつちに向かつてきた。

陽哉「とりあえず2人共無事でよかった！」

侑「・・・陽くくく！」

歩夢「陽くくくん！」

陽哉「わつ、ちよ、ふ、2人共!?!」

私と歩夢は安心感から陽が近づいてきた瞬間に2人して飛びついた。いや、うん、しようがないと思うんだ。だっていつ見つかるか分かんなかったし、私達が隠れてたの前に歩夢とコツペパン食べさせ合いつこした場所の近くにあるトイレだよ？あそこガラス張りだから、ほんとヒヤヒヤしたよ．．．いや、別に陽に抱き着きついでに匂いを嗅いで安心感を得ようとかそんなことは思っでなくもないというかあるというか．．．．．

歩夢 「．．．．侑ちゃん？」

侑 「．．．ふあいつ!?べ、別に陽の匂いを嗅いで安心感を得ようとかそんなこと．．．」

陽哉「な、何言ってるの侑？大丈夫か……？」

侑「……あ、うん。大丈夫。……それよりも、私が何て言ったか聞こえた？」

陽哉「いや、早口で何言ってるのか聞き取れなかったけど……匂いがどうか……」

侑「わあー！聞こえてないなら良かったよ！うん良かった！ほら、早く変身して怪人達をやっつけなと！ファイト！陽！」

陽哉「……まあ、いいか。じゃあ行って来るから、2人はちゃんと隠れてるんだぞ！」

侑「おっけー！」

『ブレイブドラゴン！』

陽哉「変身！」

『ブレイブ、ドラゴーン♪』

私の慌てっぷりに怪訝な表情をした陽だったけど、何とか納得し、ブレイブドラゴンワンダーライドブックの表紙を開いて閉じた後、ソードライバーに収めて火炎剣烈火を抜刀しセイバーに変身して、まだ残っている下級怪人達の方へと走って行った。

あ、危なかった……。バレるところだった。

歩夢「……………侑ちゃんも、やっぱり……………」

侑「……ん？何か言った歩夢？」

歩夢「ううん！なんでもないよ！」

陽を送り出した後、歩夢が何か言った気がしたけど聞き取れなかったし、振り返ったらいつもの歩夢の笑顔だったからきつと気のせいだと思いい陽の戦いを見守ることにした。

それから20体近くいた下級怪人の群れを陽が何体か倒したその時、校門側の方から歩いてくる人影があつて、見てみると……ウイザーソードガンを手持っている太陽君だった。

太陽「・・・・・・・・・・」

侑「太陽君！」

陽哉「セイバー」「・・・・・・・・え？」

歩夢「太陽君・・・・・・・・せつ菜ちゃんと一緒に一昨日から連絡取れなかったのに・・・・・・・・」

そう、太陽君はせつ菜ちゃんと一緒に一昨日から急に連絡が取れなくなつた。何かあつたのかはわからない……けど、太陽君は来てくれた！これならすぐに終わるよ！…….. だけど何だろう、太陽君から感じる不穏な空気は……..

陽哉「セイバー」「ウィザード！助かった……手伝つてくれ！」

太陽「……..」

『ドライバーオン！』

陽の言葉に答えない代わりにウィザードライバーを出現させ、左手のリングをかざして眼前の赤い魔方陣に向かって走ってウィザードに変身する。

太陽「……………変身。」

『フレイム！プリーズ』

『ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！』

これで陽と一緒に戦ってくれる！．．．．．そう思ったのに、太陽君は背中を向けた陽へその刃を振った。

陽哉「セイバー」「よし、これで早く片付く！」

太陽「ウイザード」「．．．．．はあっ！」

陽哉「セイバー」「がはっ．．．!?」

侑「．．．．．え。」

歩夢「どうして．．．．」

突然太陽君に斬られた陽はゴロゴロと地面を転がり、私と歩夢はたった今起きた現状に理解が追いつかない……。うん、斬られた本人である陽でさえも、自分が斬られたことに理解できず、混乱していた。

陽哉視点

セイバーとして下級怪人と戦っていると、ウイザードが駆け付けて共に戦ってくれる！……そう思っていた矢先に、俺はウイザードに斬られた。

今の攻撃、間違えたとかそんな感じじゃなかった……！本気の斬撃……ウイザードは最初から俺を狙って……！

陽哉「セイバー」「何で……何でなんだウイザード！俺達仲間じゃないか！」

太陽「ウイザード」「仲間……。今の俺に、それを名乗る資格はない。」

陽哉「セイバー」「それって……………どういう……………」

太陽「ウィザード」「俺は……………お前を倒す！倒さなきゃならない！はあつ！」

陽哉「セイバー」「ぐっ！……………何を、言ってるんだ！ちゃんと説明してくれ！」

太陽「ウィザード」「…………………………」

陽哉「セイバー」「何とか言ってくれウィザード！」

俺の問いかけに何も答えてくれないウィザードは、なおも剣を振って来る。俺はそれをいなしつつ火炎剣烈火で弾いたりする。

だけど、わからない。ウィザードがどうして俺を倒そうとしているのかもそうだけど、どうしてウィザードは魔法を使わないんだ？魔法を使えば、俺を倒すのはもつと楽になるはずなのに………。それにさっきの言葉……どこか思い詰めた様な言い方だった気がする……。

そして、何度目かの剣戟の後の鏢迫り合いの時、突然ウィザードが俺の耳元で驚愕することを囁いた。

太陽「ウィザード」――

陽哉「セイバー」……な、なんだって!?

太陽「ウィザード」――

陽哉「セイバー」「ちよ、まっ．．．．！」

太陽「ウィザード」「．．．はっ！」

陽哉「セイバー」「ぐはっ!？」

ウィザードの言葉に驚愕していると、腹に蹴りを入れられてしまった。蹴りを入れられた衝撃で地面をゴロゴロと転がり距離を取られた俺は、火炎剣烈火を支えにして立ち上がると同時にあることを決意する。

—— 侑視点 ——

太陽君が何故か陽を攻撃している現状に今だ困惑していたそんな時、校舎側の方向から天弥君・龍兔君・勇真君の3人が駆け付けてくれた……んだけど、3人共目の前の状況に驚きを露わにしている。

天弥「……侑！歩夢！」

侑「……あ、天弥君。それに龍兔君と勇真君も。」

龍兔「大丈夫ですか……って、どうしてウィザードとセイバーが戦ってるんだ？」

步夢「それが、私達も全然わからなくて……。太陽君が急に陽君に襲い掛かったの……。」

勇真「ええ!? どうして……。」

天弥「とにかく俺達も変身して2人を止めるぞ！」

そして、天弥君達がそれぞれベルトを腰に巻いたその時、陽から制止の声が響いた。

陽哉「セイバー」「……………来るな
!!!!!!」

天弥「は、はあ？なんでだよ！」

陽哉「セイバー」「ウィザードは……………俺達を裏切った。侑と歩夢を危険に晒すよう
な奴は誰だろうと許さない！俺が……………俺がウィザードを倒す
!!!!!!」

龍兔「倒すつて……………」

勇真「本気ですか……………」

『イーグル！ふむふむ……………習得一閃！』

陽哉「セイバー」「……………はあっ！」

そして陽は、ストームイーグルワンダーライドブックを取り出すと、火炎剣烈火の速読器に読み込ませ、火炎剣烈火を地面に突き刺した。

すると、陽と太陽君の2人を包み隠す様に炎の竜巻が出現し、そのまま2人の姿が見えなくなつた。

侑「あ、熱っ！」

勇真「お2人はもう少し下がってください！」

天弥「セイバーはああ言ってたけどさ、どうする？」

龍兎「どうするって、この状況じゃどっちみち近づけないでしょ。．．．まあ、よく分からないけどセイバーには何か考えがあるのかもしれないし、ウィザードのことはセイバーに任せて俺達は周りにいる下級怪人達の相手をしよう。」

勇真「そうですね、では行きましょう！」

そして天弥君達3人は、それぞれの仮面ライダーに変身する為にベルトとアイテムを起動させる。

『3、2、1……』

『ウルフ！ スマホ！ ベストマッチ！』

『Are you ready?』

『一発闘魂！』

『ア—イ！』

てんりとゆう「……変身っ!!!」

『つながる一匹狼！ スマホウルフ！ イエ—イ！』

『闘魂カイガン！ ブースト！ 俺がブースト！ 奮い立つゴースト！ ゴ—！ ファイ！
ゴ—！ ファイ！ ゴ—！ ファイ！』

天弥君はいつも通りのフォーゼに、龍兔君は銀とターコイズブルーで右腕に鉤爪と左腕に巨大なスマホ？を装備したビルドに変身し、最後の勇真君は一度真つ赤なゴースト・・・あ、あれが闘魂ブースト魂つてやつか！に変身した後、藍色の眼魂を取り出してゴーストドライバーに入れると、そこから藍色のロング丈のパーカーが現れてそれを羽織る。

勇真「ゴースト：闘魂ブースト」「・・・更に！リョウマさん！お力お借りします！」

『アーイ！』

『バツチリミナー！バツチリミナー！』

『カイガン！リョウマ！目覚めよ日本！夜明けぜよ！』

天弥「フォーゼ」「よっしやあ！タイムマン張らせてもらうぜえ！」

龍兎「ビルド：スマホウルフ（以下、スマウ）」「さあ！実験を始めようか！」

勇真「ゴースト：闘魂リョウマ」「命・・・燃やすぜ！」

仮面ライダーに変身した3人は炎の竜巻の周りにいる下級怪人達の方へ向かっていく。

そして、3人が戦っている間も、真ん中でゴウゴウと音を立て燃え盛る炎の竜巻は今だ消えることは無く、まったく中の状況を教えてくれることはなかった。

歩夢「陽君……大丈夫かな……」

侑「中で一体何が起きてるんだろう……」

私達の心配とは他所に、炎の竜巻の周りで戦っていた天弥君達はそろそろ仕上げに入ろうとしていた。

天弥「フオーゼ」「・・・おおりやあ！」

龍兎「ビルド：スマウ」「はっ！はあっ！」

勇真「ゴースト・闘魂リヨウマ」「フオーゼさん！ビルドさん！ツタンカーメンで一掃するので、一か所に集めてください！」

天弥「フオーゼ」「よしきた！」

龍兎「ビルド：スマウ」「わかった！」

天弥君と龍兎君は勇真君の指示に従い下級怪人達を一か所に集めていく。当の勇真君はターコイズブルーの眼魂を起動させゴーストドライバーに装填し、袖なしのターコイズブルーのパーカーを羽織ると、ゴーストドライバーからいつものガンガンセイバー

ではないマジックハンドの様な武器が出てきて、更に何処かからやって来た機械の蛇？
がマジックハンド型の武器にくっついて鎌になった。

勇真「ゴースト：闘魂リョウマ」「ツタンカーメンさん！お力お借りします！」

『ア—イ—！』

『カイガン！ツタンカーメン！ピラミッドは三角！王家の資格！』

勇真「ゴースト：闘魂ツタン」「・・・行くぞ！」

『ダイカイガン！ガンガンミナー！ガンガンミナー！』

勇真「ゴースト：闘魂ツタン」「はああ．．．はあっ！」

下級怪人群 「[[[[[[グウウウ．．．．！]]]]」

勇真君はマジックハンド型武器の眼の紋章が描かれた部分とゴーストドライバーにかざすと、マジックハンド型の武器にターコイズブルーのオーラが纏われ、武器を振ると同時に三角形のオーラが放たれる。

三角形のオーラは下級怪人達を追い抜くとピラミッドへと変形し、大きな穴が開くと、その中へと下級怪人達を吸い込んでいく。

そして、勇真君がマジックハンド型武器のトリガーを引くと、無窮の闇を漂っていた下級怪人達諸共ピラミッドが爆発し、跡形も無く消滅した。

勇真「ゴースト：闘魂ツタン」「これで、終わりだ！」

『オメガファング！』

下級怪人群「」「」「」
グアアアアアアアアア
!!!!!!
」「」「」

天弥「フォーゼ」「……こっちは終わったな」

龍兔「ビルド：スマウ」「……ああ。後は……」

下級怪人達の一掃が終り、私達は一齐に炎の竜巻の方へ視線を向ける。すると、さつきからずつと燃え盛っていた炎の竜巻から、遂に動きがあった。

勢い良く燃え盛っていた竜巻は徐々にその勢いを失っていき、完全に消滅した。

これようやく中の様子が見れる！．．．．．そう、思ったのに．．．．．私達の眼に飛び込んできたのは、予想を裏切る．．．．．最悪の光景だった。

『キャモナ・スラツシユ・シエイクハンズ』

『フレイム！スラツシユストライク！ヒー！ヒー！ヒー！』

太陽「ウイザード」「……はあっ!!!」

陽哉「セイバー」「う、ぐっ……! うあああああつつつつつ
!?!?!?!?!」

太陽君の放った炎の斬撃を受けた陽は、その勢いに吹き飛ばされ、地面をゴロゴロと転がる。……そして、身体中に火花を散らせながら……

陽哉「セイバー」「……ごめん、皆……侑、歩夢……」

陽は、
爆散した。

第24話 ドラゴンの呼び声。

侑視点

歩夢「嘘……嘘だよ。陽君が……死んじやうなんて……。」

侑「……！」

太陽君の放った炎の斬撃が陽を襲い、私達の前で陽が……死んだ。そして、私と

歩夢は、身体に力が入らなくなり、ただへたり込むしか出来なかった。

天弥君達も同じく、それぞれが陽がいた場所をただ呆然と見つめていた。そして、私達の中でいち早く我に戻った天弥君がその場に立ち尽くしている太陽君に掴みかかった。

天弥「……おいつ！何で……何でなんだよっ!!!俺達仲間じゃねえか!!!なのに何で……何でセイバーを殺やつたんだ!!!」

太陽「……………」

天弥「俺はお前のこと仲間だつて……!!ずっと一緒に戦っていくんだつてずっとそう思ってたのに!!!お前は……お前はあ!!!!!!」

天弥君は目に涙を溜めながら叫ぶ。叫ぶ。叫ぶ。心の中に生まれた怒りを涙と共に吐き出す。太陽君はその間、一言も言葉を発することはなかった。まるで天弥君の怒りを敢えて受けているかの様に……。

龍兎君も勇真君も、普段なら天弥君を止める方に回る2人も、今はただ見ているだけだった。2人共、その目にどうしたらいのかわからないという迷いと、天弥君と同じく自分達を裏切り、仲間である陽を殺した太陽君への怒りを映していた。そして天弥君はどんどんヒートアップしていく。

天弥「なあおいっ!!!黙ってねえで何か言ってみるよ!!!」

太陽「・・・・・・・・・・」

天弥「・・・・・・・・つ！てめえつ・・・・・・・・！」

太陽「・・・・・・・・ぐっ！」

そして遂に天弥君は太陽君の顔を殴った。太陽君は尻もちをつき、天弥君はそんな太陽君を見下ろしながら言葉を投げる。

天弥「お前なんてもう……仲間じゃねえ
!!!!!!」

——せつ菜視点——

アルジャによってダイバーシティトウキョウの屋上に連れて来られて、下で行われて
いる戦闘の一部始終を見せられていた……そう、太陽君が陽哉さんを討つたその
瞬間も。

アルジャ「……くくつ。あーはっはっはっ！まさか本当に殺してくれるとは

！……まあそれほど、ウイザードの中で貴女が大切だということでしょうか……
良かったですね、中川菜々さん？」

せつ菜「……………」

アルジャ「……………ふつ、まあいいでしょう。どうやら絶賛仲間割れ中みたいですし、このままあそこにいる3人を倒し、残りを倒してくれば……………私の目的が達成されるのですから！」

せつ菜「貴方の……………目的？」

アルジャ「……………そう。私の目的……………それは、ウイザードを利用して他の仮面ライダーを消す。そして、ウイザードを私が倒すことであのお方の邪魔をする者はいなくなる！おのお方の崇高な目的の……………私は、あのお方の優秀な参謀として御側にお仕えする！これこそが私の目的！夢……………ああ、何て素晴らしいことを考えるのだろうか！我ながら自分の才能が恐ろしい……………！」

突然自分の世界に入り始めたアルジャ。あのお方・・・というのが前に太陽君達と言っていたゼウーデスで間違いないとして・・・それよりも問題は！

せつ菜「太陽君に仮面ライダーの皆さんを倒させるなんてそんなこと・・・」

「そんなことはさせない!!!」

アルジャ「……なにつ！」

せつ菜「……え？」

私の声を重なる様に、空から誰かの声があった瞬間、私とアルジャの間に降り立った人物が。……それは、私もアルジャも予想していなかった……いや、予想なんて出来るはずが無かった。……だってその、人物は……

陽哉「セイバー：クリムゾン」「……………はあつ！」

アルジャ「ぐあああああつ——！」

せつ菜「陽哉……………さん……………？」

先程太陽君に倒されたはずの陽哉さんでした！陽哉さんは火炎剣烈火に炎を纏わせてアルジャに斬り付けると、突然のことで反応が遅れたアルジャはそのまま陽哉さんが放った炎の斬撃と共に下に落ちて行った。

陽哉「セイバー：クリムゾン」「……せつ菜ちゃん！無事！」

せつ菜「え、あ、はい。……それよりも、どうして陽哉さんが？だって、先程……」

陽哉「セイバー：クリムゾン」「その話は後！とにかく俺達もここから降りよう！……ちよつと失礼するよ。」

せつ菜「え、きやつ！こ、これ……お姫様抱っこじゃないですか……まだ太陽君にもされたことないのに……」

陽哉「セイバー：クリムゾン」「……じゃ、降りるよ！ちゃんと掴まってね！」

せつ菜「あ……はい……」

そして陽哉さんは火炎剣烈火をソードライバーに納刀すると、私をお、お姫様抱っこして背中に炎の翼を出してゆつくりとダイバーシテイトウキョウの屋上から降下した。

—— 侑視点 ——

天弥君が太陽君を殴ったことで、この場の空気は最悪になっていた。そんな中、空から何か落ちて地面に衝突しその音が周囲に轟いた。

その音に驚いた私達は一齐にその方向を見る。するとそこにいたのは……

アルジャ「ぐっ、うう……！」

侑「……へっ!? デイ、デイヴェンジャー!?」

勇真「ど、どうしてここに!?」

龍兎「……いや、下級怪人達がいたしデイヴェンジャーがここにも不思議じゃない……けど、何で空から落ちて来たんだ?」

天弥「ど、どうなってんだよ……」

太陽「……………良かった。上手く行って……………」

突然のデイヴエンジャーの登場に私達が驚いていると、太陽君がぼそりと呟いた。するとまた空から人影がバサバサという音を立てながら降りて来た。だけど今度の人影は私達とは少し離れた位置に落ちたデイヴエンジャーとは違い、私達の眼前に降り立った。

そこにいたのは真つ赤な姿をした見慣れた戦士と、その戦士にお姫様抱っこされたこれまた見慣れた女の子だった。

……………ていうか、ちよつと待つてよ……………夢じゃ……………無いよね？現実……………なんだよね？ああ、やばい……。現実なんだって思うと、涙が溢れてくるよ！だって……………だつて……………！

陽哉「セイバー：クリムゾン」「……さ、せつ菜ちゃん！」

せつ菜「ありがとうございます……陽哉さん！」

侑「陽だ……陽だよ！歩夢！」

歩夢「夢じゃ、ないんだよね……侑ちゃん！」

お姫様抱っこしていたせつ菜ちゃんを下ろした陽は、変身を解除して太陽君に向かって走って行くせつ菜ちゃんの後に続いて太陽君の方へ。

地面に座り込んでいた太陽君はゆっくりと立ち上がり、走ってくるせつ菜ちゃんをぎゅつと抱きとめた。次いで来た陽とは互いに片手を上げてハイタッチを交わす。

せつ菜「……太陽君っ！」

太陽「……菜々！よかった、本当に……」

陽哉「……作戦成功だな、ウイザード！」

太陽「ああ……ありがとう、セイバー……菜々を助け出してくれて。」

陽哉「気にしなくていいって！仲間と友達を助けるのは当然だろ？」

太陽「ははっ、確かに！まあ、それはそれとして……お姫様抱っこ

で救出してくれなんて言っていないんだけど？」

陽哉「あ、いや、その……それはまあその……流れ的についていうか、屋上から降りるの危ないなあ……って……ね？」

太陽君の放った言葉に陽がひどく狼狽していると、いつの間にか私の隣から消えていた歩夢が陽の眼前まで迫っていて、陽に詰め寄り始める。

……もちろんその眼にはハイライトが灯っていない。

あくあ、ああなつた歩夢は怖いんだよねえ。私も前に「せつ菜ちゃんの方が大事なの!」なんて言われて押し倒されちゃった時はどうしようかと思つたよほんと。はは、ご愁傷様、陽……。

歩夢「陽君……ねえ、どういうこと？陽君はせつ菜ちゃんみたいな女の子がいいの？」

陽哉「え、あの……歩夢さん？怖いんだけど？」

歩夢「怖いって何？そんなことどうでもいいから速く質問に答えてよ。ねえ？ねえねえねえねえ！」

陽哉「い、いいい……！わ、わかったから！せ、せめて眼からハイライトを消すのは辞めてくれ！な！」

歩夢「答えてくれたらいいよ。」

陽哉「……いや、だから！せつ菜ちゃんの方がいいとかそういう話じゃなくて！ただ単純に安全にダイバーシテイトウキヨウの屋上から降ろすには一番いい方法かなって思ってた！時間とか無かったし！」

陽の必至な弁解で一応は納得した步夢は眼のハイライトを再び灯らせた。……歩夢のあれは、特殊な技か何かなのかな？

陽とせつ菜ちゃんが現れたことで凍り着いていた空気が和やかになり始めたそんな時……その空気をぶち壊す者が。そう、すっかり忘れられたあの……

アルジャ「……何をわちやわちやしているのですか!!!!
 きているのですか!!! 貴方はウィザードが殺したはずですよ!!! 私はこの眼で見ましたよ!!!」

陽哉「……うおお!? デイヴエンジャー!?!? ……あ、すっかり忘れてた。」

アルジャ「なにいつ！」

侑「あ、そうだよ陽！何で生きてるの！だって、だって陽は私達の前で……」

せつ菜「そうですよ！これは一体どういうことなのか説明してください！」

私達の言葉を聞いてきよんとした顔でお互いを見合わせた陽と太陽君はプツと吹き出した。

陽哉「そつかそつか！まだ説明して無かったつけ！．．．じゃあ、タネ明かしと行くか？魔法使いさん？」

太陽「ふふつ．．．ああ、そうだね．．．と言っても、別に難しいことはしてないんだけど」

歩夢「どういうことなの？」

そしてここから太陽君と陽によるタネ明かしが始まった。

太陽「まず結論から言うと、俺が倒したのは本物のセイバーじゃなくて、俺が作ったセイバーのコピー体なんだよね」

勇真「え……ええ!?!」

アルジャ「あり得ない! 私はずっと貴方達の戦いを見ていた! 貴方がセイバーのコピー体を作る暇なんてある訳が……」

太陽「あつたよ……俺達2人がここにいる全員の視界から消えた瞬間が。」

龍兎「……あ! もしかして炎の竜巻の時!」

陽哉「流石ビルド! 正解!」

炎の竜巻？・・・あ、そつか！そういえばあの時、陽と太陽君が見えなくなってた！あくなるほどね！あの時に陽が入れ替わったんだね！

天弥「ちよっと待てよ！じゃあセイバーは最初からウイザードが裏切った訳じゃないって知ってたのか？」

陽哉「いや、俺も知ったのは炎の竜巻を出す前だったよ。・・・いや〜！いきなりあんなこと言われた時はびっくりしたよ！」

——陽哉視点・回想——

ウイザードが俺の耳元で囁いた内容は、驚愕のものだった。

太陽「ウイザード」「……菜々がデイヴェンジャーに捕まった。」

陽哉「セイバー」「……な、なんだって!?!」

太陽「ウイザード」「……詳しく話したい。ストームイーグルの力で炎の竜巻を発生させて周りの眼から俺達を隠してほしい。」

陽哉「セイバー」「ちよ、まっ……!」

太陽「ウイザード」「・・・はっ！」

陽哉「セイバー」「ぐはっ!？」

せつ菜ちゃんがディヴェンジャーに捕まった？一体どうなってるんだ？・・・とにかく、ウイザードの言うことを聞くしかない・・・か。

・・・ん？あれは・・・フォーゼ達！やばい、このままじゃ3人がこっちに來るかも・・・ここは！

陽哉「セイバー」「……来るな
!!!!!!」

天弥「は、はあ？なんでだよ！」

……ごめん、ウイザード！ちよつと嘘言う！

陽哉「セイバー」「ウイザードは……俺達を裏切った。侑と歩夢を危険に晒すよう
な奴は誰だろうと許さない！俺が……俺がウイザードを倒すよ
!!!!!!」

そして俺は、ウイザードに言われた通りストームイーグルのワンダーライドブックを取り出し、火炎剣烈火の速読器に読み込ませると、炎の竜巻を発生させた。

陽哉「セイバー」「……さあ！言われた通りに炎の竜巻で俺達を包んだぞ！何があつたか説明してくれ！」

太陽「ウイザード」「……ああ。実は一昨日の日、菜々がデイヴエンジンジャーに捕まつて助けにいったんだけど……俺が不甲斐ないばかりに、菜々を助けることが出来なかつた……。」

陽哉「セイバー」「そんなことが……。じゃあ、俺を襲つたのは……。」

太陽「ウイザード」「……他のライダーを殺すこと。それがアイツが俺に言ってきた命令だった。……セイバー達を殺さなければ菜々を殺すと言われて……。だけど俺はセイバー達を殺す気も菜々を殺させる気も無い！」

陽哉「セイバー」「どうする気なんだ？」

太陽「ウイザード」「……あのデイヴエンジャーの性格から考えて奴は菜々を連れて俺達が見える高い場所にいるはず。だから……」

そこからウイザードは考えていた作戦を話してくれた。
ウイザードが話した内容はこんな感じだ。

- ① ・まずウィザードがコピーウィザードリングの魔法で俺のコピー体を作る。
- ② ・本物の俺はクリムゾンドラゴンにチェンジする。
- ③ ・炎の竜巻が消えると同時に俺は空へ飛び上がる。
- ④ ・ウィザードがコピー体を倒して皆の視線を集めている間に空からせつ菜ちゃんを捜索する。
- ⑤ ・せつ菜ちゃんを見つけ次第救出し、皆と合流する。

太陽「ウイザード」「……と、まあこんな感じなんだけど、協力してくれないかな
セイバー！」

陽哉「セイバー」「そんなの協力するに決まってる！急いで取りかかろう！」

太陽「ウイザード」「恩に着るよ。……じゃあ、早速これに右手にはめてくれ。」

陽哉「セイバー」「……わかった」

そう言うとういザードは腰のリングホルダーからコピーウイザードリングを取り出し、俺に差し出してきた。

コピーウイザードリングを受け取った俺はリングを右手にはめ、ウイザードドライ

バーにかぎす。

すると、俺の隣に俺と瓜二つのもう一人の俺が現れた。

『コピー！プリーズ』

陽哉「セイバーコピー」「……………」

陽哉「セイバー」「……………おお〜！完全に俺だあ〜！」

太陽「ウイザード」「……………それじゃあ、作戦開始と行こう！」

陽哉「セイバー」「ああ！」

『ストームイーグル!』

『西遊ジャーニー!』

陽哉「セイバー」「……………はっ!」

『烈火三冊!真紅の剣が悪を貫き、全てを燃やす!』

ストームイーグルと西遊ジャーニーをソードライバーに収めた俺は、火炎剣烈火を抜き、刀シクリムゾンドラゴンにチェンジすると、炎の翼を広げる。

陽哉「セイバー：クリムゾン」「……それじゃ、行つて来る！」

太陽「ウイザード」「……菜々のこと、よろしく。」

陽哉「セイバー：クリムゾン」「ああ、任せろ！」

。そして俺は炎の翼を広げて炎の竜巻が消えると同時に空へ飛び立った――

侑視点

まさか、さつきの炎の竜巻の中でそんなことがあったなんて……でも、それって……

侑「太陽君は……辛くはなかったの……?」

太陽「……敵を騙すには味方から。皆に憎まれるのは辛いけど……菜々を助ける為なら、俺はどんな泥も被る覚悟だった。」

せつ菜「太陽君……」

天弥「ウイザード……すまなかった
!!!!」

太陽「うわあっ!?!びっくりした!」

今まで黙っていた天弥君が突然太陽君に向かって頭を下げた。それに続いて龍兔君と勇真君も近づいてきて頭を下げた。

龍兎「俺達も……」

勇真「すみませんでした！」

太陽「ええ！ちよ、3人共！頭を上げてくれ！」

天弥「何も知らなかったとはいえ、俺はお前に……仲間じゃねえなんて酷いこと
言っちゃまった！少し考えればウイザードが俺達を裏切るなんてするはず無いのに！」

龍兎「俺も、少しでもウイザードを疑った自分が恥ずかしい……！」

勇真「本当にすみません！何とお詫びしたらいいか……」

太陽「いや、謝る必要ないって！菜々を助ける為とはいえ、俺も皆を騙してた訳だし……謝るのは辞めてくれ！」

すると、天弥君は太陽君の肩をがしつと掴んだ。

天弥「それじゃ俺の気がすまねえ！頼むウイザード！俺を殴ってくれ！」

太陽 「いやいやいや！そこまでしなくていいって！」

天弥 「頼むウイザード！」

せつ菜 「これ……どうしましょう……」

侑 「さ、さあ……？」

それから互いに譲らなかった天弥君と太陽君だったけど、暫くして太陽君が
はあ……と息を吐くと天弥君のおでこにデコピンを放った。

天弥「・・・痛っ」

太陽「これでちやらつてことで。・・・それでも納得いかないならこの間からある移動販売のドーナツ屋でプレーションシユガー奢つてよ」

天弥「ワイザード・・・お前、いい奴だなあ！わかつた！10個でも20個でも、何個でもおごつてやるよ！」

太陽「ははっ！それは流石に食べきれないから、その時は皆で食べよう！」

天弥「おう！」

話がまとまって太陽君達も仲直り出来て本当によかった……。それにしてもプレーンシユガーかあ……。あんまり食べたこと無いし、気になるなあ。

アルジャ「貴方達……。一体いつまで無駄話を続けるつもりですか!!!!」

太陽「あつ……。」

天弥「忘れてた……。」

陽哉「さつきから思ってたけど、アイツ影薄くない？」

アルジャ「……ムカツ。いい加減にしなさいよ!!!もう許しません……全員
ここで根絶やしにしてやります
!!!!!!」

陽の言葉に完全にブチ切れたデイヴエンジャーは、槍を出現させて戦闘態勢に入る。すると、それに対抗する様に太陽君と陽が私達の前に出て、陽はドラゴニックナイトワ
ンダーライドブックを取り出し、太陽君は指輪の形をした石を取り出して左手にはめ
た。

太陽「許さない?それはこっちの台詞だ!!! 俺の大切な希望に手を出して悲しませたこと、絶対に許さない!!!!」

せつ菜「あの石は!あの時使おうとした!」

陽哉「フォーゼ、ビルド、ゴースト!ここは俺とウィザードがやる!3人は侑達を頼む!」

天弥「あ、ああでも、俺達も加勢しなくていいのかよ?」

陽哉「大丈夫!ほら、ウィザードから漂ってるオーラがえぐい。」

龍兔「あゝ」

勇真「では、お任せします」。

陽の言葉に太陽君の方に視線を向けると、周りを焼き尽くさんばかりの怒りのオーラが漂っていた。

太陽「……ドラゴン、聞こえているだろ？そろそろ俺に力を貸してくれ！！！！」

——太陽視点——

左手にはめめた指輪型の石をウイザードドライバーにかざすと、俺の意識は現実世界を離れ、とある場所へと落ちていく。

俺が眼を開けると、そこはとある病室。そこには夫婦と思われる中年の男性と女性それぞれベッドで呼吸器を付けて眠り、そのベッドの間で2人の子供と思われる1人の男の子がまるで起きるのを待っているかの様に眠っている男性と女性の手を握っている。

太陽「・・・・・・・・久しぶりだな、ここに来るのは・・・・・・・・」

そう、ここは俺の精神世界・・・・つまり、俺のアンダーワールドだ。ベッドで眠っている男性と女性は俺の元の世界での実の両親だ。そして、両親の手を握っている男子こそが幼い頃の操真晴人時代の俺だ。

俺がこの光景を懐かしみながら見ていると、どこからともなくもう一人の俺が出て来た。

太陽？「・・・・・・・・どうだ？懐かしいだろう、お前の絶望の時だ。」

太陽「……相変わらずだなドラゴン。その登場の仕方飽きない？」

太陽? 「ふっはっはっは！やはりお前は面白い！」

太陽「……ていうか、そろそろ俺の姿をするのはやめてくれ。変な感じがする」

太陽? 「……ふん。」

目の前にいるもう一人の俺、こいつの名はウイザードラゴン。俺の中にいるファントムであり仮面ライダーウイザードの力そのもの。昔は何かと俺を絶望させようとしてきたが、今ではこんな感じに良好な関係を築けている。

そんなドラゴンは俺の言葉を聞いて少し不満そうに鼻を鳴らすと、元の龍の姿に戻ったかと思えば、突然笑い出した。

ウイザードラゴン「これでいいだろう。……………くくつ、それにしても……………」

太陽「な、なんだよ。突然笑い出して。俺の顔に何か付いてる?」

ウイザードラゴン「……………いや、そうじゃない。ただ、希魔太陽……………随分な名をつけたなと思つてな」

太陽「……………どういうこと?」

ウイザードラゴン「希望の魔力を持った太陽……………随分だろう?」

太陽「……うるさいなあ。……それよりも、ここに来れたってことは……
そういうことだつてことでもいいのдарろ？」

ウィザードラゴン「ああ。……今まではお前の魔力が足りなくて来れなかったが、今
ようやく至つた。……だが、本当にいいのか？」

太陽「……何が？」

ウィザードラゴン「今のお前の身体は操真晴人の時とは違い、魔力がリセットされて
いる。そんな状態で俺の力を使えばお前は絶望に近づき、俺はお前の身体を乗っ取りや
すくなる。……それでも俺の力を使うか？」

何を言うかと思えばそんなこと……

太陽「一つ忘れてるぞドラゴン。前にも言ったけどお前も俺の希望だ。……だから、俺に力を貸せ」

ウィザードラゴン「……くくっ、はっはっはっは！いいだろう！俺の力……存分に使ってみろ！」

そう言うと、ドラゴンは高く飛び上がり俺に向かって急降下した。そして、俺と融合

するようになり重なり合うと同時に俺の身体が光に包まれた。

第25話 ドラゴンを使役する騎士、ドラゴンの力を使う魔法使い。

—— せつ菜視点 ——

太陽君がウイザードドライバーにかざした石が砕け、中から少し豪華になったフレイムウイザードリングが姿を現しました。

『フレイム……ドラゴン!』

太陽「……変身!」

『ボウー!ボウー!ボウーボウーボオー!!』

左手を前に突き出すと、そこから赤い魔方陣が出現し、ドラゴンの形をした炎が太陽君の周りを旋回。太陽君の身体を紅蓮の炎が包み込んでいき、その炎が晴れると、そこにはいつもの黒いローブに身を包んだウィザードではなく、赤いローブと所々装飾が豪華になったウィザードが立っていました。

太陽「ウイザード：フレイムドラゴン（以下、フレドラ）」「仮面ライダーウイザード、フレイムドラゴンスタイル。．．．．．さあ、ショータイムだ！」

陽哉「遂に来たな強化フォーム！．．．．．じゃあ俺も！」

『ドラゴニックナイト！』

陽哉「．．．．．変身！」

『烈火拔刀！』

『ドラゴニックナイト！』

『すなわち、ド強い！』

陽哉さんもドラゴニックナイトワンダーライドブックを使い、銀色の鎧を纏ったセイバーに変身に変身し、太陽君の隣へ。

今ここに、ドラゴンの力を使う魔法使いと龍騎士が並び立ちました！

陽哉「セイバー：ドラゴ」 「物語の結末は……俺達が決める！」

『コピー！プリーズ』

太陽「ウイザード：フレドラ」「さあ・・・行くぞ！」

陽哉さんから返却されたコピーウイザードリングをウイザーソードガンにかざし、もう一つのウイザーソードガンを召喚すると、二刀流となって陽哉さんと共にアルジャに向かって行きました。

太陽「ウイザード：フレドラ」「ふっ！はあっ！」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「はあっ！てやあっ！」

アルジャ「……ぐっ、はあっ！」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「……ウイザード！」

太陽「ウイザード：フレドラ」「ああ！……はあっ！」

アルジャ「うぐああっ！」

代わる代わる攻撃を加えていく太陽君と陽哉さんに食らいついていくアルジャでしたが、アクロバティックな動きを入れた太陽君達のコンビネーションに翻弄され、遂にはその場で片膝を着くまでに！す、すごいです！

アルジャ「・・・ぐっ！はあ・・・はあ・・・！」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「もう諦めたらどうだ？」

アルジャ「たかが人間風情が！調子に・・・乗るなあ!!!」

せつ菜「あの竜巻は！あの時と同じ・・・！まずいです太陽君！」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「そんな攻撃！」

太陽「ウイザード：フレドラ」「今の俺達には効かない！」

『『フレーム！スラッシュストライク！』』

『スペシャル！ふむふむふーむ、完全読破一閃！』

陽哉「セイバー：ドラゴ」「豪火大革命！」

たいはる「……はあっ!!!」

アルジャ「……な、につ……!ぐあああああ!!!」

陽哉さんと太陽君に向けて竜巻を放ったアルジャでしたが、陽哉さんはドラゴニックブースターに火炎剣烈火の刀身を掲げて読み込ませ火炎剣烈火のトリガーを引き、太陽君は2つのウイザードガンにフレイムドラゴンウイザードリングをかざし、それぞれ炎の斬撃を放つ。

放たれた3つの斬撃は*状に合体し、アルジャの放った竜巻と激突。その圧倒的な力で竜巻を破って行き、アルジャを吹き飛ばした。

吹き飛ばされたアルジャは木々を何本かなぎ倒した後地面をゴロゴロと転がり、その後槍を支えにして立ち上がると背中から翼が!?ま、まさか逃げる気ですか!

アルジャ「……ぐっ、この間と威力が違う……!このままでは我が目的が達成できない!ここは一度退散し、態勢を立て直すしか……!」

陽哉「セイバー:ドラゴ」「あ、待て……!」

太陽「ウイザード:フレドラ」「逃がさない!」

『バインド!・プリーズ』

私の予想通り、背中から独特な翼を出して逃走を図ろうとしたアルジャを逃がすまいと太陽君はバインドウィザードリングを発動させ、飛び立った瞬間のアルジャに向けて無数の鎖を放ち、見事脚に絡ませ地面に落とすことに成功しました！

アルジャ「……う、なにっ!?ぐがつ!？」

太陽「ウィザード：フレドラ」「セイバー!今の内に!」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「ああ!任せろ!」

アルジャ「そう簡単には……やられませんよ！」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「うおお……！ぐっ！」

太陽君によって地面に落とされたアルジャの隙を突いて攻撃しようと走り出した陽哉さんだったが、そんな陽哉さんに向けて目くらまし目的で風の斬撃を放ったアルジャ。

その作戦は成功し、陽哉さんは右腕で顔を隠くすと、その隙にアルジャは鎖を断ち切りもう一度飛び立って行ってしまいました。

アルジャ「今の内です！」

太陽「ウイザード：フレドラ」「しまった・・・！」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「ウイザード！俺の責任だし、ここは俺に任せてくれ！」

太陽「ウイザード：フレドラ」「・・・それはいいけど、何か方法が？」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「こいつを呼ぶ！・・・来い！ブレイブドラゴン！」

ソードライバーに装填されたライドブックを3回押し込み、ブレイブドラゴンを召喚した陽哉さんはそのままそのブレイブドラゴンの背に乗り、アルジャを追いかける為空

へ飛び立とうとしたところで太陽君が呼び止めて来ました。

ブレイブドラゴン「グオオオオオオ！」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「じゃあ、行って来る！」

太陽「ウイザード：フレドラ」「……あ！ちよつと待って！」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「……ん？」

太陽「ウイザード：フレドラ」「これを使ってくれ！」

そうやって太陽君が投げ渡したのは左手に持っているコピーウイザーソードガンで
した。

陽哉「セイバー：ドラゴ」「これ・・・コピーの方のウイザーソードガン？いいのか？」

太陽「ウイザード：フレドラ」「ああ、持って行ってほしい」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「・・・わかった！ありがたく使わせてもらおうよ！」

太陽君からコピーウィザードガンを受け取った陽哉さんは今度こそ空へと飛び立っていきました。

——陽哉視点——

ウィザードからコピーウィザードソードガンを受け取った俺は、呼び出したブレイブドラゴンの背に乗りデイヴエンジャーを追いかけていた。

背中が見えて来た！よしっ！

アルジャ「……………ここまでくれば……………」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「待てええええ！」

アルジャ「……………なっ!?ここまで追ってくるとは……………なんてしつこい!これでも食らいなさい!」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「くっ!風の弾丸か!……………ならこっちも!ブレイブドラゴン!」

ブレイブドラゴン「グオオオ……………ガアア!」

振り返って俺が迫って来ていたのに驚いたディヴェンジャーは、持っていた槍の刀身に纏わせた風を丸型の弾丸にして数弾放って来た。その風の弾丸へ向けてブレイブドラゴンに火球を放たせ相殺させた。

煙で視界が悪くなつた隙に逃がすまいと煙の中へ突っ込んでいく。……煙を突っ切ると、いつの間にか奴の頭上に出た。

陽哉「セイバー：ドラゴ」「……やっと出た！って、奴は何処だ？……あ！いつの間にか頭上に行つてたのか！」

アルジャ「なっ!?!いつの間に！……くっ、太陽を背にしている所為でよく視えな
い……！」

．．．．ん？なんだアイツ？手で顔を隠してる？．．．あ！もしかして太陽で俺の姿がよく視えないのか？だったら今がチャンス！

陽哉「セイバー：ドラゴ」「ここで決める！」

『ドラゴニック必殺読破！』

『烈火抜刀！ドラゴニック必殺斬り！』

俺は一度火炎剣烈火をソードライバーに納刀し、ドラゴニックナイトワンダーライドブックを押し込んだ後に火炎剣烈火のトリガーを引いて再度抜刀した。

抜刀した火炎剣烈火の刀身に炎を纏わせると、俺の頭上でコピーウィザーソードガンとクロスさせたことで火炎剣烈火の炎がコピーウィザーソードガンの刀身に寄り、莫大な炎が生まれた。

そこから火炎剣烈火の炎がブレイブドラゴンの頭部を模した形に変わり、コピーウィザーソードガンの炎がウィザードの中にあるドラゴンの頭部を模した形に変化した。

陽哉「セイバー：ドラゴ」「はあああ……！」

アルジャ「……な、何ですかあの炎は!?!このままでは倒されてしまう!」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「くらえ!……
そうりゆうじんかしようてんせん!双竜神火翔天斬!!!」

火炎剣烈火とコピーウイザーソードガンをクロスさせたままブレイブドラゴンの背から飛び降り奴の背をX字に切り裂いた。

陽哉「セイバー：ドラゴ」「はあああああ
!!!!!!」

アルジャ「ひ、ひい!?!ぐがつ!?!あああああ
………
!!!!!!」

デイヴエンジャーは翼が焼き尽くされ、全身を炎に包まれながら落下していった。
……よし、後は任せたぞウィザード!

—— 太陽視点 ——

せつ菜「よく見えませんが、陽哉さんが優勢なのでしょうか?」

歩夢「……あ!見て見て侑ちゃん!陽君がデイヴエンジャー倒したよ!」

侑「おお〜!派手に行つたね〜陽〜!」

太陽「ウイザード：フレドラ」「さて・・・と。」

空からアルジャが炎に包まれながら落ちて来るのを確認した俺は、ウイザードリングホルダーから一つのリングを取り出し右手にはめると、不思議に思った菜々が問いかけて来た。

せつ菜「太陽君？何をしてるんですか？」

太陽「ウイザード：フレドラ」「ん？ああ・・・仕上げだよ。」

『ルパッチマジック タッチ ゴー! ルパッチマジック タッチ ゴー!』

俺はそれだけ言うと、ウイザードライバーを操作して待機状態へ。．．．すると、丁度アルジャが地面に激突した。

アルジャ「ああああああ．．．．．がはっ!？」

太陽「ウイザード：フレドラ」「お! ちょうど来たな。」

アルジャ「う、ぐっ．．．! 仮面ライダーセイバー．．．! よくも、よくも我が翼

を！」

太陽「ウイザード・フレドラ」「セイバーに夢中のところ悪いけど、俺のことも気にしてほしいな・・・アルマジバヴァルキリー？」

アルジャ「・・・っ！ウイザードお！いい気なものですね・・・！他人の力を借りてようやく優勢になれたというのに・・・！」

地を這い、俺を睨みつける様に見上げるアルジャに、俺は菜々を方を見ながら答える。

太陽「ウイザード：フレドラ」「……そうだな、俺はまだ弱い。自分1人の力では大切な人を守れないほどに……。」

せつ菜「……？」

太陽「ウイザード：フレドラ」「……あの時俺がお前に負けたのは、仲間頼らずに1人で菜々を助けようと焦ったからだ！……セイバーのおかげでもう一度自覚することが出来たよ……俺には足りないところを補い合い、手を差し伸べ助けてくれる頼もしい仲間達がいることに。」

アルジャ「仮面っ……！ライダーっ……！」

太陽「ウイザード：フレドラ」「……終わらせようアルマジバヴァルキリー。このショーの……閉幕の時だ！」

アルジャ「ひ、ひい!?や、やめて！やめてください！あ、謝りますからどうか！どうか殺さないで！」

俺の雰囲気、今までの態度を一変させ命乞いをしてきたアルジャを無視し、俺は右手のリング……スペシャルウィザードリングをウィザードライバーにかざす。

『チヨォーイイネー！スペシャル！サイコー！』

太陽「ウィザード：フレドラ」「……さあ、フィナーレだ！」

アルジャ「あ、い、嫌だ！死にたくない！死にたくない！またあの暗い場所に行くのは嫌だ！嫌だあああああああ

!!!!!!」

リングをかざすと、俺の後ろに赤い魔方陣が出現し、俺の身体を浮遊させると同時にワイザードラゴンの姿をした炎が現れ、俺の身体を旋回すると、背中から俺の身体に突っ込み、俺の胸部にワイザードラゴンの頭部を具現化させた。

そんな俺の姿を見たアルジャは、俺に背を向け飛んで逃げようとしたがセイバーによつて翼を焼き尽くされている為どう頑張つても飛べず、飛んで逃げることを諦めたアルジャはふらついた足取りでコケながら逃げようとした。

そして俺は、そんなアルジャに一切の容赦無く、ワイザードラゴンの口から灼熱の火を放つ。

太陽「ウイザード：フレドラ」「……お前は俺の希望に手を出した……その報いを受ける！」

アルジャ「やだ！嫌だあああ！助けて、助けてください！ゼウーデス様ああああ!!!」

太陽「ウイザード：フレドラ」「はあああ……はあああ!!!」

アルジャ「あ、ひ、ぎやああああ……!!!」

ウイザードドラゴンの口から放たれた灼熱の火炎を浴びたアルジャの身体は一瞬で溶けて跡形も無く消滅した。

アルジャを倒し、魔法を解除した俺は地上に降り、一息ついた。……すると、空からセイバーが戻って来た。

太陽「ウイザード：フレドラ」「……ふいぐ。」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「……よつと！お疲れ！ウイザード！」

太陽「ウイザード：フレドラ」「セイバー！今回は本当にありがとう……お前がいなかったら、俺はライダーの誰かを本気で攻撃していたと思う……。」

陽哉「セイバー：ドラゴ」「きつと俺達の誰かがお前の立場になっても、同じことをしてたと思う……だからもう気にするな！な！」

太陽「ウイザード：フレドラ」「ああ！ありがとう！」

同時に変身を解除した俺達に、菜々達が近づいてきた。そして俺は、菜々の肩をそつと掴み視線を菜々に合わせると、この戦いの間ずっと思っていたことを告げた。

せつ菜「……やりましたね！太陽君！」

太陽「……菜々。俺はまだ弱い。……だけど、もし君が望んでくれるなら……
これからも俺に君を守らせてくれないか？」

俺の言葉を聞いた菜々は、一瞬驚いた表情をすると、すぐにいつもの無邪気な笑顔を向けて答えてくれた。

せつ菜「・・・何を言ってるんですか！望むも何も、私が守ってほしいと願うのは太陽君ただ一人だけです！だから、その・・・これからも、よろしく願いします／＼／＼／＼希望の魔法使いさん／＼／＼／＼／＼」

太陽「菜々・・・ありがとう！」

せつ菜「わわっ／＼／＼／＼た、太陽君・・・！」

太陽「約束する！俺が菜々の最後の希望だ！」

せつ菜「ふふっ！・・・はい！／／／／／／／／／／」

菜々の言葉を聞いた俺は、堪らず菜々に抱き着いた！ああ〜！俺の幼馴染は本当に可愛いな！何があっても、絶対に菜々は・・・俺の希望は守ってみせる！

・・・ん？何か視線を感じる様な・・・？

そこで俺は周りを見ると、この場にいる皆が俺達を見てニヤニヤしていた。

天弥「おいおい〜！見せつけてくれるなあ〜！」

龍兎「まさかこんな所でイチヤイチヤしだすなんてな」

菜々は恥ずかしさのあまり顔を真っ赤に染め口をぱくぱくとし、俺は皆に見られていたという恥ずかしさを誤魔化す様に空に向かって大声で叫んだ。

・・・ま、まあ・・・その後の帰り道で菜々と2人つきりになった時にこつそり手は繋いだけれども・・・／／／／／／／

・・・え、感想？えと、そのお・・・とても、温かかったです、はい・・・

／／／／／／／

第26話 磁力全開友情パワー！

——天弥視点——

天弥「それでよー！ウイザードの奴、顔真つ赤にしちやつてさー！俺達に魔法ぶつ放そうとしたから止めるのに必死だったぜー・・・」

愛「あははつ！もー！それはてんてん達やり過ぎだつてー！・・・あくでも愛さんもそこにいればよかつたなあ〜！」

天弥「そう言えば愛はあの時、流しそうめん同好会の助っ人でオリジナルそうめん創ってたんだっけ？」

愛「そーそー!もんじゃ風味そうめんつての創つててさ!製作途中で何か外が騒がしかったけど、場所が遠くて気付かなかったんだよねー」

ウイザードがフレイムドラゴンの力でデイヴエンジャーを倒した日の翌日の放課後、俺と愛は歳三じーちゃんがいる刑務所へ面会に行く途中だ。

久しぶりに愛と2人つきりでする他愛ない会話。正直めっちゃ楽しい!・・・まあ、ちよつともんじゃ風味のそうめんつてのが気になるが・・・。

もんじゃ風味。もんじゃ風味かあ・・・一体どんな味がするんだ?つゆをつけても美味いもんなのか?それともそのまま?うくん・・・焼く?炒める?茹でる・・・は、そうめんだから当たり前か。後は・・・蒸す?いや蒸すつてなんだよ。普通のそうめんならまだしも、もんじゃ風味だぞ!もんじゃ・・・もんじゃ・・・もんじゃ・・・何だ?うくん・・・

愛「……てんでんどうかした？」

天弥「え!? あ、いや、何でもねえ何でもねえ! 気にすんな!」

愛「……そう? ならいいんだけど。……それにしてもおじいちゃん元気かな?」

天弥「なんだかんだ最近はずいぶんと忙しくて来れてなかったもんな。じゃあ、今日は時間いっぱい話してじーちゃんを笑わせようぜ!」

愛「うん! そーだね!」

??? 「やっと見つけたぞ! 友月天弥!」

天弥「は?・・・って、お前は!」

そんな俺達の前に、現れる1人の男。その男は制服姿にメガネというどっからどうみてもザ・ガリ勉と言った感じの風貌をしていた。

・・・そして俺は、この男を知っている。この男は俺が通っている流雲学園(りゅううんがくえん)って学校の生徒会長を務める「才藤 智也(さいとう ともや)」。あんま話したことは無いけど、外見通りのガリ勉で周りを見下す超絶堅物真面目な奴でうちの学園では有名人だ。

天弥「かいちよー！何でここにいんだよ！」

愛「てんてんが通つてる流雲学園の制服？ていうことはてんてん知り合い？」

天弥「いや、ダチになろうと色々アタックかけてんだけどさ、不良だ！つて言つて全然話を聞いてくれねえんだよ」

智也「当たり前だ！誰が好き好んで貴様の様な底辺と友達になるか！恥を知れこの不良が！」

愛「むっ！……ちよつと！今のは流石に聞き捨てならないんだけど！」

智也の言葉に愛が抗議しよう一歩前に出て行こうとしたが、それを俺は左手を出して制止した。

天弥「あく気にすんな愛。こいつ、いつもこんな感じで他人を見下してんだよ。」

愛「でもさ!」

天弥「いいからここは俺に任せとけて!」

愛「……………わかった。」

俺の言葉に渋々承諾した愛は一步下がる。それを確認した俺はかいちよーに向き直り、奴がここに来た理由を聞くことにした。……………が、これが悪手だった。

天弥「……で？かいちよーお前、何でここにいんだよ？俺に何か用か？」

智也「ああ用がある！貴様、常日頃から我が学園の女子達をはべらせておきながら、まさか別の学校の女子……しかもその制服！あの有名な女子高の虹ヶ咲学園じゃないか！くっそ〜！何故貴様ばかりモテるんだ！」

天弥「ちよ、おまつ！人間き悪いこと言うなよ！」

智也「五月蠅い！この色欲悪魔が！……おいその女子！騙されるなよ！そいつはいつつも学園で色んな学年の女子に囲まれているんだ！朝、登校してきてから放課後帰るまでな！」

俺は恐る恐る後ろを振り返ると、そこにはめっちゃ悲しそうな目をして俺の方を見て
いる愛の姿が！や、やべえ！今にも泣き出しそうだ……！

愛「ねえてんてん？今の話……ほんと？」

天弥「あ、いや、落ち着け愛！お前も知ってんだろ？俺の周りにはダチの皆が居てく
れんだ！だから女子だけじゃねえ！俺の周りには男子もいんだ！」

愛「……ううん、いいの。てんてんカツコイイもんね。同じ学校の女の子達が
ほつとくわけないよ……ぐすつ、愛ざん……わががつでるからあ……！」

天弥「あああ！泣くな！泣かないでくれ愛い！俺、ダチの涙は見たくねえ！だけど・・・どんなダチよりも、愛の涙が一番見たくねえんだ！お前にはいつも笑って欲しい！」

愛「え、え!? / / / / / それって・・・ どういう / / / / / ？」

天弥「えっ!? ええくと、それは、そのお・・・だから！俺はお前のことが・・・」

智也「ええい貴様等あ！僕の前でイチヤイチャイチャイチャと！鬱陶しい！当てつけのつもりか底辺共が!!! あーもー友月！貴様が邪魔だ！ぶっ潰してやる！この僕の・・・力で!!!」

突然怒り狂い始めた智也は、ブレザーのポケットから何かを取り出しそれを俺達に突

きつける。

智也が持っていたのは……デイクエンジャースイッチ!? しかもあれは!

愛「あれって歳三おじいちゃんが持ってたデイクエンジャースイッチ!?」

天弥「いや、それだけじゃねえあの形……ホロスコープスイッチか!」

智也「顔が良いだけの無能は消してやる! 爆発しろイケメンがあ!」

智也がスイッチを押すと、智也の身体を闇が包み込む。そしてその闇が晴れると、そこには人型の牛に変身した智也が立っていた。

智也？「タウロシデイヴエンジャー！この力で！貴様を潰してやるよお！！！！」

天弥「あの姿はタウラスか・・・ちよつと厄介だな・・・愛！離れてろよ！」

愛「う、うん！気を付けてねてんてん！」

天弥「行くぜ！」

愛が離れたのを確認した俺は、腰にフォーゼドライバーを巻く。そして4つのスイッチを順番に押し右横にあるレバーを引いてフォーゼに変身した。

『3!』

愛「2!」

タウロシ「?」

『1!』

天弥「変身！」

フォーゼ「宇宙……キターー!!! 仮面ライダーフォーゼ！ タイマン張らせてもらおうぜ！」

タウロシ「仮面ライダー？……そうか！お前のことだったのか！」

フォーゼ「ああ？俺の事知ってるのか？」

！
タウロシ「このスイッチをくれた奴が言っていたんだ。仮面ライダーを倒せてな！」

フォーゼ「くれた奴って……カザリの野郎か！」

かいちよーにスイッチを渡したのは歳三じーちゃんの時と同じでカザリだと思った俺はそう聞いてみたが、かいちよーは首を傾げた。

タウロシ「カザリ? 誰だそいつは?」

フォーゼ「は? かいちよー名前聞いてなかったのか? . . . チャラ男から貰ったんだろ? そのスイッチ。」

タウロシ「チャラ男? 僕がスイッチを貰ったのは紳士風の男性だったか?」

フォーゼ「え? そうなの?」

タウロシ「ああ。」

少しの沈黙の後、かいちよーがはっ！となり持っていた杖を俺に向けて来た。

タウロシ「・・・はっ！何を悠長に話をしていたんだ僕は！ええい何と卑劣な真似を！許さんぞ友月！くらえ！」

フォーゼ「うおお!?あぶ、あぶねっ！・・・このヤロー！」

『ホイール、オン』

『チエーンソー、オン』

俺に向かってエネルギー弾を数弾飛ばしてきたかいちよー。何とかそのエネルギー弾を何とか避け、ホイールモジュールとチエーンソーモジュールを装備した俺は、高速でかいちよーの元まで行きチエーンソーを振った。

フォーゼ「おおおお・・・らあつ！」

タウロシ「ふんっ！そんな攻撃痛くも無いわ！」

フォーゼ「嘘おっ!?!しかもチェーンソー折れた!?!」

タウロシ「これでもくらえ！」

フォーゼ「・・・しまっ!?!・・・ぐあああああ
!!!!!!」

チェーンソーが真っ二つに折れたことに驚いている隙を突き、杖の先端にエネルギーを溜めて爆発的は威力を生み出したかいちよーは、俺の腹を殴り付けた。

杖での殴打をもろにくらった俺は、まるでゴルフボールの様に上空に投げ飛ばされ、15メートル近く飛ばされてしまった。

フォーゼ 「あいつたたた！まさかチェンソーが折れるなんて……！」

タウロシ 「どうした？もう諦めたか？」

フォーゼ 「んな訳……ねえだろ！次はこいつで行くぜ！」

『ファイヤー』

フォーゼ 「燃える炎で……悪を撃つ！」

『ファイヤー、オン』

俺は立ち上がると赤色で20と書かれたスイッチ“ファイヤースイッチ”をフォーゼドライバーの一番右端のスイッチソケットに装填し、消火器のピンの形状をしているスイッチを引っ張りファイヤースイッチを起動させる。

そして俺は、炎の様に赤いファイヤーステイツにステイツチェンジした。

フォーゼ「ファイヤー」「おらおらおらあ！ステイキにしてやるぜ！」

タウロシ「ふん！そんなものになってたまるか！というか、人間をステイキにするとかサイコパスか貴様は！」

フォーゼ「ファイヤー」「言葉の綾ってやつだあ！」

タウロシ 「バカの貴様がよくそんな言葉を知っていたなあ!!!!
褒美の連打突きだ!!!!」

ファイヤーステイツにステイツチェンジした俺は “ヒーハツクガン” という大型銃
でかいちょーに向けて火炎弾を数弾放った。

かいちょーは杖を使って火炎弾を何発か弾いた後、巨体には想像出来ない程眼にも止
まらぬ高速で俺の元まで移動して杖で連打を打って来た。

フォーゼ 「ファイヤー」 「ぐ、あ!そんなのいらねえええええ……
!!!! あだっ!」

くっそ〜！何であの巨体でこんなにはえーんだよっ！まったく反応できねえ！はあ
〜、どーすっかな・・・このままじゃ負けちまう。何か対策対策・・・いや待
てよ？！ていうかそもそも・・・！！

フォーゼ「ファイヤー」今更だけど何でそんなに俺に突っかかってくるんだよ！俺、
かいちよーに何かした覚えないぜ！学校だって、ただダチと話してるだけだし！」

タウロシ「僕は……僕はなあ! モテたかったんだよ! 弁護士のお父さんに勉強が出来る者に女子は好意を抱くと言われたから! 勉強出来ない奴は屑とバカにされ、蔑まれると! だから僕は頑張つて学年……いや、学園一位になるまで努力し生徒会長にまであつた! 生徒会長は生徒の長だ! 一番偉いんだ! つまり、生徒会長こそが一番皆から好かれ、崇められる! そうなるはずだった! なのに何故……何故僕ではなくお前の様な勉強の出来ない不良の周りに人が集まるんだ!」

フォーゼ「ファイヤー」「アンタそんな理由で生徒会長やつてたのか。……あのな! ダチつてのは勉強がどうかそんな一方的なものじゃねえんだよ!……自分をさらけ出して真正面からぶつかるとかそこに信頼が生まれる! まるで磁石みたいに人の心と心が繋がる! それが友情だ! それがダチになるってことだ!」

タウロシ「うるさい……うるさい!!! お前の、言葉なんて……!」

フォーゼ「ファイヤー」「……いいぜ。アンタのS極! 俺がN極に変えてやる!……愛! 石化してるガラケーみたいなスイッチをくれ!」

愛「ガラケーみたいなスイッチ？・・・あ！あつた！よーっし、行つくぞー！！！」

愛から投げ渡されたガラケーの様に合体した2つのスイッチを受け取った俺は、力づくで引っ張る。

ン
!!!
「ウォーゼ「ファイヤー」「うおおお！俺の想いに応えろ・・・NSマグフオオオオオオ
ン
!!!
「行くぜ！割って！挿す！」

『Nマグネット』

『Sマグネット』

『NSマグネット、オン』

石化していた2つのスイッチ“NSマグフォン”を分割し左右に装填してスイッチを起動させた瞬間、エネルギーで出来たU字磁石と頭部アーマーとキャノンを備えた肩・胸アーマーが現れ、俺の上半身を両側から挟み込んで着装され、俺は銀色のマグネットステイツにステイツチェンジした。

愛「おおく！銀色じゃん！磁石っぼい！」

フォーゼ「マグネット」「仮面ライダーフォーゼ！マグネットステイツ！今ここに復活
！」

タウロシ「僕が、絶対なんだ！僕が・・・我が！一番偉い、王なん
だあああああああああ
！！！！！！」

フォーゼ「マグネット」「っ！・・・やべえな。スイッチに心が侵され始めてる・・・。
しゃーねえ！一撃で決めてやるぜ！」

俺はフォーゼドライバーの右横にあるレバーを引き、両肩のキャノンを分離させて空中でU字磁石型に合体させた。そして、NSマグネットスイッチの専用制御端末を操作し、2つの砲門から赤と青の閃光を束ねた紫の光弾を発生させた。

『リミットブレイク』

フォーゼ「マグネット」ライダー超電磁ボンバー!」

タウロシ「う、ぐ!・・・うぐあああああ
!!!!!!」

スイッチに心を侵され始めているかいちよーを救う為、紫の光弾を放った。俺の放ったリミットブレイクを受けたかいちよーは爆破した……が。

フォーゼ「マグネット」「……よし。これで……ん？」

タウロシ「まだだ！我はこの程度では終わらない！」

フォーゼ「マグネット」「な、はあ!?!倒しきれなかった!?!」

変身を解こうとしたその時、目の前の爆炎からかいちよーが出て来た。その姿は……ボロボロでありながら、今だデイベンジャーのまま。

タウロシ「そうだ。いい事を考えたぞ。貴様の友情……繋がりが本物かどうか、試してくれる!」

フォーゼ「マグネット」「何する気だ!」

タウロシ「貴様には何もしないさ……貴様には、な。」

フォーゼ「マグネット」「何……?」

タウロシ「我が物となれ……女!!!!!!」

爆炎の中から出て来たデイクエンジャー姿のかいちよーは、その視線を俺から別の所に移動させる。移動させた視線の先……そこにいたのは、俺の後ろで木影から覗き込んでいる愛だった。

フォーゼ「マグネット」「やべえ！逃げろ愛!!!!」

愛「……………へ？あつ……………」

フォーゼ「マグネット」「くっそ……!!」

かいちよーは愛に向けて杖を掲げた。その行動の意味をいち早く理解した俺は愛に逃げる様叫んだが時すでに遅く、愛の頭に金色の輪っかが現れてそれが消えた瞬間、愛の目から光が消えた。

俺は急いで愛の元まで駆け寄ったが、突然愛に突き飛ばされた。

フォーゼ「マグネット」「愛! 愛! 大丈夫か!」

愛「・・・・・・・・・・邪魔!!!!」

フォーゼ「マグネット」・・・・・・・・いてっ!」

俺を突き飛ばした愛は、俺に一瞥もすることなくかいちよーの方へ走って行った。かいちよーは俺に見せつけるかの様に愛の肩に手を回し、その身を抱き寄せる。

愛「智也様あゝ♡好き♡」

タウロシ「ははっ、そうかそうか! 我もお前のことが好きだぞ!」

愛「やく♡うれしー♡♡♡」

タウロシ「……どうだ友月? 悔しいか?」

フォーゼ「マグネット」「……くそっ! 愛を元に戻せ!」

タウロシ「ふっ、典型的な台詞だな。……元に戻して欲しくば我が城へ来い。」

フォーゼ「マグネット」「……城、だと?」

タウロシ「そう、我が城……流雲学園に。待っているぞ? 友月……いや、仮面ライダーフォーゼ! ふふっ、あっはっはっはっは!」

愛「ばいばい!」

そしてかいちよーと愛は、俺の前から姿を消した。

第27話 愛情という名の友情・・・それ即ち友&愛。

——天弥視点——

朝10:00。俺は俺の通っている学校・・・流雲学園の校門前に来ていた。

天弥「……………なんだよこれ。いつもの流雲学園の空気じゃねえ……………」

流雲学園・・・俺が通ってるこの学校は、いつも和気あいあいとした雰囲気を持つ楽しい学校だ。俺はそんな学校が大好きだ！だが、今その空気は成りを潜め、不気味な

までの静寂に包まれていた。

天弥「これが・・・アンタの作りたかったものなのかよ・・・かいちよー！」

そう呟いて俺は校門を潜ると、目の前には制服を着た男子生徒が一人立っていた。

??? 「お待ちしておりました、友月天弥様。」

天弥「うおっ！びっくりした!?・・・って、お前！海人じゃねえか！」

海人「私は智也様より案内を仰せつかった者です。さあ、こちらへどうぞ。我らが王がお待ちです。」

俺の前に現れた男子生徒、名前を「志貴 海人（しき かいと）」。こいつは学校内でよくつるんでる奴の1人で見た目、金髪に片耳ピアスとまあまあにチャラいが人情に厚い、良い奴だ・・・いや、だった・・・だな。

・・・だが今は、目から光が消え、言葉を淡々と言うだけの人形の様になっていやる。

そして俺は操られた海人の後について行き、校舎までの道のりを歩いて行く。校舎内の下駄箱を抜けると、そこには異様な光景が。

天弥「うおっ!?!何だこれ・・・」

海人「我々男は王のいる講堂までの道を作る様に命ぜられました。さあ、気にせず参

りましょう。」

天弥「……………かいちよーの奴。」

下駄箱までの道のりを、この学校の男子生徒と男性教諭が並んで道を作っていた。俺はその光景を訝しみながら進んでいく。

そして遂に、かいちよーが待っているという講堂の前までやって来たところで、海人が扉を叩いた。すると中から智也の声がした。

智也《何用だ？》

海人「智也様、友月天弥様をお連れしました。」

智也「ふむ、ようやく来たか。通せ。」

海人「はっ。」

智也からの命を受け、海人はガラガラツ！と講堂の扉を開いて俺に中へ入る様促した。俺は促されるまま講堂の中へ入ると、そこはさつきまでの光景が可愛く思えるほどの光景が広がっていた。海人は俺を講堂に入ると、去って行った。

・・・何だよこの光景。マンガの王様が座ってそうな豪華な椅子に智也が座って、愛を含めた女子生徒2人が智也に抱き着いていて、残った連中は智也が座っている椅子の後ろに立っていやがる。しかも智也に抱き着いてる2人、俺のダチの「朝陽 海夢（あさひ まりん）」と「由羅 かな」じゃねえか！

かな「智也さま〜♡♡♡まじ尊いんだが〜♡♡♡」

海夢「しゅきびに触れてまじつらみ〜♡♡♡智也様しか勝た〜ん！」

天弥「海夢・・・かな・・・」

愛「智也様〜！まじ好き〜！〜！」

天弥「愛・・・」

智也「やあ友月、1時間の遅刻だぞ？」

天弥「わりいな、ちよつと野暮用で遅れたわ。」

智也「まあ、我は心優しき王であるからな！今回だけは許してやろう！・・・それよりどうだ？我が城は！気に入ったか？」

天弥「・・・・・・・・それ、本気で言ってるのか？だったら笑えねえぞ。」

智也「ふつ、冗談の通じぬ奴だ。まあいい・・・・・・・・で？どうする？」

天弥「決まってるんだろ。・・・・・・・・お前を倒して！愛や他の皆を取り戻す！」

智也「話し合い無くすぐに荒事に行こうとする・・・・・・・・正に野蛮そのものだな。・・・・・・・・が、そう簡単に変身させると思うなよ？兵共よ！我が元へ来い！野蛮なこいつをひっ捕らえろ！」

かいちよーは俺の登場に腕を広げながら立ち上がり、煽る様な笑みを浮かべながら近づいてきた。かいちよーの言葉にイラついた俺はフォーゼドライバーを腰に巻き、変身しようとした・・・・・・・・が、そこでかいちよーは外にいる男子生徒や男性教諭を呼び寄せ俺を捕らえようとしてきた。

だが、いくら待っても誰も講堂に入つては来なかつた。かいちよーはそのことに訝しんでいると、かいちよーの後ろからこえが響いた。

智也「……………ん？なんだ？何故誰も入つてこない！何をしているんだ！」

「あー……………それなんだけどさ？アンタのお仲間……………ていうか部下？は外でおねんねしてもらつてるよ！」

智也「何？……………ていうか、貴様ら何者だ！」

「俺達か？俺は……………」

……てん……さい！物理学者の駆桐龍兔だ！」

璃奈「そして私は天王寺璃奈。とってもキュートな助手だよ。ほんとだよ？」

「ババーン！」という効果音が聞こえそうな感じの決めポーズを決めたニンニンコミックに変身したビルドとa e c璃奈ちゃんボード着用の璃奈が講堂のステージに現れた。見ず知らずの2人が現れたことに動揺しているかいちよーとその他女子達。

……あいつ等、意外とノリノリだな。

さて、何でこいつ等がここにいるのかというと、それはこの学校に来る数時間前に遡る。

——天弥視点・回想——

俺は学校へ向かう前に、ある男へ電話を掛けた。

《もしもし?》

天弥「よおビルド。今いいか?」

龍兎《・・・何かあったのか?》

気だるげに俺からの電話に出たビルドは、俺の声のトーンがいつもより低いことに何かを察したのか、聞いてきた。

天弥「ああ、ちよつとな……。そのことで話があるんだが、今から会えないか？」

龍兎《うくん……。まあ、いいか。何処に行けばいい？》

天弥「新宿駅前のカフェに来てくれ。」

龍兎《わかった。》

天弥「……。頼んだぜ。」

そして俺は、ビルドとの電話を切って新宿駅を目指した。

ビルドとの待ち合わせ場所に指定した新宿駅前のカフェに入店してビルドが来るのを待っていると、突然声をかけられ、振り返るとそこにはビルド・・・と、何故か璃奈がいた。

龍兎「ごめん、ちよつと遅れた」

璃奈「おはよう、天弥さん。」

天弥「お、おお！おはよう璃奈！・・・って、何で璃奈がいった？」

龍兎「フォーゼから電話を受けた時に璃奈も一緒にいてさ。せつかくだし、今日改良したやつを試してみたくてさ！」

天弥 「改良……？」

璃奈 「この子だよ。」

そう言つて璃奈が自分のバックから取り出したのは……子猫型のロボット？だつた。

天弥 「何だこりや？子猫型のロボット？」

璃奈 「この子はアラン。私のお友達。」

天弥 「へえー！可愛いダチだな！俺もダチになつていいか？」

璃奈「うん、この子も喜ぶ。」

龍兎「フォーゼお前、相変わらずだなあ〜」

天弥「まあな！・・・で？このアランがなんなんだ？」

龍兎「・・・セイバーの時といいウイザードの時といい、ディヴエンジャー側が璃奈達を狙い始めてる節がある。・・・奴等の力を強くなってきた。こっちの強化が追い付かなくなる可能性もある。」

天弥「確かにな・・・。愛も・・・。」

龍兎「・・・？」

天弥「いや、後で話す。・・・で？」

龍兎「ああ。そこで、そのもしもの為に璃奈に自衛の手段を持たせようと思つてさ。」

天弥「それでこのアランを改良したって訳か。．．．でもよ、本当に大丈夫なのかよ。」

龍兎「何言ってるんだよ、この俺が改良を加えたんだぞ？このアランVer. IIは、成りこそ小さいが、立派な機能を持ったれっきとした璃奈のボディガードだ。」

天弥「へえ、どんな機能があるんだ？」

龍兎「それは見てからのお楽しみ！．．．．．で？そろそろ教えてくれないか？何があつた？」

そこから俺は、ビルドと璃奈に昨日あつた出来事を話した。

璃奈「うそ・・・愛さんが・・・」

龍兎「まさかそんなことになっていたなんてな・・・」

天弥「で、この後乗り込むつもりなんだけど、お前に協力してほしいんだ。」

龍兎「へえ、意外だな？お前ならすぐにでも乗り込みそうなものにな」

天弥「正直最初はそうしようと思ってた。・・・けど、俺の力だけじゃ愛を・・・学校の皆を救えねえ。・・・だから、お前の力を借りたい！頼むビルド！」

龍兎「・・・まったくしょうがないなあ！貸しーな？」

天弥「サンキュービルド！」

龍兔「それじゃあ作戦会議をしたいんだけど……璃奈どうする？正直俺の予想超えてただけけど、お前は何処かで待つてる？アランの実験なら俺だけでも出来ると思うし……それに、愛さんとも戦うことになるかもしれないし……」

ビルドがそこまで言うと、璃奈は首を横に振った。

璃奈「ううん、大丈夫……。愛さんと戦うことになるのは辛いけど、それよりも……ただ守られるだけなのは……。龍兔君が傷つくのを見るしか出来ないのは嫌だから。」

龍兔「璃奈……。……わかった。でも、無理はするなよ？危険と判断したらな

りふり構わずすぐ逃げろ。俺が必ず道を作るから！」

璃奈「わかった。約束する。」

天弥「・・・お前等、いい関係だな！」

龍兎「・・・っ！／／／／／／／／／／茶化すなよ！／／／／／／／／／／．．．．ん、ん、ん。それじゃあ、作戦会議するぞ！」

璃奈「・・・ふふ／／／／／／／／／／」

——天弥視点・現在——

天弥「それで、俺が講堂に向かつてる隙にビルドと璃奈が後ろから隠れて操られた人達を眠らせてたつて訳だ！」

智也「この我が！……貴様等の様な下劣な者どもの作戦にハマったと！……許されざる愚行!!!万死に値する!!!」

俺の説明を聞いたかいちよーは怒り狂い、デイヴェンジャースイッチを押してデイヴェンジャーに変身した。

タウロシ「馬鹿者共が！我が城の兵が奴等だけだと思ふなよ！……いでよ！我が

そしてかいちよーは俺の方を向いて杖を構えてきやがった。

タウロシ「貴様は我直々に相手してやる。」

天弥「ああ、行くぜ！」

『3, 2, 1・・・』

天弥「変身！」

タウロシ「下衆者め。ここを貴様の死刑場とする！」

フォーゼ「そうは、いかねえな！」

『ロケット、ウインチ、オン』

杖にエネルギーを溜め始めた瞬間に、ロケットスイッチとウインチスイッチを起動させ、右腕にロケットモジュールと左腕にウインチモジュールを装備した。

タウロシ「ぐっ、なんだこれは!？」

フォーゼ「お前とはこっちで戦うぜ！」

タウロシ「ぐおおあああああ・・・！！！！」

そして、ウインチモジュールのフックを射出してかいちよーの装甲の隙間に挿し込むと、ロケットモジュールの推進力で外へ飛んだ。

—— 龍兔視点 ——

フォーゼがデイヴェンジャーを外に連れて行った後、俺と璃奈はダスタードとこの学園の女性陣に囲まれて背中合わせになっていた。

ビルド「ニンコミ」「…………璃奈悪い、巻き込んで…………」

璃奈「気にしないで。ついてくることを決めたのは私自身だから！」

ビルド「ニンコミ」「やっぱりお前は優しいな・・・じゃあ、そっちは任せていいか？」

璃奈「うん、任せて！こっちはアランもいるから！」

ビルド「ニンコミ」「・・・おっけー！じゃあすぐにアイツ等倒して加勢するから！」

璃奈「・・・うん！」

璃奈にそれだけ言って、俺は10体のダスタード達に向かって行き、4コマ忍法刀の

10体のダスタード達は隠れ身の術でその場から消えた俺に驚いていて、俺はその隙にダスタード達の真後ろに現れて、ダスタード達が俺の声に振り返った瞬間に4コマ忍法刀のトリガーを3回引いて竜巻を纏った斬撃を浴びせ10体中4体を倒した。

ビルド「ニンコミ」「・・・さあ、どんどん行こうか！」

龍兔君がダスタード？つていう忍者みたいなのと戦っている音を背に聞きながら、私は目の前の愛さん達と対峙していた。

愛「りなりー。一緒に智也様に仕えない？さいつこうに幸せになれるよ！」

璃奈「……………愛さん……………」

愛さんの今の笑顔……………傍から見たらとても幸せそう……………だけど、私には……………ううん、同好会の皆や天弥さん達仮面ライダーの皆が見てもわかる！今の愛さんの笑顔は……………心が、笑ってない。

璃奈「愛さん・・・今の愛さんは、心から笑ってない！それは幸せとは言わない！」

愛「アタシが？心から笑ってない？・・・あはは！そんなことないって！とつても幸せ！ほら見てよ！智也様に仕えたからこんなにもいっぱいの仲間も出来たし！」

璃奈「洗脳で出来た関係は、仲間とは言わない！本当の仲間は・・・お友達は！心と心が繋がって、ポカポカした温かいもの！そんな寒くて・・・寂しいものじゃない！」

そう、「お友達は温かいもの」それを私に教えてくれたのは他でもない、今日の前にいる愛さん。私は今もあの時のことは感謝している。だから私が、今の愛さんを救ってみせる！あの時の恩返しも兼ねて！

愛「あくもく……りなりー……いつからそんな分からず屋になったの？
これは少し、痛い目見てもらった方がいいかもね。」

璃奈「それはこっちのセリフ。……アラン!!!」

アランVer. II「ニヤーン！」

私の呼び声に、私のスクールバッグの中からアランが勢い良く出て来て、器用に私の左腕に着地した。そして私は更なる音声指示を出す。

璃奈「・・・アラン！カンビオフォルマ形態変化！」

アランVer. II「ニャオオーン!!!」

私の音声指示を聞いたアランは、ガシヤガシヤという音を立て前脚と後脚の肉球が内側に来る様に半回転し、私の左腕にプレスレットの様な感じで装着された。

愛「ふくん、すごいじゃん。・・・皆！よろしく！」

海夢 「泣かなくていいからねー！」

かな 「お姉さんたちが優しくしてあげるから！」

璃奈 「その必要はない！パラライズワイヤー射出！」

私はブレスレットになったアランの口から「ナムメタル」というひし形の金属が先端についたワイヤーを先頭を走っている人に向けて放った。

ナムメタルは途中でパカッと展開し3つの鉤爪になると先頭を走ってる人の服に引っ付いた。

ワイヤーを繋げた先頭の人に電流を浴びせて気絶させた後にワイヤーを収納した。そんな光景を見て一瞬たじろいだ他の女の人達は、またすぐに向かってきた。

「……………」だけどこの人達は気付いてない。《私がもう一つ用意し、すでに仕掛けてあることに》。

かなな「怯んでる場合じゃない！みんな行くよ！智也様の為に！」

「……………」智也様の為に
!!!!!!!!

璃奈「それは無駄…………貴女達にはすでに専用パッチを取り付けてある！」

かなな「…………え？どういう…………」

璃奈「……………皆まとめて、パラライズ。」

かな「あぎやああああああっつつつつ
!??!?!?!?

「「「「「「「「「「「「「「「
きやああああああっつつつつ
!??!?!?!?

さっきの龍兎君との登場の際に愛さんを含めた女の人全員に遠隔で電流を浴びせる
ことが出来る専用パッチを取り付けておいた。
これで何とか鎮圧出来た・・・はず・・・。

愛「うわゝ・・・・・・・・全滅とか。流石にもうちよつと頑張つてほしかったなー。」

璃奈「愛さん・・・・・・・・なんで・・・・・・・・」

愛「ん？あゝ・・・・・・・・さつきさ？あの子にワイヤー引つ掛けて電流流したでしょ？それ見て愛さん達にも何かしたんじゃないかって思つてさ！ほら、この人数相手にやけに自信満々で来たしさ。」

璃奈「・・・・・・・・・・」

愛「・・・・・・・・でも、アタシの前でワイヤー使つたのは愚策だったんじゃない？こうして次の一手がバレた訳だし。」

璃奈「そうでもない。たとえ電流が使えなくなったとしても、このアランにはまだ隠してある機能がある！」

愛「へえー・・・・・・・・じゃあ、その機能つてのを見せてみてよ！」

璃奈「・・・・・・・・っ！」

—— 龍兔視点 ——

した。
ボルテックファイニッシュでダスターード達を一掃しようとしたその時、俺の後ろで声が

ビルド「ニンコミ」「これで決め……」

「ちよつと待った！」

ビルド「ニンコミ」「……？……っ！璃奈！」

俺が声のした方を振り返ると、そこには愛さんに羽交い絞めにされて力なくうなだれる璃奈の姿が。

愛「龍兎！その武器を捨てて！でないとりなりーがどうなっても知らないよ？」

璃奈「うゝ・・・」

ビルド「ニンコミ」「愛さん・・・アンタ・・・」

・・・くそつ、璃奈が捕まった！やつぱり連れて来るべきじゃ・・・ん？何か璃奈の様子が・・・変？何であんなにうなだれてるのに璃奈ちゃんボードの表情はあんなにやる気なんだ？えゝつと、何かあった気が・・・あ！そつか！そういうことか！

璃奈が何をしようとしているのか察した俺は、4コマ忍法刀を下ろして愛さんへ話かけた。

ビルド「ニンコミ」「……なあ愛さん！」

愛「どうしたの？早くそれを捨てて！」

ビルド「ニンコミ」「いやいや、ちょっと質問したいだけなんだって付き合ってよ！」

愛「………？」

ビルド「ニンコミ」「愛さん………どうして璃奈がわざわざライブ用の璃奈ちゃんボードを着用してきたと思いますか？」

愛「何言って………っ！」

どうやら気付いたっぽい。けどもう遅い！璃奈の方が早い！

愛「あ、あはっ……ひっ、はひっ……!」

璃奈「……効果覿面。」

ビルド「ニンコミ」「だなく。……それじゃ!こつちも決めるか!」

『Lady、go!』

ビルド「ニンコミ」「勝利の法則は……決まった!」

『ゴルテック、フィニッシュ!イエーイ!』

俺はレバーを回して残りのダスタード達へ向けて紫色の巨大手裏剣を投げた後、左腕

に装備されたペン型武装 “リアライズペインター” で実体化させた漫画の擬音を巨大手裏剣と共にダスタード達にぶつけて倒すことに成功した。

ビルド「ニンコミ」「・・・ふう。何とかこっちは終わったな・・・後は・・・」

——天弥視点——

かいちよーを連れて講堂を出た俺は、エレキステイツになって校庭でかいちよーと戦っていた。

フォーゼ「エレキ」「うおおらあ！」

タウロシ「ぐっ！このお！」

フォーゼ「エレキ」「うおっ、あぶねっ！……おいかいちよー！もうやめにしねーか！他人を操って無理矢理従わせるなんて！そんなの間違ってるのはアンタもわかってるだろ！速くそのスイッチを捨てろ！」

タウロシ「捨てろだと？ふざけるな！我が夢を叶える力！手放してなるものか！」

フォーゼ「エレキ」「あーもー！この頑固野郎！いい加減目を覚ませ！」

『Nマグネット』

『Sマグネット』

俺とかいちよーは何度も何度も剣戟を繰り広げる。そしてこのままじゃ埒が明かないと思った俺は、NSマグフォンを取り出して2つに分割してフォーゼドライバーに装填しマグネットステイツにチェンジした。

『NSマグネット、オン』

フォーゼ「マグネット」「更にこいつらだ！」

『スモーク、スパイク、オン』

タウロシ「なっ！何も見えない！」

フォーゼ「マグネット」「おおおお・・・らあ！」

タウロシ「ぐっ、がはっ！」

フォーゼ「マグネット」「明確なダメージがあつたな！畳みかけるぜ！おらおらおらあ
！」

マグネットステイツにチェンジした俺はスモークスイッチとスパイクスイッチを起

動させ右足にスモークモジュール左足にスパイクモジュールを装備した。

スモークモジュールで猛烈な煙を出しかいちよーの視界を奪い、狼狽しているその隙に近づきスパイクモジュールでかいちよーの腹に一発蹴りを与えた後、連発して蹴りを放った。

タウロシ「ぐああああ！・・・ぐっ、小賢しい奴め！」

フォーゼ「マグネット」「反撃なんてさせるかよ！ここで一気に決める！」

『リミットブレイク』

フォーゼ「マグネット」「ライダー超電磁ボンバー！」

タウロシ「うわあああああ・・・！！！！！！」

！！！！！！

俺の蹴りを受けてその硬い装甲にヒビが入ったかいちよーはダメージで片膝をついた。そして、杖にエネルギーを溜めて俺に放とうとする前にリミットブレイクでかいちよーに紫の光弾を放った。

フォーゼ「マグネット」「はあ．．．はあ．．．。これで、どうだ．．．！」

タウロシ「．．．く、ああ！くそ、くそお！」

フォーゼ「マグネット」「・・・なっ！変身が解けてねえだど！ひび入れたのにどんだけ硬えんだ！・・・っ！これは。」

タウロシ「この我が貴様の様な下衆な者に！・・・こうなったら我がポリシーに反するが仕方がない！貴様を操って我が手下に・・・」

フォーゼ「マグネット」「そうはさせるかよ。」

タウロシ「・・・っ!？」

爆炎の中からディヴェンジャーに変身したまま地面に突っ伏しているかいちよーが俺を・・・俺の右手に握られている物を見て驚愕した。

そう、俺の手にはかいちよーの杖が握られている。あの時、リミットブレイクを受け

たかいちよーはその衝撃で杖を投げ捨ててしまった。そして、偶然にも杖は俺の足元へ。

タウロシ「待て貴様・・・何をする気だ・・・！」

フォーゼ「マグネット」「決まってるんだろ・・・！」

タウロシ「やめろ！やめろおおおお！！！！」

フォーゼ「マグネット」「おらああああ！！！！」

俺はかいちよーの言葉を無視して膝で杖を真つ二つに折った。
これで、愛や・・・他の皆も元に戻るはずだ。

フォーゼ「マグネット」「さあかいちよー。・・・とつとつとそのスイッチを捨てろ！」
タウロシ「・・・くっ。」

「……情けないな、タウロシデイヴエンジャー。」

俺がもう一度かいちよーを説得しようとした……その時、地面に突っ伏すか

いちよーの真横に謎の仮面ライダーが姿を現した。

フォーゼ「マグネット」「誰だお前！」

??? 「フォーゼか。・・・ふんっ。」

フォーゼ「マグネット」「あ、おい！」

??? 「さあタウロシデイヴエンジャー。・・・あのお方のお恵みを受けろ！」

タウロシ「ぐっ、ああっ・・・！」

俺達の前に現れた謎の仮面ライダーは右手に濃い紫色の光の球を出現させると、かいちよーの身体にそれを放った。

謎の仮面ライダーが放った光の球はかいちよーの身体の中に沈んでいくと、かいちよーが苦しみ出した。

フォーゼ「マグネット」「てめえ！今のはなんだ！かいちよーに何をした！」

??? 「今こいつに放ったのは冥新星^{めいしんせい}。あのお方のお力だ。」

フォーゼ「マグネット」「かいちよーを元に戻しやがれ！」

??? 「それは出来ないしもう私には止められない。・・・ではな。」

フォーゼ「マグネット」「待てよ！てめえは一体誰なんだ！」

???'「私と貴様が相見えるのはまだ先のことだ。その時まで私の正体は隠しておこう・・・仮面ライダーフォーゼ。いや・・・如月弦太郎。」

フォーゼ「マグネット」「なっ!?待て!!!」

それだけを言い残し、謎の仮面ライダーは俺の前から姿を消した。

フォーゼ「マグネット」「何者なんだアイツ、何で俺の名前を知ってんだ・・・」

タウロシ「ぐっ！あああああああああ
!!!!!!」

フォーゼ「マグネット」
「……っ！かいちよー！」

俺がさっきの仮面ライダーのことを考えていると、冥新星とかいうのを入れられたか
いちよーが絶叫をあげた。

俺がかいちよーの方を見ると、かいちよーの身体がどんどん大きくなっていつて校舎
ほどの高さになると亀の身体にサイの頭部で牛の角を生やした異形の怪物に変わった。

タウロシ「オオオオオオオオオオオオオオ
!!!!!!」

!!!!!!

フォーゼ「マグネット」「で、でかつ!?こんなもんどうやって倒せって言うんだ!」

ビルド「ニンコミ」「・・・フォーゼ!」

フォーゼ「マグネット」「ビルド!愛達は!」

ビルド「ニンコミ」「璃奈に任せてきた・・・ていうか、何があつた?」

フォーゼ「マグネット」「ちよつとな・・・。それよりも手伝ってくれ!かいちよーを助けてえんだ!」

ビルド「ニンコミ」「はあ、しょうがないなあ・・・」

『タカ!ガトリング!ベストマッチ!』

『Are you ready?』

講堂の方からやって来たビルドは溜息を吐きながら2つのフルボトルを取り出して軽く振るとビルドドライバーに装填しレバーを回してオレンジ色と濃い灰色の姿に変わった。

ビルド「ニンコミ」「ビルドアップ！」

『天空の暴れん坊！ホークガトリング！イエーイ！』

ビルド「ホークガトリング（以下、ホーガト）」「……じゃ、俺は空から攻めるから！」

フォーゼ「マグネット」「おう！任せた！」

そう言うビルドは翼を広げて空に飛んで行った。そして俺はガトリングスイッチとランチャースイッチを起動させ右足にランチャーモジュール左足にガトリングモジュールを装備した。

『ランチャー、ガトリング、オン』

フォーゼ「マグネット」「それじゃあこっちも行く・・・・・・・・」

タウロシ「オオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

フォーゼ「マグネット」「うおっ！あぶねっ！この野郎！」

タウロシ「オオオオツツツ!？」

ビルド「ホーガト」「こっちも！はあっ！」

タウロシ「グオオオ！」

ビルド「ホーガト」「．．．くっ！ダメか！」

フォーゼ「マグネット」「ランチャーで傷が入らねえ．．．。人間態の時より硬くなつてやがるのか！」

ビルド「ホーガト」「．．．。だったらこのベストマッチだ！」

『フェニックス！ロボ！ベストマッチ！』

『A r e y o u r e a d y ? 』

ビルドは空からタカの顔を模した銃で攻撃し、俺はランチャーモジュールを使ってミサイルを全弾発射したがたいしたダメージを与えることができなかった。

そしてビルドは赤と黒のフルボトルを数回振ってビルドドライバーに装填しレバーを回して今度は赤と黒の姿になった。

ビルド「ホーガト」「ビルドアップ！」

『不死身の兵器！フェニックスロボ！イエーイ！』

ビルド「フェニックスロボ（以下、フェニロボ）」「そして！」

『Lady、go!』

『ボルテック、フィニッシュ！イエーイ！』

ビルド「フェニロボ」「はあああ．．．．．はあああああつ!!!」

タウロシ「グ、オオオオオ．．．．．!!!」

ビルドは赤と黒の姿になるともう一度レバーを回して全身に炎を纏うと炎の鳥と なって巨大な怪物の姿になったかいちよ．．．いや、タウロシの背中に突撃しその 硬い甲羅を破壊してみせた。

が、背中に着地した瞬間、タウロシが尻尾を振るいビルドを叩き落とした。そして、叩 き落とされたビルドは校舎に激突しそのまま変身解除され気絶しちまった。

龍兔「……………がはっ！」

フォーゼ「マグネット」……………ビルド！」

タウロシ「オオオオオオオオ
!!!!!!!」

フォーゼ「マグネット」「や、やべえ……………！」

《てんてー……………ん
!!!!!!!》

「ザー」が俺を庇う様に現れタウロシの足を受け止めた。その瞬間、巨大なロボがパワーダイ

パワーダイザー《うつ、ぐうううう……！！！！》

フォーゼ「マグネット」「なつ、パワーダイザー!?……ていうかその声!まさか愛か!」

パワーダイザー（in愛）《……そうだよ!大丈夫でんてん?》

そう、突然現れたパワーダイザーの中にいたのはさつきまでかいちよーに操られていた愛だった。洗脳が解けたのはうれい……が!流石にあぶねえ!パワーダイザーの関節部が何か火花上げてるし!とつとと非難させねえと!

フォーゼ「マグネット」「お、おお・・・助かった。ていうか何してんだ！あぶねえから速く逃げろ！」

パワーダイザー（in愛）《そんなの・・・出来る訳ないって！アタシいっぱい迷惑かけちゃったし！うっ、ぐっ・・・！アタシもてんでんの力になる！》

フォーゼ「マグネット」「お前・・・何言つてんだ。俺はお前が傍にいてくれるだけで・・・。」

パワーダイザー（in愛）《きやあああああ
!!!!!!》

フォーゼ「マグネット」「・・・愛っ!!!」

タウロシの左足を受け止めたまま俺と話していた愛は右足で殴り飛ばされて、そのままパワーダイザーが動かなくなってしまった。

俺が愛の安否を確認しにパワーダイザーのハッチを開くと、そこには頭から軽く血を流している愛がいた。

愛「……………うつ、うう……………」

フォーゼ「マグネット」「愛、無事……………じゃねえが命に別状は無さそうでよかったぜ……………けど……………」

俺は愛の血を流す姿を見て・・・ブチ切れた。

フォーゼ「マグネット」「許さねえぞ・・・よくもやったな!!!!!!」

タウロシ「オオオオオオオオオオオ!!!!!!」

フォーゼ「マグネット」「るせえ!!!!!!ぶっ潰してやる・・・!!」

俺が怒りをタウロシにぶつけようとしたその時、パワーダイザーの中から愛が手を伸ばして怒りで我を失いそうになった俺を止めてくれた。

愛「てん・・・てん・・・！ダメ、だよ・・・」

フォーゼ「マグネット」「・・・愛！しゃべんな！」

愛「てんでん・・・怒りで自分を見失わないで・・・！かいちよーさんを・・・
助けるんでしょ・・・？」

フォーゼ「マグネット」「・・・っ！そう・・・だけどよ・・・」

愛「アタシは・・・いつでも誰かの為に全力を尽くすてんが好きだよ・・・」

フォーゼ「マグネット」「愛っ・・・！すうー・・・はあー・・・。さんきゅー愛！お
かげで目が覚めたわ！」

愛「えへへっ・・・。がん、ばって・・・！」

フォーゼ「マグネット」「・・・・・・・・おう！」

それだけを言つて、愛は気絶しちまった・・・・。ありがとうよ、愛・・・・！そこで見てくれ！絶対にかいちよーを救つてみせるぜ！

そして俺はパワーダイザーから離れると、再びタウロシの方を見て指をさす。

フォーゼ「マグネット」「おいかいちよー！アンタをそこから救い出す！待つてろよ！」

タウロシ「オオオオオオオオオオツツツツツツツ
!!!!!!!」

フォーゼ「マグネット」「ビルドと愛が作ってくれたチャンス! ぜつてえ逃さねえ!!!!」

『リミットブレイク』

フォーゼ「マグネット」「もういつちよお!!!」

『リミットブレイク』

フォーゼ「マグネット」「ライダー……超超電磁……フル! バアアアストオオオオオオツツツツツツツツツツツツツツ!!!!!!!」

俺はリミットブレイク後にもう一度リミットブレイクしてガトリングモジュールとランチャーモジュール、更にU字に合体させたキャノンがエネルギーを纏って大きくなり、超威力のライダー超電磁ボンバー一斉掃射をタウロシに向けて放った。

タウロシ 「オ、オオ!?! オオオオオオガアアアアアアア
!?!?!?!?」

フォーゼ 「マグネット」「戻ってこい!!!
!!!かいちよおおおおおおお
!!!」

タウロシ 「ウ、ウウ! オオオオオアアアアアアア
!!!!!!!」

俺の砲撃を受けたタウロシは絶叫をあげて爆散し、その爆炎の中からかいちよーが飛び出してきた。

俺は変身を解いて二度連続のリミットブレイクのダメージを受けた身体を引きずって地面に仰向けに倒れているかいちよーの所へ向かった。

かいちよーはどこか諦めきれない顔で、俺に問うてきた。

智也「……何故だ、友月。どうして僕は、こうも上手くいかない。僕の……何がいけないんだ？」

天弥「……そんなもん決まってる。アンタはまずその他人を見下す性格を直せよ。誰だつて自分を見下す様な相手と仲良くなるうなんて思わねえよ。」

智也「……そうか、そうか……。ずっと周りが悪いと思っていたが、悪いのは僕の方だったか……。なあ、友月。僕に出来るだろうか？変わるなんてことが……」

天弥「アンタは自分の悪いところを知って反省した。……それに、かいちよーは1年の頃から頑張つて勉強して生徒会長になって、ずっと学園1位を維持して来た……。そんなすげえ人が変われねえ訳ねえよ！……それでも自信が出ねえつて言うな

ら・・・俺がアンタのダチになってやるよ！」

智也「お前が・・・？」

天弥「おう！俺はダチの為なら何でも協力するぜ！だからよかいちよー！・・・いや、智也！俺とダチになろうぜ！」

俺の言葉に目を見開いて驚いた智也は少し間を置いてふつと笑った。

智也「・・・いいのか？僕なんかと友達になって・・・」

天弥「なんかじゃねえよ！俺は智也と本気でダチになりてえから言ってるんだ！だから……ほら！」

智也「友月……。」

天弥「友月……？違うだろ？」

智也「……！まったく、君も物好きだな……僕の方こそよろしく頼むよ、天弥！」

天弥「おう！」

こうして、智也はやつと俺の手を握って俺考案の友情握手をしてくれた。

智也「……………なんと言うか、皆が君を慕う理由がやっとわかった気がするよ。」

天弥「……………？なんだそりゃ？」

智也「いや、こつちのことだ。気にするな。」

天弥「おい！教えろよー！」

そして、俺と智也が会話していると、目を覚ました愛がいつの間にか俺たちの傍まで来ていた。

愛「あー！ー！てんでただけずるい！アタシとも友達になつてよ！」

天弥「愛！お前、怪我は大丈夫なのか？」

愛「りなりーに治してもらったから大丈夫！それよりほらー！かいちよーさん！愛さんとも握手しよ！」

智也「・・・え、え・・・？」

天弥「してやってくれ智也。」

智也「あ、ああ・・・わかった。」

愛「・・・はい！これで愛さんとともつちは友達ね！」

智也「と、ともつち？とは僕のことか？」

天弥「愛はあだ名で呼ぶのが好きなんだよ。」

智也「・・・なるほど」

と、俺達が話している後方で、ビルドと璃奈の2人がいつの間にかその場を去っていったが、俺は2人との会話に集中してて気づかなかった。

あ、ちなみに洗脳されてたこの学園の皆にどう説明しようか迷っていたが、どうも洗脳されてた時の記憶が無くなってらしい。だから俺が仮面ライダーであることも智也がデイヴンジャーであることも覚えては無かった。いや、助かった！

それから2日経った土曜日。俺と智也と愛の3人で遊ぶ約束をしていて、今待ち合わせ場所の原宿駅に愛と2人できると、見知らぬ男が話しかけてきた。

「……やあ、天弥！愛さん！おはよう！」

天弥「……？」

愛「えく……つと？」

俺と愛はしばらくその男を見ると、ようやく誰かがわかった。

天弥「もしかして、智也か！」

愛「え、ええ!?!眼鏡は!?!」

智也「・・・ああ、コンタクトに変えたんだよ。」

天弥「なんでまた・・・」

智也「・・・僕は今まで狭い視野の中こそが世界なのだと思ってた。・・・けど、君たちのおかげでそれは間違いであることを教えてもらった。僕は、梓のある世界で物事

を判断するのではなく、広い視野でこの世界を見ていきたいと思つたんだ。」

天弥「へえー！いいじゃん！」

愛「うんうん！カッコイイぞ！ともっち！」

智也「あ、ありがとう！／＼／＼／＼／」

天弥「よっしゃー！じゃあ今日は生まれ変わった智也を祝つて遊び尽くすぞー！
！」

愛「おー！」

智也「お、おー！」

こうして俺たちは、夜までいろいろなところに行つて遊び続けた。

第28話 シュワツと弾けるジンバーレモン！前編

——かすみ視点——

2年生組が1週間の修学旅行中、1年生組と3年生組はせっかくならこの1週間はゲリラライブをしようということになり、現在しず子とりな子とエマ先輩の協力の下である公園でライブをすることになりました。（ちなみに果林先輩はモデルのお仕事、彼方先輩はバイトだそうです。・・・まったくこのかすみのライブを手伝わないなんて！・・・まあ、お仕事じゃしょうがないですけど・・・）

しずく「かすみさん！そろそろだよ！」

璃奈「・・・頑張つて。璃奈ちゃんボード（ファイオー！）」

エマ「かすみちゃん!応援してるね!」

かすみ「ふっふっふ〜!かすみのさいっこうに可愛いライブ!見ててよね!」

そして私には3人に見送られながら特設ステージに立った。

—— 絃輝視点 ——

絃輝「いやー、わりいなビルド!付き合わせちゃって!」

龍兔「……はあ。何で俺が……」

紘輝「まあいいじゃねえか！パソコンといえればビルドだろ？」

龍兔「……で？どんなの買う気？」

紘輝「おう！何かこう……メモリがデカくて画面が綺麗なやつがいいんだけ……
ど……ん？なんかあそこの公園賑わってね？」

龍兔「……ほんとだ、なんかライブやってるっぽいな。」

紘輝「てかあれ、かすみじゃね！ちよつと観て行こうぜ！」

龍兔「あ、ちよ！……はあ」

最近俺のバイト先で使っているパソコンが調子悪くて、まあ10年前のモデルだしそろそろ買い替えるかって話になって、じゃんけんで俺が敗けたから何かいいのを買に行くことになったんだけど・・・パソコンの事なんてわかんねえし!とりあえずビルドに手伝ってもらおうとこうして街に繰り出したんだが・・・

なんと偶然通りかかった公園でフリフリの衣装を着たかすみがライブをしていた!

龍兎 「こうして観るとやっぱりかすみもスクールアイドルなんだな」

紘輝 「お前、それは酷くね?」

龍兎 「だってなんだかんだ言って俺、璃奈以外がライブしてるとこ見たことないし」

紘輝「お前ちよつと前にエマたちがやったスクールアイドルフェスティバルみてねえの？」

龍兎「観たよ璃奈のソロステージだけ。それ以外特に興味なかったし」

紘輝「おつま！最後の同好会メンバーが全員揃つてのライブが最高に最強だったんだぞ？」

龍兎「へえ」

と、俺達がかすみのライブを観ながら会話をしていると、ライブが終わったらしくかすみ観客に手を振っている。

かすみ「皆さ〜ん!今日はあく、かすみんのライブに来てくれてありがとうございます
まーす!今日だけじゃなく、これから一週間私たち虹ヶ咲スクールアイドル同好会が
ゲリラライブを色んな所でするので、観に来てくださいね〜!」

かすみの言葉に、この場に歓声が上がる。今この公園は皆が笑顔で楽しい空間になっ
てる……が、こういう時に限って……

……最悪つてのは現れやがる。

??? 「お!なんだなんだ?随分賑やかじゃねえか!祭りか?」

紘輝 「あれはっ！」

龍兔 「デイヴエンジャー……！」

声が出た方を見ると、そこにはヨロイトカゲの様な頭にワニの鱗の様な身体をし背中には巨大な腕の様な物を装備し両腕に盾を持った全身ステンドグラスのデイヴエンジャーがいた。

かすみがデイヴエンジャーの存在に気付き観客に避難を呼びかけるが、当の観客達は演出と思っているのか誰もその場を動こうとしやがらない。

かすみ 「……っ！ 皆さん！ ここは危険なので急いで逃げてください!!!」

「何だ?何かの演出か?」

「こつてんなあー!」

かすみ「ちがつ・・・違います!これは演出でも何でもありません!」

???「はっはっは!面白そうだなあ!俺も混ぜろよ!!!」

そしてデイヴェンジャーは真横の木をなぎ倒した。それを見た観客達はようやく危険だと感じたのかパニックになり逃げ始める。

そんな観客達を見てあわあわしているかすみに狙いを定めたデイヴェンジャーがかすみに波動を放ってきやがった。

??? 「てめえが一番目立ってんな．．．じゃあまづはてめえから逝けや!!!!」

かすみ 「．．．．．へ？」

しずく 「かすみさんっ！」

璃奈 「かすみちゃんっ！」

エマ 「逃げてかすみちゃん！」

紘輝 「やべえ！」

『オレンジッ！』

『ロックオーン！』

絃輝 「おっ・・・らぁ!!!」

俺は急いで戦極ドライバーを腰に巻き、オレンジロックシードを開錠して果実状態のオレンジアームズをデイヴェンジャーの放った波動に向けてオーバーヘッドキックで蹴り、波動を弾いた。

そして、弾かれたオレンジアームズに向かって走り戦極ドライバーのカッティングブレードを倒しながら飛び、オレンジアームズを頭から被りかすみの目の前に着地すると同時にオレンジアームズが展開し変身した。

かすみ 「きやあ!・・・って、え、え?」

??? 「・・・あぁ?」

『ソイヤツ!』

絃輝「ほっ……とお!」

『オレンジアームズ!花道・オンステージ!』

鎧武「大丈夫か!かすみ!」

かすみ「ここ、絃輝先輩!?どうしてここに!」

鎧武「偶然通りかかってな!それより怪我はねえか?」

かすみ「あ、はい!大丈夫です!」

エマ「絃君!」

鎧武「エマ!?しずくに璃奈も!お前らまでいたのか・・・!」

しずく「は、はい・・・」

璃奈「かすみちゃんのライブの手伝いで」

かすみだけじゃなく、エマとしずくと璃奈もいたことに驚いている間に仮面ライダーに変身してディヴェンジャーに戦いを挑むビルド。

??? 「お?なんだアイツ?面白そうな奴だなあ!」

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイ！』

ビルド「……はあっ！」

??? 「お！なんだ半分こ野郎？お前が俺の相手をしてくれんのか？」

璃奈「龍兔君！」

鎧武「エマ、しずく、かすみ、璃奈！ここは俺とビルドが引き受けるからお前らは安全なところに逃げろ！」

かすみ「は、はい！」

エマ「絃君!!!」

鎧武「……?」

エマ「頑張ってるね!」

鎧武「……おう!」

俺はビルドがデイヴエンジャーの相手をしてきている隙にエマ達を避難させてビルドの援護に向かった。

鎧武「はあっ!」

???「うおっとお!あぶねーあぶねー!……さっきの奴かあ!お前も俺と遊んでくれるのか?はっは!テンション上がるなあ!おい!」

鎧武「何だこいつ……変な奴だな……」

ビルド「気を付けろ鎧武……こいつ硬い」

ビルドと戦っているデイヴエンジャーが俺に気付いていない隙に、ダツシユで近づいて大橙丸を振るったが、奴はそれを右腕の盾で弾いた。

デイヴエンジャーはそのまま左腕で俺を攻撃してきたが、それをバク転して避けビルドの隣に立った。

鎧武「マジかよ……。どうする?」

ビルド「うーん……。無難に攻撃力が高いやつで行くしかない……。かな。」

鎧武「ま、確かにそれが一番だわな。」

『パインツ!』

『ゴリラ!ダイヤモンド!ベストマッチ!』

『ソイヤツ!』

『Are you ready?』

ビルド「ビルドアップ!」

『パインアームズ!粉碎・デストロイ!』

『輝きのデストロイヤー!ゴリラモンド!イエイ・・・!』

??? 「・・・お?なんだなんだ?」

俺とビルドは少し話し合い、攻撃力防御力の両方があるフォームにチェンジすることになり、俺は、俺は、パインロックシードを開錠し戦極ドライバーに装填し、ビルドは茶色と水色のフルボトルを数回振りビルドドライバーに装填。

そして俺はパインアームズに、ビルドは茶色と水色のボディに巨大な右腕を持った姿になった。

??? 「おー！姿が変わったなあ！・・・いかにも硬そうだ・・・こいつあ壊しがいいがあるなあ!!!おい!!!」

ビルド「ゴリラモンド（以下、ゴリモ）」「行くぞ！」

鎧武「パイン」「おう！」

ビルドはデイヴエンジャーに向けて巨大な右腕でパンチをたたき込んでいき、俺はビルドの攻撃の合間合間にパイニアアイアンで奴に攻撃。

だが、当のデイヴエンジャーは俺の攻撃をいなしつつ、無抵抗でビルドの攻撃を受け続け・・・そして、数回受けたところでビルドの右腕を掴みそのまま右手の握力だけで粉砕した。

??? 「おいおい・・・。なんだこの赤ちゃんパンチは? ぜんっぜん効かねえなあ!!!」

ビルド「ゴリモ」「・・・なっ!」

鎧武「パイナ」「は、はあっ!」

??? 「……パンチつつうのはなあ……こうすんだよお!!!!」

ビルド「ゴリモ」「……っ!」

鎧武「パイン」「ビルド!にげっ……」

??? 「おらああああ!!!!!!」

ビルド「ゴリモ」「ごはっ!?!……がっ!?!」

ビルドの右腕を破壊したデイヴエンジャーは背中の巨大な腕を装備してビルドの胸に叩き込み、そのまま地面に沈めやがった。

剛腕を叩き込まれたビルドはその衝撃で地面にクレーターを作り、変身が解除させられてしまった。

龍兔「……………」

??? 「ははっ、手ごたえがあつたな……こりやどつかの骨でも折れたか?じゃあ……
トドメと行くか!」

やべえ!このままじゃビルドが殺られちゃう!くっそ!

鎧武「させるかよ!」

??? 「おおあつぶね!」

俺はビルドにトドメを刺そうとするデイヴエンジャーにパイニアンを振るい、奴は後ろに飛び退いた。

その隙に倒れているビルドの下へ行つて庇う様に前へ出た……が。

やべえな……こつからどうする？ビルドは倒れちまつたし、あの硬さ……パイニアンのアイアンでどうにかできるか？……いや、難しいな。ビルドのあの右腕で出来なかつたんだ……あく、せめてもう1人仲間がいれば何とかなるかもしれねえのに！

「何か楽しそうなことしてるね？僕も混ぜてよ！」

鎧武「お前は……！」

そして、今この場に来てほしくない最悪の来客が現れた。

——しづく視点——

かすみさんのゲリラライブ中、突如ディヴェンジャーが現れてライブを滅茶苦茶にしてしまいました。

そんな中、偶然居合わせた絃輝さんと龍兎さんがディヴェンジャーと戦ってくれて、私達はライブを観ていた子供達と共に避難することが出来ました……が、そこには数十体の下級怪人が私達の行く手を阻んでいました。

男の子「うえ〜ん！こわいよお〜ん！」

女の子「おかあさーん！」

エマ「大丈夫、大丈夫だよ皆！」

かすみ「ひええ〜！ど、どうしようしず子〜！」

しずく「お、落ち着いてかすみさん！ここは私がカンドロイドを使って……」

璃奈「ううん、しずくちゃん。ここは私がやる！」

しずく「え、璃奈さん!？」

かすみ「ちよ、危ないってりな子！」

璃奈「大丈夫。私には、この子がいる!・・・アラン!」

アラン Ver. II, V 「ニャオオーン!」

自分のカバンの中からカンドロイドを出そうとした私を制して前へ出た璃奈さんは、突然自身が製作した猫型ロボットアランの名前を呼んだ。

すると、璃奈さんのカバンの中からアランが出てきて器用に璃奈さんの左腕に着地しました。

かすみ「え、アランじゃん。どうする気?」

璃奈「見てて。・・・アラン！カンピオフォルマ！」

アランVer. II, V「ニヤン！」

かすみ「え、え!?!左腕に引っ付いたあ!?!」

しずく「せつ菜さんが見たら喜びそうですね」

璃奈「バージョンアップしたこの子の力を見せてあげる！」

そう言うと、璃奈さんはアランの背中を軽く叩いた。

すると、カシユツという音がしてアランの背中が開き、スロットが出てきた。璃奈さんはカーディガンのポケットからピンク色のフルボトルを取り出しそれを数回振るとアランの背中のスロットに挿しこみ、スロットを閉じた。

フルボトルが装填された瞬間アランの口が開き、中からノズルが出てきて璃奈さんは

それを下級怪人達に向ける。

『オクトパス!』

璃奈「・・・行くよ。」

かすみ「うわ、すっご・・・」

しずく「流石璃奈さん。的確に相手の目に当ててる・・・」

エマ「さすがだよ璃奈ちゃん!」

璃奈さんはアランの口から出ているノズルから墨を射出させて的確に下級怪人達の

目を撃ち抜き、目潰しをしていきましたけど、相手の数もあり徐々に対処出来なくなっ
ていきました。

璃奈「……敵の数が多すぎて、アランのエネルギーが先につきそう。」

しずく「や、やっぱり私も戦うよ……！」

璃奈「……でも、カンドロイドでもこの数を相手に出来るかどうか……」

しずく「……確かに、強いて牽制くらい……かな。」

私と璃奈さんが攻め手を決めあぐねていると、私達の後ろにいたかすみさんが突如笑
いだし、何だかすっごいドヤ顔で私達の前に出る。

かすみ「ふっふっふ〜!しょーがないなあーりな子もしず子は〜!」

しずく「かすみさん?」

璃奈「かすみちゃんどうしたの?」

かすみ「まーまー!ここはかすみんにお・ま・か・せ!」

璃奈「ゲームの」

エマ「コントローラー?」

しずく「・・・あのねかすみさん?今はゲームなんてしている場合じゃないんだよ?それに、コントローラーだけあってもゲームは出来ないんだよ?」

かすみ 「いいから見てて！」

そう言うのと、自身のカバンからちよつと大きめで真ん中に謎のスロットがあるゲーム機のコントローラー？とグレーのプログライーズキーを取り出してプログライーズキーを起動させる。

『パワー！』

かすみ 「これをこう！」

『サモンライズ！』

そして、起動させたプログライズキーをコントローラーのスロットにある液晶パネルにかざした瞬間、かすみさんの目の前にゴリラのライダーモデルが出現し、かすみさんはプログライズキーをコントローラーのスロットに装填するとゴリラのライダーモデルを操作し始めました。

璃奈「ゴリラの……」

しずく「ライダーモデル!？」

エマ「わあ〜!おつきいねえ〜!」

かすみ「最後にこう!」

『コントロールライズ!』

かすみ「いつけえー！ゴリちゃん！」

す、凄い……！かすみさんがあの不思議なコントローラーで呼び出したゴリラのラ
イダモデルがどんどん下級怪人達を殴り飛ばしていつてる……！これなら！

—— 絃輝視点 ——

最悪だ……。目の前にいるすげえかてえデイクヴェンジャーの相手だけでも面倒な

のに、なんで今このタイミングでお前が来るんだよ……!!

鎧武「[パイン]」……カザリ!

カザリ「鎧武……。君と長話をする気はないんだよね。だからさ……。とつとと死んでよ?」

???「おい待てよ!こいつは俺の獲物だぜ?」

カザリ「じゃあ同時に放とうよ?」

???「……ちつ。ほんとは俺一人でやりてえが……。まあいいか!乗ったぜ!」

カザリ「じゃあ、行くよ。」

カザリが黄色い竜巻を腕にデイクエンジンジャーが腕にエネルギーを溜め始めた。どうする、どうする、どうする！今俺が避けたら俺の後ろで気絶してるビルドが危険だ！……かといってこのまま俺があいつらの攻撃を受ければビルドの二の舞……。何か解決策はねえのかよ！

「……………鎧武!!!しやがんで!!!」

鎧武「パイン」「へ？お、おう！」

『トリプル・スキャニングチャージ！』

「……………はあっ!!!」

カザリ「何っ!？」

??? 「うおっ!」

突然聞こえた声に従って慌ててしやがむと、さつきまで俺の頭があつた場所を無色の斬撃が通過してカザリとデイヴエンジャーに向かって飛んで行き、カザリとデイヴエンジャーはその無色の斬撃に当たり数メートル先まで飛ばされた。

俺がその状況に驚いていると、今の斬撃を放った奴が俺に手を差し伸べてきた。

そこにいたのは………

オーズ「鎧武、大丈夫？」

オーズだった。
。

第29話 シュワツと弾けるジンバーレモン！後編

—— 絢輝視点 ——

デイヴェンジャーとカザリの2体を相手に絶対絶命の俺の前に現れたのはしずくから連絡を受けて駆け付けたオーズだった。

オーズ「鎧武、立てる？」

鎧武「パイーン」「お、おおサンキュ……って、オーズ!?何でここに!?!」

オーズ「しずくから連絡があつたんだ。それで、ちようど近くにいたから急いで駆けつけたら鎧武がやられそうになって慌てたよ。……それで?ビルドの状況を聞いていい?」

鎧武「パイーン」「……ああ。ビルドはあそこにいる硬そうなデイヴエンジャーの攻撃でやられてさ……骨が折れてる可能性がある……」

オーズ「なんだって!?!それじゃ……すぐに済ませるしかないね。」

う、うおお……。オーズからすつげえ怒りのオーラが見える……。まあでも、俺も……。仲間をやられてムカついてるんだけどな。

オーズ「それじゃあ、どうせカザリは僕を狙ってくるだろうし、僕はカザリを相手するよ。……あのディヴェンジャーは任せてもいいかな？」

鎧武「……まあ、しゃーねえか。……だつたらこいつで行くぜ！」

オーズ「それって……もしかして彼の？」

鎧武「ああ、アイツの形見だ。……お前は嫌がるかもしれないけど……力、貸してもらおうぜ！ 戒斗！」

『マンゴー！』

『ロックオン！』

俺は腰のホルダーからマンゴロックシードを取り出してそれを開錠し戦極ドライバーにセットした。

俺の頭上に現れた果实状態のマンゴアームズを確認してカッティングブレードを倒し、「展開したマンゴアームズを装備し、重量級メイス “マンゴパニツシャー” を握る。

『ソイヤツ!』

『マンゴアームズ!』

『ファイト・オブ・ハンマー!』

鎧武「マンゴ」「ふう・・・行くぜ!」

オーズ「……うん！」

マンゴーパニツシャーを一度見つめて軽く息を吐いてから俺はデイヴエンジャーに、オーズはメダジャリバーを手にカザリに向かつて行く。

鎧武「マンゴー」「はあああ……！おりやあ！」

???「おお！ははっ！何だそのハンマー！さっきのより重い攻撃が出来るみてえだなあ！ははっ！心臓が高鳴ってきやがったぜ！」

鎧武「マンゴー」「これを使って押されたんじゃ戒斗の奴に何言われるかわかんねえ……！だからあ!!！」

??? 「……くははっ! そうだもつと! もつと叩き込んでこいよおっ!!! もつともつと……俺に心臓の高鳴りを聞かせろお!!!!」

そこからの俺達は互いに攻撃を叩き込めば叩き返される、そんな攻防を繰り返す。奴の攻撃を受け続けたマンゴーアームズはところどころが砕け、ボロボロの状態になって来たが、奴もまた一点集中で攻めたかいがあって両腕の盾にヒビが入り始めていた。俺がマンゴーパニツシャーを構えたその時、急にデイヴェンジャーが攻撃の手を止めた。

??? 「……………そういや、楽し過ぎてすっかり忘れてたぜ。」

鎧武「マンゴー」「は……はあ? 何だよ急に。」

??? 「いや、お前の名前を聞いてなかったと思ってな。．．．お前、名前は何て言うんだ？」

鎧武「マンゴー」「．．．．．鎧武。仮面ライダー．．．鎧武。」

??? 「鎧武．．．か。いい名前じゃねえか！俺はストロングゲージ．．．よろしくなあ鎧武!!!」

鎧武「マンゴー」「くっ．．．はあっ!!!」

俺もボロボロだが、あいつも．．．。後もうちよつと．．．もうちよつとなんだ！耐えてくれよマンゴーパニツシャー！

鎧武「マンゴー」「おっ……りゃあ!!!」

ストロング「ごはっ!……ははっ、おりゃあ!!!」

鎧武「マンゴー」「ぐっ、がっ!……らあああつ!!!」

後一発……後一発!これで……!

俺がボロボロのマンゴーパニツシャーを振るつた……その時だった。奴に
当たる前にマンゴーパニツシャーが限界を迎え、粉々に砕けちまった!?
そんな俺の隙を、奴は見逃すはがなかった。

鎧武「マンゴー」「なっ!?!」

ストロング「……………隙ありい!!!」

鎧武「マンガー」「っ!しまっ……………!?!」

回避が、間に合わな……………!!!

ストロング「うおらあああああ!!!」

鎧武「マンガー」「……………ぐごっ!がはっ!」

ま、ずい．．．！身体が、動かない！変身も解けちまつて、このままじややられちまう．．．！動け！動いてくれ！俺が倒れたら、後ろにいるエマ達が．．．！！

ストロング「．．．あ、ははっ。楽しかったぞ鎧武．．．．．じやあなあ！！！！」

紘輝「．．．っ！」

くそっ！すまねえ．．．．．エマ。

「……はあっ!!!」

ストロング「うぐわあっ!?!」

絃輝「……え?え?え?」

ストロングゲザーは、倒れて動けない俺に向かって巨大な腕を叩き落そうとしたが、突然銃撃がストロングゲザーを襲い、不意を突かれた奴はもろにその銃撃を食らい地面をゴロゴロと転がった。

俺は何が起きたのか理解できず慌てて銃撃が飛んできた方を見ると、そこには膝立ちでホークガトリンガーを構えているビルドの姿があった。

ビルドはゆっくりと立ち上がりふらふらしながらも俺の方へとやって来た。

絃輝「ビルドお前……何で……あいつの攻撃受けて骨が砕けてたんじゃ……」

龍兎「……まあ、正直ギリギリだった。ゴリラモンドと……この、予備のドリルクラツシャーが無ければ確実にあの攻撃で死んでた……」

そう言つてビルドはぐちゃぐちゃになつたドリルクラツシャーを捨てた。

ああ、そういうことか。……あいつのパンチを受ける寸前にあのドリルクラツシャーをで防いだのか……

龍兎「……ほら、立てる? 鎧武?」

絃輝「お、お……あいだだだ……さ、さんきゅ。」

龍兎「・・・さて、ここから俺たちが勝つには・・・これを使うしかないだろうな。」

絃輝「それって!?!・・・出来んのか?」

龍兎「やるしかないでしょ。こいつを開放出来るかどうか・・・それで俺達の勝敗が決まる。」

絃輝「確かにな・・・」

俺はビルドが懐から出した物を見て驚いた。何故ならそれは、ビルドを更に強化させるアイテムだったからだ。

ビルドの言葉に、俺も薄々感じてはいた。

ストロングゲージは強い。だからこそ、俺達はここまでボロボロにされちまった訳だしな・・・。こつから奴に勝つには、確かに強化フォームにならないといけねえ・・・。

でも今の满身創痕な俺達にこいつを開放出来るのか?そのイメージが、どうにも掴めねえ……。

龍兎「鎧武、不安ならあれを見てみる。」

絃輝「……あれ?……っ!あれは!」

俺がとあるロックシード型の石を見つめていると、俺の心情を察したのか、ビルドはある方向を指さした。つられてその方向を見ると、そこにあったのは……

絃輝「……な、なんだあのゴリラ!」

龍兎「いや、それも驚くけどそつちじゃない！」

ビルドの指さす方向を見ると、そこにはエマ達を守る様に下級怪人達に大暴れする機械のゴリラがいた。

だが、ビルドが見てほしかったのはそつちじゃなかったみたいで、すぐさま訂正が入り、俺は改めてエマ達の方を見た。すると……

男の子「がんばえー！ー！仮面ライダー！ー！ー！」

女の子「こわいかいじんをやっつけてー！ー！」

エマ「頑張って絃君！」

かすみ「こっちはかすみんとゴリちゃんやんでやるんで、思いっきりぶちのめしちやっってください!」

しずく「かすみさん、言い方が物騒だよ? . . . でも、頑張ってください絃輝さん! 龍兔さん! 応援することしか出来ませんが、お2人が必ず勝ってくれと信じています!」

璃奈「龍兔君、絃輝さん、ファイト。璃奈ちゃんボード【ファイオー!】」

絃輝「あいつら」

龍兔「あんなに応援されたらさ、出来るかどうかわからなくても、やらなきやつて力が湧いてくるだろ?」

絃輝「 ああそうだな! その通りだぜビルド!」

皆の応援の声を聞き、さつきまで抱いていた不安が一気に無くなつていくのを感じる
と同時に心が温かくなっていく。

すると、俺の心に反応したのか、持っていたロックシード型の石が輝きだし、砕けて
本来の姿を取り戻した。

ビルドの方を見てみると、俺と同じことが起きていて、ジュースの缶の様なフルボト
ルが姿を現していた。

そして、ビルドはジュースの缶の様なフルボトルを数回シャカシャカ振り、俺は戦極
ドライバーのフェイスプレートを外してそこに「ゲネシスコア」っていう機械を取り
付けて懐からオレンジロックシードを取り出すと、俺とビルドは互いに横並びになつて
強化アイテムを構えた。

絃輝「なあビルド？　こういうさ、皆の声を聞いて心があつたかくなる感じ？　こういう
現象って、物理学つてので証明出来ないのか？」

龍兔 「いや、無理だな。これは化学では証明出来ない……まさに、奇跡つてやつだな。」

紘輝 「奇跡……か。じゃあ！応援してくれるあいつらの為にも！ぜってえ勝たねえとな!!!」

龍兔 「そうだな！」

『オレンジッ!』

『レモンエナジー!』

『ロックオーン!』

『ラピッドタンクスパークリング!』

『Are you ready?』

こうりと「変身つつ!!」

決意を新たに、俺は2つのロックシードを開錠し、戦極ドライバーに装填する。俺の頭上にはオレンジアームズとレモンエナジーアームズが同時に出現し、カッティングブレードを倒すとオレンジアームズとレモンエナジーアームズが融合し、1つの大型のアームズになり俺の頭にかぶさると、そこから展開してレモンの輪切りが無数に並んだ様な模様をした陣羽織になった。

ビルドの方はフルボトルのプルタブを開いて起動させた後、ビルドドライバーに装填しレバーを回した。すると、ビルドの前後にロゴマークを模したものが現れて、それぞれ新たなハーフアーマーを形成し、ビルドの身体を挟み込む様に装着された。

『ソイヤッ!』

『ミックス! オレンジアームズ! 花道・オンステージ!』

『ジンバーレモン!ハハッー!』

『シュワツと弾ける!ラビツトタンクスパークリング!』

『イエーイ!イエーイ!』

鎧武「ジンバーレモン(以下、ジンレモ)」「ここからは、俺達のステージだあ
!!!!!!」

ビルド「ラビツトタンクスパークリング(以下、スパークリング)」「新たな勝利の
法則は……決まった!」

俺とビルドは強化フォームであるジンバーレモンアームズとラビツトタンクスパー
クリングフォームに変身した。

そして、ビルドは俺にある作戦を耳打ちしてきた。

ビルド「スパークリング」「……なあ鎧武、ちよつと話したいことがあるんだけど……」

鎧武「ジンレモ」「ん？……っ！それって！」

そう、ビルドが提案してきた作戦……それは奴を、ストロングゲイザーを倒す最適な作戦だった。

ビルド「スパークリング」「それじゃあ……行くぞ！」

鎧武「ジンレモ」「おう!」

ストロング「何かの作戦か? そんなん無駄なのによおっ!!!!」

ストロングゲザーに、まずはビルドが4コマ忍法刀を握って向かって行く。そしてビルドは4コマ忍法刀のトリガー4回引いて俺ごと煙幕で身を隠した。

『隠れ身の術! ドロン!』

ストロング「うおっ!?! 煙幕かよ!?! けど、こういうのは背後から襲ってくるって相場が決まってるだ よっ!!!!」

ビルド「スパークリング」「……!!」

ストロング「しやあ、ビンゴ!!!」

ストロングゲージは煙幕に怯むことなく自身の真後ろに拳を放った。そこには奴の予想通りビルドがいて、ストロングゲージの拳がクリーンヒットした……。が、そのビルドが突然、煙に変わった。

ストロング「な、なにいつ!？」

よっしゃ、かかったな！お前が今殴ったビルドは本物じゃなく分身の術で作った分身

体のビルドだ!

そしてビルドの分身体に驚いている隙に俺はレモンエナジーロックシードを戦極ドライバーからソニックアローに装填し弓を引つ張ったままスライディングで奴の懐に潜り込んでストロングゲザーの腹にソニックアローの矢先を向けた。

『ロックオン!』

ストロング「なっ、てめえいつの間に! そうか、今までのはこの布石か!」

鎧武「ジンレモ」「どうかな? まあ取り合えずこれでもくらえ!!!!」

『レモンエナジー!』

鎧武「ジンレモ」「お りゃあっ!!!!」

ストロング「くそ、がああああ．．．!!!」

俺の放ったレモン色のエネルギー矢をゼロ距離で受けたストロングゲージは空に打ち上がっていく。

空に打ち上がっていったストロングゲージの後ろに黄色のフルボトルを装填したドリルクラッシュヤーを構えているビルドがいた。

ビルド「スパークリング」「計算した角度びつたり．．．流石鎧武！」

『ボルテックブレイク!』

ストロング「なっ、にっ．．．!」

ビルド「スパークリング」「はあっ!!!」

ストロング「ぐっ!があああああつつつつ
!!!!」

ドリルクラッシュャーにライオンフルボトルを装填したビルドはライオンの頭部を模したエネルギー弾をストロングゲザーの背中に放ち、その攻撃を受けたストロングゲザーは凄い勢いで地面に叩きつけられ、轟音と共にクレーターが出来た。

ストロングゲザーに必殺技を放ったビルドはそのまま俺の隣に着地し、煙が立ち込めるクレーターを見つめる。

鎧武「ジンレモ」「・・・やったか？」

ビルド「スパークリング」「分からない。今ので終われば嬉しいんだけど・・・」

そんな俺達の想いも空しく、煙の中から身体中から血を吹き出すストロングゲージが高笑いしながら現れた。

ストロングゲージは口から血を吐き出しながら叫ぶ。

ストロング「くくっ。あつはつはつはつはつ!!!!これだ!心臓が生きろ生きろって激しく鼓動してドクドクと身体中に血を巡らせるこの騒音!この感覚!あーうるせえうるせえ!!!心臓の鼓動が激しく鼓膜に響きやがるこの感じが!唯一生きてるって感覚を味わえる!!!俺は今ここに生きてる!あーやっぱり戦いはいいよなあ!!!」

鎧武「ジンレモ」「まじか……。あれだけ撃ち込んでまだ立ち上がるのかよ。」

ビルド「スパークリング」「くっ。タフすぎる……。!」

ストロング「なあお前ら!まだ全力じゃないんだろ?お前らの全力を俺に味わせろ!!!!」

お前らの全力の攻撃を受け止めてやるよ!!!
 !!!
 そんなで………ぶつ殺してやるよ。」

ストロングゲザーの急激な雰囲気の変化に遂にこの戦いも終わりに近いことを悟った俺達は互いに目配せをして頷き合うと、俺はカッティングブレードを3回倒し、ビルドはベルトのレバーを回して互いに必殺技を発動。

俺の目の前にレモンとオレンジの輪切り型のエネルギーが現れビルドは右足に赤と青の炭酸の様なエネルギーを溜めると、ストロングゲザーに飛び蹴りの体勢で突っ込んだ。

『オレンジスパークینگ!ジンバーレモンスパークینگ!』

『ready、go!スパークリングフィニッシュ!』

鎧武「ジンレモ」「せいはああああああ
!!!!!!」

ビルド「スパークリング」「はああああああ
!!!!!!」

俺とビルドの全力の必殺技を受けてまお笑うストロングゲージ。それでも俺達は諦めず力を込める。

ストロング「くははははは!!!
!!!そうこれだ!これが欲しかったんだよおおおお!!」

鎧武「ジンレモ」「く、の・・・!!」

ビルド「スパークリング」「いい加減・・・落ちろ!!!」

しばらくの攻防の末……遂にストロングゲージの盾が完全に壊れ、俺とビルドの必殺技がストロングゲージを捕らえ、ストロングゲージは数m後方の建物に激突した。

正直俺もビルドももうキツイ……!これでも立ち上がるなら本気でやばいぞ!
そんなことを思いながら肩で息をしている俺達はストロングゲージの方を見る。すると徐々に煙が晴れていき、奴の姿が見えてきた。

ストロング「はあ……!はあ……!」

鎧武「ジンレモ」「まじ……かよ……」

ビルド「スパークリング」「あれだけ叩き込んで、まだ立っているなんて……!」

煙から出てきたストロングゲザーは俺達同様に肩で息をして、足もふらふらだった。そんな奴の姿を見て戦慄しつつも腕に力を込めたが、少し様子がおかしかった。

ストロング「……あーくそつ。お前らともつともつと戦遊いたかったのによお……。身体が限界みてえだわ。もう指一本も動かせねえ……。まあ、最後に最高のもん受けて、大満足だわ。本当に楽しかったぜえ……。じゃあな。」

身体中から火花を上げ血を噴き出していたストロングゲザーは、それだけを言い残して爆散した。

ストロングゲザーを倒したことを認識した俺達は、一気に身体の力が抜けて倒れる

と同時に変身も解除された。

あーもうまじで力が入んねえ……。わりいオーズ……。そっちにはいけそうにねえわ……。

—— 碧映視点 ——

しずくからの連絡を受けて鎧武達の手助けにやってきた僕は、そこにいたカザリと激しい攻防を繰り広げていた。

オーズ「カザリイイイ！」

カザリ「オーズウウウ！」

僕のメダジャリバーとカザリの鉤爪が激しく火花を散らし合う。そんな時、少し離れた場所から爆発音が聞こえ一旦カザリとの剣戟を中断して音が見ると、鎧武とビルドが倒れていた。

オーズ「鎧武っ！ビルドっ！」

カザリ「あくあ。負けちゃったんだ、あいつ。あんなにイキがってたのに……ねっ
!!!!
」

オーズ「ぐっ！」

僕が鎧武達の方へ駆け寄りとした瞬間、カザリが鉤爪を振るってきて咄嗟にメダジャリバーで防ぐことが出来た。

カザリ「行かせないよ? 前は撤退してあげたけど、今日は本気で君を殺すから。」

オーズ「……くっ。」

どうしたらいいんだろう。鎧武達のことには心配だけど、カザリがいる限り近づくことが出来ないし……何か殺気凄くなってるし……

しずく「お兄様危ないっ！！！！」

オーズ「・・・っ!?!あぶなっ!?!」

カザリ「・・・ちっ。」

突然聞こえたしずくの声に思考を止めた僕は、カザリが放った黄色の斬撃を寸でで躲すことが出来た。

ていうか、えっ!し、しずくっ!?!なんで!?

オーズ「何でしずくがこっちにいるの!?!かすみちゃん達と一緒にいたんじや・・・」

しずく「・・・お兄様が心配で来ちやいましたっ☆てへっ☆」

僕の問いに一瞬間を置いたしずくは、ペ○ちゃんの様に舌をペロツと出して可愛く右手をコツンツと額に置いた。

いや、うん。可愛いんだよ?可愛いんだけどね?今はそんな場合じゃないっていか・・・あくでも、今の写真撮りたかったなあ。

カザリ「・・・・・・・・ねえ?戦闘中って自覚・・・・・・・・ある?」

オーズ「・・・・・・・・あ、ごめん。」

しずく「すみません。つい・・・・・・・・。」

カザリ「・・・・・・・・はあー。その態度。ほんとにムカつく・・・・・・・・。わかった。オーズに

はちよつと本気になつてもらおうか。」

オーズ「……？」

て。そう言うと、カザリはしずくの方を向いた。……その鉤爪にエネルギーを溜めて。

カザリ「という訳でさ、死んでよ！君！」

しずく「……あつ。」

『トリプル・スキヤニングチャージ！』

オーズ「はあっ!!!」

しずく「きやあっ!」

カザリ「あはは残念。．．．あとちよつとだったのに。」

オーズ「．．．．．カザリ。君は今、やってはいけないことをしたよ。」

正直、あれをすると今の状态的にキツイけど、もうそんなことどうでもいいか。だつて．．．．．カザリは僕の大切な妹に手を出そうとしたんだから。

オーズ「しずく、下がってて。」

しづく「……は、はい。」

オーズ「カザリ……今から君を倒す。」

カザリ「……は？倒す？君が僕を？どうやって？」

オーズ「正直、まだこの方法は使いたくなかったんだけどね。」

そして僕は、緑色のメダルを2枚取り出してタカメダルとトラメダルをオーズドライブバーから抜いて、2枚の緑色のメダル“クワガタメダル”と“カマキリメダル”をオーズドライブバーのスロットにセットし、オースキャナーで3枚のメダルをスキャンして緑一色のガタキリバコンボにチェンジした。

『クワガタ!カマキリ!バツタ!』

『ガクガタガタ・キリツバ・ガタキリバツ!』

オーズ「ガタキリバ」「・・・はあっ!」

カザリ「何が出てくるかと思えば、ウヴァの力じゃん。・・・で、何?数の暴力で倒そうってこと?舐めてんの?」

オーズ「ガタキリバ」「まあ数の暴力ではあるよ。でも、これは予想出来なかったでしよ?」

カザリ「はあ?」

僕はガタキリバコンボの能力を使い分身体を4体出現させて合計5人のガタキリバ

コンボの僕が円型に並んだ。

「ただこれで終わりじゃない。僕たちはそれぞれオーズドライバーのメダルを差し替えてオースキャナーでスキャンさせる。ちなみに本物の僕はタトバコンボだよ。」

オーズ「ガタキリバ（本物）」「それじゃあ……皆行くよ！」

オーズ「ガタキリバ×4（分身体）」「……うん!!!」

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！』

オーズ「はあっ！」

『ライオン！トラ！チーター！ラタ・ラタ・ラトラアータアー！』

オーズ「ラトラーター」「やあっ！」

『クワガタ!カマキリ!バッタ!ガクタガタガタ・キリツバ・ガタキリバツ!』

オーズ「ガタキリバ」「はいっ!」

『サイ!ゴリラ!ゾウ!サ・ゴーズ・・・サ・ゴーズオツ!』

オーズ「サゴーズ」「うおおっ!」

『シャチ!ウナギ!タコ!シャ・シャ・シャウタ!シャ・シャ・シャウタ!!』

オーズ「シャウタ」「てやっ!」

それぞれのコンボにチェンジした僕たちは、横並びなってポーズを決めた。

しずく「は、はわあああ！色とりどりのお兄様がいっぱい！これは夢？夢かな？」

カザリ「なっ・・・!?」

しずく「ちよつと頬をつねってみようかな。・・・あ、いたつ。夢じゃない！5人のお兄様に囲まれちゃったらずく、どうなっちゃうの——！きや——♡」

カザリ「ちよ、うるさいなっ!!!」

しずく「・・・ひっ、ご、ごめんなさい。」

オーズ「ラトラーター」「しずくにひどいことはさせない！うおおおお！」

オーズ「皆目を瞑って！」

オーズ「サゴーズ」「しずくは僕が守るよ！」

ラトラーターコンボの僕が吠えると同時にライオンヘッドの蠶ッライオネルフラツシヤーッで光を乱反射させてこの場を光で包む。

この技は僕達も自滅させてしまうので皆一斉に腕で目を隠しつつ目を瞑った。この技を知らないしずくはサゴーズコンボの僕が両腕を広げてしずくの視界を遮ってくれた。

カザリ「・・・ぐっ、うっ！」

オーズ「よし皆!今のうちに叩き込もう！」

オーズ「シヤウタ」「おー！」

オーズ「ガタキリバ」「わかったよ！」

ラトラーターコンボの僕の光に怯んだカザリに僕達は一斉に必殺技を放つ為、再度
オースキャナーでメダルをスキャンさせる。

『『『『スキャンニングチャージ』』』』
!!!!!!

オーズ「サゴーズ」「まずは僕から！うおおおおお
!!!!!!」

カザリ「うっ！があっ！これはっ、重力操作っ……！」

オーズ「ラトラーター」「次は僕だ！はあああ……せいつ、せいつ！せいやー！」

カザリ「うっ、ぐっ、ぐはっ！」

オーズ「サゴーズ」「これもくらえ！」

カザリ「ぐはあっ……！」

サゴーズコンボの僕が放つドラミングによる重力波を受けたカザリは重力増加により地面にクレーターを作りながら片膝をつく。

重力波を解除したところにラトラーターコンボの僕が高速で移動して“トラクロ”で連続斬りでカザリを斬り付ける。

そして、ゴリ押しとばかりにサゴーズコンボの僕が“ゴリバゴーン”というガントレット状の武器をカザリに向けて発射し、カザリを空に打ち上げた。

オーズ「シャウタ」「せいっ！」

カザリ「うぐっ！」

オーズ「ガタキリバ」「せいやー——！」

オーズ「シャウタ」「せいやー——！」

オーズ「はあああ……ていやー——！！！！」

カザリ「く、そっ！う、ぐああああああ……！！！！」

空に打ち上げられたカザリをシャウタコンボの僕が“ウナギウイップ”という両腕に装備されている2本の電気鞭でカザリを拘束し、そこにガタキリバコンボの僕とシャ

ウタコンボの僕、最後に僕自身が飛び蹴りの体勢になって必殺キックを順番に叩き込んだ。

僕達の必殺キックを受けたカザリは爆発し、その爆発と同時に分身体が消えて僕一人に戻った。

オーズ「……ふう。」

しずく「お兄様!凄かったです!」

オーズ「あ、しずく……無事で……よかつ……た……」

しずく「お兄様?おにーさまー!!!」

僕は体力の限界で変身が解除され、そのまま意識を失った。

—— Not anyone 視点 ——

仮面ライダーオーズの必殺キックを間一髪のところ、その場から逃げ出し何とか生き延びたカザリだったが身体には致命的なダメージを受け、もはやまともに歩くことも出来ずフラフラの状態だった。

カザリ「ぐっ、ああつ・・・！オーズの奴！思い出しただけでもイライラが収まらない！絶対に、絶対に許さない！」

仮面ライダーオーズへの怒りに身を震わせるカザリ。そんな彼の下に黒のスーツを着こなし、夜空の様に暗い黒髪的美青年が近寄って来た。

??? 「やあカザリ君。随分派手にやられたみたいだね?」

カザリ 「・・・っ!?!何しに来たの・・・?」

??? 「・・・まあまあ落ち着いてよ。実は君に渡したい物があつてね」

カザリ 「渡したい物?」

??? 「これさ」

そう言つて黒髪的美青年が差し出してきたのは、真ん中に円型のスロットがある禍々しい形をしたベルトのバックルと光沢感のある濃い紫で縁取りされた一枚の黒いメダルだった。

それを見たカザリは訝し気な目を向ける。

カザリ「それは・・・？」

??? 「これは私が作った7つのベルトの内の1つ。憤怒ドライバーとその力を最大限に使うデスコアメダルだよ」

カザリ「まさか、それを使って僕に仮面ライダーになれとでも言うつもり？」

??? 「ああ、その通り」

カザリ「・・・！本当にどいつもこいつも僕をイラつかせる・・・！絶対にごめんだ

ね!そんなものを使わなくても僕の力であいつらを倒すよ!」

そう言ってふらつきながらもこの場を去ろうとするカザリに美青年は笑いながら返す。

??? 「あはは!僕の方で倒す・・・ね。君だって気付いているんだろう?君の方では彼等に勝てないことに」

カザリ 「・・・なんだって?」

??? 「だってそうだろう?初めて彼等の前に出た時も君は死にたくないあまりに撤退し、今回も同じ理由で逃げて来た。それは君自身が自分の力ではどうにもならないことを分かっているからだ。・・・まあ、それでも認めたくないって言うなら私が断言してあげよう。カザリ君、君の力だけでは絶対に彼等・・・いや、オーズ1人でさえも

勝てないよ。」

カザリ「……………っ！」

??? 「もういいだろう？ そう意固地になつたところで君に待っているのは死だけだよ？ 死にたくなければ、君の心に渦巻く怒りを晴らしたいと言うのなら……………この憤怒ドライブを受け取るんだ。」

黒髪的美青年の言葉にカザリは憤りを感じながらも、言い返すことが出来なかつた。それは言われたことが凶星だったからだ。彼は血がにじむほどに拳を握り締め、怒りと悔しさを瞳に乗せて目の前の美青年を見る。

カザリ「……………本当に、それを使えば僕は死なずに済むんだね？」

??? 「このベルトは君の怒りでその力を増す特別なベルト。君の怒りが増せば増すほど、絶大な力を得ることが出来る。」

カザリ 「……………そう。なら……………癪だけど使つてあげるよ。」

こうして、カザリは憤怒ドライバーとデスコアメダルを受け取りこの場を去つて行った。

カザリが去つてすぐ後、美青年の下にワインレッドのジャケットを着こなす男性が現れた。

??? 「……………よろしかったのですか?あの様な者に憤怒ドライバーを渡して。」

??? 「暴食か。．．問題無いよ。そもそも憤怒ドライバーを使わせる為に彼を蘇らせただけだからね。彼の憤怒は使える．．．．せいぜい憤怒ドライバーを覚醒させる為に働いてもらうさ。．．それよりも、嫉妬は見つかった？」

??? 「．．．申し訳ございません！現在、私とルクスリアの2人で搜索しているのですが、なかなか見つけれられず．．．．」

??? 「．．．ん？2人だけ？強欲と怠惰はどうしたの？」

??? 「あの2人は協力を要請しても無視でして．．．．」

??? 「まったく仕方がないねあの2人は。．．．．まあわかった。出来るだけ早く見つけ出してね。」

??? 「．．．はっ！必ずや見つけ出して見せます！．．．．ところで」

??? 「．．．何かな？」

??? 「その・・・傲慢は見つけなくてもよろしいのでしょうか?」

??? 「あーそれは大丈夫。候補はもう見つけてあるから」

??? 「そうなのですか?」

??? 「うん。・・・それじゃ、わかったら嫉妬を見つけてこようね?」

??? 「・・・は、はいっ!急いで見つけて参ります!」

「そう言うと赤ワインジャケットの男性は急いでその場を後にし、美青年は一度夜空を見上げた後、軽い足取りで闇夜に消えて行った。

クリスマス特別編

聖夜の奇跡???俺達、入れ替わって

るうううう
!?!?!?!

——Not anyone視点——

侑（陽哉）「・・・・・・・・何でこんなことに・・・・・・・・」

陽哉（侑）「なっちゃったの——————!!!」

劍緋陽哉と高咲侑。この2人は現在、互いの身体が入れ替わっている。何故こんなことが起きてしまったのか・・・それは、数時間前に遡る・・・

今日はクリスマススイブ。陽哉と侑の2人は、明日行われるクリスマスパーティーに向けて色々買い出しに出していた。

陽哉「えーっと、ケーキの材料はドライブと彼方さんが集めてるんだっけ？」

侑「うん！料理の材料も一緒にトライドロンに乗っけてくんだって！」

陽哉「こういう時、車は便利だなあ。・・・で？俺達はあと何を買えばいいんだっけ？」

侑「えーっと、ツリーの力ザリ．．．じゃなくて、飾りは大体買ったし．．．部屋の飾り付け用の物くらいかな？」

陽哉「そつか．．．じゃあ早く終わらせて帰るか！」

侑「そうだね！かすみちゃん達もお菓子の買い出し終わったみたいだし！」

そうして陽哉と侑が足早に次の店に行こうとしたところで．．．．．サンタの恰好をした変なおじさんに遭った。

???「クリスマス！それは恋人達の宴！お何と素晴らしい！そして僕はサンタの恰好をした恋のキューピット、その名も．．．．．天ヶ崎、恋です！」

侑「え．．．何あの人．．．」

陽哉「さ、さあ・・・? (いや、待てよ? あのおじさん・・・今自分のこと天ヶ崎恋つて言ったか? 天ヶ崎恋・・・どつかで聞いたことある様な・・・なんだっけなあゝ・・・)」

恋「さあ! この素晴らしい日を僕色に染めて・・・」

陽哉「あーーーーー!!! 思い出した!!!」

侑「うわっ!?! うるさっ!?! 急にどうしたの陽?」

陽哉「あ、ごめんごめん・・・」

恋「まったく誰だ? この僕の邪魔をするのは・・・おや? おやおやおや? そこにいるのは仮面ライダーじゃあないか?」

侑「えっ!?! 何で陽が仮面ライダーって知ってるの!?! ...ちよつと陽! いつの間に他

の人に見られてたの！やばいじゃん！」

陽哉「いやいや落ち着け侑！このおじさんは……」

恋「おじさんだとおろろ！この天ヶ崎恋をよくもそんな屈辱的な名で呼んでくれたなあ！許さないぞお！」

陽哉のうっかり発言に激怒した天ヶ崎恋は、怒りのままにラヴリカバグスターサンタバージョンに変身した。

侑「え、ええっ!? デイヴエンジャー!?!」

陽哉「……くっ、やつぱりか！侑！お前は隠れ……」

ラヴリカサンタ「お前何かこうしてやるう！」

陽哉「・・・なっ!?!うわああああ
!!!!」

侑「何で私までっ・・・きやああああ
!!!!」

そして陽哉達はラヴリカが放った謎の光線に当たってしまい、そこで気を失った・・・。

気を失って数分、最初に目を覚めたのは陽哉だった。

「う、ううくん……はっ！奴は！」

陽哉が目を覚ましてすぐは、頭が回らず一瞬ぼーつとしていたが、すぐに先ほどのことを思い出して自身の警戒心を強めて辺りを見回す。

そんな彼の声で眠っていた侑も目を覚ます。……そして目を覚ました2人は互いを視界に入れ……。驚愕した。

「もおく陽うるさくい……。……って！何で私が目の前にいるの!?!」

「……えっ!?!何で俺が目の前に!?!……まさか」

侑（陽哉）「俺達！」

陽哉（侑）「私達！」

「入れ替わってるうううううううううう
!!!!!!!
」

そう、先程天ヶ崎恋ことラヴリカバグスターサンタバージョンが放った光線は、受けた者の精神を入れ替えるというものだった。

この光線には機械等の魂が無いものと人間等の魂があるものでも精神の入れ替えが可能である。もちろん、生物同士の入れ替えも可能……つまり、ラヴリカが当初狙っていたのは陽哉とポストを入れ替えようとしていたのであつて陽哉の隣にいた侑は、完全な巻き添えをくらつたということになる。

侑（陽哉）「厄介なことになつたな……。とりあえず、皆のところにな……。…」

陽哉（侑）「ふわああああ！これが男の子の身体！ていうか陽の身体！うっわー！遅しー！ひやつほーい！」

侑（陽哉）「あ、ちよまつ！戻ってこい侑！侑………!!!」

自分と同じ様に戸惑っているであろうと思った陽哉は侑の方へ振り返る……が、当の侑は初めての男の子の身体に大興奮し、ベタベタ触った後その場から走り去ってしまった。

陽哉は急いで侑の後を追いかけたが、如何せん今は侑の身体。同好会の中では天王寺璃奈と競り合う程に体力も筋力も無いに等しい侑の身体では当然仮面ライダーとして日々戦い、鍛えている自分の身体に追いつけるはずもなく、追いかけてしまってもその数秒で息切れを起こし見失ってしまった。

というか、先程璃奈と競り合う程と言ったが、侑はマネージャーで璃奈はスクールアイドル。当然スクールアイドルとして日々トレーニングをしている璃奈は徐々に体力も筋力も上がっている訳で、このまま行けば侑は同好会の中でダントツのビリッケツになつてしまう。果たして侑本人はこのことに気付いているのかいないのか、彼女の往く先は過去か未来か――

侑（陽哉）「……いや言ってる場合か！話が脱線してるって！」

あ、ごめんなさい。

侑（陽哉）「ていうか会話出来たの!? 君は誰!?!」

あ、自分、今回だけの特別ストーリーテラー（自称）です、はい。よろしくお願ひします。

侑（陽哉）「あ、そうなんだ。こっちこそよろしく。」

．．．．．でもおかしいですね? こっちの声が聞こえない様になつてはるはずなんですが．．．．．

侑（陽哉）「え、バリバリで聞こえるんだけど？」

あ、まじですか。うう……ん。……あ、やべ。通信切るの忘れてた。こっちのミスですすいません！

侑（陽哉）「ちよ、大丈夫？」

すいません、自分今日からのド新人なもんで。とりあえず通信切るんで陽哉さんはそのまま話に戻って貰って。

侑（陽哉）「ま、まあわかった。……頑張ってるね？」

お心遣い痛み入ります、ありがとうございますががんばります！

侑（陽哉）「じゃ、じゃあ俺はとりあえずこのまま同好会の部室に行くよ。」

わかりました！

えーおほん！こうして、体力の限界で侑を見失った陽哉は同好会の部室にいるであろう仲間達に助けを求める為に虹ヶ咲学園に向かった。

『身体が入れ替わったあ

!!!!!!

』

虹ヶ咲学園の同好会の部室に着いてから中へ入ると、案の定仮面ライダーの仲間達と同好会のメンバーがいた。

そして陽哉が先程起きた出来事を皆に話すと、全員が目が飛び出さん程に驚いた。

しずく「見た目は完全に侑さんですね……」

雷羽「ドッキリか何かかと思っっちゃうよな……」

侑（陽哉）「だから本当に俺なんだって!」

エマ「うーん、どうしたらわかるかな?」

絃輝「何かこう、身体の中身が見えればいいんだけどな……」

彼方「わー、絃輝さんのエツチ〜」

絃輝「そういう意味じゃねえよ！」

彼方「わかってるよお〜」

侑（陽哉）「真面目に考えてくださいよ！本当に困ってるんですからー！」

果林「わかってるわよ・・・とは言っても」

愛「どうすればいいかわかんないよねえー」

皆が悩んでいる中、今まで黙っていたかすみが不適な笑いと共に声を上げた。

かすみ「ふっふっふ！私、いいこと思いつきましたよ！」

せつ菜「本当ですかかすみさん！流石です！」

太陽「で、どんなことを？」

かすみ「そ・れ・はー．．．．．出番ですよ愛先輩！」

愛「え、アタシ!？」

かすみ「そうです！今こそ愛先輩の激さぶダジャレを披露する時！」

愛「あ！遂に言ったな！さぶいって！激さぶって！もおー怒ったかね愛さん！見せてあげるよ、温めに温めたクリスマス用最強ダジャレを連発したげる！お腹がよじれても知らないからな！」

天弥「おー！愛の最強ダジャレ！しかもクリスマス用か！それは楽しみだな！」

愛「じゃあ行くぞー！強制ヤバい、今日聖夜ばい！」
3 択問題にサンタ苦悶

大！” “サンタクローズになったらアンタ苦労するよ？” “サンタが焼肉食つ

てるよ。これが本当のサンタ食うロスってか？” “サンタさんの母さん多産！

” “否、聖夜に安静や。” “こんなに部屋の明かりが豪華なら、イルミネー

ション、要る意味ねーしよん” “クリスマス、願い事の多さにサンタもビックリす

ます!?” “……で、どうだあ！”

「「「「「「「」」」」」」」

天弥「あっはっはっはっは!!! やっぱ愛のダジャレはさいつこうだ！」

何と、愛は8つもダジャレを披露したが、結局笑ったのは天弥ただ1人。普段なら侑も大爆笑してくれるのだが、今の侑の中身は陽哉であるため当然笑わない。これを見た

全員は確信した……。「本当に入れ替わっている!」……と。

愛「あ、あのいつも大爆笑してくれるゆうゆが……笑ってない!」

走介「これは……まじで入れ替わってるっぽいな」

歩夢「本当に入れ替わってるんだ……いいなあ侑ちゃん……」

しずく「歩夢さん、それは今違うかと……」

龍兎「これはまずいことになったな……」

璃奈「龍兎君、どういうこと?」

龍兎「人間の身体っていうのは魂を入れるいわゆる器だ。元々の形とは違う形のものを入れたりすると最初こそ違和感があるでしょ? だけど、日が経つに連れて見慣れてき

たり器自体が入れたものに馴染んでくる。」

龍兎の説明に、大体のメンバーは何が言いたいのか理解した様で頷いているが、内3人……果林とかすみと天弥だけは頭に？マークを浮かべている。

かりかすてん「二う、ううくん……??」

龍兎「……うくん、例えば靴なんだけど、初めて買った靴って履きづらさがあったりするでしょ？でも、履き続けていくと自分の足に馴染んでくる。人間の身体もそんな感じで他の人間の精神……魂を入れると最初は違和感があるけど、徐々に身体に馴染んでくる。……だからこのままいくとセイバーと侑さんは二度と元に戻れなくなるってこと」

かすみ「そんな！」

果林「大変じゃない!」

天弥「まじかよ!」

侑（陽哉）「だから皆で協力して侑を探して欲しいんだよ!」

勇真「確かに、このままセイバーさんと侑さんが元に戻らなかつたら今後の戦いにも影響してきますよ」

碧映「それは流石に避けたいよね……」

雷羽「しよーがない!パーティーの準備は一旦止めて、侑さんを探しに行くか!」

こうして、同好会と仮面ライダーの全員による侑大搜索作戦が始まった。

侑大搜索作戦が発動している中、今だ興奮冷めやらぬ侑は、ずっとやってみたかったある事をしようとラヴリカを探していた。

陽哉（侑）「何処にいるのかなーさっきのディヴエンジャー。早くあれを試したいのにー！ー！」

そうしてラヴリカを探すこと40分。ようやくお目当てのラヴリカを街中で見つけた。見つけたラヴリカはまた人間態である恋の姿に戻っていた。

恋「何処もかしこも恋、恋、恋！ピンクのハートが飛び交っている！ラブ・・・い

や、ラブが満ち満ちている!」

陽哉（侑）「見つけたよ! デイヴエンジャー!」

恋「・・・うん? おやおやこれは誰かと思えば先程のお嬢さんではありませんか! どうしました? まさか、僕の魅力にやられちゃったのか・な☆でもごめんね☆僕は皆のものだ・か・ら☆」

陽哉（侑）「え・・・ちよつと何言ってるかわからないけど、行くよ!」

『聖剣ソードライバー!』

『ブレイブドラゴン!』

『かつて、全てを滅ぼすほどの偉大な力を手にした神獣がいた・・・』

『烈火抜刀!』

陽哉（侑）「……変身！」

『ブレイブ、ドラゴン♪』

『烈火一冊！勇気の竜と火炎剣烈火が交わる時、真紅の剣が悪を貫く！』

『火炎剣烈火！』

そう言うと、侑は聖剣ソードライバーを腰に巻き、ブレイブドラゴンワンダーライドブックの表紙を開いて閉じた後、ソードライバーに収めて納刀している火炎剣烈火を抜刀した。

そう、侑は仮面ライダーセイバーに変身したのだ！そして、これが侑のやってみたかったことである！

セイバー「……うわあ！ほ、本当に変身出来たー！やったー！」

恋「ほほう！仮面ライダーに変身しましたか。まあ、その身体は元々あの彼の物なので当然といえば当然。……それで？どうするのですか？」

セイバー「決まってるよ！貴方を倒す！やあああ！」

恋「はっはっはっ！おもちゃを与えられた子供の様に可愛らしい！これもひとえに愛！ならば僕も……その愛に応えよう！」

火炎剣烈火を振る侑の攻撃を余裕で避けた恋は一度距離を置いて、ラヴリカバグスターサンタバージョンに変身した。

ラヴリカ「・・・さあ！何処からでもかかってくるよ！アオツ！」

セイバー「調子狂っちゃうなあー！やあつ！やあつ！」

ラヴリカ「あははっ！そんなんじや僕は捕まえられないぞ☆」

セイバー「もおーどうして当たらないのお！」

ラヴリカ「本当は君のチャーミングなはしやく姿をもう少し見てあげたいところだけど・・・そんな物騒な物を振るうのはレディーとしてはいただけないなあ！ちよつとオシオキさせてもらう・・・よっ！」

セイバー「きやあつ!？」

ラヴリカは少し強力な攻撃を侑に与え、それをまともに受けてしまった侑は数メートル

ル吹き飛んで変身が解除させられてしまった。しかも、攻撃を受けた衝撃で火炎剣烈火を放り投げてしまい、絶体絶命のピンチに陥ってしまった。

陽哉（侑）「う、うう……。」

ラヴリカ「それじゃ……バイバイ！」

陽哉（侑）「ひいっ！」

ラヴリカ「君の死に……LOVEを！」

倒れた侑に向けて両手でハートを作ってエネルギーを溜め始めたラヴリカ。……その光景を見て初めて死を意識した侑は恐怖で身体を強張らせる。

そして、ハート型のエネルギーが放たれようとした……。その時！侑とラヴリカの間に割って入る者がいた！

「……そうはさせない!!!!!!」

ラヴリカ「なにつ!? ……ぐわあっ!?」

陽哉（侑）「へ……ええ……?」

「やっと見つけた、侑。」

陽哉（侑）「あ、ああ……!陽う!」

侑を助けた人物……それは、火炎剣烈火を手にした侑。……いや、陽哉だった。陽哉は侑を探していた際に偶然侑とラヴリカの2人が戦っているところを発見し、侑がやられて火炎剣烈火を落とした時にそれを拾い、2人の間に割って入った。

そして陽哉は静かに侑へ問いかけた。

侑（陽哉）「…………侑、仮面ライダーになって戦ってみた感想はどうだった？」

陽哉（侑）「え……………」

侑（陽哉）「俺の身体になった時にえらいテンションが上がってたからな、仮面ライダーになってみたかったんだろ？」

陽哉（侑）「う、うん……………」

侑（陽哉）「なんでまたそんなことを？」

陽哉（侑）「勿論派手に怪人を倒す姿がカッコイイって思ったのもあるよ?」
「だけど……陽、いつも私達の為に傷つきながら戦ってくれて……それなのに私は何も出来ないし……だから、私も仮面ライダーになれたら陽の負担を少しは軽くできるかな」

て………」

侑（陽哉）「……………」

陽哉（侑）「だけど、考えが甘かった。さつきあのラヴリカに殺されそうになって……人生で初めて死つていうのを意識して……私、恐怖で動けなかった。だから……ごめんね、私じゃ力になれそうに無いよ……」

侑のその言葉を聞いた陽哉は一度大きく溜息を吐くと、侑の頭を少し雑に、だけど優しく撫でた。

陽哉（侑）「わわっ。ちょ、いきなりなに！髪が乱れる……！」

侑（陽哉）「まあ、その怖さを知ることが出来たっていうのは、人としても成長出来る

いい機会だったと思う。．．．それにな侑。お前は私じゃ力になれないって言ったけどそれは違う。」

陽哉（侑）「．．．え？」

侑（陽哉）「侑や、歩夢。君達が俺の傍で．．．後ろで見守ってってくれるから、俺は安心して戦えるんだ。君達の存在が．．．俺に力をくれるんだ！だから、そうやって心配してくれるのは嬉しい．．．けど、大丈夫！2人がいれば、俺は何度だって立ち上がる！」

陽哉（侑）「．．．そっか。私、ちゃんと陽の力になれてたんだね．．．。」

侑（陽哉）「．．．ああ。だから、後は俺に任せてソードライバーを渡してくれ。」

陽哉（侑）「．．．わかった、はい！」

2人のそんなやり取りを見たラヴリカは酷く狼狽していた。

ラヴリカ「な、なんだこの純度の高いLOVEは!?これが噂に聞く互いを思いやる幼馴染のパワー……………」

『PERFECT!』

ラヴリカ「うぐわあっ!」

陽哉（侑）「え、な、なに急に…………!陽何かしたの!」

侑（陽哉）「いや、何もしてない…………うぐっ!」

陽哉（侑）「な、なにこの苦しき…………!ううっ!」

突然特大ダメージを受けたラヴリカの影響なのか、陽哉と侑が突然苦しみだし、陽哉の身体から緑のオーラが、侑の身体から赤いオーラが出てきて赤いオーラは陽哉の身体に、緑のオーラは侑の身体に入った。

するとどうでしょう!入れ替わっていた2人の精神が元に戻ったではありませんか!

侑「あ、あれ……?」

陽哉「もしかして、元に戻った?」

侑「やったー!……でも、なんで?」

陽哉「さあ?でもちようどいい!これで全力で戦える!」

侑「陽……頑張ってね!」

陽哉「……ああ！」

そして侑が離れたのを確認した陽哉はブレイブドラゴンワンダーライドブックを開こうとした……が、その瞬間、ワンダーライドブックが赤と緑に光輝き、その光が収まると……表紙の絵柄が少し変わったブレイブドラゴンワンダーライドブックになっていた。

そして陽哉は、戸惑いつつもその特別なワンダーライドブックを開いた。

陽哉「な、なんだこれ……ハッピーブレイブドラゴン？ 一体、どんな力があるんだ……」

『ハッピーブレイブドラゴン！』

『かつてすべてを幸せにするほどの偉大なイベントに届く神獣がいた……。』

『烈火拔刀!』

陽哉「……変身!」

『ハッピーライダー!』

『ハッピー!一冊!幸せの本は、さらなる力を剣に宿す!』

セイバー「ハッピー」「うおお……。!何か、サンタっぽい……。!」

特別なワンダーライドブックを使用した陽哉は、左肩にサンタの帽子、左腕にクリスマスツリー型の小型の盾を装備したセイバーに変身した。

ラヴリカ「な、なんだその姿は……！」

セイバー「ハッピー」「一日限りの奇跡の姿だ！見せてやる……希望に満ちた、トキメキの力を！」

陽哉は一度火炎剣烈火をソードライバーに納刀し、トリガーを引いて必殺技の体勢に入った。

『必殺読破！』

『烈火抜刀！』

『とある物語！一冊撃き！ファイヤー！』

セイバー「ハッピー」「はあああ……はああああつ!!!」

ラヴリカ「な、そんな!?この愛の伝道師たる僕が……仮面ライダーなんかになんか……
!うわあああああつつつつ
!?!?!?!」

セイバー「ハッピー」「メリー……クリスマス。」

『GAMECLEAR!』

クリスマスツリー型のエネルギーに包まれた陽哉はそのまま飛び蹴りの体勢でラヴリカに必殺技を叩き込んだ。

ラヴリカを倒すことが出来た陽哉は変身を解除して侑の下へ駆け寄り、空を見上げる
と、そこにはキザなポーズを取った天ヶ崎恋の幻影が見えた。

恋『また会おう………BOY & GIRL』

ゆうはる「……もういいよっ!!!」

ひとつツツコミ終えた2人はその場を後にし、すでに部屋に戻っていた他のメンバーに今回迷惑かけたことを謝罪してクリスマスパーティーを楽しむのであった――

第30話 トラブル修学旅行 in 京都

—— 侑視点 ——

虹ヶ先学園の2年生は現在修学旅行で京都に来てるよ！私・歩夢・せつ菜ちゃん（今は菜々ちゃんの姿）・愛ちゃん・副会長さんの5人でグループを作って京都の綺麗な街並みを堪能中！

侑「はあく！生八ツ橋美味し〜！」

歩夢「もおー侑ちゃん！口に粉付いてるよ！」

「菜々「やはり京都と言えば和菓子ですね！」

愛「愛さんは抹茶も好きだな〜！」

侑「あ、わかる〜！副会長さんは？」

私がせつ菜ちゃんの隣であんみつを食べている副会長さんに話を振ると、急にもじもじし始めた。

副会長「あ、私も抹茶と和菓子の組み合わせは最強だと思う・・・」

侑「だよねー！」

歩夢「……あれ？副会長さんどうかした？」

副会長「……え？」

歩夢「いや、何だかもじもじしてる様に見えたから……何かあったのかなって」

菜々「そうなのですか？」

歩夢にそう言われた副会長は、伏し目がちであんみつを膝の上に置き、ほんのり顔を赤らめながら答えた。

副会長「あ……あのね？／＼／＼／＼／せつかくの修学旅行だし、その……私のことを副会長……じゃ、なくて、名前で呼んで欲しいなって／＼／＼／」

副会長のもじもじしてる姿……とっても可愛いYO！確か副会長さんの名前は「世良 彩音（せら あやね）」さんだったよね。じゃあ……

侑「よーしわかった！それじゃあ……彩音ちゃん！」

歩夢「よろしくね、彩音ちゃん！」

愛「あやっち！」

副会長（以下、彩音）「皆……！」

菜々「よかったですね！彩音さん！」

彩音「うん♪」

改めて彩音ちゃんとの仲を深めた私達は、和菓子と抹茶を堪能した後、清水寺に来ていた。

愛「おー！たっかーい！」

侑「風がきもちいー！」

彩音「よく清水の舞台から飛び降りる気だつて言うけど、ほんとに飛び降りたら死んじゃうわよね？死んでも構わないってことかしら？」

歩夢「彩音ちゃん……それはちよつと思考がクレイジー過ぎるよ……」

菜々「ふおー！テンションが上がりますね！！！！」

歩夢「ちよ、せ・・・菜々ちゃん！そんなに身を乗り出したら危ないよ！」

身を乗り出す菜々ちゃんを必死に止める歩夢。そんな時、意外な人物が声をかけて来た。私達はその声に振り向くと、そこには普段京都にいるはずのない陽がいた。

「・・・やっぱり侑と歩夢！」

歩夢「え？」

侑「ん？・・・つて、陽っ!？」

愛「おっ！はるはるじゃん！」

菜々「陽哉さん！奇遇ですね！」

陽哉「愛ちゃんにせつ・・・」

菜々「あーっとおおおお！」

陽哉「むぐっ!？」

愛ちゃんと菜々ちゃんに挨拶しようとした陽だったけど、誤って菜々ちゃんの姿の時にせつ菜ちゃん呼びしようとしたところを危機一髪で菜々ちゃんが陽の口を塞ぎ、そのまま少し離れたところまで猛スピードで連れて行った。

まあ多分事情説明中だと思うから、私は困惑している彩音ちゃんに陽について教えることにした。

彩音「あ、えつと……」

侑「あー、彩音ちゃん。今本人連れてかれちゃったけど紹介するよ。さっきの男の子は剣緋陽哉って言って、私と歩夢の幼馴染なの」

彩音「えっ!?そ、そうなの!？」

歩夢「うん♪」

私が彩音ちゃんに陽の紹介をしていると、私達と同一年くらいの男の子が話しかけて来た。

「???」
「……お！可愛い子ちゃん集団はっけーん！ねえねえ君たちー！俺の連れ知らない?」

歩夢「ゆ、侑ちゃん……」

愛「うわ、明らかにチャラ……」

彩音「……」

侑「彩音ちゃん、すっごい怖い顔してるよ？……でも、この人の着てる服どこかで……」

突然現れた男の子に私達がどうしようか困っていると、菜々ちゃんとの話を終えた陽が戻って来て、その男の子にチョップを食らわせた。

陽哉「何やってんだお前。」

??? 「あいたっ!? …… って陽哉!？」

陽哉 「あんまりこの子達に迷惑かけるなよ、翔護。」

翔護 「この子達つてことはお前!まさかこの可愛い子ちゃん達と知り合いなのか!」

陽哉 「まあ……」

翔護 「紹介してくれーよおーー!」

陽哉 「ちよ、脳が!脳が揺れる……!」

翔護と呼ばれた男の子は陽の陽の顔を両手で挟んで激しく前後左右に揺らす。
な、なんて言うかチャライし激しいなあこの人……。

侑「ね、ねえ陽？もしかしてその人は陽の友達？」

陽哉「ん？ああ……こいつは五十嵐翔護（いがらし しょうご）。俺の通ってる創神学園の同級生で侑の言う通り俺の友達なんだ。」

愛「……ぶふっ！あーはっはっは！www」

侑「ゆ、侑の言うとおり……あははははっ！ひっー！ひっー！www」

彩音「え、え……？2人共どうしちゃったの？」

歩夢「侑ちゃんも愛ちゃんも……笑いのツボが赤ちゃんだから……」

菜々「陽哉さん……やってしまいましたね……」

陽哉「うん、そんなつもりじゃなかったんだけど……後悔してる……」

それから10分ぐらい私と愛ちゃんは笑い転げ続けた。

だ、だって・・・w急にダジャレを言ってくるんだもん・・・卑怯すぎるよ・・・w

w
w

翔護「ま、まあ・・・何かよくわかんねえけど・・・よろ☆」

陽哉「まあ見た目はチャラいけど、いい奴なんだ！仲良くしてやってほしい！」

翔護「・・・何かそれ、俺が友達いねえ奴みたいじゃね・・・？」

それから私達は翔護さんに自己紹介をしたんだけど・・・最後の私が終わったところ、京都中で大規模な地響きが起きた。

侑 「な、なにこの地響き……!？」

翔護 「うおお……!なんだなんだ!？」

陽哉 「皆!頭を押さえてしやがむんだ!」

突如発生した地響きに私達を含めて清水寺にいる人達がパニックになり始めたところ、更に驚くことが起きた。

それはこの清水寺中心に北・南・西・東の4箇所で一斉に4体の巨大な怪物が現れた。

バケガニ「……！！！！！！」

歩夢「あ、あれなにつ!？」

愛「巨大な……カニっ!？」

陽哉「あれは……!？」

菜々「ほ、ほかにもいますよ!？」

彩音「サイみたいのと、マンタ?それに、あれは……人間の手の怪物!？」

翔護「な、なんじゃありやあ!？」

私達の正面には巨大なカニ、右にはマンタに鳥の翼を加えた巨大な怪物、左にはサイ

の様な灰色の怪物、後方には人間の手の様な形で指の部分が蛇になった掌に目を持った怪物が清水寺目掛けて進軍してきていた。

陽哉「このままじゃ京都の街が……！皆！絶対にここから動くなよ！」

翔護「はあ!? な、なんでだよお！」

陽哉「分かんないのか!!! 今、あの怪物達は4方向からここに近づいてきてる! ならへたに動くよりも、ここにいた方が安全だ! ……大丈夫、俺が何とかする!」

翔護「何とかするってお前……まさかあの怪物達に向かって行く気かよ!?!」

陽哉「……ああ。」

翔護「! はあ………死んだらマジ許さないからな?」

陽哉「わかってる。……彼女達は任せた！」

翔護「あんなデカ物から守れるかわつかんねえけど……俺なりにやってみるわ！」

そして陽は私達の下から去って行った。私は特に強く引き止めなかった翔護さんに気が付いたら質問していた。

侑「あの……私が言うのもなんですけど、どうしてすぐに行かせたんですか？」

翔護「ん？ああ……あいつがあんな真剣な顔をしてる時は、基本的に人の静止を聞かないからつていうのが1つ。後はまあ……あいつは俺に何か隠してるんだろぅけどさ、きつとそれは人を助けることだと思うから……だから俺はあいつがああいう顔

をした時は引き止めないって決めてんのよ」

この人、確かに見た目ちよつとチャライけど……陽の言つた通りいい人なんだ……。
いい友達じゃん、陽！

見た目で判断しちやいけないっていうけど、その通りだね……反省しなきゃ
な。

——陽哉視点——

侑達から離れた俺は、パニックになっている人込みの中をかき分けて物陰に隠れ、念のためにつけてきていた聖剣ソードライバーをバックから出して腰に巻き、ドラゴニックナイトワンダーライドブックの表紙を開いて閉じた後にソードライバーに収めて火

炎劍烈火を抜刀し、セイバーに変身した。

『ドラゴニックナイト!』

陽哉「変身!」

『烈火抜刀!』

『ドラゴニックナイト!』

『すなわち、ド強い!』

セイバー「ドラゴ」「さて、次は……!」

ドラゴニックナイトに変身した俺は侑達がいる方とは反対側から飛びだし、地面に着地する前にワンダーライドブックを3回押し込んでブレイブドラゴンを召喚してそのままブレイブドラゴンの背に乗って、清水寺からまずはバケガニへ向かって行った。

セイバー「ドラゴ」「まずはバケガニから行くぞブレイブドラゴン！」

ブレイブドラゴン「グオオッ！」

今この京都の街に仮面ライダーは俺しかない！なんとしてでも、これ以上の被害を出さない為にここで食い止める！！！！

セイバー「ドラゴ」……その為には、まずあの4体の注意を俺だけにひきつけない

と！」

そして俺はブレイブドラゴンに意思疎通でバケガニに向かって火球を放つ様に指示をした。

ブレイブドラゴンの放った火球が当たったことでバケガニの視線がこっちに向いて、俺達を追いかけながら巨大なハサミを振り回して来た。

セイバー「ドラゴ」「あ、あぶっ！あぶなっ!?!・・・と、とにかくブレイブドラゴン！
このままイツタンモメンの方に行くぞ！」

ブレイブドラゴン「グオオオオ！」

イツタンモメン「キュルルル！」

セイバー「ドラゴ」「ブレイブドラゴン！もう一発だ！」

ブレイブドラゴン「グオオオオ!!!」

イツタンモメンに近づいた俺はブレイブドラゴンにもう一度火球を放つ様に命じ、残りの2体にも同じことをして4体の注意を俺だけに集め、そのまま一か所に集めることが出来た。

セイバー「ドラゴ」「何としてでも、この京都の街を……そこに住む人々を守ってみせる!」

私達は清水寺から外の戦況を見守っていた。

侑「陽・・・大丈夫かな・・・」

愛「せめててんや他の仮面ライダーの皆がいてくれたら・・・」

歩夢「でも、今から呼んでも・・・」

侑「・・・間に合う可能性は低い・・・」

私達に重い空気が流れる中、今まで黙っていた菜々ちちゃんが声を上げた。

菜々「……………あ————!!!」

歩夢「うわあっ!？」

愛「ちよ、急にどしたんせつつ……………じゃなくてななち!」

菜々「いますよ!すぐに来てくれる方が!」

侑「え、うそっ!?!いったい誰なの……………?」

菜々「絶望を希望に変える魔法使い……………ですよ」

そして菜々ちゃんは自分の携帯であの人に連絡を入れた。

陽哉視点

4体の怪物を相手に大立ち回りを繰り返して来たが、そんな中でイツタンモメンが超音波攻撃をしてきた。

イツタンモメン「キュルルルル!!!」

セイバー「ドラゴ」「う、ぐっ!これは・・・超音波か・・・!」

ブレイブドラゴン「グルルツ・・・!」

イツタンモメンの超音波攻撃を受けた俺とブレイブドラゴンはその音に苦しむその

場に止まってしまった。

そんな俺達の隙をこの怪物達が見逃すはずがなく、バケガニが俺達に向かってそのデカイハサミを振り下ろして来た。

セイバー「ドラゴ」「・・・っ！しまっ！」

バケガニ「・・・!!!」

セイバー「ドラゴ」「ぐわああああ・・・!!!」

バケガニの振り下ろされたハサミに叩き落とされた俺は京都の街に激突し、その衝撃で変身が解け、ブレイブドラゴンも消えてしまった。

陽哉「ぐっ、うう・・・！」

エラスモテリウムオルフェノク「ウオオオオオオオオオオオオ
!!!!!!」

陽哉「まず・・・い・・・！」

倒れて動けない俺へ、エラスモテリウムオルフェノクはその巨大な前足で踏みつけようとして振り下ろそうとしてきた。

これは流石に……死……

「悪いけど、そいつをまだやらせる訳にはいかない！」

エラスモテリウム「グオオアアアアツツツ
!?!?!?」

陽哉「え、え……? 一体何が……?」

巨大な足が振り下ろされそうになったところで、突如火炎がエラスモテリウムオルフェノクを襲い、俺は死を免れることが出来た。

そして、火炎が飛んで来た方へ目を向けるとそこには巨大な赤色の魔法陣があり、そこから見覚えのあるドラゴンが現れバランスを崩していたエラスモテリウムオルフェノクに体当たりをして吹き飛ばした。

見覚えのあるドラゴンが体当たりした後、そのドラゴンの背から俺の下にこれまた見覚えのある奴が現れた。

ウイザード「ごめんセイバー。待たせた。」

陽哉「うい、ウイザード……！何で京都に!？」

ウイザード「菜々から連絡があつたんだ。」

陽哉「せつ菜ちゃんが……。そつか、それじゃあ後でお礼言わなきやな……」

ウイザード「そう言うこと！……さ」

「そして俺は差し出されたウィザードの手を取って立ち上がったが……あれ？ちよつと待てよ……」

陽哉「ウィザードが来てくれたことはありがたいんだけど、俺とお前だけでもあの4体はキツくない？」

ウィザード「あーそれなら大丈夫。……助っ人を連れてきてるから」

陽哉「え……？」

そう言うウィザードは自分が通つて来た魔法陣に視線を向けた。俺もそれにつられて魔法陣に再び目をやると、2つのロボットの様な物が出てきて人間の手の様な怪物のヨルムンガンドとイッタタンモメンに攻撃を加えた後、俺達のところに着地した。

『スイカアームズ！大玉ビツクバン！』

鎧武「スイカ」「おおお．．．せいは——！」

イツタンモメン「キュルルツ．．．！」

『パワーダイザー！』

フォーゼ《パワーダイザーで．．．キター——！！》

ヨルムンガンド「ツ．．．!?!」

陽哉「鎧武！フォーゼ！」

鎧武「スイカ」「よおセイバー！間に合ってよかったぜ！」

パワーダイザー「infooze」「あつぶなかつたなー!」

陽哉「2人共来てくれたのか、ありがとう!」

鎧武「スイカ」「京都の危機……ていうか、お前の危機って聞いたら来ない手はないだろ!」

パワーダイザー「infooze」「そーそー!俺達が来たからには大船おおふなに乗ったつもりでいろよ!」

ウィザード「それを言うならおおぶね。……それよりも3人共、誰がどれを担当する?」

ウィザードの言葉に俺達は怪物達の方を見る。すると、ちようど4体の怪物達が起き上がり、こつちに睨みをきかせていた。

鎧武「スイカ」「んーそうだなー……じゃ、俺はあのサイみたいな奴にするわ！」

パワーダイザー「infooze」「じゃ、俺はあの手みてえな奴で！」

ウィザード「それじゃあ俺はあの飛んでるマンタみたいなのにしようか」

陽哉「じゃあ俺がバケガニってことか」

それぞれの担当を決めた後、鎧武とフォーゼは飛び出し、ウィザードは再びウィザードラゴンに乗って空に……そして俺はドラゴニックナイトではなく、ブレイブドラゴンとキングオブアースーのワンダーライドブックを使用してドラゴンアースーに変身し、上空に巨大なキングエクスカリバーを出現させた。

セイバー「ドラゴンアースー」「行くぞバケガニ！はああああ!!!」

バケガニ「……………!!!」

俺の振るった巨大なキングエクスカリバーとバケガニのハサミが火花を散らし、何回か剣戟を繰り返す。

セイバー「ドラゴンアースー」「ふっ！はっ！はあっ！」

バケガニ「……………!!!」

セイバー「ドラゴンアースー」「いい加減終わらせる！」

『ブレイブドラゴン！』

『必殺読破!』

『キングスラッシュ!』

セイバー「ドラゴンアースー」「聖王火炎斬!はあっ!」

バケガニ「……………」

!?!?!?!?

俺はトドメに火炎剣烈火をソードライバーに納刀し、ソードライバーからブレイブドラゴンワンダーライドブックを抜いてキングエクスカリバーにリードさせ、その後キングエクスカリバーのトリガーを5回引いて背後の巨大なキングエクスカリバーの剣身に炎を纏わせ必殺技をバケガニに叩き込んだ。

炎を纏ったキングエクスカリバーの斬撃を受けたバケガニは少し抵抗したが、その威力に負けて真つ二つに斬られ消滅した。

自分の戦いが終わって皆の方を見ると、ちょうど他の場所でも戦闘が終わるところらしく、皆必殺技を放っていた。

『ソイヤツ！スイカスカツシユ！』

鎧武「スイカ」「輪切りにしてやるぜ！せいはいーいーいー！！！！」

エラスモテリウム「ウ、グ、グオアアアアアアアア・・・・！！！！」

鎧武はスイカ型のエネルギーにエラスモテリウムオルフェノクを閉じ込め、スイカ双刃刀で連続で斬り伏せた。

輪切りって言ってたけど、あれはどうみても乱切りだよな。

パワーダイザー「i n フォーゼ」「愛達を怖がらせる奴は俺が許さねえ！」

『ロケット、ドリル、リミットブレイク。』

パワーダイザー「i n f o o z e」
 「ライダーロケットドリルキックダイザー」
 「!!!!!!」

ヨルムンガンド「……………」
 「!?!?!?!?!」

フオーゼはいつものライダーロケットドリルキックをパワーダイザーでやり、ヨルムンガンドを巨大なドリルモジュール型のエネルギーで貫いた。

ウイザード「これで決める!」

『キックストライク!サイコーー!』

ウイザード「はあああ……………はああああ!!!!!!」

イツタンモメン「キュ、キュルルルウウウ……………!!!!!!」

ワイザードはキックストライクワイザードリングでワイザードラゴンを巨大なドラゴンの足を模した姿「ストライクフェーズ」に変形させ、ストライクエンドをイッタンモメンに叩き込んで消滅させた。

ワイザード「……ふい〜。」

こうして、京都の街を震撼させた今回の騒動は、仲間達が駆けつけてくれたおかげで死人を出さずに済んだ。

その後俺達は変身を解いて清水寺にいる侑達と合流した。

菜々「太陽君!!!」

太陽 「わ、と、とお！ 菜々、無事でよかった。」

彩音 「ちよ、ちよつと菜々！／／／／／／／／」

菜々 「あ、わ、私だったらつい．．．ごめんなさい太陽君。」

太陽 「いや、大丈夫大丈夫．．．君が世良彩音さん．．．だよね？」

彩音 「あ、はい！／／／／／」

太陽 「俺は菜々の幼馴染で希魔太陽．．．いつも菜々が迷惑かけてごめんね、これからも菜々のことお願い出来る？」

彩音 「あ、そんな．．．私も菜々にはいつも助けてもらってるので．．．全然．．．はい．．．／／／／／」

俺達が合流すると、真つ先に菜々ちゃんがウイザードに抱き着き、それを世良さんが止める。世良さんは男子に慣れてない様で終始顔を赤らめてウイザードと話していた。そんな光景を見て血の涙を流す翔護が俺の肩を強く掴み、ギリギリと歯噛みをしながら聞いてきた。

翔護「おい陽哉……あのイケメンは誰だあ？ていうかお前と一緒に来た他のイケメン2人も誰だあ？教えないとお前……肩がひどいことになるぞお？」

陽哉「怖い怖い！あれは俺の………共通の趣味を持った仲間だよ。せつ、菜々ちゃんと一緒にいる奴は菜々ちゃんとは幼馴染なんだよ」

翔護「イケメン幼馴染だとお！くつそお！何で俺には可愛い幼馴染がいねえんだよお！」

陽哉「それは……ドンマイ。」

俺の言葉を聞いてその場にくず折れる翔護。フォーゼや鎧武も愛ちゃんや侑と歩夢と話している。

そんな中、清水寺に野太い男性の声が響いて、俺と翔護はその場で背筋を伸ばした。

「やっと見つけたぞ！ 剣緋！ 五十嵐！」

翔護「ひいつ……！」

陽哉「こ、この声は……」

俺達が恐る恐る振り向くと、そこには般若……もとい、ピツピツのスーツを着た筋骨隆々の男性が怒りに顔を歪めていた。

この男性は俺の通ってる高校の体育教師で名前は「盛郷 彪（もりごう たけし）」。

その外見と無尽蔵な体力からゴリ盛だの鉄人だのシンプルに鬼だの・・・色々なあだ名を付けられている。そのあだ名から想像できるように、怒らせるとすつつつつつごく怖い先生だ。

陽哉「ゴ・・・」

翔護「ゴリ盛!!!!」

彪「・・・ほう、五十嵐。どうやら先生の特別補習が受けたいらしいなあ？」

翔護「いいえそんなことはありません!!!!」

彪「まったく貴様は・・・。兎に角2人共、無事でよかつた。」

陽哉「先生、ご心配おかけしてすみません。無理に動かない方がいいと思います
て・・・」

彪「…………ふむ。その判断は評価しよう。」

翔護「…………え、じゃあ補習は回避…………」

何とかお仕置きは回避できた…………かに見えたが、次の瞬間、盛郷先生は不敵な笑みを俺達に向けた。

彪「そんな訳が無いだろう?…………貴様等2人共、これからみっちりしごいてやる。なあくに心配するな!先生が終わるまでちゃんと一緒にいてやる!」

しょうはる「…………い、いやだあああああ
!!!!!!!」

こうして俺達は、盛郷先生に首根っこを掴まれてそのまま引きずられて行った。

侑視点

な、何か突然ムキムキスーツの人が来たと思っただら陽と五十嵐君を連れて行ってしまった……あ、あれが陽の通ってる学校の先生なんだ……何か、凄いや……

歩夢「陽君……連れてかれちゃったあ……」

侑「あ、あはは……」

天弥「すっげー筋肉だったなー！あのせんせー！」

愛「てんでん、お願いだからあはならないでね……？」

彩音「何を食べたたらあんな身体になるのかしら・・・」

菜々「やはりササミでしょうか!!!!」

太陽「それだけじゃないと思う・・・」

紘輝「確かにな・・・ありや熊と戦ってる系の人だぜ・・・」

その後、太陽君達は彩音ちゃんに隠れてそつとコネクトウイザードリングで魔法陣を展開して東京に帰って行った。

あ、そうそう。この後にホテルで談笑していると、陽から「せつ菜ちゃんにウイザードに連絡入れてくれてありがとうとお礼言つといて」というメッセージが来ていた。

大罪の7騎士（セブンス・リッター）編
第31話 強襲、セブンス・リッター

侑視点

修学旅行での一件が終わって無事、東京に帰って来ることが出来た私達は、それから平和な日々を過ごしていた。

ひどい筋肉痛で入院していた雷羽君が今日退院するってことでお祝いに皆でピクニックでもしようということになった。

それで盛り上がったのはいいんだけど、場所を決めるのをすっかり忘れてて、料理は歩夢・彼方さん・エマさん・愛ちゃん・走介さん・碧映さん・勇真君に任せて、場所決めを私・せつ菜ちゃん・かすみちゃん・しずくちゃん・璃奈ちゃん・果林さん・天弥君・太陽君・龍兎君・紘輝さんで2グループに分けて探すことになった。

陽は……何でも、特別補習中らしくて遅れるって……この間の修学旅行のあれがまだ続いているとかじゃないよね？

かすみ「……あ！この広場なんてどうですか？広いし、ちらほらピクニックしてる集団もいますよ！」

侑「おう！確かにいいかもね！」

璃奈「確かにここなら19人くらいならブルーシート2つに分けたらいけそう。」

太陽「雰囲気もいいし、ちょうどいいかも」

天弥「よっしゃ！んじゃ、あつちのチームに連絡入れとくか！」

太陽「それじゃ俺は料理チームに」

侑「それじゃあ私達はブルーシート敷くのちょうどいい所探しとくよ！」

太陽「了解！」

別動チームと料理チームへの連絡を太陽君と天弥君に任せて私達は広場の中でブ

ルーシート2つ分のスペースを探すことに。

侑「うーん、何処がいいかなー？」

かすみ「あの大きな木の下なんてどうですか？」

璃奈「紅葉が綺麗。とつてもいいと思う。かすみちゃん、今日は冴えてるね。」

かすみ「ちよ、りな子！それどーいう意味！かすみはいつでも冴え冴えですけど！」

璃奈「……璃奈ちゃんボード【お前の中ではそうなんだろう……お前の中ではな】」

かすみ「ほんとに喧嘩売ってるの!？」

そんな2人のいつものコントを聞きながら、広場を見渡していると、少し離れたところにいる太陽君の焦った様な声が聞こえて、気になった私達は急いで太陽君達のところに戻った。

そして、太陽君のスマホの画面から……エマさんの悲鳴の様な声が聞こえた。

太陽「ちよ、エマさん！エマさん!?!何があつたんですか!」

かすみ「何事ですか!?!」

侑「何かあつたの!?!」

天弥「わかんねえ．．．電話してたら急にウイザードの携帯から爆発音が聞こえて．．．．．」

エマ《．．．．．きゃあ!?!》

璃奈「今の、エマさんの声!」

太陽「．．．．．切れた。」

侑「太陽君!一体何があつたの!?!」

エマさんの悲鳴の様な声が聞こえてすぐ、エマさんからの通話が切れて、自分のスマホの画面を見つめて呆然とする太陽君へ何があつたのか問いたただいたけど、太陽君も何が起こっているのか把握していないらしく、首を横に振った。

太陽「分からない……。料理チームに場所を伝えようと思つてエマさんに通話してただけど……急に爆発音がして……」

璃奈「もしかして……襲われた……?」

かすみ「そ、そんな訳……!」

太陽「いや、璃奈ちゃんの言う通りかもしれない。」

侑「そ、そんな……!」

歩夢達が襲われたかもしれないという事実私達の心が焦る中、天弥君が電話をかけている方……別動チームからも料理チームと同じ様に爆発音が轟いた。

せつ菜《……きゃあ!?!》

天弥「お、おい!どうしたせつ菜!?!……切ちまった。」

侑「まさか、せつ菜ちゃん達の方でも……?」

かすみ「そんな……同時に襲われるなんて……」

璃奈「とつてもまずい状況……。」

太陽「……………2手に別れよう。俺と侑は料理チーム、かすみちゃんと璃奈ちゃん、とフオーゼは別動チームの方へ！」

天弥「おう！」

何があつたのか確かめる為に私達は2手に別れることにした。

……………けど、そんな私達のところにも……………悪意はやってきた。

???「他の所には行かせませんよ。」

太陽「……………っ!?!上だ!!!」

天弥「……………くそっ！」

私は太陽君に、かすみちゃんと璃奈ちゃんは天弥君に抱きかかえられる形でその場を飛び退いた。

そして、私達がいた場所に何かが急落下して土煙と地面に小さなクレーターを作りながら、その何か……いや、謎の仮面ライダーが土煙の中から出て来た。

??? 「……はあ。どうして私がこんなこと……めんどくさい。」

かすみ 「えっ!?! 仮面ライダー!?!」

太陽 「知らないベルト……何だあの仮面ライダー……」

天弥 「初めて見たぜ、あんな奴……」

土煙から出て来た謎の仮面ライダーは黒のアンダースーツに黄褐色で差し色にオレンジ色の鳥の様な形のプレートアーマーを身に纏い、鳥の翼を模した双剣を持っている。その謎の仮面ライダーは右手に持つ剣の切っ先を太陽君と天弥君に向けた。

??? 「……仮面ライダーウイザードさんと、仮面ライダーフォーゼさんですね

？」

太陽「……なっ!?俺達のことを知ってる!」

天弥「なにもんだ!!」

???「え……名乗らないとダメですか?うわっ、めんどくさ……まあしよ

うがないか。……私はアケディア。怠惰を司るセブンスリッターの1人です。」

侑「セブンス……」

璃奈「リッター……?」

かすみ「なんですか、それ?」

アケディア「それは流石にめんどくさいので、他の人にでも聞いてください。……

さて、早く帰りたいんで始めましょうか……戦いを。」

そう言つて謎の仮面ライダー「アケディア」が双剣を構えて走り出した。

いち早く反応した太陽君がウイザーソードガンを出してアケディアの剣を受け止めたことで私達に被害はなかった。

……それにしてもこの人、声からして私と同年代くらいの女の子だったりする?

太陽「フォーゼ！」

天弥「おう！」

『3、2、1……』

天弥「変身！」

かすみ「うえ、っ！口の中に砂利が入ったあ！」

フォーゼ「宇宙……キターーー！仮面ライダーフォーゼ！タイマン張らせてもらおうぜ！……そして！」

『エ・レ・キ、オン』

フォーゼ「エレキ」「ビリビリに感電させてやるぜ！おらあっ！」

太陽君がアケディアの攻撃を受け止めている隙に、天弥君はフォーゼに変身した後、エレキステイツにチェンジし、ビリーザロッドを構えて背面のスラスターを使って跳躍ジャンプして太陽君とアケディアの間に割って入った。

……まあ、変身した時の蒸気みたいなので砂利が舞っちゃったせいで上手く顔を

ガード出来なかったかすみちゃんの口に砂利が入っちゃうプチハプニングがあったんだけど………ドンマイ、かすみちゃん。

アケディア「わっ!?ちよ、何するの!」

フオーゼ「エレキ」「それはこっちのセリフだ!ふっ!はっ!おりや!」

アケディア「きやつ!ちよ、まつ、きやあつ!」

太陽「……よし、今のうちに!」

『シャバドウビタツチヘンシーン!シャバドウビタツチヘンシーン!』

太陽「変身!」

『ウオーター!ドラゴン!』

『ジャバジャババシャーン!ザブンザブーン!』

太陽君と入れ替わりでアケディアと戦闘を始めた天弥君。

そして、天弥君がアケディアを相手にしてる隙にちよつと豪華な装飾の青色のリング“ウオータードラゴンウイザードリング”を左手にはめて腰のウイザードライバーに

かざした太陽君は、仮面ライダーワイザードウォータードラゴンスタイルに変身して天
弥君の加勢に向かっていた。

ワイザード「ウォードラ」「はあああ……はっ！はあっ！」

アケディア「きやつ！ちよ、2対1とか卑怯じゃん！」

フォーゼ「エレキ」「いきなり襲ってきておいて何言ってるんだ！」

ワイザード「ウォードラ」「このまま押し切ろう！フォーゼ！」

フォーゼ「エレキ」「おう！」

ワイザード「ウォードラ」「はあっ！」

フォーゼ「エレキ」「おりゃあ！」

アケディア「ぐっ、きやあっ……！」

太陽君と天弥君の猛攻に最初の派手な登場の仕方からは想像出来ない程に押されて
いくアケディア。

ていうか何だろう……戦い慣れてない感じ？どこか無理して戦ってる様な……。

私がそんなことを考えていると、アケディアが突然頭を押さえて苦しみだした。

アケディア「あっ！くっ！」

フオーゼ「エレキ」「・・・な、なんだ？」

ウイザード「ウオードラ」「急に苦しみ出した・・・？」

アケディア「ダ・・・メツ・・・！アナタは出て・・・来ないでっ・・・！」

ウイザード「ウオードラ」「何だかよくわかんないけど・・・チャンスだー！」

フオーゼ「エレキ」「おう！一気に畳み込もうぜ！」

急に苦しみ出したアケディアに対してチャンスと睨んだ太陽君と天弥君は攻撃を畳み込む為にそれぞれ武器を構えて走り出した。

・・・けど、その瞬間、頭を押さえて苦しんでいたアケディアが突然だらんと腕を下ろし、脱力した様な状態になると・・・紫色だったマスクの複眼

が赤色に染まった。

アケディア「……………あーもー。ぐだぐだぐだぐだ……………うざったい!!!」

ウィザード「ウオードラ」「何っ!?ぐはあ!」

フォーゼ「エレキ」「おお……………うぐあっ!」

アケディア「こつちはとつとと終わらせて帰りたいのにさー!抵抗とかやめてよ
ねっ!」

かすみ「ふええ……………何ですかあの人!急にキャラが変わりましたよお!」

璃奈「何だか人が変わったみたい……………」

複眼の色が赤色に変わった瞬間、まるで人が変わった様になったアケディアはさつき
までの戦い慣れてない感じが消え、鋭く力強い斬撃を太陽君と天弥君に与えた。

……………そしてここからが、地獄の瞬間の始まりだった。

先程までとは一転し、太陽君と天弥君の攻撃はことごとく弾かれるか避けられ当てる

ことが出来ない。逆にアケディアの攻撃は全て太陽君と天弥君に当たり2人は片膝をつくまでに追い詰められている。

ウィザード「ウオードラ」「ぐっ、はあ．．．はあ．．．！」

フォーゼ「エレキ」「くっそ．．．はあ．．．はあっ．．．！」

アケディア「はあああ．．．。仮面ライダーつてこの程度なんだ。アタシいらなかつたじゃん。」

かすみ「う、嘘．．．！先輩達が一方的にやられるなんて．．．。」

璃奈「信じられない．．．こんな急に戦況が変わるなんて．．．。」

侑「雰囲気が変わった瞬間にここまで変わるなんて．．．。このままじゃ、2人が．．．！」

突如訪れた太陽君と天弥君の危機に、私は無意識に胸の前で手を組み、まだ来ぬ幼馴染へ助けを求めている。

侑「お願い陽……早く来て……！」

——せつ菜視点——

雷羽さん退院お祝いピクニックをする場所を探していた私・愛さん・しずくさん・果林さん・龍兎さん・絃輝さんは、広めの公園を見つけて散策していると、天弥さんから通話が入った直後……謎の仮面ライダーから襲撃を受け、現在龍兎さんと絃輝さんが変身して戦ってくれています。

私達が衝撃を受けたのは、その謎の仮面ライダーは龍兎さんのビルドドライバーに似た色違いのベルトを身に着けてそこに2本のフルボトルがはめられていたこと。一体どういうことなのでしょうか……

ビルド「アンタ何者だ！何でそのベルトを持つてる！」

???「ふん、貴様に答える必要などないわ！」

ビルド「・・・うぐっ！」

鎧武「だったら名前くらい名乗ったらどうだ！」

???「・・・まあいいだろう。このまま蹂躪してもつまらん。・・・私は難

波重三郎。」

ビルド「難波・・・重三郎だと!？」

???「又の名を・・・仮面ライダーアウアリティア。強欲を司るセブンスリッターの

1人だ。」

?
龍兎さんのあの動揺ぶり・・・この方は龍兎さんと何か因縁があるんでしょうか

アウアリティア「ビルド……。貴様とエボルトさえいなければ、私は世界を統べる王になれたものを……。！」

ビルド「ふざけるな！アンタのせいで戦争が起きた……。アンタのせいで！散らなくていい命がたくさん散った！アンタの好きになんてさせるか！」

『ラビットタンクスパークリング！』

ビルド「ビルドアップ！」

『シユワツと弾ける！ラビットタンクスパークリング！』

『イエー！イエー！』

怒りのままに走りながらラビットタンクスパークリングを使ってラビットタンクスパークリングフォームにフォームチェンジした龍兎さんはそのまま右ストレートをアウアリティアへと放ちましたが、アウアリティアは龍兎さんの拳を左手で受け止め、右腕に装備しているゲームパッドの形をした武器のチェンソー側を龍兎さんに向け、ボタンを押して強力な斬撃をゼロ距離で龍兎さんに放ちました。

斬撃を受けた龍兎さんは数メートル吹き飛ばされ建物の壁に衝突すると、変身が解かれてそのまま倒れた。

ビルド「スパークリング」「・・・はあっ!!!」

アウアリティア「こんなものか。」

ビルド「スパークリング」「なにつ・・・!」

『Critical Sacrifice!』

アウアリティア「はあっ!」

ビルド「スパークリング」「う、ぐあああああ・・・」

!!!!!!
」

鎧武「ビルド!?!・・・くそ!」

アウアリティア「面倒だ・・・終わらせるとしよう。」

『Pause!』

紘輝さんが龍兎さんの仇とばかりにアウアリティアに向かって行ったところで、アウアリティアが今度はゲームパッド型の武器のABボタンを同時に押し――

『Restart!』

鎧武「ぐああああっつつつ．．．

!!!!!!
」

気が付くと、紘輝さんがアウアリテイアにやられて吹き飛ばされると、地面を転がる

と同時に変身が解除されてしまいました。

しづく「え、ええ!？」

果林「な、なにがあつたの!？」

愛「ちよ、どゆことっ!？」

せつ菜「ど、どうして紘輝さんが急にやられてるんですか!？」

突然紘輝さんがやられてしまったことに私達が動揺していると、アウアリティアがこちらを向いてゆつくりと歩み寄って来た。

アウアリティア「ふっふっふ……」

紘輝「や、めろっ……!」

龍兎「その人達……近づくな……!」

果林「ちよ、ちよっと!こっちくるわよ!？」

愛「パワーダイザーを呼んでアタシが何とか……」

果林「待ってる間にさっきの……何か……変なのやられたら意味無いわよ！」

しずく「ど、どうしたら……そ、そうです！カンドロイドで牽制を……！」

せつ菜「……いえ、しずくさん。それはおそらく意味が無いかと……」

現状を何とかしようと、しずくさんがバックの中のカンドロイドに手を伸ばそうとしたのを私は制止させました。

……そう、何故なら絃輝さんと龍兎さんを一撃で倒すほど方です。カンドロイドを出したところで牽制にもならないのは自明の理。

かと言ってどうすることもできない……一体、どうしたら……太陽君……！

ゆつくりと歩を進めてくるアウアリティアに恐怖を覚え始めた……その時、アウアリティアが急に歩みを止めて自身の左耳を押さえてブツブツ話し始めた。

それはまるで、誰かと通信でもしている様な仕草でした。

アウアリティア「この娘達を捕らえれば、他の仮面ライダー達も手出しは出来まい。いや、むしろ私に従うはず……そうなれば奴を倒して今度こそ難波帝国が出来上がる!……ん? まったくなんだこんな忙しい時に……なんの用だ? 貴様の命令で動いてやっているというのに……何? ふざけるな! 今ここで仮面ライダー共を倒せば!……くつ、わかった。」

アウアリティアはそう言うと、私達を一瞥して去って行った。

しずく「たす……かった……?」

果林「みたいね……」

せつ菜「……。はっ! ぼーつとしている場合じゃありません! 紘輝さんと龍兎さんを!」

愛「おお! そーだった!」

果林「そ、そうね!」

しずく「は、はい！」

難を逃れた私達は、倒れている紘輝さんと龍兎さんを介抱する為、虹ヶ先学園の保健室へ向かった。

—— 歩夢視点 ——

太陽君からの電話が来ている最中、私達はカザリって怪人に襲われていた。カザリは碧映さんしか興味が無いみたいで、必要に攻めてきていたの。

オーズ「カザリ……君もしつこいな！」

カザリ「……は？当たり前じゃん。僕は君を倒さないと気が済まないんだからさあ！」

ドライブ「くっつ！」

ゴースト「ノブナガ」「これでも……くらえ！」

『ダイカイガン！』

『ガンガンミナー！ガンガンミナー！』

『オメガスパーク！』

ゴースト「ノブナガ」「……はあっ!!!」

カザリ「うっ、ぐっ、うわああああ……!!!」

カザリが碧映さんにばかり目が行ってる隙に勇真君がノブナガ魂っていう全体的に紫色で所々金色のパーカーを羽織って長いライフル？みたいな銃に描かれた目みたいなマークをゴーストドライバーにかざした瞬間、勇真君の周りに無数のエネルギー状の銃が出現して、無数の弾丸をカザリに浴びせて、全弾受けたカザリは吹き飛んで地面をゴロゴロと転がって行った。

そして、勇真君に碧映さんとの戦いを邪魔されたカザリは地面を強く叩いて怒りを露

わにしたカザリ。

カザリ「あーもう!!!邪魔すんなよ!!!」

ドライブ「無茶言うなよ!」

ゴースト「ノブナガ」「そうですね!先に攻撃してきたのはそつちじゃないですか!」
カザリ「……ちっ!この力は使う気まだなかったけどもういいや、覚悟してよ!」

カザリはどこからともなく真ん中に小さな円型のスロットがある丸形のバックルを取り出すと、それを腰に巻いて一枚のコアメダルを取り出した。

『憤怒ドライブバー!』

ドライブ「な、なんだあれ!」

ゴースト「ノブナガ」「あんなベルト見たことないですよ……」

オーズ「あのベルトは何処となくミハル君がしていたアクアのベルトに似てる気がする

る……けど、あれはコアメダル？カザリのメダルは全部僕が持つてるし、そもそもあの黒いメダルは見たことが無い……」

カザリ「行くよ仮面ライダー共……全員消し去ってやるよつつつつ……」

『セツト！デスコアメダル！』

カザリ「……変身つつつつ
!!!!!!」

カザリが黒いコアメダルをバックルにはめた瞬間、カザリの身体を闇が包んでいき、その闇が晴れると……黒いライオンの姿の仮面ライダーに変身しちゃった！

ドライブ「カザリが……!?!」

オーズ「仮面ライダーに変身した!?!」

ゴースト「ノブナガ」「そ、そんな……!?!」

カザリ「この姿の名は仮面ライダーイーラ。憤怒を司るセブンスリッターの1人さ。……さあ！僕の怒りで君達を蹂躪してやるよ!!!」

ゴースト「ノブナガ」「憤怒……」

ドライブ「それって確か、七つの大罪だったよな？」

オーズ「……うん。七つの大罪の名を冠する……。一体、どんな力があるのか、想像出来ない……。2人共、油断せずに行こう！」

ドライブ「ああ！」

ゴースト「ノブナガ」「はい！」

そして碧映さん達は仮面ライダーに変身したカザリことイーラに向かって行った。けど、さつきまでと違って全然ダメージを与えられてない様な……。むしろ、弄ばれてる……？

ドライブ「この！」

オーズ「やあつ！」

イーラ「あははっ！ぬるいよ！はあつ！」

ドライブ「ぐはっ……!？」

オーズ「ごふっ!？」

ゴースト「ノブナガ」「ドライブさん!? オーズさん!?! . . . この!」
 イーラ「遅いよ。」

ゴースト「ノブナガ」「. . . なっ!?! いつの間につ!」

イーラ「. . . バイバイ!」

ゴースト「ノブナガ」「ぐはあああああつつつ
 !!!!!」

果敢に攻めた碧映さんと走介さんだったが、簡単にあしらわれて重い一撃を受けてよろけて、反撃として勇真君が銃を構えたけど、いつの間にかイーラが勇真君の目の前に来ていてその鉤爪で斬り上げられその勢いで勇真君は縦にグルグル回転しながら地面に叩きつけられそのまま変身が解かれちゃった。

勇真「う、ぐっ . . . !」

ドライブ「ゴースト . . . !」

イーラ「今度は君の番だ!」

ドライブ「なにっ!?! ぐわああああ
 !!!!!」

勇真君がやられたことに動揺した走介さんの隙を突いてイーラが高速で走介さんの真横に移動すると走介さんが反応するより早く鉤爪でゼロ距離から斬撃を放たれて、数メートル吹き飛ばされて学校の壁に激突して走介さんの変身が解除に追い込まれちゃった。

イーラ「これで後は君だけだね、オーズ！」

オーズ「2人の分まで、負けるわけにはいかない！」

『ライオン！トラ！チーター！』

『ラタ・ラタ・ラトラアター！』

イーラ「僕のかか……。今更そんなもので倒せるとか思ってる？」

オーズ「ラトラター」「倒せるか倒せないかじゃなくて、倒さなきゃいけないんだよ。」

イーラ「ふーん、あつそ。ならやってみてよ！」

ラトラーターコンボにチェンジした碧映さんはそのままイーラと高速戦闘を始めちやつた。

オーズ「ラトラーター」「ふっ！はっ！」

イーラ「はっ！てやっ！」

彼方「わわっ、2人共全然見えない〜」

歩夢「て言うか彼方さん！走介さんの介抱してあげないと！」

彼方「・・・おおく！そうだったぜ〜！・・・そーくーーん！」

エマ「それじゃあ私は勇真君の方に行つてくるね！」

歩夢「はい！お願いします！私は・・・陽君・・・！」

倒れている勇真君と走介さんを彼方さんとエマさんに任せて、私は助けてもらおうと陽君に電話をかけた・・・けど・・・

歩夢「何で……繋がら……ないっ……」。

私からの電話が繋がることはなかった。

そうこうしていると、遂に碧映さんとイーラの戦いが決着の時を向かえた。

イーラ「……………あはっ」

オーズ「ラトラーター」……………っ！」

更に速度を上げたイーラが目にもとまらない速さで碧映さんの懐に飛び込み、エネルギーを溜めた拳を碧映さんのお腹に叩き込んで、反応出来なかった碧映さんは100メートル以上吹き飛ばされて壁に激突してそのまま変身解除と共に血を吐いて気を失っちゃった。

碧映「ごふっ！あつ……。あ……。」

イーラ「……。こんなもんか。さ、トドメと行こうか。」

???「待て、イーラ。」

気を失った碧映さんにトドメを刺そうと近づこうとしたイーラを突然何もないとこ
ろから現れた右手に錫杖を持って両肩に丸形のお皿の様な盾を装備して腰に1つのス
イツチをはめた丸形の星座早見盤の様なバツクルを装着した謎の仮面ライダーが制止
した。

イーラ「君は……。確か、グラトニーだったっけ？何の用？」

グラトニー「今日はここまでだ。帰還しろ」

イーラ「は？嫌だよ。……。ようやくオーズをこの手で葬れるんだ！この気を逃す
もんか！」

グラトニー「貴様の気持ちなどどうでもいい。あのお方の命令だ……。このまま連

行する。」

イーラ「……なっ！やめろ！くそっ！このっ！」

それだけ言うと、イーラは謎の仮面ライダー「グラトニー」に連行されて闇の中に消えて行った。

歩夢「……………陽、君……………何で？」

—— 侑視点 ——

あの後も……………太陽君と天弥君はアケディアに挑んだ……………けど、結局2人共

変身解除に追い込まれちゃった。

2人を倒したアケディアは、変身したまま呑気に欠伸をしてる。

アケディア「……………ふあゝあ。」

太陽「……………くっ……………！」

天弥「うつ……………くそっ……………！」

璃奈「嘘……………」

かすみ「太陽先輩と天弥先輩がかんっげんに負けちゃいましたよお！」

侑「何か……………私達にも出来ることがあればいいのに……………！」

そして……………戦いを見守る私達の真後ろに……………大きなおっぱいの美人な女の子が立っていた。

「その悩んでいる顔……………可愛らしいですわあ！」

かすみ「うひゃあっ!? な、なんですかこのおっぱい魔人はっ!？」

璃奈「璃奈ちゃんボード【びっくり!】」

侑「い、いいいいいいの間に!？」

???「うふふっ。．．．私の名はメディック。又の名を．．．．．仮面ライダークスリア。色欲を司るセブンズリッターの1人ですわ!．．．．．まあ、私のことはドライブにでも聞いてくださいな!」

．．．．．って、目の前のおっぱいさん．．．．．もとい、メディックは綺麗な笑顔を浮かべて来た。

．．．．．え、ていうか今、セブンズリッターって言った!？」

璃奈「今、セブンズリッターって言った?」

侑「言ったね．．．．．確実に」

かすみ「うええ! さっきから少し動くだけでおっぱいがばるんばるん動きますよ

！・・・妬ましい！

侑「かすみちゃんちよつと黙ってようか!!!」

璃奈「気持ちにはわかる。」

メディック「さあ貴女達、私と共に参りましょう?」

侑「えつと・・・それは何故ですか?」

メディック「男はペット、可愛い女の子はお人形・・・なので、貴女達を私のお人形にする為ですわ!」

ゆうりなかす「二い、いやあああああ・・・」

かすみ「だ、誰か助けてー」

!!!!

!!!!!!

じりじりと私達詰め寄るメディック。

どうしようもなくなつてかすみちゃんが叫んだその時、懐かしの音声が聞こえて、メディックに飛び蹴りを放つ人影が。

『ライジングインパクト!』

ゼロワン「俺復活&かすみに何してんだキーーーーーッツツツツツ
メディック「おっと、危ないですわ♪」
!!!!!!

ゼロワン「……ちっ、避けられたか。」

と、メディックにキックを放つたのは今日のピクニックの主役。全身筋肉痛でさつきまで入院していた雷羽君だ。

いや、ほんと、久しぶりにゼロワンの姿を見たよ。うん。

かすみ「……ら、雷羽……?」

ゼロワン「よっ!久しぶり!……って言ってもかすみは毎日俺の病室に来てくれてたけどな!」

かすみ「……ちよっ!// // // //」

侑「えく!ちよつと奥さん聞きました?」

璃奈「聞きましたわ。最近の若い子は健気でキュンキュン来ちゃいましたわ。」

かすみ「ちよつと2人共なんなんですかそのキヤラは!というかりな子は私と同年

だし侑先輩は一個上なだけじゃないですか！全然若いじゃないですか！」

璃奈「かすみちゃん、どうどう。」

かすみ「うがー！ー！私は馬じゃなー！ー！ーい！！！！」

ゼロワン「……ははっ！楽しそうだな、かすみ！」

かすみ「楽しくないよ！というか雷羽も何笑ってんの！怒ってよ！」

そんな私達のことを見ていたメディックは愛らしそうに笑った後、雷羽君に問いかけた。

メディック「ふふっ！愛らしいですわあ♪……とは言え、私の方に来てよろしかったのですか？あちらのお仲間を助けてあげた方がよかったですのでは？」

ゼロワン「ああ、それなら心配ない！……援軍は俺だけじゃないからな」
侑「……え？」

『必殺読破！』

セイバー「火炎十字斬！てやあっ！」

アケディア「おっとつと。」

侑「……陽！」

雷羽君の言葉と同時に聞こえて来た音声に太陽君達の方を振り返ると、そこにはアケディアに必殺技を放つセイバーに変身した陽の姿があつた。

そして、陽が現れたことに顎に手を置いて少し考える仕草をしたメディックは、アケディアに言い放つた。

メディック「セイバーまで来ましたか……。挨拶は終わりましたし、ここに長居する必要はありませんわ。アケディア！ 行きますわよ！」

アケディア「……はあ。やつとかあゝ。」

メディック「それでは皆さん……ごきげんよう♪」

ゼロワン「あ、待て！」

雷羽君がメディック達を引き留めようとしたけど、メディックが薔薇の様なエフェクトを出現させて雷羽君の進路を妨害、エフェクトが消えるとそこにはもう2人の姿は無かった。

ゼロワン「どうする？追うか？」

セイバー「……いや、もう完全に気配が消えてる。今追つても意味無い。……

それよりも、今はウィザード達の介抱だ！」

ゼロワン「……だな！かすみ、手伝ってくれ！」

セイバー「侑と璃奈ちゃんも！」

かすみ「う、うん！」

侑「わかった！」

璃奈「……了解。」

そして私と陽で太陽君を、雷羽君とかすみちゃんと璃奈ちゃん、天弥君を担いでニジ

ガクの保健室へ向かった。

第32話 差し始めた影

—— 侑視点 ——

セブンズリッターの襲撃の後、私達は虹ヶ先学園の保健室へと向かった。

扉を開けるとそこにはすでに他のメンバーもいて、碧映さんと龍兎君と絃輝さんは重傷でベッドで寝ていて3人をエマさん・しずくちゃん・愛ちゃんに介抱してくれていた。歩夢達は比較的軽傷の走介さんと勇真君の傷の手当てをしてたから私達も太陽君と天弥君を空いてるところに座らせて手当てをすることにした。

その際、璃奈ちゃんと愛ちゃんは場所を交代して璃奈ちゃんは龍兎君の、愛ちゃんは天弥君の介抱をすることに。

・ ・ ・ ・ ・ あ、ちなみに部屋の端っこに果林さんとせつ菜ちゃんが正座させられて

たけど、歩夢に理由を聞いたら2人に手当てを任せたら包帯グルグル巻きのミイラにさせられたり例の紫オーラを放つ謎の物体・・・もとい、料理を食べさせようとしたりで仕事が増える為に反省させているんだって。

侑「ところで、保健室の先生は？」

歩夢「職員会議中だって」

侑「あーなるほどねー・・・あ、太陽君ちよつと沁みるよ」

太陽「・・・あいつたあ!？」

侑「はいがまーん!仮面ライダーでしょー」

愛「てんてんもー」

天弥「いつつってええええ!」

走介「おーい、うるさいぞー!」

天弥「む、り、だろ・・・」

陽哉「しようがない。ここじゃなくて軽傷組は同好会の部室で手当てしようか。ゼロワン!何かあった時の為にここに残ってくれるか?」

雷羽「おっけー」

こうして私達はエマさん・しずくちゃん・璃奈ちゃん・雷羽君・絃輝さん・龍兔君・碧映さんを残して太陽君達を連れて同好会の部室に行くことになった。

ちなみにせつ菜ちゃんと果林さんのことをすっかり忘れてたよ……ごめんね2人共……

部室に着いた私達は手当ての続きをしつつ、情報の整理を始めた。

走介「さて……と。その様子からしてお前らも襲われたんだよな？どんな奴だった？」

陽哉「俺はゼロワンと途中から来たけど、何か気だるそうな奴とゴスロリ風のドレスっぽい服着た美人だったな」

侑「・・・あ！そういえば陽、雷羽君と一緒にだったね。何で？」

陽哉「ん？ああ・・・侑からメッセージが来た後急いでたら早めに病院出て散歩してたゼロワンとぼったり出くわしてき、事情話して一緒に来たんだよ」

歩夢「え・・・侑ちゃんの方に・・・？」

侑「あーなるほ」

かすみ「あーーーーー！！！！」

私達が話していると、急にかすみちゃんが大声を上げて勢いよく座っていた椅子から立ち上がって走介さんに詰め寄った。

愛「きゅ、急にどしたんかすみ!？」

かすみ「思い出したんですよ!・・・走介先輩!」

走介「へ、な、なに・・・？」

かすみ「あのおっぱい魔人とはどういう関係なんですか!!!」

走介「は？おっぱい魔人・・・？」

勇真「・・・おっぱい魔人・・・」

かすみ「しらばつくれなくてくださいよ！ちゃんと聞いたんですから！私のことはドライブにでも聞いてくださいって！」

確かにあのメディックつてセブンズリッターはそう言つてた。そして、この話題にもつとも食いついたのは・・・彼方さんだった。

彼方さんはゆらゆらと立ち上がり走介さんの下まで行くと、笑顔で詰め寄る。けど、その笑顔はいつものほわほわ笑顔ではなく、怒りからくるもの・・・走介さんが間違つたことを言おうものなら、何をされるかわからない。そんな笑顔。

彼方「そーそーくーそーん。おっぱい魔人と知り合いつて・・・どういふことかな？」

走介「え、彼方さん？ちよつと・・・怖いですよ？」

彼方「いいから答えて？」

走介「い、いや！ほんとに知らないんだって！お、おい侑！お前もいたんだろ！おっぱい魔人って誰のことなんだよ！」

侑「え、私!? えーつと・・・確か、メディックって名乗ってた気が・・・」

走介「なっ!?!メディック!?!」

ベルトさん『それは本当かね!?!』

侑「へ・・・う、うん。」

私がメディックの名前を出すと走介さんとベルトさんが驚愕の声をあげ、雰囲気が一変した。

走介「あのメディックがハート以外に付き従うなんてな・・・どう思うベルトさん？」

ベルトさん『ふむ・・・彼女の性格からして、自ら・・・というのは考え辛いね。』
走介「ということは甦らされた時に洗脳された・・・か。」

ベルトさん『そう考えるのが妥当だろうね。』

彼方「ちよ、ちよつと〜！突然空気変わったら彼方ちゃん戸惑っちゃうよ〜！2人の世界に入らないで〜！」

走介「あ・・・ああ、悪い。」

勇真「そのメディックっていうのはどういう人なんですか？」

ベルトさん『厳密には人ではなく、ロイミュードさ。』

走介「メディック・・・あいつは・・・」

そこから、走介さんがメディックというロイミュードについて話してくれた。

メディックの能力、性格、過去に何があったのか、戦いの最中メディックに助けられたこと等々・・・色々な話を聞くことが出来た。

かすみ「ふええ〜ん！おっぱい魔人なんて言っでごめんなさ〜い！」

天弥「うおおお〜！メディック〜！いい奴じゃねえかあ！」

愛「人間の悪意が・・・性格を歪ませちゃったんだよね・・・」

侑「理由を聞いちやうとちよつと納得だよね・・・・・・・・」

勇真「それもありませんが、何より厄介なのが・・・・・・・・」

太陽「治療能力・・・・・・・・。もしその力が健在なら・・・・・・・・」

陽哉「今回の戦い、相当厳しいものになるな・・・・・・・・」

私達が今後メディックとどう戦えばいいのか考えていると、不意に走介さんがパンパンッ！と手を叩いた。

走介「ほらほら！確かにメディックも強力だ！けど、今回はメディックだけじゃなく他の奴らもわかる範囲で情報を交換しとかないとだろー！」

勇真「そ、そうでした・・・」

陽哉「じゃあ、まずはゴーストとドライブのところはどんな奴が来た？」

走介「俺達のところはカザリだった」

天弥「カザリ・・・あいつもセブンスリッターってのになつてたのか」

勇真「カザリは見たところ、単純な身体強化だと思えますが・・・」

走介「ああそれと、あいつは憤怒ドライバーっていうベルトを使ってたな。」

憤怒・・・？　そういえば、アケディアも自分のこと怠惰って言ってた様な・・・

かすみ「そういえば、私達のところに来たアケディアも自分のこと怠惰を司るって
言ってませんでした？」

太陽「カザリと同じなら、あの見知らぬベルトが怠惰ドライバー・・・」

走介「見知らぬベルト？」

太陽「見たこと無い不思議なベルトをしてたんだよ」

天弥「あのベルトに付いてたの・・・俺の持つてるスイッチとも違うし、ビルドのボ
トルとも違った・・・」

アケディアの腰にあつた不思議なベルトについて考え始めると、かすみちゃんが何気
ない一言を放つ。

かすみ「あれ、何かスタンプみたいでしたよねー！」

てんたい「それだ!!!」

かすみ「うゑゑゑ、っ!?何ですか急に!？」

太陽「スタンプ……そうスタンプ!ちよつと形は大き目だったけど、あれはスタンプっぽかった!」

天弥「おぉーめつちやしつくり来た!流石だなかすみー!」

かすみ「な、何だかよくわかりませんが悪い気はしませんね!もつと褒めていいんですよ!」

陽哉「うわー。かすみちゃん、目に見えてハナタカになってるな!」

侑「あははっ!確かに!」

愛「まーそれがかすみの良いところでもあるっしょ!」

勇真「おだてられやすいのも、ちよつと不安になりますけどね……」

かすみちゃんの一言をきっかけに徐々に場の雰囲気明るくなってきた。

その後私達は和気藹藹と関係ない話をして楽しい時間を過ごした。

・・・・・・・・・・・・・・・・けど、私達は・・・特に私と陽は気付くべきだった。

歩夢「・・・・・・・・・・陽君は、私じゃなくて侑ちゃんを選んだってこと・・・・・・・・？」

この時すでに、歩夢の心に暗い影が落ち始めていたことに・・・・・・・・

——しづく視点——

侑さん達が保健室を出た後、お兄様達の額に載せているタオルを濡らす為の水を交換しにぬるくなった水が入ったボウルを持ってエマさんと雷羽さんと璃奈さんが保健室を出て現在、ベッドで眠っている3人以外は保健室には私しかいない。

しづく「お兄様、紘輝さん、龍兔さん・・・早く起きてください。でないと、私もエマさんも璃奈さんも・・・他の皆さんも心配していますよ・・・」

こんなことを口にしても、返ってくる言葉は無い・・・。そんなことはわかってるはずなのに、やはり寂しさを感じてしまう・・・。

・・・とはいえ、改めてまじまじとお兄様の寝顔を見るとやっぱりと言うか何

といいますか……子犬みたいでかわいいです！ああ……こうしてお兄様の寝顔を見たのはいつぶりでしょうか？小学生以来？中学の頃は無理言つて一緒に寝てたからやっぱり中学生以来かな！

そ、それにしても……久々に寝顔を見たからなのか、妙に胸がドキドキしてきましたね……

しずく「……だ、誰も見ていませんよね……？……む、むちゅー……
！」

辺りをキョロキョロ見回して、誰も見ていないことを確認した私は自分の唇をお兄様の唇に近づけて……

せつ菜 「何してるんですかしずくさん!!!!!!
しずく 「うきやあああああああお!!?!?!?!?!?!?
///
///
///
///
///
///
///
///

果林 「貴女もなかなか大胆ね♪しずくちゃん♪」

しずく 「い、いいいいいなんですかせつ菜さん! 果林さん!」

せつ菜 「ずっといましたよ!!!!!!」

果林 「そうずっと・・・ずっと拘束されてたわ。」

ああそういえば先程拘束したのすっかり忘れていました……。

しずく「あの……どうかこのことはご内密に……／＼／＼／＼／」

果林「まあ、いいわよ？……この拘束を解いてくれたらね♪」

しずく「……ううっ……」。

こうして私はせつ菜さんと果林さんの2人に最大級の弱みを握られてしまっ
た……。

ここはとある会社の一室。現在この部屋である男が数ある書類に目を通していた。

??? 「・・・ふむ。ホテル事業のシェア率が上がっているね・・・このまま行けばオハラグループのシェアを奪えるかな・・・さて、問題は飛瀬グループの方か。やはり強い・・・けど、私が彼の会社に敗ける訳がない。必ず奪い取ってみせる・・・」

豪華なつくりの一室で男は一人、野心に燃える。

そんな中突如扉を叩く音が響き、男はそちらに意識を移して叩いた者に中へ入る様に促す。

?????? 「・・・?入っっているよ!」
「失礼します。」

促されて入ってきたのは、ワインレッドのジャケットを羽織る男性。

??? 「やあ、暴食！・・・そういえばさつき皆でご挨拶に行ってきたんだろう？どうだった？」

グラトニー 「私は暴走しそうだったカザリ・・・もといイーラを連れ戻しに行っただけですが・・・。」

??? 「ああ、そう言えば僕が命じたんだったね！」

グラトニー 「それで、他の者達は満場一致で大したことが無い・・・と。」

??? 「大した事が無い・・・か。調子に乗るのは勝手だけど、油断はしない様にね？彼等の諦めの悪さは君が一番よく知っているだろう？」

グラトニー 「はい、勿論です・・・。それと、もう一つご報告したいことがあるのですが」

??? 「・・・ん？何？」

グラトニー 「・・・お喜びください、嫉妬が見つかりました。」

ワインレッドのジャケットを羽織る男性がそう言うと、男は高級そうなオフィスチェアから勢いよく立ち上がり、食い気味に聞き返す。

??? 「それは本当かい!？」

グラトニー 「……ええ。」

??? 「そうか……やっとか! それで? 誰なんだい?」

グラトニー 「その者の名は虹ヶ先学園スクールアイドル同好会に所属している……」

……上原歩夢。」

??? 「上原歩夢……確か、セイバーにくつついてる子の1人だったよね？」

グラトニー「はい、その通りです。」

??? 「ならどうやってこつちに引き入れる気だい？何か策でも？」

グラトニー「私に考えがあります。まずは、貴方様のお力をお借りしたいのですが」

??? 「この場合の力っていうのは……表の方……かな？」

グラトニー「ええ。」

??? 「……いいよ！嫉妬を手に入れる為だし！協力してあげるよ！」

グラトニー「ありがとうございます！」

??? 「同時に上原歩夢の近辺を調査しておいてね？」

グラトニー「はっ！お任せを！」

グラトニーが部屋から去った後、男は夜空を見上げながら不適に笑みを浮かべた。

??? 「早く会いたいな……上原歩夢君♪」

第33話 狙われた歩夢・・・

侑視点

私達が襲われて今日で1週間。あれから下級怪人や怪人が襲ってきたことはあったけど、結局セブンズリッターの誰一人として現れることはなかった。

そして今日、緊急の全校集会が行われた。その内容は歴史の竹下先生が何か、問題を起こしたとかで懲戒解雇になったっていうのと、その後任の先生の紹介だった。

この後任の先生っていうのが男の人なんだけどまー顔が良くて、スタイルも良くて、登壇した瞬間に周りの生徒全員が黄色い声を上げちよつとした騒動に……（まあ、私としては陽の方がかっこいいと思うけど……／／／／／）

??? 「皆さん初めまして。本日からこの学校でお世話になります……速水公平です。」

そう名乗ると、想像通りの低音イケボだったのかまた黄色い声が木霊してもうひと騒動起こった。

それからいつもの学校生活を送って現在放課後、部室に向かつて廊下を歩いていると、不意に誰かから声をかけられ、その方向を向くとそこには今日一番の話題の人速水先生がいた。

侑「あーちよつと遅くなっちゃった！急がなきゃっ！」

速水「廊下を走るのは感心しないな」

侑「あつ、えつと、速水先生！ごめんなさい急いでつい……」

速水「素直に自分の過ちを反省出来るのは良いことだ……そんなことより、君は確か……高咲侑君……だったかな？」

侑「えつ、私のこと知ってるんですか!？」

速水「勿論！君を含め、スクールアイドル同好会のメンバーはこの学校では有名な

じゃないか……かく言う私自身、君達のことはこの学校に来る前から知っていたよ」

侑「とても有難いですけど……その、私のことも知っていたん……ですか？」

速水「当然だ。君はスクールアイドルフェスティバルの発案者兼一番の功労者だこの学校の生徒どころか教師の方々まで褒めていたよ」

侑「そ、そんな……皆がいたからで、私なんて全然……」

速水「そう謙遜しないでいい……人の称賛は素直に受け取っておくべきだ。実際、君は素晴らしいことをした」

侑「えっと……ありがとうございます／＼／＼／＼」

／
／
／
な、なんかこの歳になって褒められることってあまり無いからむずがゆいな……／

速水「それでは、私はまだやることがあるから失礼するよ。呼び止めて悪かったね」
侑「あ、いえ！」

こうして私は速水先生と別れて同好会の部室へ向かった。
それにしても、速水先生って話しやすくていい先生だなあ。

速水「高咲侑……上原歩夢の幼馴染で一番の理解者……か。ふっ。」

——陽哉視点——

今日は夕方から雨が降るらしく空は曇天に覆われていた。そんな空を見上げながらどこか嫌な予感を感じつつ学校が終わって侑と歩夢を迎えに虹ヶ先学園の校門前で待っていると、歩夢だけが出て来た。

侑がない理由を聞くと、やり残したことがあるらしく先に帰ってほしいと言われたそう。だから今日は久々に歩夢と2人で帰ることになった。

歩夢「……ねえ、覚えてる？前に私達が2人で帰った日のこと」

陽哉「あ……確か中一の頃だっけ？侑がインフルかかって学校休んだ時だよな？」

歩夢「うん！あの時は毎日侑ちゃんへのお見舞いの品をかう為に寄り道とかいっぱいしたよね」

陽哉「侑も凄いキツそうだったしな。回復した後も一週間近くは謝ってたっけ……？」

歩夢「私達自身、友達がインフルエンザにかかるなんて初めてだったから凄い戸惑っちゃったよね」

陽哉「歩夢なんてわんわん泣いてたもんな！」

歩夢「陽君だつて涙目でオロオロしてたじゃん！」

陽哉「あれは初めてのことでどうしていいかわからなくて……」

歩夢「私だつて侑ちゃんが死んじゃうんじゃないかって不安になつて……」

陽哉「まあでも、こうして3人今まで大きい病気とか無くてよかつたよな！このま

刀し変身した。

陽哉 「早く済ませたいからな！一気に仕留めさせてもらう！」

『ドラゴニックナイト！』

陽哉 「変身！」

『烈火抜刀！』

『ドラゴニックナイト！』

『すなわち、ド強い！』

セイバー 「ドラゴ」「行くぞ！」

だが、俺はこの時どうして歩夢を1人で行かせてしまったのかと激しく後悔することになる。

—— 歩夢視点 ——

陽君と久々に2人つきりで帰っていると、突然現れた怪人達に襲われそうになって囲まれる前に陽君が私を逃がしてくれて、私は少し離れた橋の下に身を隠した。

歩夢「陽君……大丈夫かな……」

橋の下から少しだけ顔をのぞかせて戦況を見守っていたら、突然後ろから声をかけられた。

振り返るとそこには速水先生がいた。

速水「君、うちの生徒だな？こんなところで何をしている？」

歩夢「へっ!?!……あ、えっと、速水先生……」

速水「……おや？君は確か……上原歩夢君だったかな？」

歩夢「わ、私のこと知ってるんですか!?!」

速水「まあね。……それで、君はここで何をしているんだい？」

歩夢「あ、それは……」

ど、どうしよう……。陽君が今そこで戦っているからって言えないし……。と、とりあえず適当なことを言っておこう！

歩夢「あ、えつと……。じ、実はすぐそこで刃物を持った悪い人がいて、いなくなるまでここで隠れていたんです！」

速水「何？それこそ早く帰りなさい！」

歩夢「あ……。あう……」

咄嗟の言い分も効かず、私があたふたしていると……………

突如先生の雰囲気の不気味なものに変わった。

速水「……時に、君の言う悪い人……。というのは、こういうものを腰に巻いていなかった

たか？」

歩夢「……………え？」

雰囲気が変わった速水先生は懐からベルトのバックルの様なものを取り出して自分の腰に装着した。

『暴食ドライバー！』

歩夢「え、それ……………何で先生が……………！」

速水「何故……………か。それは……………このベルトが私のもものだからだ」

見覚えのあるベルトを装着した速水先生は片手サイズのスイッチを取り出してそのボタンを押すと、バックルのスロットに装填してそのスイッチを軸に丸形の星座早見盤を1回転させる。

すると、速水先生の身体を夜空の様な闇が包み、幾つもある星の様な光が星座の様に

浮かび上がって形を変えると速水先生は見覚えのある仮面ライダーに変身した。

『リブラー!』

速水「変身。」

歩夢「あ、そ……そんな……!」

グラトニー「改めて自己紹介といこうか。私の名は速水公平……又の名を、仮面ライダーグラトニー……暴食を司るセブンズリッターの1人だ。」

歩夢「先生が……セブンズリッター……!?!」

グラトニー「私と共に来てもらおうか、上原歩夢。」

歩夢「い……いやっ……!」

迫りくる速水先生ことグラトニーに私は首を横に振りながら後ずさる。

歩夢「助けて……助けて、陽く……!」

「グラトニー」君に拒否権は無い！」

そして私が陽君に助けを求めようと踵を返して走り出そうとしたけど、それよりも速くグラトニーが自身の錫杖を地面に叩く方が速くて、私は……

歩夢「陽君………！」

………グラトニーの作り出した闇に飲み込まれた。

下級インバスやダスタードを全て倒した俺は、変身を解除して歩夢が隠れているであろう橋の下に向かった・・・・・・・・・・けど・・・・・・・・

陽哉「歩夢ー！もう出てきていいぞー！……つて、あれ？歩夢？」

そこには歩夢の姿がなかった。

しばらく周辺を探してみたけど、結局見つからず、そうこうしている間に雨が降って来た。

陽哉「はあつ……！はあつ……！何処行っちゃったんだよ……歩夢ー……！！！！」

——Not anyone 視点——

仮面ライダーグレートニーから変身を解除した速水公平によって連れ去られた上原歩夢は、とある会社の本社ビルに連れてこられていた。

歩夢「ここ、ここは……?」

速水「黙って歩け。」

そのままエレベーターに乗り36階に到着すると、そこからはらく歩いて豪華な造りの扉の前にやって来た。

そして速水がその扉を数回叩くと、中から声がして速水は扉を開いて歩夢の中に入る様に促した。

??? 「……………誰？」

速水 「暗輝様。速水です。例の娘を連れてきました。」

??? 「入っていいよ！」

速水 「はい。……………さあ、入りなさい。」

歩夢 「……………」

速水に促され部屋の中に入るとそこには男性が1人、デスクに座っていた。

闇夜の様に真っ暗な黒髪が似合うとても綺麗な顔立ちで年齢は20代前半くらいだ
ろうか、身長も高く脚長でとてもスタイルがいい。

そんな彼がデスクから立ち上がると歩夢に握手を求めて来た。

??? 「……………やあ！君が上原歩夢君だね！初めまして！」

歩夢 「あ、えつと……………」

??? 「おつと失礼、私はこういう者なんだ」

歩夢 「は、はあ……」

歩夢が男性から名刺を受け取ると、そこには「暗輝コーポレーション代表取締役社長
暗輝颯馬」と書かれていた。

暗輝コーポレーションとは最近出来たばかりの会社であるにもかかわらず、その急成長が目覚ましくたびたびメディアに取り上げられている会社だ。

現在の日本ではホテル事業に力を入れているオハラグループと様々な事業を手掛けるマルチに活動する飛瀬グループが実質トップに君臨しているが、最近ではこの2つの会社が食われるのではないかと言われている程、この暗輝コーポレーションのシェア率が急上昇し様々な企業を傘下に置き始めている。

それを全て一代で成したのが今歩夢の目の前にいる暗輝颯馬だ。

歩夢 「暗輝コーポレーションって今有名な……！」

暗輝 「おや？ 私の会社のことを知ってくれていたんだね！」

歩夢 「それは……まあ……でも……」

何故そんな大会社の社長がセブンズリッターの1人である速水公平と知り合いなのか。それは、彼の正体にあつた。

暗輝「まあ立ちっぱなしもなんだし、座つてくれ」

歩夢「は、はい……」

歩夢を部屋のソファに座らせ、自身はその対面のソファに腰かけると歩夢の疑問を口にした。

暗輝「さて、今君はこう思っているんじゃないかな？……何故一会社の社長である私がそこにいる速水公平君と知り合いなのか……と。」

歩夢「あの……その……」

暗輝「……………ゼウーデス。」

歩夢「えっ…………!?」

暗輝「ふふっ。…………君は彼等から聞いたことはないかな?この名前。」

歩夢「それは…………でも、どうして貴方がその名前を!」

暗輝「それ…………私なんだ。」

そう、暗輝颯馬。彼こそが仮面ライダー達が倒そうとしている敵の大元…………ゼウーデス本人だ。

だが、歩夢が剣緋陽哉達から聞いていた姿は怨念の集合体である為、明確な実体を持たない存在。でも、今日の前にいるのは完全に人間。

歩夢「そ、そんな…………!」

暗輝「実はね…………こっちの世界に来る際、私の存在が消えそうになってね。存在が消える寸前に偶然見つけた母体に入って難を逃れたんだ。」

暗輝はそこまで話すと、手を叩いて話を変える。

暗輝「さ！私の話はここまでだ！今日君をここに呼んだのは君の力になりたいからなんだ！」

歩夢「私の……力に……？どういう意味ですか？」

暗輝「単刀直入に言おう……君は仮面ライダーセイバー……剣緋陽哉君に惚れてるよね？」

歩夢「ふえっ!?!/!/!/」

暗輝「あははっ！可愛い反応だね！」

歩夢「あの、どうしてそのことを……？/!/!/」

暗輝「二応、仮面ライダーは私の敵だからね。彼等を調査している時に偶然君を見つけたんだ。」

そこから暗輝颯馬は興奮気味に語りだす。

暗輝「そして私は、君の純粋な心に自身の心を打たれた！この時代……ここまで一途に1人の人間を想うことが出来るのかと！私は世に言う悪の存在だ……けど！そんなことがどうでもよくなるくらい、君のことは見守りたい！応援したい！そして、君の様な純粋な子が報われてほしいと！そう思えるようになった……人の恋心というのがこんなにも素晴らしいものなのだ……君のおかげで知ることが出来た！だからどうか……君に協力させてはくれないか？君の為に……私の持てるすべての力を使いたいんだ！」

歩夢「そこまで……私のことを……？」

暗輝「うん、それに……このままじゃ、君が報われなと思うって……」

歩夢「えっ……それってどういうこと……ですか？」

暗輝「正直……君に見せるべきかどうか迷っただけだね……。けど、君が後々事実を知ってしまうなら……と、そう思っただけで今日速水君に君を連れてきてもらったんだ。」

そうやって暗輝颯馬はソファから立ち上がり一旦自身のデスクに戻ると、引き出しの

中にあるある一つの封筒を取り出し、その中身をテーブルに広げ歩夢に見せた。

封筒の中身は数枚の写真。だがその写真に写っていた光景は……歩夢にとつて今一番見たくない最悪のものだった。

暗輝 「心して見てほしい……」

歩夢 「……っ！これ……うそっ……！」

そこに写っていたのは、陽哉と高咲侑の2人が仲睦まじく歩いているものだった。中には手をつないでいたり、抱き合ったり……特に歩夢の心を抉ったのは、2人が抱き合つてキスをしている一枚だった。

暗輝 「その……とても言いにくいんだけど、剣緋陽哉君と高咲侑君はどうも恋仲にあるようなんだ……。それに、この写真の日付を見てほしい。」

歩夢 「え……？……っ!?この、日付って……!？」

陽哉と侑がキスしている写真の日付を見て歩夢は驚愕した。何故ならその日は歩夢が陽哉に映画に誘って大事な用があるからと断られ、侑を誘っても同じことを言われて断られた日だったからだ。

つまり陽哉と侑の2人はこの日、歩夢の誘いを断って2人で会ってデートをしていたのだ。

この事実が・・・・・・・・歩夢の心を深く深く墮としていく。そうして歩夢の心に生まれたのは・・・・・・・・

………嫉妬。

歩夢「あ……ああ……！そんな、そんなあ！」

暗輝「私は悔しい！この2人は歩夢君を除け者にして2人で愛を育んでいた！どうして……どうして歩夢君の様な純粋な子が報われないんだと！」

歩夢「嫌……嫌あ！！！！」

暗輝颯馬から事実を知らされた歩夢は自分の髪をぐちゃぐちゃにしながら激しく頭を左右に振る。まるで、突きつけられた事実を受け入れたくないという風に。

そんな彼女へ、暗輝颯馬は邪悪な笑みを浮かべこう提案してきた。

暗輝「歩夢君……君も悔しいだろう？当然だ……信じていた2人から同時に裏切られたんだから。……だからこそ……現状を変える方法が1つだけあると言えば……君は信じてくれるかい？」

歩夢「……え？」

歩夢が見上げると、暗輝颯馬の目からは涙が流れていた。それを見た歩夢は思ってしまった……

自分の為に涙を流してくれるこの人は……いい人なのではないかと。

それが、暗輝颯馬の策略とも知らずに。

そして暗輝颯馬は歩夢へ語り続ける。優しく、優しく……歩夢の心にすつと入っていくかの様に。着実に、確実に、歩夢の真っ白な純粹な心を黒く染め上げて行く。

まるで……透明な水に真っ黒な絵の具を落とす様に……その心を黒く染める。

暗輝「君はこのまま受け入れるのかい？自分の純粹で真っ直ぐな心に気付かず……応えることなく高咲侑君と愛し合う劍緋陽哉君を。その道は苦しいよ？寂しいよ？誰一人として君の心の傷に気付いてくれない……永遠に一人ぼっちな世界。私は……君にそんな世界に行つてほしくはない……。だから、これを受け取つて欲しい。」

そう言つて暗輝颯馬が差し出して来たのは1冊のワンダーライドブックと一振りの魔剣だった。

暗輝颯馬が差し出して来た2つのアイテムを見つめていると、徐々に徐々に、歩夢は自分の意識が遠のいていくのを感じていた。

歩夢「これ……は……?」

暗輝「この2つのアイテムが君に力を与えてくれる。君の夢は1人ぼっちの寂しい世界に行くことじゃない! 剣緋陽哉君と2人だけの幸せな世界に行くことだ!」

歩夢「陽君と私だけの……幸せな世界……」

暗輝「そうだ! 君のその素晴らしい世界を……私は実現させてあげたい! その為なら、どんな協力も惜しまない! どうか私に……君の夢を実現させる手助けをさせてはくれないかな?」

歩夢「私は……」

暗輝「さあ! 君の心の声を聞かせてくれ! 君は……どうしたい?」

そして、遂に歩夢の目から光が消えた……………。

歩夢「行きたい……行きたい。2人だけの、幸せな世界……。」
暗輝「さあ、受け取ってくれ！君の世界を……実現させる為に。」

目に光を失った歩夢は暗輝颯馬の言葉に従い、ワンダーライドブックと魔剣を手にした。

その瞬間、歩夢の腰にベルトが出現した。

“人心掌握”

これこそが、暗輝颯馬の人としての力だ。暗輝コーポレーションが短期間で大きく成長したのは暗輝颯馬のこの力にある。

彼は人の心の闇を見抜くのが上手い。歩夢の様な者には優しく接してその者の心に寄り添い自分を味方だと思わせる。逆に向上心の高い者にはそのプライドを煽り、提携している会社よりも好条件を提示して自社の傘下へと勧誘する。

これだけ。たったこれだけで、人の心は簡単に掌握出来てしまう。そして一番重要なのは他者に信頼されること。だからこそ暗輝颯馬は自社だけでなく傘下の会社……いや、業務提携していない会社や近所の方々に至るまで、全ての人に優しく接して優しただけじゃなく若くして成功した凄い人と巷で話題になっている。

暗輝颯馬に関わる者は皆、簡単にその心を掴まれてしまう。

暗輝 「さあ歩夢！私に見せてくれ！君の勇気ある第一歩を！」

歩夢 「……………」

そして歩夢は立ち上がり、ワンダーライドブックの表紙を開いた。

『狂愛の女神！』

『狂愛リード！』

歩夢 「……………変身。」

『愛に狂いし女神と嫉炎劍愛邪しえんけん・あいじやが交わる時、混沌の愛が世界を墮とす！』

歩夢は表紙を閉じたワンダーライドブックを魔劍の速読器に読み込ませると腰のベルトに収め、魔劍の柄でワンダーライドブックのページを開いて、黒に暗いピンクが入った仮面ライダー。

嫉妬を司るセブンズリッター……………仮面ライダーインウイディアへと変身した。

インウイディア「……………」

暗輝「……………くっ、あっはっはっはっは!!! やつと……………やつと嫉妬を手に入れた!」

速水「流石です、暗輝様。」

暗輝「君もありがとう、公平君! 君のおかげだよ!」

速水「いえっ! 勿体ないお言葉……………ああそれと、1つお伝えすることが。」

暗輝「何だい?」

速水「先程ルクスリアから報告があつたのですが、監禁していたイーラがそろそろ限界だと……………いかがいたしましたしょう?」

暗輝「あくそういえば彼、あのあと監禁したんだっけ? そっか……………そろそろ怒りが溜まりきったか……………よしっ! 解き放つていいよ!」

速水「……………はっ!」

速水が去つた後、立ち尽くすインウイディアこと歩夢の頬に手を添える。

暗輝 「さあ歩夢君、これからよろしくね！」
インウイディア 「……………」

第34話 憤怒の獅子

——Not anyone 視点——

ここはとある山の中。現在、速水公平とメディックがある場所へと向かっていた。

速水「そろそろか……。」

メディック「ええ。……着きましたわ。」

道なき道を歩くこと数十分、2人は突如立ち止まる。そして、メディックが1本の木を軽く叩くと、叩いた箇所がスライドし中からキーパッドが出現。

メディックがそのまま指定の数字をキーパッドに入力すると、今度は2人の眼前の地

面がスライドし地下へと続く階段が出て来た。

速水「さて、行くか。」

メディック「ええ、早く済ませましょう。」

メディックと速水が地下への階段を降りて行くと開けた空間に出て、その先に牢屋があった。速水はその牢屋に着く前に腰にベルトを巻いて仮面ライダーグラトニーに変身した。

『リブラー!』

速水「変身。」

この牢屋の中には仮面ライダーイーラことカザリが監禁されていた。

カザリ「いつまで僕をここに閉じ込めておくつもり？ さつさと出しなよ！ いい加減君達を喰うよ！」

グラトニー「やってみろ。」

メディック「貴方が暴走しかけて颯馬様のお手を煩わせるからですわ。」

カザリ「ちようどいいや……。怒りでどうにかなりそうだったんだ!!!」

グラトニー「ふっ……。ちようどいいのはこちらの方だ。その怒り……今度こそ奴らにぶつけてやるといい」

カザリ「何っ!？」

枷を破壊して檻まで破壊してグラトニーとメディックに襲いかかろうとしたカザリだったが、その前にグラトニーが自身の錫杖で地面に叩き闇を生成、カザリをとある場所へ飛ばした。

カザリを別の場所へ飛ばした後、グラトニーは変身を解き一息つく。

速水「…………ふう。」

メディック「終わりましたわね。それでは、私はこれで失礼しますわ♪」

速水「…そういえば、今日は例の日だったな。」

メディック「ええ、また颯馬様の夢の実現に一步近づきました♪」

速水「くれぐれも粗相をして暗輝様のお顔を汚すなよ？」

メディック「…………貴方に言われるまでもありませんわ。」

そう言うと、メディックはその場から姿を消した。

1人残った速水は、先程のメディックの言葉を思い出し忌々し気に言葉を吐いてその場を後にした。

速水「……………ふんっ。いけ好かない女だ。」

陽哉視点

「歩夢（さん）（先輩）（ちゃん）がいなくなったあ

!?!?!?!?!?

」

俺が昨日の出来事を皆に話すと、皆が同時に驚きの声を上げた。

陽哉「ごめん…俺がついていたのに……!」

雷羽「いや…まあ実際それもあるんだろうけど、全部が全部セイバーが悪いって訳じゃないだろ？」

勇真「そ、そうですよ！急に襲ってきた怪人達の方が悪いって言うか……」

果林「そうよ、それに悪いって思ってるなら全力で歩夢を探すべきだわ！」

エマ「私達も手伝うからね！」

彼方「彼方ちゃんフルスロットルで頑張っちゃうぜ〜！」

侑「陽：正直色々言いたいことはあるけど、私だつて考え始めたら後悔が止まらないよ。……でも、後悔してるだけじゃ多分歩夢は戻つてこない。だから：皆と一緒に前を向いて歩夢を探そう？」

陽哉「侑：皆：ありがとう。」

責められてもおかしくないのに……皆、本当に優しいな……

かすみ「と、とにかく警察！警察に連絡しましょう!!!」

天弥「お、おお！そうだな！……なあ愛！警察つて何番だつて？119？」

愛「てんでん……それは消防。」

かすみ「違いますよ天弥先輩！118番ですよ！」

璃奈「……落ち着いてかすみちゃん、それは海上。……それと、警察は証拠とか無いと家出として処理する場合が多い。」

俺の話聞いてあたふたするかすみちゃんやフォーゼとは違い、俺の話聞いたドラ
イブ達が真剣な顔で話していた。

走介「……オーズ、ウイザード、ビルド……お前ら気付いてるか？」

碧映「……うん。」

太陽「まあ……」

龍兎「考えてることは一緒かなあ……」

しずく「あの……どうかしたんですか？」

走介「あー……何て言うか……都合がいいって言うか何て言うか……」

碧映「タイミングがいいんだよね。セイバー達の前に下級怪人達が現れて、セイバー
が対処。当然歩夢ちゃんに危害が加えられない様にセイバーは歩夢ちゃんを逃がすよ
ね？」

太陽「そしたら歩夢が消えた。……ね？出来過ぎてると思わない？」

しずく「た、確かに……」

せつ菜「ではまさか……！」

龍兎「もしセブンズリッターに捕まったんだとしたら……ゼロワンの衛星でも見つけ

こうして俺達は歩夢を探す為に外へ出た。

だが、俺達が外へ出た瞬間、目の前にブラックホールの様な闇が出現しそこからカザリが現れた。

カザリ「あいつ…今度会ったら喰い尽くしてやる……!!」

碧映「なっ!?カザリ!」

雷羽「何でこんな時に出てくんだよ!」

かすみ「ひ、ひえええ……!!」

カザリ「…ん? オーズ達か……。ちようどいいや! 君達でこの怒りを発散させてもら
うよっ!!!」

そう言うと、カザリはバックルを取り出してそれを自分の腰に巻く。

『憤怒ドライバー!』

カザリ「蹂躪される準備はいい?」

『セット! デスコアメダル!』

カザリ「変身つつつ!!!」

憤怒ドライバーに黒いコアメダルをはめ込んでカザリは仮面ライダーイーラに変身した。

そして俺達も侑達を下がらせて全員仮面ライダーに変身した。

陽哉「皆、行こう！」

「「「「「「ああ（はい）（うん）」

『ドラゴニックナイト！』

!!!!!!!

「「「「「」

『シャイニングジャンプ！』

『ウォーター！ドラゴン！』

『ラビットタンクスパークリング！』

『ワイルド！』

『Nマグネット』『Sマグネット』

『一発闘魂！』『アーイ！』

『オレンジッ！』『レモンエナジー！』

『サイ！ゴリラ！ゾウ！』

「「「「「「「「変身っ「「「「「「」

!!!!!!

『ドラゴニックナイト!』『すなわち、ド強い!』

『シャイニングホッパー!』

『ジャバジャバシャーン!ザブンザブーン!』

『シュワツと弾ける!ラビットタンクスパークリング!』『イエイ!イエーイ!』

『ド、ラーイブ!ターイブ・ワイルド!』

『NS マーグネット、オン』

『ミックス!オレンジアームズ!花道・オンステージ!』『ジンバーレモン!ハハッ!』

『サ・ゴーズ…サ・ゴーズオツ!』

俺達全員が変身して改めてイーラと対峙する。

すると、前回イーラと戦ったドライブとゴーストとオーズがイーラを見て違和感を持った。

ドライブ「ワイルド」「なあ、カザリの奴…あんなだったか？」

ゴースト「闘魂ブースト」「いえ…あんな大きい鉤爪ではなかったと思います。」

オーズ「サゴーズ」「そうだね。…皆！あの大きい鉤爪は前回には無かったから注意して！」

ゼロワン「シャイニング」「了解！」

オーズの言葉に俺達はイーラの両腕を覆うほどの大きさの鉤爪を警戒する。だが、そんな俺達をあざ笑うかのようにイーラはその巨大な鉤爪を俺達の方に向けてくる。

イーラ「無駄な作戦会議してる暇なんかあるの？少しでも長生き出来るかを話し合った方がいいんじゃない？」

フォーゼ「マグネット」「お前の方こそ、俺達全員を相手に怖気づいてんじゃないのか？」

イーラ「…言ってくれるね。その言葉…後悔しないでよ！」

その言葉を言った瞬間、イーラの姿がその場から消えた。次に俺達がイーラを認識した時、奴はフォーゼの目の前に現れた。

イーラ「…はあっ！」

フォーゼ「マグネット」「はやっ!?!…ぐはっ!」

鎧武「ジンレモ」「フォーゼ!?!…くそっ!」

ウイザード「ウオードラ」「このっ!」

イーラ「ははっ!?!…よっわっ!」

ウイザード「ウオードラ」「ぐはっ!?!」

鎧武「ジンレモ」「がはっ!?!」

高速で動いたイーラはフォーゼの眼前に現れて、そのままフォーゼを自身の鉤爪で斬り裂いた。

その後、いち早く反応した鎧武とウイザードがソニックアローとウイザーソードガン

をイーラに振う。

が、イーラは脅威的な反応速度で2人の攻撃を鉤爪で弾き、がら空きになった2人の身体を斬り裂いた。

ビルド「スパークリング」「くそっ！…：ゴースト！」

ゴースト「闘魂ブースト」「…はい！」

『ボルテックブレイク！』

『オメガシャイン！』

イーラ「…っ！」

ビルド「スパークリング」「通常攻撃でダメなら！」

ゴースト「闘魂ブースト」「更に強力な技で！」

ビルドは自身のドリルクラツシャアのスロットにカブトムシフルボトルを装填し、カブトムシの角を模したエネルギーをドリル部分に纏わせ、ゴーストはサンングラストラツシャアのスロットにオレゴースト眼魂とムサシ眼魂を装填し燃え盛る炎の刀身を作り、

ビルドとゴースト、2人同時にイーラに剣を振り下ろした。

ビルド&ゴースト「はああああああああつ!!!」

イーラ「その程度の攻撃……僕には効かない!!」

そんな2人に対してイーラは鉤爪に闇のオーラを纏わせビルドとゴーストに斬撃と
して放った。

イーラの放った闇の斬撃に咄嗟に互いが持つ武器でガードしたビルドとゴースト
だったが、あまりの威力に防ぎ切れず2人共後方に吹き飛ばされた。

ビルド「スパークリング」「うっ、ぐっ……ぐああああああつ………!」
ゴースト「闘魂ブースト」「ぐっ、ううっ……うああああああつ………!」

くそっ！フォーゼだけじゃなくビルドとゴーストまで！何とか3人共変身は解除されてないが、このままじゃ、俺達の後ろにいる侑達にも危害が及ぶ！

それだけは絶対にさせないっ！

そして俺はゼロワンとオーズとドライブの3人と目配せをしてまずは俺とオーズが先行してイーラへ俺は火炎剣烈火を振り、オーズは打撃を放つ。

セイバー「ドラゴ」「ふっ！はあっ！」

イーラ「ふっ、おっと！」

オーズ「サゴーズ」「せっ！はっ！」

イーラ「ぐっ、はあっ！」

俺とオーズは何とかイーラの攻撃を避け、互いが持つ武器で弾く。だがそれはイーラも同じで俺達3人は目紛るしい剣戟を繰り広げる。

だが俺とオーズの狙いはこの剣戟じゃない。

そして、イーラの意識が俺達に向いたタイミングで、その時は来た。

『バースト!』

『Progress key confirmed. Ready for bust
er.』

ゼロワン「シャイニング」「はああああ………はあっ!」

『バスターダスト!』

俺達から離れた位置にいて、イーラの意識外だったゼロワンがオーソライズバスターにレッドパールのプログライズキーを装填し、銃口をイーラに向けてライオンの頭部を撃った。レッドパールのエネルギー弾を放った。

イーラ「…なにつ!?くつ…!」

セイバー「ドラゴ」「オーズ!」

オーズ「サゴーズ」「うん!行くよ!」

『ドラゴニック必殺読破!』

『スキヤニングチャージ!』

セイバー&オーズ「はあああ……はあああああ!!!」

ゼロワンの攻撃に合わせて俺とオーズはイーラから離れて、今まで俺達に意識を集中していたイーラは反応に遅れてライオンの頭部を模したエネルギー弾を真正面からではあるがその驚異的な反応速度で両腕の鉤爪をクロスさせてガードした。

そしてイーラがゼロワンの攻撃を受け止めている隙に俺は神火龍破斬を放ち、オーズは右腕に重力の波動を溜めて右腕に装備されているゴリバゴンと共に一気に放った。

俺達の放った必殺技はそのままゼロワンのエネルギー弾を後押しする様に重なり、更なる威力を増す。

イーラ「うっ、ぐうっ！……ぐおあああああつ……！！！」

あれだけ脅威的な力を持つイーラであっても、流石に仮面ライダー3人分の必殺技だとその威力を前に受け止めながらも苦悶の声を漏らす。

しかしここまでやっても、イーラを倒せない。

だが俺達の作戦はまだ終わってない。

イーラ「あつはは！このまま押し返してあげるよっ……！！！」
オーズ「サゴーズ」「……そっか、なら……」

セイバー「ドラゴ」「……最後の一押し、だな！」

ベルトさん『ヒツサーツ！フルスロットル！』

ドライブ「ワイルドフレア」「更に!!!」

ベルトさん『ヒツサーツ！フルスロットル！フレア！』

ドライブの必殺技が重なったことで更に威力を増した俺達の必殺技は、遂に受け止めていたイーラの防御を崩した。

イーラ「ぐあああああああああ………?!?!?!?!?!」

オーズ「サゴーズ」「や、やった………!」

ゼロワン「シャイニング」「ここまでして、やつかよ………!」

ドライブ「ワイルドフレア」「さて………ここまでやって立ち上がってくるならいいよだな………」

オーズ「サゴーズ」「兎に角、気は抜かない様にしよう………」

セイバー「ドラゴ」「ああ………」

俺達が目の前の爆炎に警戒する中、突然その爆炎が吹き飛んだ。

濃縮な闇がイーラの全身を覆い尽くし、どんどん大きく膨らんでいく。

そして、濃縮な闇が晴れた時……そこに現れたのは……

『ガオオオオオオオオオオオオ』

!!!!!!!!!!!!

漆黒の体毛に紫のラインが目元から全身に伸びた一体の獅子だった。
――。

一周年記念特別企画

雷羽「……え〜…それでは！この作品『9人の戦士と10人の虹乙女』の！投稿一年を祝して……皆でボウリングだー……」
『いえーい！』
『!!!』

今日、5月2日はこの作品「9人の戦士と10人の虹乙女」を投稿し始めて1年が経った記念すべき日。

そんな訳で、現在9人の仮面ライダー達と10人の虹ヶ咲スクールアイドル同好会のメンバーたちは、飛瀬グループが経営しているボウリング場に来ていた。

それとここだけの話、作者はどうやら初投稿の日を5月5日だと勘違いしていたとい

うのはここにいるメンバーには内緒だ。

走介「……は？それマジ……？」

かすみ「作者が初投稿の日勘違いするとかどうなっているんですか——！」

………おや？何故そのことを知って……？

璃奈「……知ってるも何も……聞こえてる。」

龍兎「ていうか、さつきから聞こえるこの声は一体……？」

陽哉「……あく……」

侑「陽、この声の人知ってるの？」

陽哉「……この人は特別ストーリーテラー（自称）って人で、前回のクリスマスの時にちよつと。……あの——また通信切り忘れちゃってますよ——！」

え……?……あ、ホントだ! くっそー! まあーた夜勤の人ちゃんと通信切らずに帰つたなー!

しづく「夜勤とかあるんですね……」

碧映「びつくりだよね……」

せつ菜「……色々大変なんですね、ストーリーテラーという職業も……」

太陽「職業と言つていいのかどうなのか……」

天弥「うおー! ストーリーテラーキターー! なあ! 俺とダチになろうぜ!」

愛「いやいや、てんでんそれは流石に……」

えっ?! いいんですかっ?! 実は自分、友情握手やってみたかったですよ!

絃輝「いや乗るんかい!」

エマ「わあー！ねえ果林ちゃん彼方ちゃん！私もお友達になれるかな〜！」

果林「いやいやエマ……貴女まで何言ってるのよ……」

彼方「彼方ちゃんはそんな純粹なエマちゃんも好きだぜえ〜」

勇真「でもこれ、どう收拾付けたら……？」

いやー、楽しみですわー！……ん？あれ、社長？どうしたんですか？……え？あんまり物語に関わるな？いやーわかってるんですけどおー？夜勤の人が切り忘れちゃったからあー？……あ、待って、ごめんなさい調子乗りました本当に申し訳ないとおもってますって！あ、待って！あ、あ、ごめんなさい！ごめんなさい！！待って！待って！その関節はそつちに曲がらなッ……ぐぎやあああああああああ
!!!!!!

陽哉「えっ?!ちよっ！なにになになにつ！」

雷羽「怖い怖い！」

侑「ブラツク過ぎないッ!?死んじやつたとか無いよねッ！」

あー、あー。テストス…マイクテスト。どうも皆さん、社長です。

勇真「社長出てきましたよ……」

かすみ「もー！何なんですかさつきからー！」

この度はうちのクズ……ん、ん、おっほん！……社員の者が大変ご迷惑をおかけしました。以後はこのようなことが無い様にいたしますので、皆様は気にせず物語のほうに戻ってもらって。

しずく「気にするなと言われても……」

愛「…まあ、無理っしょ。」

走介「普通じゃありえないしな……」

……まあ、皆さんそう言うと思っではいました。……なので、皆さんの記憶を消させていただきます。

紘輝 「なっ!?マジで言ってるのか!」

太陽 「敵だったのかっ!」

龍兎 「くそっ!せめて璃奈達だけでも……!」

それでは皆さん……記憶削除……!アツパラピッピくノポントロピンツ♪

陽哉 「な……何だそのふざけた呪文みたいなのは……!」

『うわあああ~~~~~!!!』

……さ、仕事に戻るか。貴様も今度はちゃんと仕事しろよ？

……イエス、マイ・ロード。

陽哉「ううゝ…ん。……あれ、俺、何してたんだっけ？」

劍緋陽哉が目を覚まし、辺りを見回す。

ボウリング場の店内、自分と同じ様に眠っている仮面ライダー達とスクールアイドル同好会のメンバー達を見てボウリングをしに来たことを思い出した。

陽哉「ああ、そつか。そういうえば皆でボウリングに来たんだっけ……。おおい皆！起きろー！」

天弥「……んんん。……お？ここ何処だ？」

せつ菜「えつと……。確か、皆さんでボウリングをしに行こうとなっていた様な……。エマ「……あれ？でも、何でボウリングをしに来たんだっけ？」

果林「……何か理由があつた様な気がしたけど……。駄目ね、全然思い出せないわ。」
紘輝「まあ、日頃のお疲れ様会つてことでいいんじゃないね？」

璃奈「……同意。」

雷羽「それじゃ！何か良くわからんけど！お疲れ様つてことでボウリングたのしむ

ぞー！」

『おおーーー！！！！』

「ちよつと待ったあ！！！！」

「?!?!?!?!」

何はともあれ皆でワイワイボウリングをしようとしたところで、制止の声が入り、全員が声のした方を向くと……そこには現在絶賛敵対中のセブンス・リッターの面々がいた。

速水「貴様等だけワイワイ楽しもうなど気に食わないな。」

難波「わっば共が。年功序列という物を教えてやるわ。」

アケディア「……はあ。どうして私まで……。」

メディック「まあまあアケディア！よいではありませんか！」

突然のセブンス・リッターの登場に、全員戦闘態勢を取ろうとするが、どうやら今日は戦いに来た訳ではない様だ。

陽哉「何でお前達がここにッ……!」

龍兎「あーさいつあくだ!」

速水「待て。今日は戦いに来た訳ではない。」

天弥「そんなの信じられるかよ!」

難波「まったく、これだから最近の若いモンは。よく見てみる! 私等は丸腰だろう!」

メデイツク「私達は貴方達にボウリング勝負を申し込みに来ただけですわ!」

碧映「……嘘を吐いてる様には見えないけど……」

走介「今まで戦っててはいさそうですかって簡単に納得は出来ねえだろ」

仮面ライダー全員が警戒する中、意外な人物が声を上げた。

侑「……いいんじゃない? ボーリング勝負受けても!」

陽哉「ちよつ、侑!」

雷羽「正気ですか!」

侑「うん。だってこのままじゃ埒が明かないし、この人達本当に丸腰っぽいし、それに何より……………早く遊びたい!!もう限界なんだよお!!!」

陽哉「…………あーもうわかった!ならその勝負受けて立つ!」

こうして、なんやかんやあつて仁義なきボウリング対決が始まろうとしていた。

彼方「さあ〜始まったよ〜!虹ヶ面ライダーチームVSセブンズ・リッターチームの仁義なきボウリング対決〜!司会進行は彼方ちゃん担当するよお〜!ちなみに〜虹ヶ面ライダーチームは人数が多いのでABCDの4チームに分けるからねえ〜!…そうそう〜後〜、ガターを出した人はミニカップ一杯、最下位チームはジョッキでせつ菜ちゃん特製ドリンクを飲んでもらうからねえ〜!」

『なんだって!?!』

せつ菜「皆さんのことを想って一生懸命作りました!」

速水「罰ゲームというやつか…。しかし、ドリンクだけだど?」

メデイック「ですが、ドライブ達のあの表情…………油断なりませんわね。」

難波「…ふん、所詮小娘の作った物。たかが知れとる。」

彼方「じやあせつ菜ちゃん、その特製ドリンクお披露目してえ〜!」

せつ菜「はい!これが私の作った特製ドリンク…その名も!せつ菜の青酔!です!!!」

そこにあつたのは、いかにも美味しくなさそうな真つ青な色をした液体がジョッキに入っていた。

それを見た虹ヶ面ライダー陣営は速攻円陣を組む様に円型に集まってこそこそ話始めた。

かすみ「な、なんですかあの真つ青な液体は……!」

雷羽「とても自然界にある飲み物に見えないんだけど……!」

しずく「心なしか目に来ますね……シバシバしてきました……」

璃奈「あれを飲んだらどうなってしまうのか想像つかない。璃奈ちゃんボード【ガクガクツ!】」

愛「りなりー大丈夫！愛さんがついてる！」

龍兎「あれは……ちよつと……化学では説明出来そうにないなあ……」

天弥「いやほら！勝てばいいんだろ！勝てば！」

走介「あれはそれでリカバリー出来るか……」

紘輝「飲んだ後が全然想像出来ねえ……」

碧映「まあでも、頑張って作ってくれたのは嬉しいよね！」

勇真「飲みたいか飲みたかないかで言えば申し訳ないですけど……飲みたくはないです……」

果林「エマ！何としても勝つわよ！」

エマ「うん！頑張ろうね！」

陽哉「せつ菜ちゃんの料理の腕は聞いてたけど……飲み物も例外じゃないんだな……」

侑「あ、あはは……太陽君、どうにかならない？」

太陽「うくん、どうにかしてあげたいけど……菜々のあの笑顔を見ると……どうしようもない。」

侑「……そこなんだよなあ！」

彼方「へい君達、そろそろ始めるぜ？覚悟はいいね？」

——虹ヶ面ライダーAチーム

かすみ「いいですか皆さん！やるからには絶対勝ちますよ！」

愛「おー！かすみやる気が満々じゃん！」

雷羽「よし！良く言ったかすみ！全力で行くぞ！」

天弥「うっしやあ！俺達が優勝だー！ー！」

——虹ヶ面ライダーBチーム

龍兎「璃奈、全力で計算式を組むぞ！」

璃奈「……うん。璃奈ちゃんボード【勝利の法則は決まった！】」

陽哉「侑達には悪いけど、絶対にあのドリンクだけは避けましょうエマさん！」

エマ「そうだね！ガターを取らない様にも頑張るよ！」

——虹ヶ面ライダーCチーム

しづく「私はプロボウリングプレイヤー……私はプロボウリングプレイヤー……」

碧映「しづく、集中してるなあー」

果林「勇真！下手なことしたら許さないわよッ！」

勇真「その言葉！そっくりそのまま返すよ果林姉え！絶対に不器用発揮しないでね
！」

——虹ヶ面ライダーDチーム

紘輝「こっからは俺達のステージだよな！ドライブ！」

走介「おう！ひとつ走り付き合ってもらおうぜ鎧武！」

太陽「今回はよろしく、侑！」

侑「うん！こっちこそよろしくね太陽君……せつ菜ちゃんには悪いけど、絶対にあのドリンクは飲みたくないからね！」

——セブンス・リッターチーム

速水「我々の力、とくと見るがいい！」

難波「年功序列というものを教えてくれる！」

メディック「貴方先程も同じこと言っていましたわよ？もう老人ホームに入ってはどうか？」

アケディア「わあ、ボウリングなんて久しぶり……じゃ、なくて……あーめんどくさっ。私帰っていいですか？」

こうして、絶対に負けられないボウリング対決が幕を開けた。

——1投目・虹ヶ面ライダーAチーム

かすみ「かすみんのミラクルストライクで一気に決めてやりますよ！」

愛「行ったれかすみー！」

天弥「お前ならいけるぞー！」

雷羽「やれば出来る子だー！」

かすみ「……せいやあああああ
!!!!!!」

「気合い十分のかすみが放った！投目は、最初こそ真っ直ぐ転がったが……」

かすみ「あつ、待って！曲がらないで！まっすぐ行ってよお！いやあだあああ
!!!!!!」

すぐに左へと曲がり、そのままかすみの悲痛な声も空しくボールはガターレーンへと
落ちた。

かすみ「そん……な……。
ッ!？」

せつ菜「かすみさん!!!!!!」

かすみ「せ、せちゆなしえんばい……かすみん達は同じ部活の仲間……ですよね？」
せつ菜「せつ菜の青酢をどうぞ!!!」
かすみ「人の話をき……んぐつ！」

開幕早々ガターを出したことに絶望しているかすみのところに、ミニカップを持ったマッドサイエンティストせつ菜が現れ、情に訴えかけようとしたが人の話を聞いていないせつ菜が口を開けたところに青酢を入れた。

かすみ「■▲○▽△●□!？」

雷羽「か、かすみ!？」

青酢を飲まされたかすみはその威力に卒倒。ミニカップ一杯で卒倒という光景を見た他の面々は戦慄した。

愛「ミ、ミニカップ一撃ッ……!？」

天弥「嘘……だろ……！」

璃奈「あ、あわわあ〜っ……。」

龍兎「大丈夫……大丈夫……。俺と璃奈の計算式が敗れるはずがない……大丈夫……大丈夫……。」

しずく「私はプロボウリングプレイヤー……私はプロボウリングプレイヤー……。」

絃輝「ほ、本当にあれを飲まなきゃいけないのか……！」

速水「あれは何だ……！殺人兵器か……！」

メデイック「機械の身でありながら軽く恐怖を覚えましたわ……！」

せつ菜「……あの、かすみさんはどうしてしまったのですか？」

彼方「大丈夫だよせつ菜ちゃん。かすみちゃんは美味しさの余り気絶しちゃっただけだから。……さ、雷羽くん！かすみちゃんの分の2投目投げて〜！」

雷羽「……え、あ、はい。」

「気絶したかすみは空いてる席に運ばれ退場。雷羽がかすみの分の2投目を難なく投げ終えた。」

雷羽「よ、良かった……。」

——1投目・虹ヶ面ライダーBチーム

陽哉「……それじゃあ、行ってきます。」

エマ「頑張つて！陽哉君！」

龍兎「自分を信じれば行ける！」

璃奈「陽哉さんなら大丈夫。璃奈ちゃんボード【むんツ！】」

陽哉「ふうく………はッ！」

迫る恐怖に怯えつつ、何とか息を整えて放った1投目。

陽哉が放ったボールは綺麗な軌道を描いて真っ直ぐに進み、ストライクを取つてみせた。

陽哉 「うおおしやあああ!!! あつぶなっ!!!」

果林 「……ちっ。厄介な奴が残ったか……」

勇真 「果林姉え……キャラ……」

速水 「忌々しい奴め……」

彼方 「じゃ、次Cチーム〜!」

—— 1 投目・虹ヶ面ライダーCチーム

碧映 「よーし! 行ってくるかなー!」

勇真 「随分ノリが軽いですね?」

果林 「やる気があるのはいいいことよ!」

碧映 「……よつと!」

碧映が放ったボールは少しゆっくり目な速度で真っ直ぐに転がって行ったが、最後の最期で右にズレてピンを一本も倒せずガターとなってしまった。

しかし、当の碧映本人はこの結果を気にしている様子はなく、むしろ青酢を飲むことに嬉しささえ見て取れる。

碧映「あららつ、ガターになっちゃったかあー」

しずく「いいなあーお兄様……。」

璃奈「……どうしたの？しずくちゃん？」

しずく「お兄様は昔から休日は色んな所に旅に出たりしてたので、慣れてるんですよ……ゲテモノに。」

愛「いやゲテモノで……。」

走介「なるほどな、だからさつきから飄々としてるっていうかー人だけ余裕な感じだったのか……」

周りがそんな会話をしている中、ガターを出した碧映のところにせつ菜がミニカップを持ってやって来た。

碧映はせつ菜からミニカップを受け取ると、何の抵抗も無く青酢を口に放り込んだ。

せつ菜「碧映さん！どうぞ！」

碧映「ありがとうせつ菜ちゃん！さて、一体どんな味がするのかな……………」

絃輝「しずくの言葉が本当なら、オーズはあの液体が効かないってことだよな？いいなあ〜それ！」

天弥「だよなー！俺も旅に出よっかな……………」

侑「せつ菜ちゃんのあれが効かない人がいたらそれって凄くない？」

エマ「今まで全滅だったもんね！」

陽哉「そうなつてくるとCチームはかなり有利だな……………」

雷羽「くう〜！俺もオーズと組めばよかった！」

果林「ていうか、私達も気合いで何とかならないかしら？」

しずく「果林さん……………無駄な期待を持つのはやめましょうよ……………。私達は散々味わってきたはずです……………あの絶望を……………希望など無いのだと……………」

璃奈「回避するにはガターを出さずに優勝するしかない。」

愛「何としてでも勝たないと愛さんもかすみの二の舞に……………」

太陽「……あれ？ていうか、さつきからオーズが静かすぎない？」

太陽のその言葉に、全員が碧映の方に視線を向ける。すると、当の碧映はミニカップを傾けたまま止まっていた。

すると次の瞬間、口の端から一筋の青い液体が流れたと思ったら、そのまま碧映は地面にぶっ倒れてしまった。

碧映「……………」

しずく「…………お、お兄様ツ!？」

走介「おいっ！倒れたぞっ！」

龍兎「…………駄目だ、意識を失ってる…………」

絃輝「マ、マジか……！鍛えてる仮面ライダーでも一撃瞬殺って…………」

雷羽「信じられない…………そんな超兵器をあんな可愛らしい人が作り出したなんて…………！」

勇真「しかも本人はその自覚無くあの無邪気な笑顔…………。恐ろしいにも程があります

よせつ菜さん……………！」

アケディア「ひ、ひいい……………！あんなの飲みたくない……………！私帰りますッ！」
メディック「待ちなさいアケディア！逃がしませんわよ！」

彼方「……………さ、次はDチームの番だよ〜！」

速水「私が言うのもなんだが、貴様に人の心は無いかッ……………！」

こうしてまた犠牲者……………もとい、ゲームの脱落者が増えた。

——1 投目・虹ヶ面ライダーDチーム

侑「こ、怖い……………。大丈夫かなあ……………」

紘輝「大丈夫だ侑！」

走介「自分を信じて突っ走れ侑！」

太陽「希望を捨てなければ大丈夫！1ピンでも倒せばとりあえず回避できる！」

侑「い、行くよ……………！おりゃあッ!!!」

恐怖全開の中放たれた侑のボールは、ゆっくりでふらつきながらも右曲がりに転がっていき、一瞬ガターになるかと思われたが何とか3ピン倒すことが出来た。

侑「嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ……！お願いしますガターだけは勘弁してください！飲みたくないんですまだ死にたくないんですやり残したことが多すぎて泣きそうなんですお願いします……あ、3ピン！3ピン！良かったあ……！」

愛「おお！ギリギリだったけどやるねえー侑ー！」

陽哉「相手チームが減らないだけで緊張感が凄いな……」

彼方「じゃあ最後のセブンス・リッターチーム行ってみよー！」
難波「ようやくか。」

—— 1 投目・セブンス・リッターチーム

難波「……ふん！」

難波の投げたボールは速攻でガターレーンに落ちた。

メデイック「ちよっ！速すぎますわよ！」

アケディア「せめてもう少し粘ってくださいよ！」

速水「所詮は老害か……」

難波「黙れ！難波チルドレンにしてやろうか！」

せつ菜「さあ！どうぞ！」

難波「ふん！そんな物飲んでいられるか！」

せつ菜「……え、飲んでいただけなのですか……？」

難波「当然だ。そんな物を飲んだら私の命が……」

彼方「せつ菜ちゃん、ちよっとなんか貸して？」

せつ菜「あ、はい。どうぞ。」

彼方「ありがと〜！……それっ。」

難波「…んぐつ！…ぐぼらッ！」

ガターを出したにも関わらずせつ菜の青酢を飲むことを拒否した難波に対してせつ菜からミニカップを受け取った彼方が何かごちゃごちゃ言ってる難波の口の中に青酢を放り込んだ。

当然難波もかすみと碧映同様に例外無くその場にぶつ倒れた。

速水「老害とはいえ、我らセブンス・リツターのメンバーまでも瞬殺とは……」

メディック「これは……舐めてかかると痛い目を見ますわね……」

アケディア「こんなデスゲーム参加するんじゃないやなかつたあ……」

彼方「…さ、全チームの1投目が終了したところで、ここからはダイジェストでお届けするよお〜！皆の阿鼻叫喚の悲鳴をご覧あれ〜！」

——ダイジエストタイム

天弥「うぎやあああああ!!!」

愛「きやあああああ!!!」

雷羽「ぐぎやらッ!!!」

龍兎「完全な計算式のはずが!……うぼがあッ!!!」

エマ「さようなら……世界……」

果林「嫌、嫌よ!私はまだ死にたくなッ……死にたくないのおおおお!!!」

勇真「これで僕も英雄に……なれたかな……」

紘輝「うぼっぎやらあッ!!!」

走介「俺の走りも……ここままでかあ……あぎやああああ!!!」

速水「この私がガターを取ってしまうとは……無念だあああ!!!」

メディック「ああこのメディック!先絶つ不幸をお許しください……!!!」

アケディア「そんなッ!嫌、嫌だよお!おかさああああああん!!!」

彼方「……と、いう訳でね!尊い犠牲を払いつつ!残ったのはBチームより陽哉君と

璃奈ちやくん！そしてCチームよりしづくちやくん！最後にDチームより太陽君と侑ちやんだよお〜！」

陽哉「皆の犠牲……無駄にはしない！」

璃奈「龍兔君の想いは私が受け継ぐッ！」

しづく「私はプロボウリングプレイヤー……私はプロボウリングプレイヤー……」

太陽「絶望を希望に変えて見せる！」

侑「皆の魂は……私達の中で生き続けるからね！」

彼方「さ、皆から言葉を聞いたところでしづくちゃんの番だよー！」

しづく「はい！」

しづく「ふうー。……ふっ！」

しづくの投げたボールは真っ直ぐと転がってストライクを取った。しかもしづくはこれで3回連続でストライクを取っている。

あまりの集中力に口笛を吹くほどだ。

しずく「ヒュ〜。」

侑「しずくちゃん、またストライク……」

太陽「凄い集中力……」

陽哉「ノって来たなしずくちゃん。」

璃奈「ああなつたしずくちゃんを止めるのは難しい……」

集中力を維持したまま次のボールに手をかけるしずく。そんなしずくを見て流石に次ストライクを取られたらマズイと判断した侑は、隣にいる太陽にある作戦を持ちかける。

しずく「……………」

侑「あのままじゃマズイ……何とかしなきゃ……。……よし、太陽君！」

太陽「……どうした侑？」

侑「ちよつとトイレに行つて変身してきてくれない？」

太陽「えっ……何で？」

侑「ちよつとした作戦があるんだよ！いいから早く！」

太陽「わ、分かった……」

侑に強引に押し切られた太陽は渋々トイレに向かい、その中でフレイムスタイルに変身して再度戻つて来た。

それを確認した侑は仮面ライダーウイザードに変身した太陽をしやがませ、今まさにボールを放とうと構えるしづくに聞こえる様に少し大きめの声で叫んだ。

侑「いやあ、流石しづくちゃん！これは敗けてられないなあ……つて、あれツ!? このボール……指を入れる穴が無いツツツ!!!」

しづく「へ……?」

侑「……と思つたら、ウイザードに変身した太陽君の頭部だった♪」

ウイザード「……てへっ！」

しずく「へああつ。……つて、あッ！」

侑と太陽による姑息な罠にかかったしずくが誤ってボールを放してしまう。それによりボールはそのままガターレーンにドボン。しずくは年上の卑劣な罠にはまり脱落となつてしまった。

しずく「ちよ、ちよつと待つてください！今のは無しです！反則行為を受けましたッ！」

彼方「しずくちゃん……勝負とは非情なのだよ。侑ちゃんと太陽君のあれもまた作戦さ。」

せつ菜「しずくさん!!!どうぞ!!!!」

しずく「うっ、ぐっ……！恨みますからね侑先輩！太陽さん！」

太陽「ごめん、しずくちゃん……俺達はどうしても勝たなきゃいけないんだよ……」

侑「しずくちゃん……ゴツチュー。」

しずく「ごぼろっしやあああああ!!!!!!」

陽哉「何て卑劣な……でもちよつと助かった。」

璃奈「しずくちゃん可哀そう。璃奈ちゃんボード【ラッキー!】」

しずくが倒れたことで残り2チームとなった。そして侑・太陽のDチームが投げた点数は優勢。陽哉・璃奈のAチームが勝つには10フレーム全てストライクを取らなければならぬ状況となった。

侑「よーし、これでは陽達には残り3投全てストライク出さなきゃ無理だね

!」

太陽「そんな奇跡はそうそう起きる訳ないし、余裕だな侑!」

彼方「それじゃ、陽哉君達始めちゃってえ〜!」

陽哉「分かりました! すうー……絶つ………対に!!!! 負けなくなああああああああ

あああああああああああああああああああああ!!!!!!」

!!!!!!」

ストライク。

侑「まあ？まだ一回目だし？まだまだ余裕！」

太陽「まだ慌てる時間じゃないな！」

彼方「次、璃奈ちゃん！」

璃奈「頑張る。璃奈ちゃんボード【あんな不気味な物飲みたくないいいいいいい！！！！】」

ストライク。

侑「…い、いやいやいや！まだ！まだだから！」

太陽「まあ、最後の悪あがきってやつかな？」

彼方「じゃあ最後に陽哉君もう一回おねがい！」

陽哉「分かりました！すう…はあ…。あんなの飲んだら………死んじやうつてえ

これも先程しずくにした卑劣極まりない行為が原因ともいえよう。まあ何と云って
も人間正々堂々素直にゲームをするのが一番ということだ。

そして、ゲームに敗れた2人に死神のお迎えが……………

侑「嘘……………でしょ……………」

太陽「そんな奇跡を出すなんて……………」

彼方「…侑ちゃん、太陽君。……………地獄の時間だよ。」

「ツ……………!!!」

侑「ちよ、ちよつと待ってくださいいよ彼方さん！」

太陽「そうですね！話し合えば分かり合えますって！」

彼方「そうはいかないのさ。…ほら、見てごらん？死者達が迎えに来たよ。」

「へ……………？」

彼方に言われて侑と太陽は背後に目をやる。するとそこには脱落していった亡者達が立っていた。

「ひい…!!」

かすみ「逃げないでくださいよ侑せんぱい？太陽せんぱい？」

しずく「うふふつ、そうですよお〜？ちゃんと飲まないダメじゃないですかあ〜？」

碧映「大丈夫。結構いけるよお〜？」

愛「ほらほら〜？愛さん達がついてるからさあ〜？」

雷羽「さあさあご一緒に……？」

エマ「行こう〜？」

紘輝「ずっと俺達のステージだぜ〜？」

天弥「皆でいれば怖くねえからさあ〜？」

走介「お前等もひとつ走り付き合おうぜえ〜？」

果林「そんなに怖がらなくていいんじゃない〜？」

勇真「そうそう、気持ちいいですよお〜？」

龍兔「2人の今後の法則は決まっていますよお〜？」

速水「貴様等だけ逃がしてたまるかあ〜？」

難波「この私と同じ目以上の苦しみを味わうがいいわあ〜？」

メデイック「さあ、遠慮なさらずにい〜？」

アケディア「とつても美味しいですからあ〜？」

「ダ、ダレカタスケエエエエエエエ………」

!!!!!!!
」

亡者達に囲まれた2人の雄叫びがボウリング場内に響き渡り、この地獄のゲームの終わりを迎えた。

陽哉「……か、勝てて良かった………本当に………」

璃奈「………璃奈ちゃんボード」
「やっぱり日頃の行いなんだよちゆんなあ〜」

彼方「そうそう！2人にまだ優勝賞品を渡してなかったねえ〜。」

せつ菜「優勝おめでとございますお2人共！これをどうぞ！」

そう言ってせつ菜が差し出して来た物は、赤い液体が入ったジヨツキだった。

陽哉「……………これは……………は……………?」

せつ菜「これは青酢の親戚みたいなもので滋養強壮に良いドリンク!その名もせつ菜の赤酢!」

璃奈「あか……………ず……………」

彼方「……………さ!ぐびつと行っちゃおうか2人共!」

「……………」

もしかしたら、今回の本当の悪魔は彼方なのかもしれない……………。

第35話 しずくの想いと相棒の残した力。

——陽哉視点——

巨大な漆黒のライオンを前に、俺達は驚愕の声を上げた。

ゼロワン「シャイニング」「お、おお…!?まじか!？」

ドライブ「ワイルドフレア」「で…でつか!？」

オーズ「サゴーズ」「う、うわあ…」

セイバー「ドラゴ」「これは…やばいな…」

目の前の漆黒のライオンへの対策を考えていると、ウィザード達がダメージを受けた

箇所を押さえながら戻って来た。

ビルド「スパークリング」「いったた……」

フォーゼ「マグネット」「くっそ……油断した……!」

ドライブ「ワイルドフレア」「お前ら!……よかった、その様子だとまだ戦えそうだな……」

ゴースト「闘魂ブースト」「何とか……。けど、近くで見るとデカすぎますね……」

ゼロワン「シャイニング」「だろ? どう攻略しようかって……」

セイバー「ドラゴ」「……?」

ゼロワンが言葉を言い終わる間際、巨大化したまま静止していた漆黒のライオンが気になった俺は、チラッと視線を移すと……。そこには、口を半開きにして口内に闇の光を溜めるもう見た目からしてヤバい攻撃を放ってきそうな漆黒のライオンの姿があった。

ワイザード「ウオードラ」「とんでもない。……なんて、言えるレベルじゃないな……」

ゴースト「闘魂ブースト」「あんなの受けたら……ひとたまりもないですよ……！」

ドライブ「ワイルドフレア」「おい！次が来るぞ……！！！」

『ガルルオオオオオオオオ』

『ぐわあああああああ』

！！！！！！！！

漆黒のライオンは、今度は両前足で地面を叩き、衝撃波を発生させた。

俺達はその衝撃波を避けることが出来ず、吹き飛ばされて全員壁に叩きつけられた。

ゼロワン「シャイニング」「なんつー威力の衝撃波だよ……！！」

鎧武「ジンレモ」「何とか変身解除は避けられたのはまだよかったな……」

フォーゼ「マグネット」「けどこれ、どうにかしねーとこのままじゃ被害が拡大するぞ

！」

さっきのレーザービームといい衝撃波といい、漆黒のライオンの放つ攻撃は威力がばかっている。こんな威力の攻撃をバカスカ撃たれたら俺達がどれだけ対処しようといずれ俺達に危害が及ぶ。

ウイザード「ウオードラ」「…まずはアイツを別の場所に移そうか」

そう言うと、ウイザードの身体から巨大な水の塊が分離。その影響でドラゴンスタイルは解除され、ウイザードはウオータースタイルに戻った。

一方、ウイザードから分離した水の塊は徐々に形を変えていき、水が弾けるとウイザードラゴンが現れた。

そしてウイザードは右手のリングをコネクトリングに変えてウイザードライバーにかざし、魔法陣の中からマジンウインガーを取り出してウイザードラゴンと合体させてそのまま漆黒のライオンに体当たりしてそのまま遠くに飛んで行った。

ワイザードラゴン 『グオオオオオオ!!!』

『コネクト、プリーズ』

ワイザード「ウォーター」「…それじゃあ皆！また後で！」

セイバー「ドラゴ」「あちよつ！ワイザード！」

ゴースト「闘魂ブースト」「行っちゃいましたね……」

鎧武「ジンレモ」「しようがねえ。とりあえず俺達も後追うぞ！」

ゼロワン「シャイニング」「よっしゃ！じゃあ急いで行こうぜ！」

そして俺達は空を飛んで行く為に空を飛べる者達がそれぞれフォームチェンジをしてワイザードの下に行こうとした時、侑達に呼び止められた。

セイバー「ドラゴ」「よしっ！それじゃあ行——」

侑「ちよつと待って！陽！」

セイバー「ドラゴ」「うおいッ!?どうした侑!?!」

侑の声に俺達が振り向くと、そこにはいつになく真剣な眼差しの同好会メンバーの皆の姿があつた。

侑「ねえ陽。…私達も行かせて!」

セイバー「ドラゴ」「なっ!? そんなの無理に決まつてるだろ!」

ゼロワン「マンモス」「そうですね! 危険な目に遭わせたくないですし!」
かすみ「それならもうすでに何回も遭つてるもん!」

オーズ「サゴーズ」「そこを突かれると弱いんだけども……」

エマ「お願いっ! 絃君! 私達も連れて行って!」

鎧武「スイカ」「つってもなあ……」

ドライブ「ワイルドフレア」「どうする? セイバー?」

実際、侑達の言いたいことはわかるし……俺達自身、侑達が傍にいてくれればどれほど心強いことか……!

「だけど、流石に今回は洒落にならないッ……。侑達を守りながらあんな奴と戦うのは正直厳しい……。」

「だからごめん侑……皆……。」

セイバー「ドラゴ」「……やっぱりダメだ。」

侑「なんでよッ！」

セイバー「ドラゴ」「……足手纏いなんだよッッッ!!! 侑達がついてきたら余計な手間が増えて勝てる戦いも勝てなくなるッ! だから大人しくここで待つてくれッ!!!」

ビルド「ホーガト」「ちよっ、何もそこまで……。」

セイバー「ドラゴ」「いいから……行こうッ！」

こうして俺達は、侑達を置いてウイザードのもとへと向かった。

—— 侑視点 ——

ほんつと……陽つて嘘が下手つていうか何て言うか……。

果林「嘘が下手ね、あの子。」

彼方「だね。」

エマ「私でも嘘つてわかつちやつたよ！」

璃奈「かすみちゃんだつてもう少し上手く言う。」

しずく「かすみさんと同じ……ちよつとかすみさんの方が上くらいだよね！」

かすみ「ちよつ！何なのそのかすみんいじり!?ていうかかすみん嘘なんて吐いたことないし！」

せつ菜「陽哉さんはああ言つてましたが……どうしますか？侑さん？」

侑「……ま、あそこまで言われたらしょうがない！ここで帰つてくるのを待つとどうか！」

と、私達が言つてると・・・急に愛ちゃんが大きな声を出した。

愛「……あつ!!!」

侑「うわっ!?びっくりした……。どうしたの愛ちゃん?」

愛「いや、てんてんがパワーダイザーをらいらいの飛行船みたいのに乗せて持つて行ったから何でかなーって思っただけだよ?そういえば……って……」

そう言いながら愛ちゃんはアストロスイッチカバンを開いてワイヤレスで自立行動モードのバガミールと繋ぐ。

すると、バガミールのカメラアイから空中に何かの映像がホログラフ投影された。

かすみ「うぎやあつ!?急に何か出ましたよっ!?!」

璃奈「…これ、ホログラフ映像?」

愛「おー!やっぱりそういうことかー!」

エマ「愛ちゃん、これって？」

愛「ああこれ？これはパワーダイザーの搭載カメラから映像がアストロスイツチカバンに送られてくるからそれを皆が観やすい様にバガミールに繋いで投影してるんだ！」

しずく「なるほど……」

彼方「未来的〜！」

侑「これで…陽達の戦いが観られるんだね！」

愛「そ！」

本当は近くで見守りたい……。けど、それじゃ私達の為を思って嫌われ役っぽいこととした陽に悪いもんね。

だから私は……。私達は、ここで見守ってるからね！……。あ、でも、心はいつでも一緒だから！

侑達と別れた後、俺達はワイザードが戦っている山に到着した。
そしてそこは………怪獣大戦争会場と化していた。

ゼロワン「マンモス」「うわすっげ……」

ビルド「ホーガト」「怪獣大戦争じゃん……」

セイバー「ドラゴ」「あ、それ俺も思った」

鎧武「スイカ」「うおー！見ろよフォーゼ！すげえぞおい！」

フォーゼ「マグネット」「テンション上がるなあ鎧武！大怪獣バトルキター！」

ドライブ「ワイルドフレア」「おいお前らー！はしやぎ過ぎて落ちるなよー！」

オーズ「サゴーズ」「まあ、気持ちはわかるけどね。」

ゴースト「闘魂ブースト」「皆さーん！そろそろ準備しましょうよー！」

そして俺達は怪獣大戦争中のワイザードに加勢した。

ゼロワン「マンモス」「うおおお……!! 必殺スイカシュー……!!」
鎧武「スイカ」「おまつちよっ! 今大玉モードじゃなっ……ぐぎやああああ!!」
『大玉モード!』

丁度鎧武の後ろを飛んでいたゼロワンはそのままジェットフォームから人型に変形させ、スイカアームズヨロイモードの背中を思いつ切り蹴った。

いきなりのことで焦った鎧武だったが、何とか大玉モードにチェンジしてとんでもないスピードと大回転のまま漆黒のライオンに突っ込んでいった。

ドライブ「ワイルドフレア」「うわすげー回転……」

オーズ「サゴーズ」「僕なら絶対目が回るね」

ゴースト「闘魂ブースト」「オーズさん……それは皆そうだと思いますよ……」

フォーゼ「マグネット」「おーい! ウィザード! あぶねえぞお!」

ウイザード「ウオーター」「…ん？うわあああああああああ
!!!!!!」

とんでもスピードで向かって来る鎧武のスイカアームズに驚きながらもウイザードは何とかウイザードラゴンと共にギリギリで避けることが出来た。

ただ、ウイザードラゴンで視界を塞がれていた漆黒のライオンは避けることが出来ず、顔面に食らってその巨体を後方の地面に叩きつけられた。

ウイザード「ウオーター」「あ、あぶな……」

鎧武「スイカ」「うおお…。目が回るう……」

フォーゼ「マグネット」「よっしやー！モンスターハンターだー！！！！」

ドライブ「ワイルドフレア」「準備はいいか！行くぞ！」

ゼロワン「マンモス」「よしっ！せつかくだしこれで行くかつ！」

『ハイパージャンプ！』

『オーバーライズ！』

『プログラーイズ！』

『Warning, warning. This is not a test!』

『ハイブリットライズ!』

『No chance of surviving this shot.』

ブレイキングマンモスから降りたゼロワンは銀色のグリップを取り出して、それをシャイニングホッパープログラムライズキーに装着し、それをゼロワンドライバーに読み込ませる。

すると、ゼロワンの頭上にバツタのライダーモデルが浮遊する状態で現れ、そこから展開し人型の外骨格に変形してからゼロワンに覆い被さり、ゼロワンは派生フォーム……シャイニングアサルトホッパーに変身した。

ゼロワン「シャイニングアサルトホッパー（以降、S・A・H）」「おらあつ! シャインシステムウウ……起動!」

シャインニングアサルトホップパーに変身したゼロワンは、シャインクリスタという青いエネルギー波動弾を展開し、それをちょうど起き上がった漆黒のライオンにビームを照射した。

セイバー「ドラゴ」「何か…あんま効いてないっぽい？」

ゼロワン「S・A・H」「おいマジか……」

オーズ「サゴーズ」「とりあえず大技出せる人が一斉に撃ってみるっていうのはどう？」

鎧武「パイン」「それで行ってみるか。」

ドライブ「ワイルドフレア」「それじゃああんまり大技出せない組は攪乱でもするか。」

セイバー「ドラゴ」「よし、それで行こう！」

こうして俺達はゼロワン・俺・ドライブ・ビルド・オーズの攪乱組とフォーゼ・ウィザード・ゴースト・鎧武の大技出せる組に別れて攻撃することにした。

ゼロワン「S・A・H」「行くぞー！」

ドライブ「ワイルドフレア」「じゃあちよつと元に戻してつと……」

ベルトさん『ド、ラーイブ！ターイブ・スピード！』

ドライブ「更に…来い！ミッドナイトシャドー！」

ベルトさん『ターイヤ、コウカーン！ミッドナナイト、シャドー！』

セイバー「ドラゴ」「じゃあ俺とビルドは空から攻めよう！」

ビルド「ホーガト」「おっけー！…あ、でもその前に……」

『タンクー！』

ビルド「ホーガト」「ビルドアップ！」

そして俺とビルドは空に飛び、俺はブレイブドラゴンに指示して火球を放ち、ビルドは空からホークガトリンガーとドリルクラッシュヤーの二挺拳銃で高速に飛行しながら弾幕を張って行く。

セイバー「ドラゴン」「いけ！ブレイブドラゴン！」

ブレイブドラゴン「グオオ……ガアツ！」

ビルド「ホータン」「はああああ！」

オーズ「サゴーズ」「2人が空からしてくれてるし、僕達は地上からヘイトを集めよう！」

ゼロワン「S・A・H」「おう！」

ドライブ「シャドー」「よっしや！行くぞ！」

そしてオーズ達は地上で攻撃を開始。このまま大技出せる組に意識が向かない様に注意していく！

——太陽視点——

セイバー達が注意を引いている内に俺達は大技を放つ準備をしていた。

ウイザード「ウォーター」「さて、皆！セイバー達がヘイトを集めてくれてる内に準備しようか」

鎧武「パイン」「おう！」

フォーゼ「マグネット」「どう攻めんだ？」

ゴースト「闘魂ブースト」「僕の大目玉をウイザードさんがストライクエンドでシユートして、鎧武さんの巨大化させたパインアイアンをフォーゼさんがリミットブレイクで押し出すっていうのがベターな気がします。」

ウイザード「ウォーター」「うん、それで行こう」

鎧武「パイン」「んじや、準備するか！」

フォーゼ「マグネット」「おう！」

そして俺とゴースト・鎧武とフォーゼの2人組に分かれて少し距離を置いてから必殺技を発動させた。

『闘魂ダイカイガン！ブースト！オオメダマ！』

『チヨーイイネ！キックストライク！！サイコーー！！』

『パインスカツシユー！』

『リミットブレイク』

ゴースト「闘魂ブースト」「ウイザードさんツツツ！！」

ウイザード「ウオーター」「おっけー！行くぞドラゴンツツ！！」

鎧武「パイン」「準備はいいかフォーゼ！！行くぜツツ！！」

フォーゼ「マグネット」「いつでも来いッ！！」

「「「はあああああああ！！！！！！」」」

そしてゴーストが出現させた巨大な眼魂型のエネルギー玉を俺が水流を纏ったストライクエンドで蹴り、眼魂型のエネルギー玉に激しい水流を纏わせ漆黒のライオンに放ち、鎧武の巨大化させたパインアイアンをフォーゼがU字に合体させたキャノンによるビームで飛ばす。

『グツ、グルオオオオオオオ………！！！！』

俺達の合体技は見事に漆黒のライオンに命中し、その巨体を覆う程の爆煙が舞う。ちなみにセイバー達は俺達が攻撃を放った直後にその場を離れて為に巻き込まれることは無かったが、爆煙の勢いが凄すぎて少し押し出されて俺達の所にズザーツという風に転がって来た。

ゼロワン「S・A・H」「し、死ぬかと思ったツ!!!」

ドライブ「シヤドー」「深入りしてたらヤバかったなあ!」

オーズ「サゴーズ」「ほんとだね……」

セイバー「ドラゴ」「流石にあの威力の直撃は効いただろ……」

ビルド「ホータン」「そう信じたいな……」

セイバー達が思い思いに安堵の声を漏らしたのとほぼ同じくらいのタイミングで、爆煙の中がキラツと光った。

ウイザード「ウオーター」「皆ツツ!!!まだ終わってないぞツツツ!!!」

ゼロワン「S・A・H」「やべえツツ!!!シャインシテムツツツ!!!」

ドライブ「シャドー」「ベルトさんツツ!オールタイヤアタックだツツツ!!!」

ベルトさん『OK!オールタイヤアタックツツ!!!』

『ドラゴニック必殺斬り!』

セイバー「ドラゴ」「くそツ!…:神火龍破斬ツツツ!!!」

ウイザード「ウオーター」「もうあんまり魔力が残ってないっていうのにツツ…:!!!」

『デイフェンド!デイフェンド!デイフェンド!デイフェンド!…:…:…:』

フォーゼ「マグネット」「お、れ、もおおおおお!!!」

『リミットブレイク』

『スキヤニングチャージ!』

オーズ「サゴーズ」「はああ…:はあツ!!!」

『パインスカッシュュ!』

鎧武「パイン」「もういつ……ちよおおおおツツツ!!!」

『カイガン!オレ!レッツゴ!覚悟!ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!』

ゴースト「僕も……限界までツツツ!!!」

『ダイカイガン!オレ!オオメダマ!』

『ゴリラ!ダイヤモンド!ベストマッチ!』

ビルド「ホータン」「ビルドアップ!」

『輝きのデストロイヤー!ゴリラモンド!イエーイ……!』

『ReadyGO!』

ビルド「ゴリモン」「はあッ!!!」

絶大威力の黒い光……というか漆黒のビームを何とか防ぐ為に俺達は残る全ての力を振り絞って全力の技を絶大威力の漆黒のビームにぶつけた。

しばらく押し押されの拮抗が続き……俺達の限界に近づいたところで、何とか相殺することが出来た。

だが、その際に爆風が辺り一面を襲い、俺達全員その爆風に吹き飛ばされ……意識を

失った……………

——しづく視点——

私達は愛さんが観せてくれている戦いの映像を見守っていた私達でしたが、その映像が凄まじい技のぶつかり合いの直後に観えなくなってしまうました。

かすみ「えっ、なっ、何が起こったんですかっ!？」

彼方「愛ちやくん！早く観せて〜！」

愛「痛い痛い！カナちゃん痛いー！」

エマ「心配だよ〜果林ちやくん……………」

果林「…そうね、本当なら私達もあそこに行けたらいいんだけど……………」

璃奈「……………龍兎君……………」

侑「璃奈ちゃん、きつと大丈夫だよ……！陽達がそう簡単に敗けるはずない！」
せつ菜「そう……ですね……信じましょう……太陽君達を……！」

お兄様……何か……私にも何か出来ないのでしょうか？助けて……力になりたい……！

お願いします神様……どうか、どうかお兄様達に力を！私はどうなっても構いませんからツツツ
!!!!

「はっ、…自己犠牲なんてアイツが望むとは思えねえなあ。」

しずく「……………！」

今の声……………一体何処から!?

かすみ「…ちよ、しずく子お!？」

しずく「……………！ かすみさん? どうしたの?」

かすみ「どうしたのじゃなくて! それ!」

しずく「…それ……………?」

突然聞こえたかすみさんの声に我に返った私が見ると……いつの間にか私の目の前に赤く光る3つのコアメダルが宙に浮いていました。

しずく「……これは……」

「どうやら繋がったみたいだなあ。なら時間も無いから早速来てもらうぞ。」

しずく「……!」

謎の声がまた耳に響くと同時に私の意識が一瞬薄れ、次に意識がはつきりした時には真つ白な空間にいました。

しずく「……ここは……!? かすみさん達は!」

「……………ここはお前の精神世界だ。」

しずく「ツ！ あ、貴方は……………？」

私が真つ白な空間？に戸惑っていると、先程聞こえた声が聞こえて振り返るとそこには右腕が異形の物となった如何にもヤンキーな風貌をした金髪の男性の方がこちらを睨む様に立っていました。

「俺のことはあのバカにでも聞け。」

しずく「あのバカって……………？」

「いいから俺の話を聞けッ！」

しずく「ひっ……………い、嫌ですっ！せめて名乗って貰わなければ！知らない人の話は聞くなと教わってますし！」

「……………！ 映司の奴……………余計なこと教えやがって。……………アंकだ！これでいいか！」

しずく「は……………はい……………」

アंक「……………よし！それじゃあ早速だがなあ……………お前の力を貸せ。」

しずく「……………へ？」

な、何を言ってるんですかこの人……。力……。？一体なんのことでしょう……………？

しずく「あの……。力って何のことですか……。？？」

アंक「あ？時期にわかる。それよりとつとつと手を出せ。」

しずく「手……手え……？」

アंक「時間がねえ。アイツもかなり危ない状態だからなあ。」

しずく「アイツって……。まさか、お兄様ですかッ!?お兄様と知り合いなのですかッ!？」

アंक「あーくそっ！うるせえ！とつとつと手を貸せ!!!」

しずく「ちよ、ちよつと……………!」

アंकと名乗った目の前の男性は、私の手を取ると強引に身を寄せてきた。

アंक 「いいか！お前はただアイツのことを強く想えばいい！後はこつちでやる！」
しずく 「どうして……貴方の言うことを聞かなければいけないのですか……！」

アंक 「…あ？お前はアイツが死んでもいいのか？」

しずく 「えっ…それは一体どういうことですかッ!？」

アंक 「ギヤーギヤーうるさいやつだなあ。お前が力を貸さなければあのバカは死ぬし、お前が力を貸せばアイツは無事……かもしれないってことだ」

しずく 「かも……？」

アंक 「それはアイツ次第ってことだ。」

しずく 「お兄様……次第……」

アंक 「…で？どうする？」

この人のことは完全には信用できませんが、もし……この人の言う様に私がお兄様の力になれるなら……！

しずく「もし……本当に私がお兄様の助けになるのなら……やります！」

アंक「……はっ！最初からそう言え！」

しずく「貴方のことは信用出来ませんが。」

アंक「ああんツ！」

私の言葉にドスの効いた声で突っかかってきましたが、それをスルーして私は男性……アंकさんの手を握る。

しずく「……それで、どうすればいいんですか？」

アंक「……ちっ。お前……比奈に似てんなあ。……まあいいか。強く念じろ。今お前が助けたい奴を。力になりたい奴のことを。」

しずく「力になりたい……人……」

そこで私は……目を閉じてお兄様を頭に思い浮かべた……。

すると……私の手が温かくなっていくのを感じた。見てみると……私とアंकさんの手が赤と水色に光っていました。

見てみると、アंकさんはいつの間にか先程私の目の前に浮いてた3つのメダルが握られていて、そのメダルが光り輝いていました。

しずく「これは……先程の……」

アंक「これでいい。後は任せろ。」

しずく「あ、あのっ……!」

アंक「あん?」

あいずく「お兄様を……お兄様をお願いします!」

私の言葉にこの場から去ろうとしたアंकさんが立ち止まって少しだけ顔をこちらにむけると、先程までの仏頂面とは違い……少し口角を上げて素っ気ないながらも穏やかな口調で反応してくれました。

アंक「……ああ。」

それを最後に、私の意識はまた現実世界へと戻って行きました。そして、見てみるとかすみさんが大粒の涙を流して私に抱き着いていました。

しずく「………はっ！ここは………現実世界？」

かすみ「あ！しず子！やっど起きだあ！」

しずく「か……かすみさん？どうして泣いてるの？」

璃奈「しずくちゃん……覚えてないの？」

しずく「え……？」

侑「しずくちゃんの前にメダルが浮いたと思ったら急にしずくちゃん倒れるんだもん！びつくりしちゃったよ！」

愛「そんでしずくが起きるちよつと前に浮いてたメダルがてんでん達の方に飛んでっただよ！」

エマ「体調は大丈夫？」

彼方「具合が悪かったら休んでいいからね？」

果林「そうよ……無理はいけないわ。」

しずく「皆さん、ありがとうございます。けど、大丈夫です！それより……」

せつ菜「……それより？」

しずく「いえ……」

私はメダルが飛んで行った方向を見つめる。

アंकさん……後はお願いします！

—— 碧映視点 ——

漆黒のライオンとの戦いの最中……気を失っていた僕達だけど、カザリの方もダメー
ジが大きかったらしく、漆黒のライオン形態が解除されイーラの姿に戻り、身体中から
血を流し肩から息をしている感じに見える。

イーラ「……ぐッ……！」

陽哉「これだけやってライオン形態は解除出来てもまだ変身したままなのか……！」

天弥「くそっ……！もう変身出来るほど力残ってねえ……！」

走介「どうする……？」

龍兎「どうするって言われてもな……対抗策がもうっ……！」

どうしよう……このままカザリが動ける様になれば確実に僕達は終わる……。そう
なればこの世界は……いや、それどころかしずくたちが……！」

それだけは絶対あっちゃいけない……！何としてでもあの子達を守らないと……！

僕がそう思っていると、何処からか声が聞こえた……

とてもとても懐かしい……相棒の声が……

アंक「たくつ。いつまでも世話の焼ける奴だなあ……お前は！」

碧映「……ッ……ッ……！」

その声に振り返ると、そこには赤と水色の2色の光に包まれた3枚のメダルが浮いていた。

……しかもその内の1つは……ヒビが入っている。

碧映「これって……」

紘輝「おい……そのメダルって確か……」

太陽「アंकのコアメダル……だったっけ……?」

碧映「う……うん……」

雷羽「これ……掴めばいいのか?」

勇真「もしそうならオーズさんが掴んだ方がいいですね」

そして僕がそつとそのメダルを掴むと……僕の意識は途切れた。

碧映「……えつと……ここは……?」

アंक「……よお。」

碧映「……ッ……! アン……ク……!」

アंक「顔は変わっても相変わらずお人よしそうな顔してんなあ」

碧映「う、うるさいな……。ていうかここつて……」

アंक「ああ、ここはお前の精神世界。……で、俺がここに来た理由……わかってんな？」

碧映「ま、まあ……。何となく。タジャドルコンボを使えつてことですよ？」

アंक「それだけじゃ今の力ザリには勝てねえなあ。アイツに勝つにはそれよりもつと強力な……。メダルに残した俺の力を使う必要がある。」

メダルに残した……。アंकの力……？

碧映「そんな力……。あつたの……？」

アंक「まあなあ。だが俺だけじゃ力を開放出来なくてなあ。お前とあの女の力が必要だった。」

あの女……。？しずくのことかな……。？

碧映「俺としずくの力が必要だったってことは……鍵のこと？」

アंक「ああ。女の方は貰ってきた。後はお前だけだ。」

碧映「後はお前だけって……どうすればいいんだよ？」

アंक「あ？お前はただ浮かんでるメダルを掴んで変身すればいい。」

碧映「え、それだけでいいの？何かこう……力を注ぐみたいなのは無いの？」

アंक「それはあの女がやった。どうせこの力を使うのはお前だ。今ここで力を込めるまでもないなあ。」

碧映「そ、そっか……」

アंक「……わかってんだろうな映司い！この力は今までのタジャドルみたな俺の力の一部を使う訳じゃねえ！完全な俺の力だ！俺の力を使ってカザリに敗けてみる……ただじゃおかないからなあ！」

碧映「わ、わかつてるよ……。それと、今の俺の名前は映司じゃなくて碧映だから！アंक「知るか！いいからとつとカザリの野郎を倒してこい！」

碧映「わかつたって！まったく……そっちこそ相変わらずじゃないか……」

本当に相変わらずだなあコイツは……。でも、やっぱり安心する。

ねえアंक……もう一度……もう一度……お前とこうして話せる時が来るのかな？
もしお前がこつちの世界で蘇ったら……しずくのこと、ちゃんと紹介させてよ……

碧映「……ねえ、アंक……また、会えるよな！」

僕のその言葉に……アंकはいつもの調子で返すけど……その口元は……少しだけ
緩んでいた。

アंक「はっ……さあなあ！」

そう言うと、アंकの姿とこの空間が霞がかっていく。

ああ……現実世界に戻るんだ……。

アंक……また必ず……会おう！絶対……絶対に諦めたりはしないから！

碧映「……………はっ！……………」

陽哉「オーズ、大丈夫か？」

碧映「え？……あ、ああ……うん。ちよつとき……懐かしい奴に会って……」

太陽「懐かしい奴……？」

碧映「うん……。……さて！早くしないとアイツにどやされちゃうし！とつとつやり
ますか！」

雷羽「やるって……何か策があるのか!？」

碧映「まあ見えて！」

そう言うと、僕は迷い無く宙に浮くメダルへ手を伸ばし……3つのメダルを手にする

と、その3つのメダルを見つめて一気にオーズドライバーに装填する。

碧映「アंक……しづく……行くよッ!!! 変身ッッ!!!」

アंक『タカッ!』

しづく『クジャクッ!』

碧映『コンドルッ!』

『タージャードル〜〜!』

アーク「TCLBV(タジャードルコンボロストブレイズバージョン)」……はあッッッ
!!!」

アंकと僕としづくの力がこもったメダルをオーズキャナーでスキャンすると、僕達3人の声が鳴り響き、僕の背中に巨大な6枚の翼が出現し、僕の身体を包み……再び翼

が開かれると、右腕がアंकの腕に、右側の額に黄色のメッシュ、左側に水色のメッシュが入った普段のタジャドルコンボより、より一層生物身を帯びた真紅のオーズへと変身を遂げた。

……これがアंकの残してくれた二度と使うことの出来ない最後の力。その名も……

“仮面ライダーオーズタジャドルコンボロストブレイズバージョン”

紘輝 「す、すげえ……」

龍兎 「いつものタジャドルコンボと……違う……」

走介 「何か……凄い力を感じるな……」

天弥 「うおー！行っけー！オーズ！」

勇真 「何だか……あの姿からはオーズさんの他に2つの力を感じます……！」

オーズ「TCLBV」 「見ててアंक……しずく……！ 2人から託されたこの力で、絶対に勝ってみせるから!!!」

そして僕は、6枚の翼を広げて飛翔し、カザリの元まで飛んで行った。

オーズ「TCLBV」 「カザリッ！」

イーラ「……ッ……！ 何だいその姿……。それじゃあまるでアイツじゃないか……！」

オーズ「TCLBV」 「決着を付けようカザリ。僕達の因縁に！」

イーラ「死してなお……！ 僕の邪魔をし続けるのか……アアアアア
クウウウウウウツツツツツツツツツ
!!!!!!」

僕の姿を見たカザリは怒りのままに叫び、全身に黒い光を纏い、さつきの漆黒のライオンの頭部を模した光に包まれると、僕の方に向かってきた。

そして僕も、必殺技を発動させて真紅の炎を身に纏い、全身が赤く、羽根の先端が黄

色く、目元から水色のラインが身体に伸びた6枚の翼を持った巨大な紅蓮の鳥になってカザリの方に突っ込んでいく。

オーズ「TCLBV」「はあああああああッッッッッッ
!!!」

イーラ「あああああああッッッッ
!!!」

2つの絶大な技がぶつかりあい、辺り一面に巨大な波紋が流れる。

初めは拮抗していた互いの技。だけど、僕とカザリでは圧倒的に違うものがある。

それは、向こうはたった一人に対して、こっちはもつとも信頼している2人と力を合わせていること。

これは絶対に埋めることが出来ない違い。

そしてそれが、勝敗を決する決め手になる。僕は、僕の後ろに現れたアंकとしずくの幻影と共に一気に押し込んでいく!

オーズ「TCLBV」「あああああああああああああツツツツツツ
 アンク『はあああああああツツツツ!!!』
 しづく『やあああああああツツツツ!!!』
 イーラ「ぐつ…がつ…：…あああああああああツツツツ
 !?!?!?」

拮抗していた力は徐々に僕が勝って行き、遂にカザリを捕らえて岩壁に叩きつけた。
 カザリを岩壁に叩きつけた後、空中で技が解けたと同時にロストブレイズの力も解除
 され、元のタジヤドルの姿に戻り、ホバリングしたまま土煙が舞う岩壁を見る。
 そこから1分くらい経ったかな？土煙が徐々に晴れて行き、中の様子が分かる様
 になってきた。

カザリ「ぐつ…がはつ…：ごほつ…：…！」

岩壁の中にいたカザリは身体中から血を垂れ流し、変身も解除されていた。……というか、カザリの腰から憤怒ドライバーが無くなっていた。

多分、さっきの攻撃で破壊されたのかな……？

カザリ「僕は……まだ、ここで終わるわけにはいかないっ……！」

そう言うと、カザリはこの場から逃走を図ろうとした。

そしてそれを見た僕は……静かにオースキャナーをオーズドライバーに滑らせる。

オーズ「タジャドル」「逃がす訳にはいかない。アイツと約束したしね……。それに、言っただよカザリ………」

『スキヤニングチャージ！』

オーズ「タジャドル」「決着を付けるって!!!」

カザリ「ッ……いい、嫌だ！僕はこんなところで終わる器じゃない！今度こそ……僕

はッ……!!」

オーズ「タジヤドル」「はああああ………ていやあああああッッッッ
カザリ「あッ…があああああッッッ!!!!」

展開したコンドルレッグで急降下し、カザリの身体を貫いた。そしてカザリは、身体が爆散し、完全消滅した。

オーズ「タジヤドル」「はあ…はあ…。約束は果たしたよ………アंक………」

そして、全ての気力を使い果たした僕は、体力の限界を迎えてそのまま倒れた。

—— Not anyone 視点 ——

仮面ライダー達とカザリの戦いを少し離れた位置で見っていた仮面ライダーグラトニーこと速水公平。

その手には、先程までカザリの腰に装着されていた憤怒ドライバーが握られていた。そして、そんな彼は自身の主である暗輝颯馬へと電話をかけていた。

グラトニー「……ええ。無事、憤怒ドライバーの回収しました。……はい、これより帰還します。」

報告を終えた彼は電話を切ってこの場を去ろうとする。

……が、その前に消滅したカザリに視線を移して一言だけ呟いた。

グラトニー「……ふん、所詮貴様は首輪に繋がれたペットだったな。」

それだけ眩き、自身が形成した闇の中へ消えて行つた。

——陽哉視点——

カザリとの戦いの後、力を使い果たして倒れたオーズを運んでニジガクに戻つて来た俺達は、保健室でオーズをしずくちゃんに任せて同好会の部室で一息ついていた。

走介「それにしても、今回は過去一ギリギリだったな。」

太陽「確かに。正直オーズがあそこで特別なタジャドルになつてなかつたら今頃全滅してたかも……」

侑「映像で見てたけど、本当にハラハラしたよ……」

陽哉「悪い侑。まさかカザリがあんな強大な力を手にしてたとは……」

龍兎「失念してたな。他の連中もあんな感じだと考えて気を引き締めないとな……」

紘輝「だな！そんでとつとこの戦いを終わらせねえとな！」

彼方「でも。今はとりあえずゆっくりしよ？」

果林「それもそうね。根を詰めすぎちゃ、いいパフォーマンスが出来ないわ。」

俺達が各々今日のことやこの先について話している中、少し離れたところにいたゼロワンが焦った様子で大声を張り上げた。

ゼロワンが観ているのは……スマホのメッセージアプリだった。誰かと話してるのか……？

雷羽「なつ、マジかつ!!!」

かすみ「うわつ、びっくりした!?どうしたの雷羽!」

雷羽「……いや、今知り合いから連絡が来たんだけど……。なあ璃奈?そのパソコ

ンってテレビ機能あつたっけ？」

璃奈「……？あるよ？」

雷羽「ならちよつと付けてくれ！」

璃奈「う、うん……」

そう言ってゼロワンは璃奈ちゃんにお願いしてパソコンのテレビ機能を起動してもらっていた。

俺達是不思議そうにパソコンの周りに集まると、すでに起動したテレビ画面からはあるニュースが読み上げられていた。

『速報です。本日正午、日本の2柱であるオハラグループの株が暗輝コーポレーションによつて全て買収され、新たに暗輝コーポレーション社長、暗輝颯馬氏がオハラグループの会長になることが株主総会で決定しました。』

エマ「オハラグループって確か……」

せつ菜「ええ。現在、日本を代表する大企業です。雷羽さんの会社の飛瀬グループとは肩を並べるご関係だったかと」

走介「確か西の小原、東の飛瀬……だったっけ？」

彼方「そんな凄い会社を買収したってこと？それって凄くない？」

果林「暗輝コーポレーションって言ったら最近凄く名前を聞くわよね？」

勇真「うん。なんでも、社長さんが凄いとか……」

璃奈「暗輝コーポレーション社長の暗輝颯馬さんは会社経営の他に、地域ボランティアにも積極的に参加してるらしい。」

龍兎「しかも自分の会社の社員以外にも傘下の会社の社員……ボランティアで関わった地域の人達やその他色んな人にも凄い人柄良く接してるらしいな」

絃輝「まさに非の打ちどころがねえってやつか……」

ニュースを観ながら俺達は何処か他人事の様にする。そんな中、ゼロワンだけが絶句しながら自身のスマホの画面に目を落としながらぼつりと呟いた。

雷羽「……鞠莉姉え……」

陽哉「ゼロワン…オハラグループの社長さんと知り合いなのか？」

雷羽「え？ああ……まあな。小さい頃からの知り合いでさ。……俺にとっては姉みたいな存在の人なんだ……」

侑「そうなんだ……。じゃあキツイよね、このニュース。切ろうか？」

雷羽「いえ、大丈夫です…。」

そこからゼロワンは少し悲しむ様に、懐かしむ様に話し始めた。

雷羽「オハラグループはさ……家みたいに社員を第一に考える会社でさ。鞠莉姉えのお爺
さんの代から続いでるんだ。」

龍兎「そんな会社なら社員との絆も固かったんじゃないのか？」

雷羽「お爺さんもおじさんも……経営者としてはとても高い能力を持ってた。もちろん経営不振になんてなるはずが無い程に……。」

彼方「なら、その鞠莉さんって人は違ったの〜？」

走介「おい彼方！」

雷羽「いいよドライブ。……経営者には、2つのタイプがあるんだ。」

せつ菜「2つのタイプ……？」

雷羽「1つは経営者としての器がすでに出来てる先天的なタイプともう1つは周りの人間と力を合わせて徐々に経営者としての器を完成させていく後天的なタイプ。俺の親父や鞠莉姉えのお父さんとお爺さんは前者。鞠莉姉えは後者。」

愛「じゃあ、オハラグループを買収した暗輝颯馬って人は……」

雷羽「多分……いや、確実に前者のタイプです。だからこそ暗輝颯馬は気付いていた……鞠莉姉えが後者のタイプであることを。そして……このタイミンが狙い目だということ。」

侑「このタイミンが狙い目って……買収するのを狙ってたってこと？」

雷羽「多分ですけどね。後天的なタイプは先天的なタイプよりも人と人との絆がより強固になりやすい。だからこそ、器が完成すれば誰も手が出せない程の強力な器になるし、今回の様に多数決で敗けることなんてあり得ない。外部の社長からしたらとても厄介な才能なんです。……けど、鞠莉姉えの経営者としての器が完成する前に、手を打たれてしまった……」

陽哉 「じゃあ……その鞠莉さんは打つ手なしってことなのか……？」

雷羽 「ああ……」

まさか、ゼロワンの知り合いがそんなことになるなんて……。どうも、最近周りで色々なことが動き始めている気がする……。歩夢のことも気がかりだし……

歩夢………

第36話

——Not anyone 視点——

それは、桜坂碧映達がカザリと戦っている最中のこと……。

別の場所では、オハラグループの株が買収され、その買収した相手……暗輝コーポレーション社長である暗輝颯馬と付き人としてメディックがオハラグループを訪れ、オハラグループの幹部数名と現オハラグループ社長である小原鞠莉を交えて株主総会が行われ、今……その結果が決まってしまったところだった。

「では、反対ゼロ賛成多数により……現オハラグループの社長である小原鞠莉様の解任が決定し、暗輝颯馬様を新たなオハラグループ社長として就任することを決定します。」

司会の男性の声がシン……とした会議室に響く。

この会議室はかなり広く、真ん中にO型の大きいテーブルがあり、左右に10名の幹部役員。前方に暗輝颯馬……更に、後方の出入り口を背にして綺麗なブロンドの金髪を腰まで伸ばし左頭部の髪を6の形に結び、頭頂部に三つ編みカチューシャを作っているとてつもない程の美人……現オハラグループ社長、小原鞠莉が暗輝颯馬の対面に座っていた。

そして司会の男性の言葉通り、暗輝颯馬と小原鞠莉を除いたオハラ幹部達が全員手を上げ、暗輝颯馬を新たな社長とすることを賛成していた。

この結果に、暗輝颯馬は涼しい顔をし、逆に小原鞠莉は悔しそうに唇を噛み、目の前に座る暗輝颯馬のことを睨みつけていた。

そして、結果が出たことでこの会議は終了し、司会の男性と幹部役員達は会議室から退出し、この場に残されたのは暗輝颯馬とメイク……そして、小原鞠莉の3人だけである。

鞠莉「貴方は……何の為にオハラグループを買収したの？」

暗輝「何の為……？」

鞠莉「そうよ。だって……貴方の暗輝コーポレーションとウチとでは業種……というか戦略法が違うわ。どちらかと言えば飛瀬グループの方が貴方と似てるじゃない。」

暗輝「そうだねえ……確かに飛瀬グループも狙っていたけど。まあ簡単にライバルを取り込んでしまうのも面白味にかけるからね。今は保留かな。（まあ別の理由もあるけど）……それと、君の会社を買収した理由だけ……必要だったんだよね。オハラグループの力がさ。」

鞠莉「オハラ……？」

暗輝「そう。オハラは日本のシェアを半分も持つてるだけじゃなく海外にも絶大な勢力を持っている。……例えば違う戦略法を使っている会社であろうとも、そんな戦力は欲しいでしょ？ 経営者としては。」

鞠莉「……これほど多くの企業を傘下に加えて……貴方は、何をしようとしているの？」

鞠莉のその問いかけに、暗輝颯馬はその問いに答える前にメディックに視線を合わせる。

暗輝「その問いに答える前に……メディック、君は先に帰っておいてくれ。」

メディック「へ……え？何故ですか……？」

暗輝「今から彼女に大事な話をするからだよ。」

メディック「それなら私もっ……！」

暗輝颯馬「……メディック。」

メディック「……ッ……！」

退出してくれという暗輝颯馬の言葉に反対しようとしたメディックだったが、冷たく重たい声と共に覇気を静かに出した暗輝颯馬を前にメディックは萎縮し、素直に従った。

メディック「わかり……ました……」

メデイックはそう言うと、酷く怯えた表情で会議室を後にした。

そして、暗輝颯馬は鞠莉の方へ向き直り、穏やかな何処か余裕そうな表情を浮かべて先程の鞠莉の問いに答える。

暗輝「さて、私が何をしようとしているのか……だったね。」

鞠莉「え、ええ。」

暗輝「私はね……人間を含めたこの世界に生きとし生ける全ての生物を幸せにしたいんだ。」

鞠莉「……え？」

もつと何か良からぬことなのかと考えていた鞠莉は、暗輝颯馬の予想外の言葉に一瞬戸惑った。

鞠莉「全ての生物を幸せにとって……どうということ？」

暗輝「そのままの意味だよ。この世に蔓延る悪意から皆を救いたい。悪意無い幸福の世界を創りたい……ただそれだけ。」

鞠莉「全ての人を救いたい幸せにしたいって……そんなこと出来ると思ってるの？ 出来るとしたらどうやって？」

暗輝「その方法を教えることは出来ない。……けど、やってみせる。いや、私なら出来る。」

鞠莉「随分と傲慢なことを言うのね……貴方は……神にでもなろうとしてるのかしら？」

暗輝「神？ そんな物に興味は無いけど……まあそうだね、私のやろうとしていることを端的に言うならそうなるかな。」

そして、次の暗輝颯馬の言葉に、鞠莉はこれまで以上の怒りをみせる。

暗輝「まあ安心してよ。君を社長の座から降ろしたからと言って邪険に扱う気は無い。むしろ良い役職を与えよう。君も必ず幸せの世界へ連れて行こう……勿論、君がこ

の会社以上に大切に想っているお友達たちも……ね。」

鞠莉「なっ……！貴方……何処まで私のことを調べたのッ！」

暗輝「大体全てだよ。買取相手のことを知るのは当然でしょ？」

鞠莉「あの子達に手を出したら……許さないわよッ！」

暗輝「手を出すなんて人間きの悪いことを言うね。……まあいいけど。結局今の君にはもう何も出来ないし。」

鞠莉「……くっ。」

暗輝「それじゃあ……これからよろしくね？小原鞠莉君♪」

そう言うと、暗輝颯馬は会議室を後にした。

一人残された鞠莉はただ……悔しさに打ちひしがれ、この場にはいない……幼少期から知っている弟の様に可愛がってきた彼に自身の不甲斐なさを謝ることしか出来なかった。

鞠莉「ごめんなさい……雷羽……。約束を守れなくて……不甲斐ない私を許して

⋮
└

第37話 小原鞠莉と中須かすみ

——陽哉視点——

俺達がゼロワンからの言葉を聞いて一抹の不安を覚えていると、不意に部室の扉がノックされた。

侑「…? はい!」

??? 「Sorry!入ってもいいかしら?」

侑 「え、は、はい。どうぞ。」

突如扉の向こう側で聞こえた女性の声に戸惑いつつ、侑は声の主に部室に入ってもいいと了承する。

侑の声から一拍置いて扉が開かれると、綺麗な金髪を左サイドで6に結んだ整った綺麗な顔立ちをした100人中100人が美人と答える様な大人の女性が部室に入ってきた。

ていうか……あれ?……この人って何処かで見た様な……

雷羽「ま、鞠莉姉え!」

走介「ま、鞠莉姉えって今ニュースで観てた……!」

かすみ「な、なな、なんでここにいるんですかあ!」

鞠莉「久しぶりね……雷羽。」

そう、そこにいたのはたった今話題に出していた人物……オハラグループ前社長でゼロワンとは幼い頃からの知り合い……というか姉貴分の様な存在の小原鞠莉さんその人だった。

ただ、その表情は暗く、目元が赤く腫れていた。

雷羽「鞠莉姉え……………どうしてここに……………?」

鞠莉「一応挨拶にね……………。それと、貴方のFriendsを見てみたから……………かな。」

雷羽「そつか……………。あのさ鞠莉姉え……………」

鞠莉「No。言わなくていいわ雷羽……………。こんなことになったのは……………私の不甲斐なさの原因だから……………」

小原鞠莉さんの言葉に返す言葉が見つからないのか、ゼロワンは悲しそうに俯き唇を軽く噛んで押し黙る……………そして、小原鞠莉さんは今度は俺達の方に顔を向けて来た。

鞠莉「あなた達が雷羽のFriendsね?いつも雷羽と仲良くしてくれてありがとう。……………どう?この子、皆に迷惑かけてない?」

陽哉「あ、いや……………むしろいつも助かってます。」

鞠莉「そう、それならよかったわ。……ていうか、あなた達……傷だらけじゃない!?
何があつたの!？」

やばっ……何て言い訳しよう……。

陽哉「あ、えっと……これはその……」

太陽「実は俺達、ここに来る前に部活でちよつとやつちやつて……!」

ナイスウィザード!……いや、これ誤魔化せるか……?」

鞠莉「……そう。なかなかAggressiveな部活をしてるのね……」

い、いけたー！

鞠莉「でも……気を付けなきゃ駄目よ？」

太陽「はい……。ありがとうございます。」

俺達との会話を終えると、小原鞠莉さんは再びゼロワンの方への向く。

鞠莉「……もう！いつまでそんな顔してるの！」

雷羽「いや……。だって……」

鞠莉「言ったでしょ？こんな結果になったのは……私の不甲斐無さが原因だって。だから……雷羽は気にしなくていいのよ。」

そう言って小原鞠莉さんはゼロワンの頭を優しく撫でる。その2人の姿は本当の姉

弟の様だ……。

その後、鞠莉さんは場の雰囲気を変える為にスクールアイドルの話題を振ってきた。そこで知ったのは小原鞠莉さんが実は伝説のスクールアイドルAqoursのメンバーであったことだ。俺達仮面ライダー側は全員驚いたが、流石現役スクールアイドルとマネージャーの侑とニジガクの皆は知っていたみたいだ。

その話でさつきまで重かった空気が変わり、和気藹藹とした楽しい空気になった。ただ俺達は気付かなかった……いつの間にかかすみちゃんがいなくなっていたことに……

—— かすみ視点 ——

小原鞠莉さんが部室に来て……私は何だかその場にいたくなくて、1人学校の屋上に来ていた。

かすみ「……はあ。」

私……何してるんだろ……。折角伝説のスクールアイドルAqoursのメンバーだった小原鞠莉さんに会えたのに……

でも、まさか雷羽と知り合いでしかも姉弟みたいな関係だったなんて……知らなかった……

ううん、そこはいい。小原鞠莉さんと雷羽がどういう関係でも私には関係無い……はずなのに……何で？何でこんなにもモヤモヤするの……？

2人を見てると……ううん、私じゃない他の人と仲良くしてる雷羽を見ると……胸が苦しい。苦しいよお……！

かすみ「何なの……もう……！」

思い悩む私は……背後に迫る人影に気付かなかった!?

「えいつー!」

かすみ「ひゃふあっ!?／＼／＼／＼／／」

「ん〜!これは発展途上でありながらなかなかの柔らかさで可能性を感じマース!」

突然だ、誰かが私のおっぱい…じゃなくて胸を揉んできた!?

い、一体誰ですか!こんなことをするのは!果林先輩ですか!果林先輩ですよね!果林先輩しか考えられません!……でも果林先輩より手付きがみよーにいやらしいというか……?!

いや何言ってるんですか!かすみんは!?

かすみ「誰ですかー!!!かすみんの胸を揉むのはー!!!」

「Oh〜!めんなさいね、ついでな癖でやっちゃったわ!」

かすみ「て…お、お、小原鞠莉さん!?どうしてここに……!」

そう、そこにいたのはさつきまで部室で皆に囲まれていた小原鞠莉さんだった。ていうかこの人も果林さんと同じタイプだったなんて……

鞠莉「マリーで良いわ。……ちよつとアナタと話してみたくって……。アナタが中須かすみね？かすかすで良かったかしら？」

かすみ「むかつ！かすかすじゃありませんかすみんですー！ー！」

鞠莉「Oh！それは失礼。……じゃあかすみ、今ちよつといいかしら？」

かすみ「……そういえばかすみんと話したいって言っていましたね。」

鞠莉「……ええ。突然なんだけど……。アナタ、雷羽のことどう思ってるの？」
かすみ「ふえっ!?! // // // //」

な、何いい言い出すんですかこの人はっ!?! // // // //

鞠莉「マリーはね……好きよ？あの子のこと。」

かすみ「えっ……」

鞠莉「私と雷羽ね？小さい頃に約束してたのよ。お互いに親がやってる会社を継いで社長になったら……手を取り合って頑張ろうって。……けど、その約束は叶わなかった……。あの子はそれでも私を責めることはしなかった……昔っからそう、ここぞという時はいつも自分より他人を優先しちゃうし誰も責めない……。そんなところは昔から変わっていなくて嬉しさもあり心配で苦しくもある……。それでも私は雷羽のそういう真面目で優しいところが好き。この気持ちは誰よりも強いって信じてる。」

ああ……嫌だなあ……聞きたくないよ……この人と雷羽の……私の知らない雷羽の話聞くのは……

それに……この人の心を聞くのも……苦しい……

鞠莉「……けど、あの子の眼に……心に私はいない。」

かすみ「えっ……それってどういう……」

私は鞠莉さんの言葉が引つかかって聞き返した。だけど、鞠莉さんは一瞬答え様として、頭を振ってその言葉を？み込んだ。

鞠莉「それはっ………いいえ、やっぱり言うのはやめるわ。マリーから言うのは違うもの。」

かすみ「ええ〜!?なんなんですか〜!」

鞠莉「ふふっ…大丈夫♪あの子がヘタレじゃない限り………きっとわかる時が来るわ」
♪

ほ、本当になんなんですかこの人………

鞠莉「それで？話が逸れちゃったけどどうなの？雷羽のこと」

かすみ「そ、それは……正直、よくわかりません……」

鞠莉「う〜ん……それじゃあ雷羽がかすみ以外の女性と話してるのを見たらどう思う？もやつとしなかった？」

かすみ「そ、それは……」

鞠莉「嫉妬FIRE〜〜♪…してるんでしょ？」

かすみ「嫉妬って……そんな……」

鞠莉「隠そうとしても無駄よ？アナタの顔を見ればわかるわ……だって同じ人を好きになっただから……」

かすみ「へ？最後なんて言っただんですか？」

鞠莉「いいえ何でもないわ♪……それより、待ってるだけじゃなくて早く自分の気持ちに気付いて自分からもATTACKしてかなきゃ失ってからじゃ遅いわよ！」

かすみ「自分の気持ちって……」

鞠莉「いいから！わかった？」

かすみ「は、はい……！」

鞠莉「それじゃあ……応援してるからね♪」

そう言うと、鞠莉さんは屋上の出入り口へと歩き始めた。
そして、鞠莉さんが歩き出したと同時に出入口の扉が勢いよく開いた。

雷羽「かすみツ!!!」

鞠莉「Oh!?!」

かすみ「ら、雷羽あつ!?どうしたのっ!?!」

雷羽「どうしたのじゃないだろ!急にいなくなつたから心配したんだぞっ!」
かすみ「えっ……」

心配……してくれたんだ……

鞠莉「まったく……お似合いじゃない……」

雷羽「? あ、鞠莉姉え!ここにいたのか……」

鞠莉「もう帰るとこよ」

雷羽「帰るって……」

鞠莉「内浦にね、帰ろうと思うの。しばらくは大切な A q o u r s の皆と一緒にいようかなって」

雷羽「そっか……。それなら、送るよ!」

鞠莉「NO! その心配はいりませーん! アナタはかすみと一緒にいてあげて?」

雷羽「でも……」

かすみ「そーですよ! 夜は危険ですから襲われちゃいますよ!」

鞠莉「だーいじょうぶ! 実是用事でこっちにきてる幼馴染の1人が迎えに来てくれることになってるの。だから心配ないわ♪ だから……またね。」

雷羽「あ、ああ……また……」

鞠莉「かすみも! また会いましょ!」

かすみ「は、はい!」

鞠莉「次会った時は……自分の気持ちに正直にちゃんと気付いてることを願うわ♪」

かすみ「えっ……」

雷羽「……?」

鞠莉「それじゃあね!」

そう言つて……鞠莉さんは帰つて行つた。

雷羽と2人で残された私は……ちよつと気まずい……。

ていうか、最後に何言つてくれてんですかあの人！

雷羽「なあ？鞠莉姉えが最後に言つてたのつてどういう意味なんだ？何の話してたんだよ？」

かすみ「べ、別につ！ただお話してただけだから！」

私は雷羽の質問にちゃんと答えず誤魔化してさつさと屋上を後にした。

まったく……！なんなんですか！なんで……

なんでさつきから……こんなにも顔が熱いんですか……
／／／／／／／／

雷羽「お、おう……つて！ちよつと待てよかすみ〜〜！」

第38話 行方不明の少女

——太陽視点——

歩夢が行方不明になって既に2週間近くが経とうとしていた……。その間、俺達は放課後や休日の時間を使って歩夢を探し回っていた。

そして今、俺は菜々と一緒に街中を探し回り、疲れたので休憩をするため最近菜々が気に入ってる喫茶店にやってきていた。

この喫茶店はどうやら家族経営らしく、落ち着いた雰囲気があつて何故か丸々としたフクロウ？がいる。

太陽「なんて言うか……良い雰囲気のカフェ店だな。菜々、いつから通ってるの？」

菜々「私も先週くらいから通い始めたんです！良い雰囲気ですよね！出てくる料理も美味しくて、私もすぐ気に入っちゃいました！」

太陽「確かに。コーヒーも美味しいし、俺もここ気に入ったかも！」

菜々「本当ですか！嬉しいです！」

俺達がそんな会話をしている中で、端のテーブル席に目をやると……そこには紺色の制服を着た2人の少女がいて、少し重い空気を漂わせていた。

「千紗都……やはりかのんは……」

「ダメ……全然手掛かりが無いよ……」

「れんれん達の方は……？」

「あっちもダメだって……」

「一体……どこに行ったのでしょうか……かのんは……」

「かのんちゃん……」

会話の内容までではなく、あの2人……何かあったんだろうか……？

と、いつの間にかその話に集中していたのか、菜々の俺を呼ぶ声で我に返った。

菜々「太陽君!!」

太陽「うわあっ!?びっくりした!」

菜々「もう!どうしたんですか急にぼーっとして」

太陽「ああいや……ちよつとあつちの子達の会話が気になって……」

そうやって俺は視線だけを軽く先程の彼女達の方へ向ける。せつ菜が俺の視線と同じ方向を見ると、一瞬眉間にしわを寄せて彼女達を見て……その後、何かを思い出した様にはっと嬉しそうな表情を浮かべた後、意気揚々と彼女達の方へと歩いて行った。

菜々「あの方々は……もしや……!」

太陽「ちよ、菜々!？」

俺は慌てて鼻息荒く彼女達にせまる菜々の後を追いかけた。突然の菜々の登場に驚きと怯えた目で見ている2人組の女の子達。

まあそりやそうだよな……知らない人がいきなり自分達の前に現れたら誰だって怖いよ。うん。

菜々「あの!もしかして貴女達はL i e i l a!の唐可可さんと嵐千紗都さんではありませんか!!!」

千紗都「え、ええと……」

可可「そ、そうデス……」

菜々「やはり!ふおお!こんなところで出会えるとは感激です!!!」

太陽「ちよつと菜々。2人とも困ってるしお店に迷惑だからとりあえず落ち着こう。」

菜々「あ、そ、そうですね……。すみません……」

千紗都「い、いえ……」

太陽「それで、少し話が聞こえちゃったんだけど……よければ詳しく話を聞かせてくれないかな？」

可可「え……ですが……」

うーん、やっぱり知らない人にそう簡単に言えないよな……

太陽「ほら、人を探してるんだったら人数は多いに越したことはないでしょ？」

千紗都「それはそうですけど……どうして見ず知らずの私達の為にそこまで？」

太陽「話の内容的に放っておけなかったから……かな？」

可可「疑問形なんデスね……」

うーん、どうしよう……。完全に警戒されちゃつてるなあ……。まあ、そりやそうか。

太陽「兎に角、一度場所を移して話の続きをしたいんだけど……いいかな？俺の力は……きつと君達の助けになると思うからさ。」

クウちさ「は、はあ……」

そうして俺達は、一度喫茶店を出て少し離れた裏路地へとやって来た。

何故裏路地なのかって？いやほら、俺の魔法をそう色んな人に見せる訳にもいかないでしょ？

太陽「つて訳で、まずは自己紹介からってことで、俺は希魔太陽、よろしく」

菜々「私はゆu…ではなくて！中川菜々と言います！」

千紗都「私は嵐千紗都あらしちさとって言います！」

可可「你好！クウクウは唐可可たんくくと申します！」

どうやら嵐さんと唐さんは設立されて間もない私立結ヶ丘女子高等学校の二年生で、さつき菜々が言った様にL i e i l a ! (リエラ!) というグループ名でスクールアイドル活動をしているらしい。

しかも嵐さんはダンスの腕前が凄く、色んな大会で実績を残してるんだとか。

そしてあらかた2人のことを聞いた俺達は、2人が探しているという女の子について聞くことにした。

太陽「それで……君達を探している子ってどんな子なの？」

千紗都「あ、えつと……この子です。」

嵐さんに見せてもらった写真にはツリ目で特徴的な前髪をしたオレンジ髪をした嵐さん達と同じ制服を着た女の子が少し恥ずかしそうに顔を赤らめながら笑顔でピースしている姿が写っていた。

しかしこの子、幼さを残してるけどすごい美人だな……いや、俺が会って来たスクールアイドルの子は皆美人ばかりなんだけど……

菜々「……………太陽君？」

太陽「ひやいつ?!いや、何でもない！」

菜々「ほう……………まあいいです。」

千紗都「あの……続き話してもいいですか……………」

太陽「あ、ああごめん!どうぞ！」

千紗都「えつと……この子の名前は澁谷かのん。さつきまで私達がいた喫茶店の子なんです。」

太陽「あの喫茶店の……………。それでこの子の行方が突然わからなくなったと?」

可可「はい……………。本当に突然でシタ……………」

千紗都「私達も思いつく限りの場所を探したんですが……………全然見つからなくて……………」

と、2人はまた暗い表情に変わっていく。確かに、一か月近く友達が行方不明となると不安と心配で泣きたくもなるよな……………。

よし、そろそろ俺の力を見せてちゃんと協力しようか。

太陽「よし。ちよつと待ってて」

千紗都「へ…?」

可可「一体何を…?」

俺は右手にリングをはめ、腰の待機状態のウイザードライバーにかざす。すると俺の目の前に赤・青・黄のプラモデルのランナーが現れ、自動でカチャカチャと赤いガルダ・青いユニコーン・黄色いクラーケンが組み立てられた。

これを見た嵐さんと唐さんはそれはもう驚いた。

『ガルダ!』『ユニコーン!』『クラーケン!』

千紗都「うえええ!?なにこれ!」

可可「どどどどうなってるデスカあー!」

菜々「この子達は太陽君の使い魔なんですよ！」

千紗都「使い…魔…？」

太陽「俺は色んな魔法を使う指輪の魔法使いなんだ。」

千紗都「魔法使いつて……」

可可「いやいやそんなバカなデスよ」

太陽「まあそうだよね……なら、変身」

『フレイム！』

『ヒー！…ヒー！…ヒーヒーヒー！』

目の前でプラモンスターを出しても俺の言葉を信じられないといった態度の2人に俺は変身。すると2人はまたしても驚愕した。

クウチさ「うえええええツツツツ?!?!?!」

ウイザード「ふい〜。 どう?ちよつとは信じてくれるかな?」

千紗都「は、はあ……」

可「そりやもう……デエス」

俺が変身したところを見た2人は放心状態になりながらも魔法使いであることを納得してくれた。

それから俺は変身を解除して俺達は話し合いをして俺・嵐さんチームと菜々・唐さんチームの2手に別れることにした。

何故2手に別れたかという点、簡単に言うとう効率が良いから。それに、嵐さん唐さんを別けたのは俺と菜々を同じチームにすると見落とす可能性があるから、俺達より澁谷さんのことを知っている2人を別け探した方が見つけやすかったり何か気付きがあると思ったからだ。

まあ、これに関しては菜々がちよつと不満気ではあつたが……アハハ……

太陽「さてつと、じゃあ最後の仕上げをしようか」

菜々「最後の仕上げですか？」

太陽「ああ、人探しといえはつて2人に連絡入れようと思つて」

可可「そのお2人も魔法使いさんなのデスか？」

太陽「いや、魔法使いではないけど頼れる仲間さ」

そう言つて俺はとある2人に電話をかけた。連絡を取つた2人は快く了承してくれ
た。1人は後で菜々と唐さんと合流することになつていて、もう1人は嵐さん唐さん以
外のリエラのメンバーを陰ながら護衛してもらうことになつた。

まあ色々準備があつたが、俺達は澁谷かのんさん搜索に乗り出した。

太陽「それじゃあ行こうか」

千紗都「はい！お願いします！」

菜々と唐さんと別れた俺達は歩き出した。本当はバイク使つた方が楽なんだろうけど、それだとさつき言つたみたいに見落としてたり急に見つけた時に対処が出来ないからだ。

千紗都「あの……希魔さんはもしかして都市伝説の戦士なんですか？」

太陽「はええっ!?!と、都市伝説の戦士って……なに？」

千紗都「最近、SNSとかでひそかに話題になってるんですよ、怪物と戦う謎の戦士って。ただ、SNSとかに動画がアップされてもすぐに消されたりニュースでも取り上げられないから、大半の人達からは都市伝説として扱われてるんです」

太陽「な、なるほどね……。ところで、どうして嵐さんは俺がその都市伝説の戦士って思ったんだ？その動画を見たことあったとか？」

千紗都「えっと、まあ先程の姿と使い魔？を出した魔法を見せられたら……そうなのかなって。あ、ちなみに動画は見たこと無いです」

太陽「そ、そっか……」

うくん、基本的に俺達の情報はゼロワンの家の力で隠蔽してくれてはいるけど……流石に消す前に観た人の記憶は消せないし、ネットに一度出た動画や画像も全ては消しきれない……か。

自分で答え合わせしちやっつたのはミスったな……でもまあ俺のこと信じさせるにはああするのが手っ取り早かったし仕方ないか……この子は周りに言いふらす様な感じの子じやなさそうだし、大丈夫かな。

太陽「一応君の言う通りだけど、1つお願いを聞いてもらっていいかな？」

千紗都「お願い？」

太陽「うん。俺がその都市伝説の戦士……仮面ライダーであることは内密にお願い出来るかな？」

千紗都「内密にすることはそれほど不特定多数の人に知られたくないことだからですか？」

太陽「まあそうだね」

千紗都「わかりました！」

太陽「ありがとう」

大丈夫とは思っても念のためくぎを刺しておいた。それから色々話しながら辺りを

見回して人気の少ない場所に来た瞬間だった。

太陽「それにしても……ここまで探して手掛かりすら見つからないなんて……」

千紗都「はい……」

太陽「家出とかだったら、一人の人間を割と大勢の人間が探して手掛かりすら見つからないのはどう考えてもおかしい……」

千紗都「もしかして、誘拐とか！何か犯罪に巻き込まれたんじゃ!？」

太陽「いや、それにしたって見つからなさすぎる……プラモンスターまで放っているのに……」

これはもしかしたら、俺が考えていた最悪の方が当たったかもしれないな……。そうなってくると、ちよつとめんどうだな……

俺がそんなことを考えていると、突然背後から声をかけられた。

??? 「あの、これ……あなたのですよね？」

太陽 「へ……？」

俺がその声に振り返ると、フードを目深かに被って更に目元に仮面を付け明らかに素顔を見せない様になっている子がいた。多分声からして女の子だと思うけど……。

そして、俺はその怪しい女の子が右手に持っているものを見て驚愕した。

太陽 「って、ガルーダ!？」

??? 「困るんですよ……こういうことされるの……」

そう言うと女の子は俺にガルーダを投げ渡し、ローブのお腹付近を捲ると……そこに
は、見覚えのあるバックルが腰に装着されていた。

太陽「な、それは!？」

『フクロウ!』

??? 「……変身。」

太陽「くっ……! 嵐さんッ！」

千紗都「わっ!？」

目の前の女の子の腰に装着されていたバックル：仮面ライダーアケディアの使っていたドライバーを見て驚愕している間に手の平大のフクロウが模られたスタンプを取り出して上部のスイッチを押してそのスタンプを起動しドライバーにセットする。

やばいと思った俺は、横で何が起きているのか分からず戸惑っていた嵐さんを庇う様に抱きかかえながら倒れる。

すると、先程まで俺達の頭があった場所をオレンジ色のゲル状のフクロウが通り過ぎて行った。

俺はすぐに嵐さんを起き上がらせてローブの女の子から距離を取ると空に飛びあがったゲル状のフクロウが急降下し女の子の身体を包み込んだ。

太陽「嵐さんツ！離れてて！」

千紗都「え、えっ!?!あの、一体何が……!?!」

太陽「後で話すツ！だから今は離れて！」

千紗都「っ…!?! は、はい！」

『ドライバー、オン』

太陽「変身ツ!!」

『ハリケーン…ドラゴン…ビュー…ビュー…ビュービュー、ビュービュー…』

嵐さんを離してすぐ俺はハリケーンドラゴンスタイルに変身し、ローブの女の子の方もゲル状のフクロウが弾け飛んだと同時に俺が以前戦った仮面ライダーアケディアへと変身した。

アケディア「行きます…!」

ウイザード「ハリドラ」「ふっ！はあ！」

アケディア「くっ……! やあっ!」

ウイザード「ハリドラ」「……………」

………やつぱりそうだ。前から感じてたけど、この子……武器を扱いきれてない……戦い慣れてない?

でも、あの時は何故か突然戦うスタイルが一変したし……一体どうなってるんだこの子……?」

アケディア「やあっ!」

ウイザード「ハリドラ」「おっと……!」

アケディア「もう! なんて避けるんですか!」

ウイザード「ハリドラ」「いや、避けるでしょそりや!」

アケディア「くっっ! えい! えい!」

ウイザード「ハリドラ」「ほっ……よっ……!」

しばらくこんな感じで向こうの拙い攻撃を避けてたんだけど、またあの時みたいに急に頭を押さえて苦しみだした。

アケディア「いい加減にしてッ……!? 貴女は…出て…こないでッ……!!」
ウイザード「ハリドラ」「…ッ！まさか、また……!?」

アケディア「……………ほんとほさあ？出てくるのめんどくさいし、今回は見とこうかなって思ってたんだけどさ？……………流星に戦い方が拙すぎるでしょ!? うざったい!!」
ウイザード「ハリドラ」「くっ…！ぐはっ!?」

前回同様、突然性格が変わったアケディアが自身が持っていた双剣を変形させて二丁拳銃にすると、俺に向けて発砲した。

ウイザード「ハリドラ」「ちよっその双剣、二丁拳銃になるのか!？」

アケディア「…ん？前回使わなかったっけ？」

ウイザード「ハリドラ」「使ってませんがっ!？」

アケディア「ふん、そっか。じゃあ良かったね、今知れて!」

ウイザード「ハリドラ」「あぶなっ!…って、うえっ!？」

会話中にいきなり撃つて来たのを何とか避けたが、アケディアの方を見ると背中からゲル状の翼を出現させて飛び立ちながら更に銃撃を放ってきた。

アケディア「ほらほらほらあ!いつまで避けれるかな!」

ウイザード「ハリドラ」「くっ!この…!調子に乗るな!」

『サンダー!プリーズ!』

ウイザード「ハリドラ」「はあッ!!」

アケディア「ぐッ…!がああああッ…!!?」

ウイザード「ハリドラ」「これで決める!」

『キャモナ・シユータイング・シエイクハンズ!』

『ハリケーン! シユータイングストライク! ビュー! ビュー! ビュー! ビュー!』

ウイザード「ハリドラ」「はああ……はあああッッ!!」

アケディア「ぐッ……ううああああ……?!?!」

アケディアの銃撃をウイザードソードガンのガンモードで撃ち返しながら避け、隙が出来たところですかさずサンダーウイザードリングを使って強力な雷撃をアケディアに放った。

アケディアは飛びながら避けていたが雷の数に対処しきれず命中。ダメージが入って地面に落ちたところをウイザードソードガンで緑色のウイザードラゴンを模した強力な風の弾丸をアケディアに放った。

アケディアは先程の雷のダメージが入っていて避け切れず直撃し、風の弾丸と共に後方に吹き飛んで行った。

ウイザード「ハリドラ」「ふいっ。さてっと……」

??? 「ぐっ、うう……!」

俺は念のため変身を解除することなく、アケディアが吹き飛んで行った方へと向かった。そこには、ダメージが蓄積して変身が解除されたローブの女の子が膝に力を入れながら小さく震えつつ立ち上がるうとしていた。

すると、付けていた仮面の右目部分が砕けて少しだけ素顔が見えた。しかもフードがポロポロになっていて髪まで覗いている。

何処かでこの子を見たことがあると思っただけど、中々思い出せなかった俺の真後ろで物陰から戦いを見守っていた嵐さんがいつの間にか来ていて、俺達の目の前にいる女の子を見て驚愕しながら震える声でその女の子の名前を呼んだ。

千紗都 「う、嘘……」

ウィザード 「ハリドラ」「うわっ、嵐さん!?! いつの間に……っていうか、もしかして知ってる子?」

千紗都 「し、知ってるも何も……その子が、かのんちゃん……私達が探していた澁

谷かのんちゃんです……!」

ウイザード「ハリドラ」「へ……ええ!？」

嵐さんの言葉に俺は驚いてもう一度目の前の女の子を見た。
う……た、確かにさつき見せてもらった子っぽいな……。

かのん(?)「くっ……!」

『フクロウ!』

ウイザード「ハリドラ」「あつ、しまった!？」

目の前の女の子……もとい、澁谷かのん(?)さんは俺が油断した瞬間の隙を狙って再び変身するとゲル状の翼を出現させ飛び立っていった。

千紗都「かのんちゃんツ!？」

ウィザード「ハリドラ」「任せてツ！」

俺は急いで風の魔法で飛び出し追跡しようとしたが、スピードに差があり追いつけない。だから俺はスペシャルウィザードリングの力を使ってドラゴンの翼を召喚し、超スピードで肉迫した。

『スペシャル！サイコー！』

アケディア「ツ…!？」

ウィザード「ハリドラ」「君、澁谷かのんさんだよね！少し話出来ないかな!？」

アケディア「いい加減、鬱陶しい!!」

『フクロウ!』

『タイダルスマッシュ!』

アケディア「うらあツ!!」

ウィザード「ハリドラ」「ツ!？」

アケディアこと澁谷かのん(?)さんは俺が近づいて来たタイミングでバックルのレバーとなっているスタンプを操作した。すると、ゲル状の翼が倍の大きさになり羽ばたきと共にゲル状の無数の羽根を飛ばして来た。

俺は無数のゲル状の羽根を回避しつつドラゴンの翼を使って吹き飛ばしたりしたが、気付くと1本の羽根が右太ももに刺さっていた。

ウイザード「ハリドラ」「ッ…!?!」

アケディア「驚いた?この羽根……飛ばすだけじゃなくて私の思い通りに操ることが出来るんだよ!」

マジか!?……あれ?なんか、なんだ?身体が気だるくなってきた……?

アケディア「どうやら、効果が出て来たみたいじゃん？」

ウイザード「ハリドラ」「こう……か……?」

アケディア「説明は……めんどくさいからいいや。どうせ今から体感するしねえ」

そう言うと澁谷かのん(?)さんは去って行った。俺は……あー、なんかどうでもよくなってきた。飛んでるのも疲れたしもういいや……落ちよ。

ウイザード「ハリドラ」「アーオチル」

千紗都「うええええつつつ
!?!?!」

突然私と希魔さんの前にローブを羽織った人が来たと思ったら希魔さんが変身した仮面ライダーに似た？姿に変身して、希魔さんと戦って、希魔さんが勝ったと思ったらそのローブの人がかのんちゃんやんで、かのんちゃんがいきなり逃げ出して希魔さんが追いかけたと思ったら何か、よく見えなかったけど希魔さんが落ちて来た!!

っていうか……………

千紗都「ちよ、ど、ど、ど、ど、どうしようどうしよう!?!と、兎に角……可可ちゃん
!中川さん連れてきてー!!!」

。そうして私は中川菜々さんと一緒にいる可可ちゃんに電話でヘルプを出すのだった